松山市文化財調査報告書 130

樽味四反地遺跡

－12次・13次調査－

平成17年度国庫補助市内遺跡発掘調査報告書

2009

松山市教育委員会
財団法人松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター

巻頭図版１　樽味四反地遺跡13次調査３号大型建物（北東より）

28

54

320

427

277

57

444

71

巻頭図版２　樽味四反地遺跡12次・13次調査出土遺物（12次：28・54・57・71、13次：277・320・427・444）

序

本書は、平成10年の樽味四反地遺跡６次調査並びに平成15年の同８次調査によって確認された、西日本有数の規模を誇る弥生時代後期末から古墳時代初頭の大型建物址２棟につづき、３例目の大型建物址という大きな発見に繋がった樽味四反地遺跡12次、13次調査の報告です。

樽味四反地遺跡は、松山平野の中心部を南西に流れる石手川中流域左岸、川の氾濫によって形成された標高39.2m の扇状地上に位置し、これまでの埋蔵文化財発掘調査によって、大型建物址のほか、縄文時代から中世にかけての集落関連遺構や遺物が確認されています。

今回の調査は、重要遺跡確認調査の一環として、大型建物址を中心とする遺跡の範囲確定とその前後の時期の集落の分布状況の確認をめざして、大型建物址が発見された樽味四反地遺跡６次調査地の西隣と、同８次調査地の南隣に調査区を設定して実施したものです。３例目の大型建物址は13次調査地から発見され、弥生時代中期から古代までの遺構、遺物も確認できています。

大型建物址３棟はまだまだ多くの謎を秘めております。本書が、多くの方々と問題を共有しながら謎解きに向かう原動力になることを祈っております。

最後に、発掘調査および報告書刊行に、ご協力いただきました地権者ならびに周辺の住民の方々、関係各位に厚くお礼申し上げます。

平成21年３月31日

松山市教育長　山　内　　泰

例　　言

1．本書は松山市教育委員会、財団法人松山市生涯学習振興財団が国庫補助事業として、平成17年度に実施した松山市樽味地区における埋蔵文化財の発掘調査報告書である。なお、本報告書は平成20年度の国庫補助事業として刊行したものである。

2．本文中では遺構名を略号化し、竪穴住居：SB、掘立柱建物：掘立、溝：SD、土坑：SK、柱穴・小穴：SP で記述した。

3．本書で使用した標高数値はすべて海抜標高を示し、方位は国土座標を基準とした真北である。

4．基本土層や遺構埋土の色調は農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』(1998)に準拠した。

5．屋外調査での写真は調査担当者と大西朋子が、遺物写真と図版作成は大西が担当した。

6．遺構の実測は相原秀仁、遺物の復元及び実測・製図は相原の指示のもとに、山下満佐子、平岡直美、西本三枝、木西嘉子、森田利恵、鈴鹿八恵子、高尾久子、山邊進也、黒田竜弥、堀眞也がおこなった。

7．挿図の縮尺は縮分値をスケール下に記した。遺物実測図は原則として、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器は1/4、石器、金属製品は1/2、石鏃は2/3、玉類は1/1とした。

8．調査では下條信行（元愛媛大学)、前園実知雄（奈良芸術短期大学)、長井数秋（日本考古学協会会員)、名本二六雄（日本考古学協会会員）の諸先生方にご指導、ご教示を頂いた。記して感謝申し上げます。

9．屋外調査における国土座標測量は、国際航業株式会社に業務を委託した。

10．本書の執筆は相原がおこなった。編集は相原が担当し宮内、山下、平岡の協力を得た。浄書は相原の指示のもと平岡が担当した。

11．本書に掲載した記録類や遺物は、松山市立埋蔵文化財センターにおいて保管されている。

本　文　目　次

第１章　はじめに …… 1
１．調査に至る経緯
２．刊行組織
３．立地と環境

第２章　樽味四反地遺跡12次調査 …… 9
１．調査の経緯
（１）調査の経緯　（２）調査組織
２．層　位
（１）基本層位　（２）検出遺構・遺物
３．遺構と遺物
（１）竪穴住居　（２）掘立柱建物　（３）溝　（４）土　坑
４．その他の遺構と遺物
（１）柱　穴　（２）包含層出土遺物　（３）地点不明出土遺物
５．小　結

第３章　樽味四反地遺跡13次調査 ……31
１．調査の経緯
（１）調査の経緯　（２）調査組織
２．層　位
（１）基本層位　（２）検出遺構・遺物
３．弥生時代の遺構と遺物
（１）竪穴住居　（２）溝　（３）土　坑
４．古墳時代の遺構と遺物
（１）竪穴住居　（２）掘立柱建物　（３）溝　（４）土　坑
５．その他の遺構と遺物
（１）時期判断が困難な遺構　（２）柱　穴　（３）包含層出土遺物
６．小　結

第４章　調査の成果と課題 …… 117

挿　図　目　次

第１章　はじめに
第１図　松山平野の地形概要図（縮尺１／200,000）……2
第２図　調査地位置図（縮尺１／3,000）……5
第３図　周辺主要遺跡分布図（縮尺１／25,000）……7

第２章　樽味四反地遺跡12次調査
第４図　調査地位置図（縮尺１／250）……11
第５図　遺構配置図（縮尺１／100）……12
第６図　調査壁土層図（縮尺１／50）……13
第７図　ＳＢ１測量図（縮尺１／80）……16
第８図　ＳＢ１出土遺物実測図(1)（縮尺１／４）……17
第９図　ＳＢ１出土遺物実測図(2)（縮尺１／２・２／３・１／１）……18
第10図　掘立１測量図・出土遺物実測図（縮尺１／80・１／４）……19
第11図　ＳＫ１測量図（縮尺１／40）……20
第12図　ＳＫ１出土遺物実測図（縮尺１／４・１／２）……21
第13図　ＳＫ２測量図・出土遺物実測図（縮尺１／40・１／４）……22
第14図　ＳＫ３測量図（縮尺１／40）……23
第15図　柱穴出土遺物実測図（縮尺１／４）
第16図　包含層出土遺物実測図(1)（縮尺１／４）……24
第17図　包含層(2)・地点不明出土遺物実測図（縮尺１／４）……25

第３章　樽味四反地遺跡13次調査
第18図　調査地位置図（縮尺１／500）……34
第19図　北壁・南壁土層図（縮尺１／40）……35
第20図　西壁土層図（縮尺１／40）……37
第21図　遺構配置図（縮尺１／200）……39
第22図　ＳＢ２・10測量図（縮尺１／50）……40
第23図　ＳＢ２出土遺物実測図（縮尺１／４・２／３）……41
第24図　ＳＢ４測量図（縮尺１／50）……43
第25図　ＳＢ４出土遺物実測図（縮尺１／４）……44
第26図　ＳＤ１・３・４・７出土遺物実測図（縮尺１／４・１／２）……46
第27図　ＳＫ１測量図・出土遺物実測図（縮尺１／40・１／４）……47
第28図　ＳＫ４測量図・出土遺物実測図（縮尺１／40・１／４）……48
第29図　ＳＫ６測量図・出土遺物実測図（縮尺１／40・１／４）……49
第30図　ＳＫ７測量図（縮尺１／40）
第31図　ＳＢ10出土遺物実測図（縮尺１／４・１／１）……51
第32図　ＳＢ１測量図・出土遺物実測図（縮尺１／50・１／４・１／２）……53

第33図　ＳＢ３測量図（縮尺１／50）……54
第34図　ＳＢ３出土遺物実測図（縮尺１／４）……55
第35図　ＳＢ５測量図・出土遺物実測図（縮尺１／50・１／４）……56
第36図　ＳＢ６測量図（縮尺１／50）……57
第37図　ＳＢ６出土遺物実測図（縮尺１／４・１／２・２／３）……59
第38図　ＳＢ８測量図・出土遺物実測図（縮尺１／50・１／４）……60
第39図　ＳＢ11測量図（縮尺１／80）……61
第40図　ＳＢ11出土遺物実測図(1)（縮尺１／４）……62
第41図　ＳＢ11出土遺物実測図(2)（縮尺１／４・１／２・１／１）……63
第42図　ＳＢ９測量図（縮尺１／80）……65
第43図　ＳＢ９埋土下位出土遺物実測図（縮尺１／４）……66
第44図　ＳＢ９埋土上位出土遺物実測図（縮尺１／４・１／２・１／３・１／１）……67
第45図　ＳＢ７測量図・出土遺物実測図（縮尺１／50・１／４）……68
第46図　３号大型建物測量図（縮尺１／80）……70
第47図　３号大型建物柱穴断面図(1)（縮尺１／80）……73
第48図　３号大型建物柱穴断面図(2)（縮尺１／80）……74
第49図　３号大型建物出土遺物実測図(1)（縮尺１／４）……75
第50図　３号大型建物出土遺物実測図(2)（縮尺１／４）……76
第51図　掘立１測量図・出土遺物実測図（縮尺１／60・１／４）……78
第52図　ＳＤ２測量図（縮尺１／50）……79
第53図　ＳＤ２　１区下層出土遺物実測図(1)（縮尺１／４）……83
第54図　ＳＤ２　１区下層出土遺物実測図(2)（縮尺１／４・１／２）……84
第55図　ＳＤ２　２区下層出土遺物実測図（縮尺１／４）……85
第56図　ＳＤ２　１区上層出土遺物実測図（縮尺１／４）……86
第57図　ＳＤ２　２区上層・３区上層出土遺物実測図（縮尺１／４）……87
第58図　ＳＤ２ 礫層・ベルト・トレンチ出土遺物実測図（縮尺１／４）……88
第59図　ＳＤ５出土遺物実測図（縮尺１／４）……89
第60図　ＳＫ９測量図・出土遺物実測図（縮尺１／40・１／４）
第61図　ＳＫ２・３・８測量図（縮尺１／40）……90
第62図　柱穴出土遺物実測図（縮尺１／４・１／２）……94
第63図　包含層出土遺物実測図(1)（縮尺１／４）……95
第64図　包含層(2)・地点不明(1)出土遺物実測図（縮尺１／４・１／２）……96
第65図　地点不明出土遺物実測図(2)（縮尺２／３・１／２）……97

表　目　次

第１章　はじめに
表１　調査地一覧……1

第２章　樽味四反地遺跡12次調査
表２　竪穴住居一覧……27
表３　掘立柱建物一覧
表４　溝一覧
表５　土坑一覧
表６　ＳＢ１出土遺物観察表（土製品）
表７　ＳＢ１出土遺物観察表（石製品）……28
表８　ＳＢ１出土遺物観察表（金属製品）
表９　ＳＢ１出土遺物観察表（玉類）
表10　掘立１出土遺物観察表（土製品）
表11　ＳＫ１出土遺物観察表（土製品）……29
表12　ＳＫ２出土遺物観察表（土製品）
表13　柱穴出土遺物観察表（土製品）
表14　第Ⅳ層出土遺物観察表（土製品）
表15　第Ⅴ層出土遺物観察表（土製品）……30
表16　地点不明出土遺物観察表（土製品）

第３章　樽味四反地遺跡13次調査
表17　遺構一覧……33
表18　竪穴住居一覧……98
表19　掘立柱建物一覧
表20　溝一覧
表21　土坑一覧
表22　ＳＢ２出土遺物観察表（土製品）……99
表23　ＳＢ２出土遺物観察表（石製品）
表24　ＳＢ４出土遺物観察表（土製品）
表25　ＳＤ４出土遺物観察表（土製品）……100
表26　ＳＤ４出土遺物観察表（金属製品）
表27　ＳＤ１出土遺物観察表（土製品）
表28　ＳＤ３出土遺物観察表（土製品）
表29　ＳＤ７出土遺物観察表（土製品）
表30　ＳＫ１出土遺物観察表（土製品）
表31　ＳＫ４出土遺物観察表（土製品）
表32　ＳＫ６出土遺物観察表（土製品）……101

表33　ＳＢ10出土遺物観察表（土製品）…… 101
表34　ＳＢ10出土遺物観察表（玉類）
表35　ＳＢ１出土遺物観察表（土製品）
表36　ＳＢ３出土遺物観察表（土製品）…… 102
表37　ＳＢ３出土遺物観察表（石製品）
表38　ＳＢ５出土遺物観察表（土製品）
表39　ＳＢ６出土遺物観察表（土製品）
表40　ＳＢ６出土遺物観察表（石製品）…… 103
表41　ＳＢ６出土遺物観察表（金属製品）
表42　ＳＢ８出土遺物観察表（土製品）
表43　ＳＢ11出土遺物観察表（土製品）…… 104
表44　ＳＢ11出土遺物観察表（石製品）…… 105
表45　ＳＢ11出土遺物観察表（玉類）
表46　ＳＢ９出土遺物観察表（土製品）
表47　ＳＢ９出土遺物観察表（石製品）…… 106
表48　ＳＢ９出土遺物観察表（金属製品）
表49　ＳＢ９出土遺物観察表（玉類）…… 107
表50　ＳＢ７出土遺物観察表（土製品）
表51　３号大型建物出土遺物観察表（土製品）
表52　掘立１出土遺物観察表（土製品）…… 108
表53　ＳＤ２（１区下層）出土遺物観察表（土製品）
表54　ＳＤ２（１区下層）出土遺物観察表（石製品）…… 109
表55　ＳＤ２（２区下層）出土遺物観察表（土製品）
表56　ＳＤ２（２区下層）出土遺物観察表（石製品）…… 110
表57　ＳＤ２（１区上層）出土遺物観察表（土製品）
表58　ＳＤ２（２区上層）出土遺物観察表（土製品）…… 111
表59　ＳＤ２（３区上層）出土遺物観察表（土製品）
表60　ＳＤ２（礫層）出土遺物観察表（土製品）
表61　ＳＤ２（ベルト）出土遺物観察表（土製品）…… 112
表62　ＳＤ２（トレンチ）出土遺物観察表（土製品）
表63　ＳＤ５出土遺物観察表（土製品）
表64　ＳＫ９出土遺物観察表（土製品）…… 113
表65　柱穴出土遺物観察表（土製品）
表66　柱穴出土遺物観察表（石製品）
表67　柱穴出土遺物観察表（金属製品）…… 114
表68　第Ⅵ層出土遺物観察表（土製品）
表69　第Ⅳ層出土遺物観察表（土製品）
表70　地点不明出土遺物観察表（土製品）…… 115
表71　地点不明出土遺物観察表（石製品）(1)
表72　地点不明出土遺物観察表（石製品）(2)

表73　地点不明出土遺物観察表（金属製品）…… 115

第４章　調査の成果と課題
表74　大型建物一覧…… 119

写真図版目次

巻頭図版１　樽味四反地遺跡13次調査３号大型建物（北東より）
巻頭図版２　樽味四反地遺跡12次・13次調査出土遺物

第２章　樽味四反地遺跡12次調査
図版１　１．調査地全景（南西より）　２．南壁土層（北より）
図版２　１．東半部検出状況（西より）　２．西半部検出状況（東より）
図版３　１．ＳＢ１検出状況（北より）　２．ＳＫ１完掘状況（北より）
図版４　１．掘立１完掘状況（東より）　２．作業風景（北西より）
図版５　１．ＳＢ１出土遺物
図版６　１．出土遺物（ＳＫ１・包含層）

第３章　樽味四反地遺跡13次調査
図版７　１．調査地全景（北西より）　２．西壁土層（東より）
図版８　１．北半部遺構検出状況（北より）　２．南半部遺構検出状況（北より）
図版９　１．遺構完掘状況（北より）
図版10　１．ＳＢ２・10完掘状況（北東より）　２．ＳＢ４完掘状況（北西より）
図版11　１．ＳＢ１完掘状況（北東より）　２．ＳＢ３完掘状況（北東より）
図版12　１．ＳＢ５完掘状況（南東より）　２．ＳＢ８検出状況（東より）
図版13　１．ＳＢ６完掘状況（北より）　２．ＳＢ６遺物出土状況（南より）
図版14　１．ＳＢ９・11検出状況（北東より）　２．ＳＢ９遺物出土状況（南東より）
図版15　１．３号大型建物検出状況（北東より）　２．３号大型建物検出状況（東より）
図版16　１．３号大型建物柱穴（ＳＰ㉟）完掘状況（東より）　２．ＳＤ２断面（東より）
図版17　１．ＳＤ２上層遺物出土状況（南東より）　２．ＳＤ２下層遺物出土状況（北東より）
図版18　１．出土遺物（ＳＢ２・ＳＤ４・ＳＫ１）
図版19　１．ＳＢ10出土遺物
図版20　１．出土遺物（ＳＢ１・ＳＢ３）
図版21　１．出土遺物（ＳＢ６・ＳＢ８）
図版22　１．ＳＢ９出土遺物(1)
図版23　１．ＳＢ９出土遺物(2)　２．３号大型建物出土遺物
　　３．ＳＤ２出土遺物(1)
図版24　１．出土遺物（ＳＤ２(2)・柱穴）
図版25　１．出土遺物（包含層・地点不明）

第1章　はじめに

1．調査に至る経緯

2003（平成15）年に実施された樽味四反地遺跡８次調査において、古墳時代初頭の大型掘立柱建物が検出された。1998（平成10）年に実施された同６次調査においても同様の大型掘立柱建物と溝が検出されている。これら２棟の大型掘立柱建物は当該期のものとしては規模が西日本最大級であることから、樽味地区には首長層の存在を裏付ける遺構が存在する可能性が高まりつつある。そのほか樽味地区には樽味遺跡（愛媛大学構内）をはじめ、樽味四反地遺跡（１～11次）、樽味高木（１～12次）、樽味立添遺跡（１～３次）など周知の遺跡地帯として知られている。そこで、文化庁、愛媛県教育委員会及び愛媛大学等のご指導を得たところ、史跡指定の価値に十分値する極めて重要な遺跡と判断されたため、周辺地権者の協力を得て、遺跡の全体像を解明することを目的とした、確認調査を実施することとなった。

確認調査は松山市教育委員会文化財課が主体で、2004（平成16）年11月25日に松山市樽味４丁目231番の１の一部でおこなった。立会人のもと３本のトレンチを設定し、各トレンチの土層の堆積状況と遺構検出の確認をおこなった。その結果、Ｔ１・Ｔ２において６次調査で検出した溝や柱穴を検出したことから、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センターが2005（平成17）年11月から本格調査を開始した。調査は12次調査、13次調査の順で着手し、一部調査期間が重なる。13次調査地は調査以前水田として利用されていたため、調査終了後は水田に戻した。なお、12次調査は宅地建設の開発に伴う事前の発掘調査として行われた。調査は10月17日から12月26日までの間実施した。

表１　調査地一覧

調査地	期　間	面　積
12次調査	2005（平成17）年10月17日～同年12月26日	201㎡
13次調査	2005（平成17）年11月１日～2006（平成18）年３月30日	820㎡

2．刊行組織（平成21年３月31日現在）

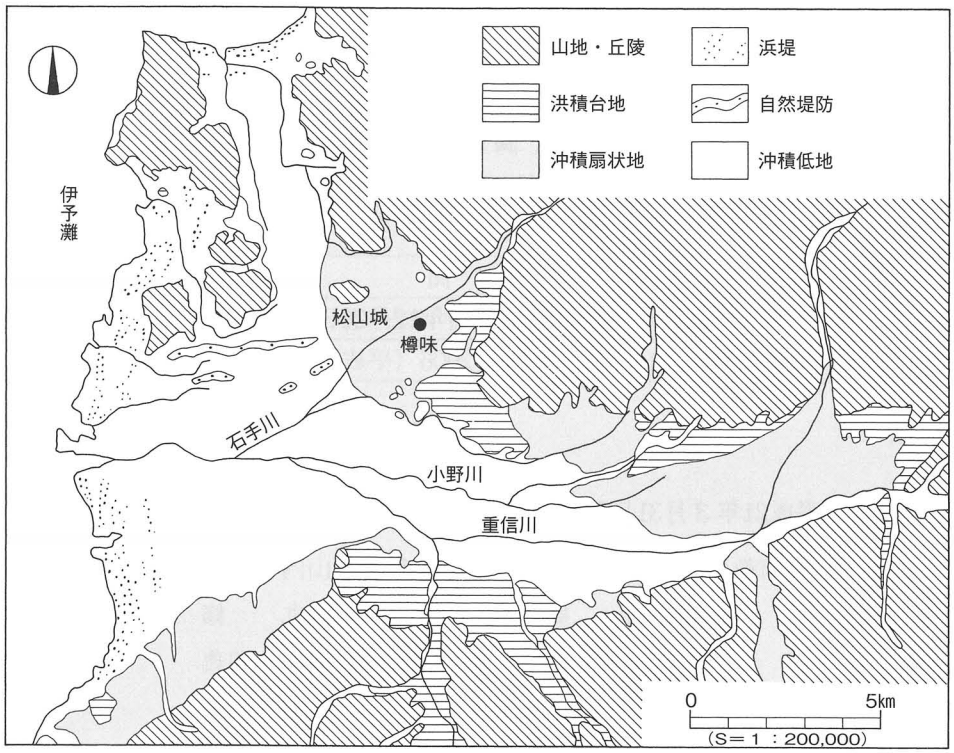
松山市教育委員会	教育長	山内　泰
事務局	局長	石丸　修
	企画官	仙波　和典
	企画官	古鎌　靖
	企画官	岸　紀明
文化財課	課長	家久　則雄
	主幹	森　正経
	主幹	森川　惠克
財団法人松山市生涯学習振興財団	理事長	中村　時広
	事務局長	吉岡　一雄
埋蔵文化財センター	所長兼考古館長	丹生谷博一

次長兼教育普及担当リーダー	折手　均
次長兼調査担当リーダー	重松　佳久
調査担当リーダー	栗田　茂敏
教育普及担当リーダー	梅木　謙一
調査員	宮内　慎一
調査員	相原　秀仁
調査員	大西　朋子（写真担当）

3．立地と環境

（1）立　地（第1図）

調査地は四国北西部の松山平野に位置する。松山平野は、北東部に高縄山、南東部は四国山地に囲まれ、その山々から流れる支流が重信川や石手川と合流して伊予灘に流れ出る。その大小河川により形成された洪積台地や沖積扇状地上に位置する。調査地が所在する樽味地区は平野北東部の沖積扇状地上の石手川南岸に位置する。



第1図　松山平野の地形概要図

（2）環　境

ここでは、樽味・東野地区で発掘調査された集落遺跡の遺構と出土遺物について、主に縄文時代から古墳時代を概観する。

縄文時代：縄文時代では検出例は少なく、晩期の遺構や遺物が確認されているのみである。

〔晩期〕樽味立添遺跡３次調査、東野森ノ木遺跡２・４次調査では、長さ１～1.5m、幅0.5～１ｍを測る隅丸方形状の土坑が検出され、断面形態から貯蔵穴と考えられている。今後、調査地周辺で該期の居住施設が検出される可能性がある。

弥生時代：前期から中期にかけて竪穴住居や溝、土坑の検出例があるが、とりわけ後期には検出例が増加する。

〔前期〕前期前半では樽味遺跡１次調査から溝と土坑が検出され、前期中頃では樽味遺跡５次調査から竪穴住居が検出されている。前期後半では樽味四反地遺跡７次調査から南北方向の溝が検出され、区画溝の可能性が考えられている。前期末から中期初頭では、樽味立添遺跡３次調査から、幅1.6～3.2m、深さ0.8～1.2mを測る大溝が複数確認されている。このうち、溝ＳＤ101は平面形態が弧状を呈しており、形状や土堆積状況から集落を分ける区画溝と考えられている。当該期の集落の性格を考える上で貴重な資料となる。

〔中期〕中期前半では東野森ノ木遺跡４次調査から、大型壺を使用した土器棺墓が検出され、調査地周辺が墓域として土地利用されていたとみられる。中期後半から後期初頭では、樽味高木遺跡２次調査と樽味四反地遺跡５次調査から、一辺2.5～3.0mを測る方形小型住居が検出されている。樽味高木遺跡７次調査では推定直径９ｍを測る比較的大型の円形住居ＳＢ201、樽味四反地遺跡５次調査では直径9.2mを測る円形住居ＳＢ８が検出されている。樽味高木遺跡９・13次調査では長さ1.6～2.4m、幅1.0～2.0mを測る方形土坑２基が検出され、断面形態や堆積状況から貯蔵穴と考えられている。樽味高木遺跡３次調査検出の土坑や樽味四反地遺跡６次調査検出の溝内からは、中期後半の遺物が出土しており、これらの遺物は松山平野の土器編年を考える上で好資料となっている。

〔後期〕前半の遺構は未検出である。後葉から末では樽味四反地遺跡３～５・９次調査、樽味立添遺跡３次調査、樽味高木遺跡９・11次調査において、一辺３～５ｍを測る方形住居や直径7.5～9mを測る円形住居が多数検出されている。樽味高木遺跡11次調査検出の方形住居ＳＢ102には長方形状の張り出し部が付設されている。遺物では樽味立添遺跡１次調査の包含層中から「貨泉」、樽味高木遺跡３次調査の第Ⅳ層中からは準構造舟が描かれた絵画土器片が出土し、他地域との交流を示す貴重な資料となる。

古墳時代：前期の検出例は少なく、中期から後期にかけて竪穴住居の検出例が急増する。

〔前期〕樽味四反地遺跡６次調査（平成10年度：１号大型建物と呼称）と樽味四反地遺跡８次調査（平成15年度：２号大型建物）では超大型建物が検出されている。両者共に６間×６間規模の総柱建物で床面積は１号大型建物が128.60㎡、２号大型建物が161.88㎡を測る。松山平野内では初めての検出であり、出土遺物から古墳時代初頭の時期をあてている。一方、一般集落では前期前半に樽味立添遺跡１次調査にて、一辺４ｍを測る方形住居ＳＢ13が検出されている。前期後半では樽味四反地遺跡16次にて、一辺６ｍを測る方形住居ＳＢ１などが検出されている。ただし、古墳時代を通してみると、前期の遺構や遺物の検出例は少ない。

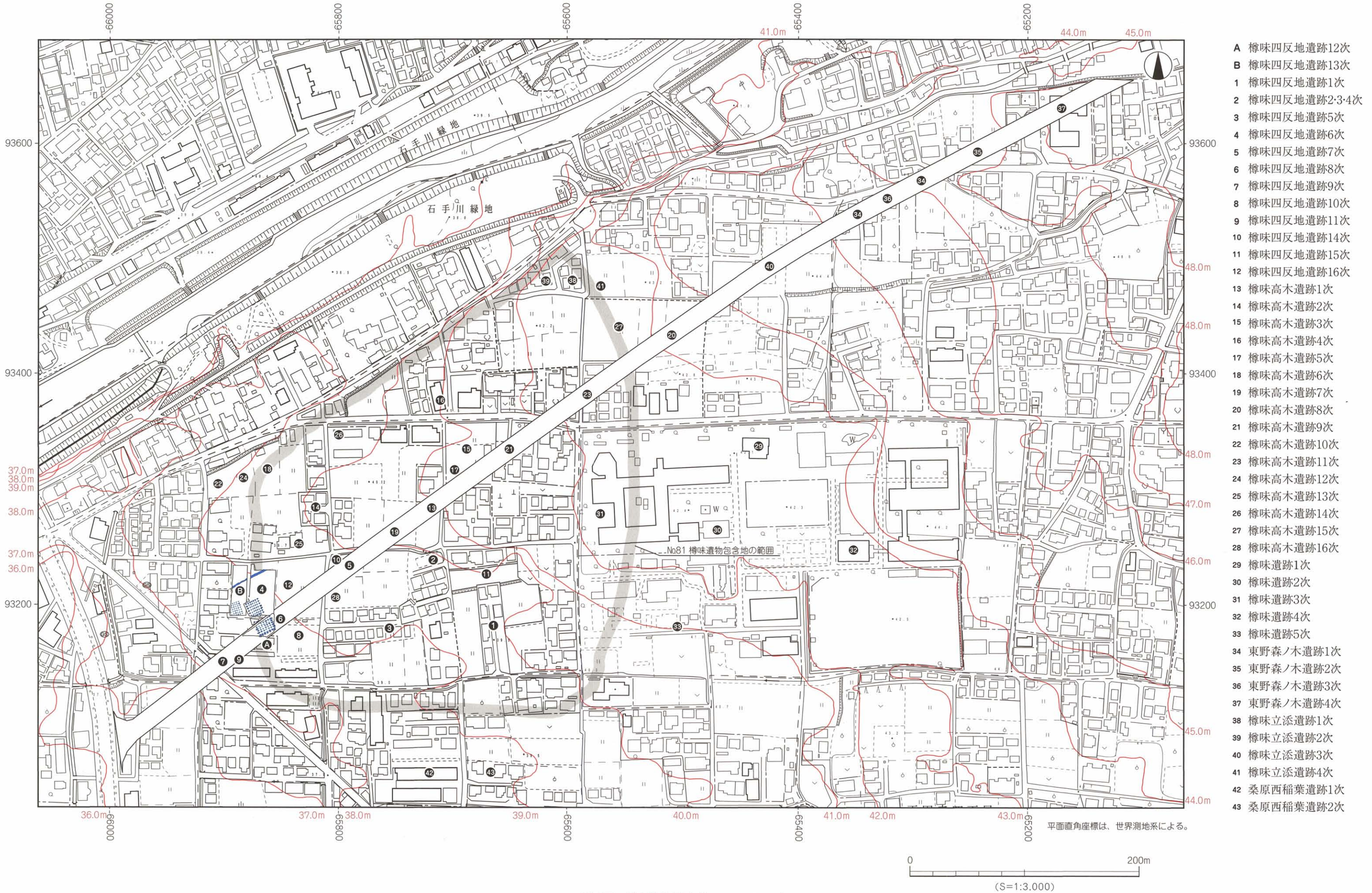
〔中期〕中期では遺構・遺物共に検出例が増加する。中期前半では樽味高木遺跡７～９・11・12次調査、樽味四反地遺跡７～９・16次調査、樽味立添遺跡４次調査において竪穴住居が多数確認されている。平面形態は方形～長方形を呈しており、一辺３～４ｍを測る小型住居と一辺６ｍ以上の住居とに

分かれる。遺物では樽味四反地遺跡７次調査検出の住居ＳＢ304から朝鮮系軟質土器や土製算盤玉形紡錘車が出土しており、樽味地区では渡来人との関係が密接であったとも考えられる。

〔後期〕後期では中期と同様に遺構や遺物が多数確認されている。樽味四反地遺跡５・６・16次調査において竪穴住居が確認されている。調査地に隣接する樽味四反地遺跡６次調査では一辺４～７ｍを測る隅丸方形住居が多数検出され、住居内からは臼玉やガラス小玉が出土している。古墳時代後期には竪穴住居の廃絶に伴い、人為的に埋戻しや臼玉やガラス小玉等の装飾品を伴った廃絶行為がみられた。

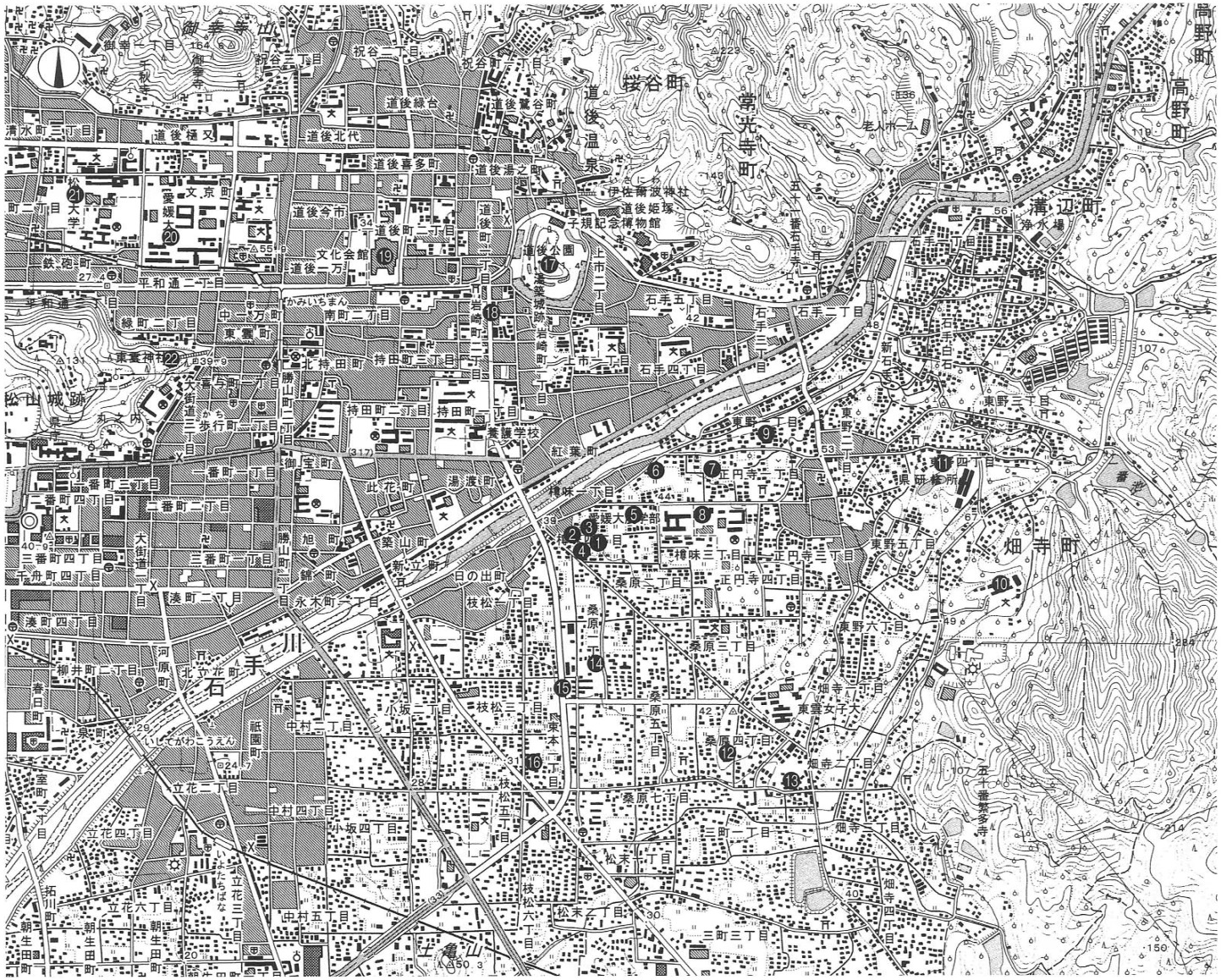
【参考文献】

宮本一夫　1989「樽味遺跡」愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ⅰ
吉田　広　1997「樽味遺跡５次調査」愛媛大学埋蔵文化財調査報告Ⅸ
高尾和長　2007「樽味立添遺跡３次調査」松山市文化財調査報告書第117集
加島次郎　2007「東野森ノ木遺跡４次調査」松山市文化財調査報告書第117集
高尾和長　2002「樽味四反地遺跡５次調査」松山市文化財調査報告書第87集
宮内慎一　2007「樽味高木遺跡13次調査」松山市埋蔵文化財調査年報19
梅木謙一　1994「樽味四反地遺跡３・４次調査」松山市文化財調査報告書第46集
梅木謙一　1992「樽味立添遺跡」松山市文化財調査報告書第26集
小玉亜紀子　2003「樽味四反地遺跡６次調査」松山市文化財調査報告書第94集
梅木謙一　1992「樽味高木遺跡」松山市文化財調査報告書第26集
加島次郎　2007「樽味高木遺跡７次調査」松山市文化財調査報告書第117集
高尾和長　2007「樽味高木遺跡８次調査」松山市文化財調査報告書第117集
加島次郎　2007「樽味高木遺跡９次調査」松山市文化財調査報告書第117集
高尾和長　2007「樽味高木遺跡11次調査」松山市文化財調査報告書第117集
河野史知　2006「樽味高木遺跡12次調査」松山市埋蔵文化財調査年報18
加島次郎　2007「樽味四反地遺跡７次調査」松山市文化財調査報告書第117集
加島次郎　2007「樽味四反地遺跡８次調査」松山市文化財調査報告書第117集
加島次郎　2007「樽味四反地遺跡９次調査」松山市文化財調査報告書第117集
宮内慎一　2007「樽味四反地遺跡16次調査」松山市埋蔵文化財調査年報19
水本完児　2007「樽味立添遺跡４次調査」松山市埋蔵文化財調査年報19



A 樽味四反地遺跡12次
B 樽味四反地遺跡13次
1 樽味四反地遺跡1次
2 樽味四反地遺跡2·3·4次
3 樽味四反地遺跡5次
4 樽味四反地遺跡6次
5 樽味四反地遺跡7次
6 樽味四反地遺跡8次
7 樽味四反地遺跡9次
8 樽味四反地遺跡10次
9 樽味四反地遺跡11次
10 樽味四反地遺跡14次
11 樽味四反地遺跡15次
12 樽味四反地遺跡16次
13 樽味高木遺跡1次
14 樽味高木遺跡2次
15 樽味高木遺跡3次
16 樽味高木遺跡4次
17 樽味高木遺跡5次
18 樽味高木遺跡6次
19 樽味高木遺跡7次
20 樽味高木遺跡8次
21 樽味高木遺跡9次
22 樽味高木遺跡10次
23 樽味高木遺跡11次
24 樽味高木遺跡12次
25 樽味高木遺跡13次
26 樽味高木遺跡14次
27 樽味高木遺跡15次
28 樽味高木遺跡16次
29 樽味遺跡1次
30 樽味遺跡2次
31 樽味遺跡3次
32 樽味遺跡4次
33 樽味遺跡5次
34 東野森ノ木遺跡1次
35 東野森ノ木遺跡2次
36 東野森ノ木遺跡3次
37 東野森ノ木遺跡4次
38 樽味立添遺跡1次
39 樽味立添遺跡2次
40 樽味立添遺跡3次
41 樽味立添遺跡4次
42 桑原西稲葉遺跡1次
43 桑原西稲葉遺跡2次

第２図　調査地位置図（Ｓ＝１：3,000）



第３図　周辺主要遺跡分布図（Ｓ＝１：25,000）

❶ 樽味四反地遺跡12次
❷ 樽味四反地遺跡13次
❸ 樽味四反地遺跡６次
❹ 樽味四反地遺跡８次
❺ 樽味高木遺跡３次
❻ 樽味立添遺跡１次
❼ 樽味立添遺跡３次
❽ 樽味遺跡
❾ 東野森ノ木遺跡４次
❿ 畑寺竹ヶ谷古墳
⓫ 東野お茶屋台古墳
⓬ 経石山古墳
⓭ 三島神社古墳
⓮ 桑原高井遺跡１次
⓯ 東本遺跡４次
⓰ 枝松遺跡５次
⓱ 湯築城址
⓲ 岩崎遺跡
⓳ 道後今市遺跡
⓴ 文京遺跡
㉑ 松山大学構内遺跡
㉒ 東雲神社古墳

第２章　樽味四反地遺跡12次調査

１．調査の経緯

（１）調査の経緯

調査は2005（平成17）年10月17日から12月26日までの間実施した。以下調査工程を略記する。発掘調査は廃土置き場の都合上、調査地内を東半分と西半分とに分けて実施した。10月17日、西半分の調査を開始する。重機にて表土層を除去した後、引き続き包含層を掘り下げて遺物を取り上げる。10月24日、第Ⅵ層上面にて竪穴住居、掘立柱建物、土坑、溝、柱穴を検出した。10月26日、竪穴住居と土坑の掘り下げをする。掘立柱建物を構成する柱穴は半截し、測量をおこなう。なお、11月１日、発掘調査中には職場体験学習として、勝山中学校の生徒２名が調査に参加し屋外調査や測量作業を体験した。11月２日、測量業者に基準点測量を委託し、５ｍ四方のグリットを設定する。11月17日、すべての遺構測量を終了し、西半分の調査を終了した。11月21日、重機により西半分の埋め戻し作業をおこない、引き続き東半分の表土掘削をおこなう。11月24日、第Ⅶ層上面にて竪穴住居、溝、柱穴を検出した。なお、竪穴住居は西半分で検出した住居の延長部である。12月１日、竪穴住居の掘り下げをする。12月22日、東半分の調査を終了した。12月26日、重機により東半分の埋め戻し作業をおこなう。12月26日、発掘機材や用具を撤収し発掘調査を終える。

（２）調査組織

調 査 地　　松山市樽味４丁目228番３
遺 跡 名　　樽味四反地遺跡12次調査
調査期間　　2005（平成17）年10月17日～2005（平成17）年12月26日
調査面積　　201㎡

２．層　位

（１）基本層位（第６図）

調査地は標高39.20ｍに立地し、調査以前は既存宅地であった。調査地の基本層位は以下のとおりである。

第Ⅰ層：近現代の造成に伴う客土で、地表下40～50cmまで開発が行われている。

第Ⅱ層：近現代の水田耕作に伴う耕土である。土色の違いにより２層に分層される。

第Ⅱ①層－青灰色（5B6/1）粘質土で水田耕作にかかわる耕作土である。層厚５～15cmを測る。

第Ⅱ②層－黄橙色（7.5YR7/8）粘質土で水田耕作にかかわる床土である。層厚５～15cmを測る。

第Ⅲ層：灰褐色(7.5YR4/2)粘質シルトで調査地北東部を除く全域に堆積し、層厚10～15cmを測る。

第Ⅳ層：灰黄褐色（10YR5/2）粘質シルトで調査地西部に堆積し、層厚20～25cmを測る。本層中からは、主に古代に時期比定される土師器、須恵器のほか、石器が出土した。

第Ⅴ層：黒色（10YR2/1）粘質シルトで調査地全域に堆積し、層厚15～25cmを測る。本層中からは弥生土器、土師器、須恵器が出土した。

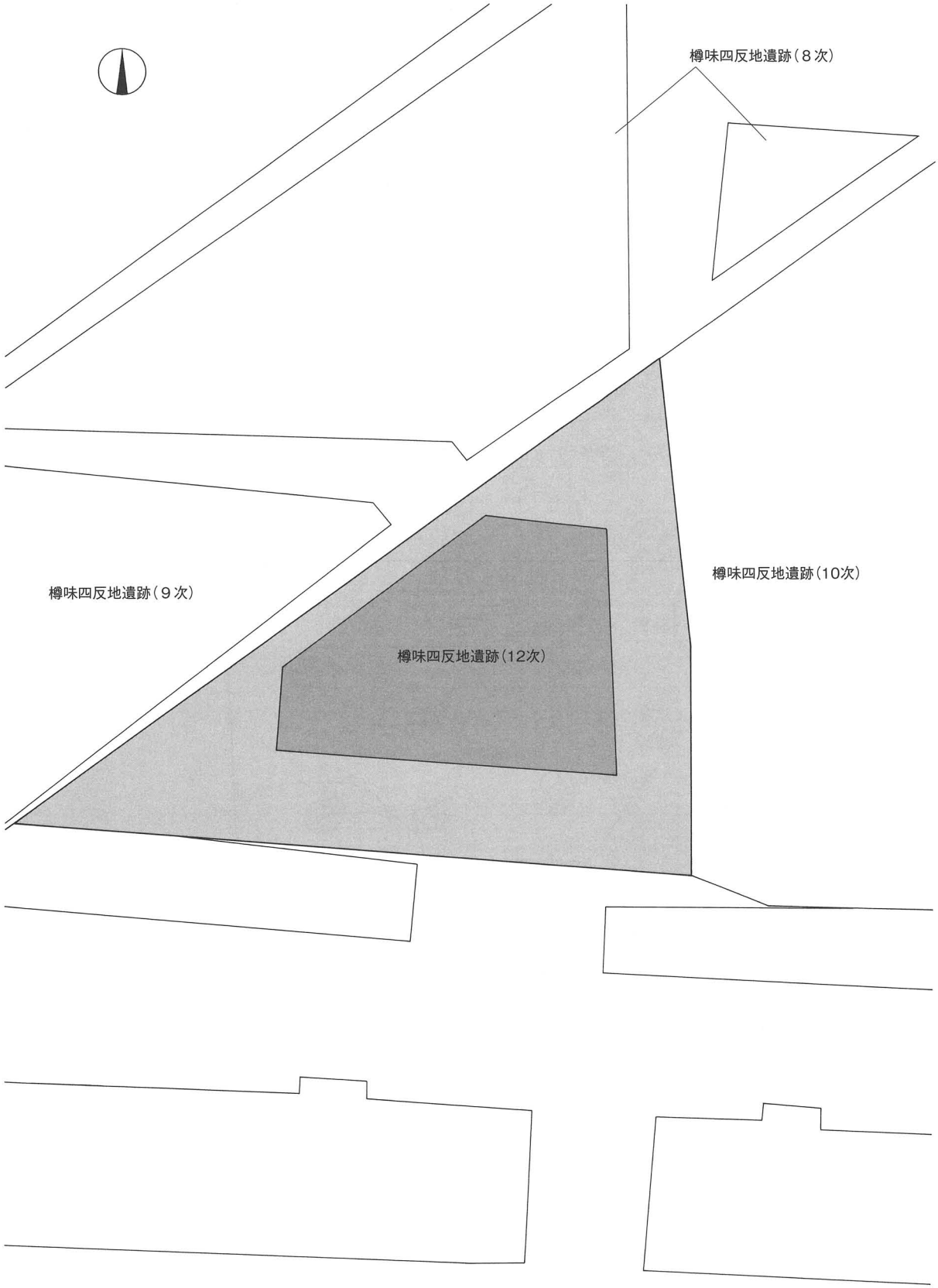
第Ⅵ層：にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質シルトで、本層上面が調査における最終遺構検出面となる。

本層中からの遺物の出土はない。

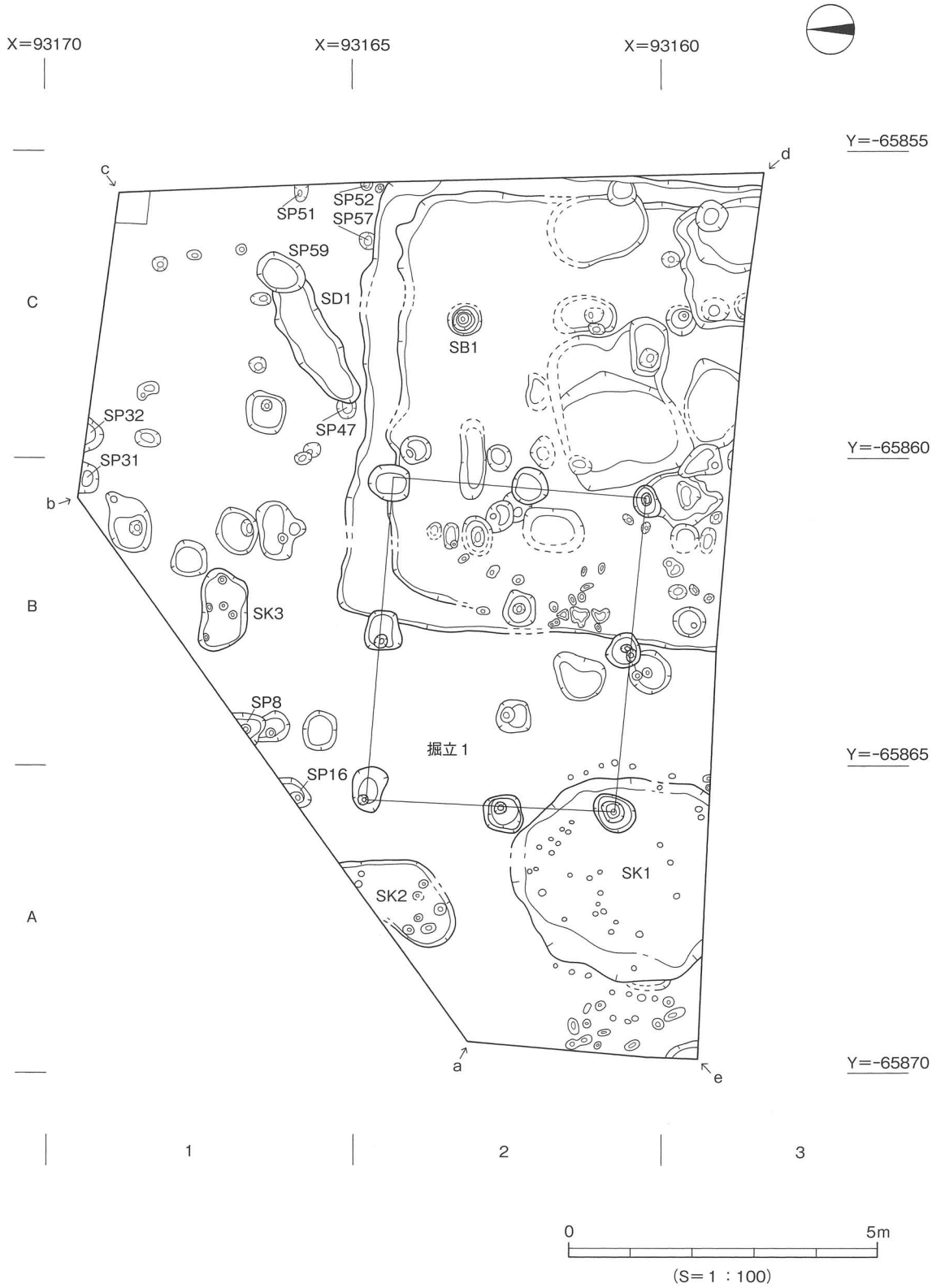
検出遺構や出土遺物から、第Ⅳ層は古代、第Ⅴ層は弥生時代～古墳時代までに堆積した土層と考えられる。なお、第Ⅵ層上面の標高を測量すると、調査地北東部が最も高く、南西部に向けて緩傾斜する（比高差35cm）。なお、調査地内を５ｍ四方のグリットに分けた。グリットは西から東へＡ・Ｂ・Ｃ、北から南へ１・２・３とし、Ａ１・Ａ２・・・Ｃ３といったグリット名を付した。

（２）検出遺構・遺物

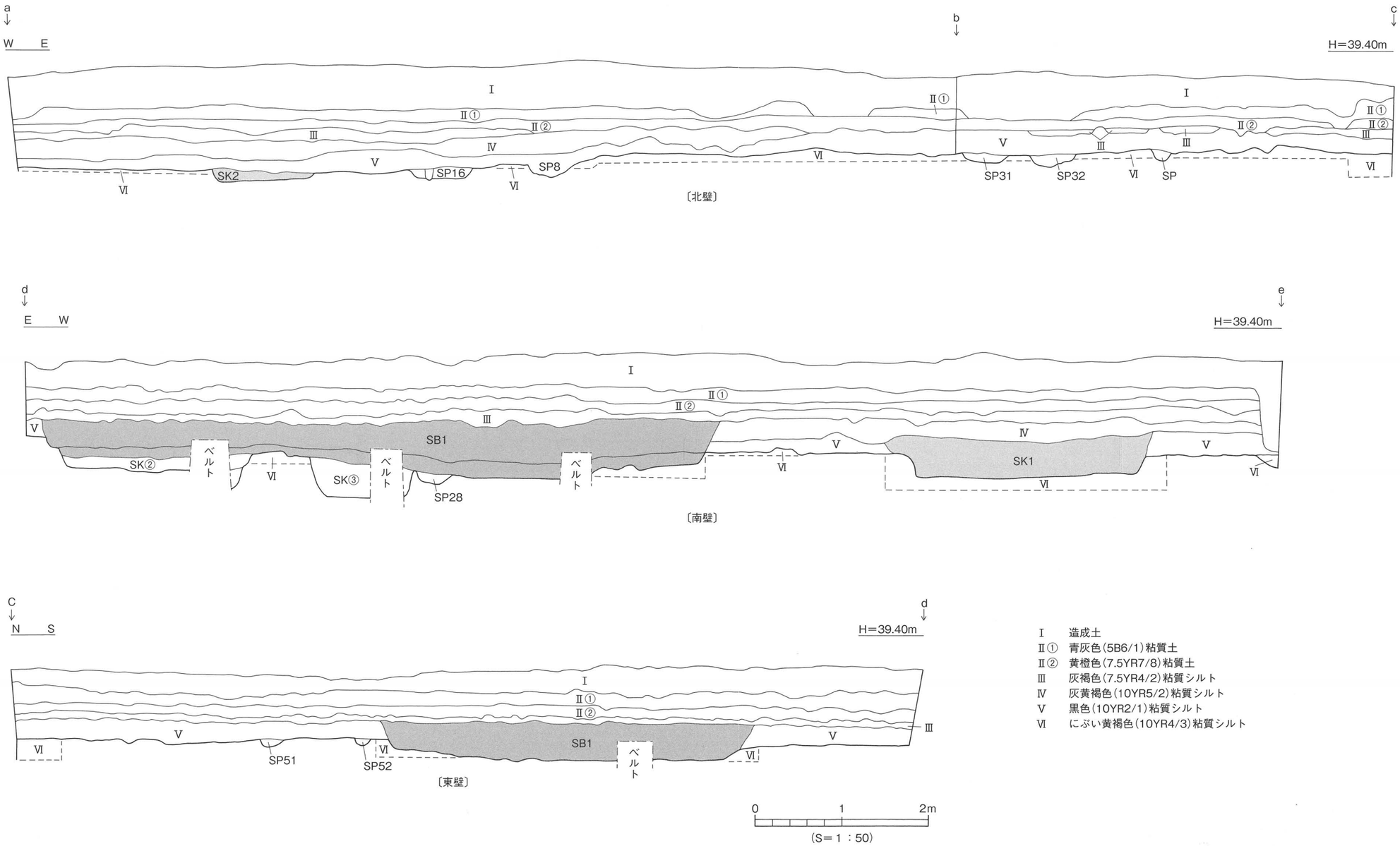
調査では主に古墳時代の遺構を検出した。竪穴住居１棟〔後期後半〕、掘立柱建物１棟〔後期後半以降〕、溝１条〔時期不明〕、土坑３基〔ＳＫ１：中期後半、ＳＫ２：中期後半、ＳＫ３：中期後半〕、柱穴49基である。遺物は遺構及び包含層中より、弥生土器、土師器、須恵器、石器、鉄器、玉類のほか、分銅形土製品２点と軟質土器片が出土した。



第４図　調査地位置図（Ｓ＝１：250）


X=93170
X=93165
X=93160
Y=-65855
Y=-65860
Y=-65865
Y=-65870
C
B
A
1
2
3
a
b
c
d
e
SP51
SP52
SP57
SP59
SD1
SB1
SP32
SP31
SP47
SK3
SP8
SP16
掘立１
SK1
SK2
0
5m
(S=１：100)

第５図　遺構配置図



Ⅰ　造成土
Ⅱ①　青灰色(5B6/1)粘質土
Ⅱ②　黄橙色(7.5YR7/8)粘質土
Ⅲ　灰褐色(7.5YR4/2)粘質シルト
Ⅳ　灰黄褐色(10YR5/2)粘質シルト
Ⅴ　黒色(10YR2/1)粘質シルト
Ⅵ　にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質シルト

第６図　調査壁土層図

3．遺構と遺物

本調査では、竪穴住居１棟、掘立柱建物１棟、溝１条、土坑３基、柱穴49基を検出した。すべて第Ⅵ層上面での検出である。

（1）竪穴住居

ＳＢ１（第５・７図、図版３）

ＳＢ１は調査区東側Ｂ１～Ｃ３区に位置する。ＳＢ１は住居埋土の掘り下げを進めるうちに、住居内側にて新たな住居プランを検出した。断面観察の結果、建て替え（拡張）が施された住居であることがわかった。ここでは構築時と改築時に分けて説明する。

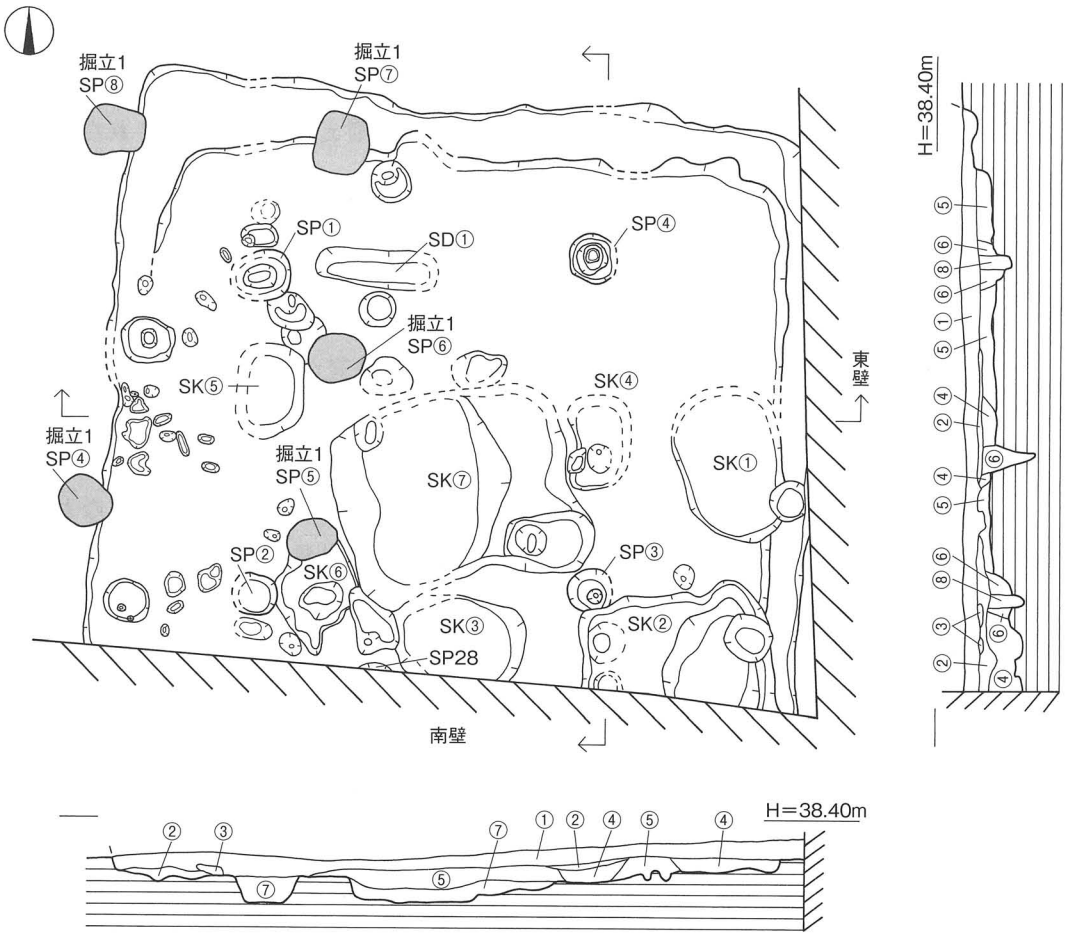
ｉ）構築時：住居西側は掘立１柱穴（ＳＰ④・⑧）に切られ、東側、南側は調査区外に続く。第Ⅵ層上面での検出であるが、調査区南壁の土層観察により第Ⅳ層上面から掘り込まれた遺構であることを確認した。平面形態は方形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長6.70m、南北検出長5.60m、壁高10～16cm、床面積37.52㎡を測る。住居埋土は黒褐色粘質シルトに、にぶい黄褐色粘質シルトがブロック状に少量混入するもの（⑤層）である。主柱穴はＳＰ①～④の４本を確認した。各柱穴の平面形態は円形～楕円形を呈し、規模は径40～50cm、深さ20cmを測る。柱穴掘り方埋土は黒褐色粘質シルトに、にぶい黄褐色粘質シルトがブロック状に混入するもの（⑥層）である。なお、ＳＰ③・④では柱痕を確認し、柱痕径は径15cmを測る。柱痕埋土は黒褐色粘質シルト（⑧層）である。床面にて、住居構築以前と思われる土坑３基（ＳＫ③・⑤・⑦）を検出した。平面形態は隅丸方形～楕円形を呈し、規模は径1.2～2.4m、深さ20～40cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は黒色粘質シルト（⑦層）である。土坑内からは弥生土器や石器のほか、ＳＫ⑤より分銅形土製品が１点出土した。

ⅱ）改築時：平面形態は方形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長7.70m、南北検出長6.30m、壁高26～32cm、床面積48.51㎡を測る。住居埋土は大きく２層あり、上層は黒褐色粘質シルトに褐色粘質シルトが斑点状に混入するもの（①層）、下層は黒褐色粘質シルトに、にぶい黄褐色粘質シルトがブロック状に混入するもの（②層）であり、にぶい黄褐色粘質シルト（③層）がブロック状に混入する。住居床面にて土坑４基（ＳＫ①・②・④・⑥）と溝１条（ＳＤ①）を検出した。各遺構埋土は、にぶい黄褐色粘質シルトに黒褐色粘質シルトが少量混入するもの（④層）である。

遺物は埋土上層から、弥生土器、土師器、須恵器、石器、鉄器のほか、滑石製の臼玉６点が散在して出土した。

出土遺物（第８・９図、図版５）

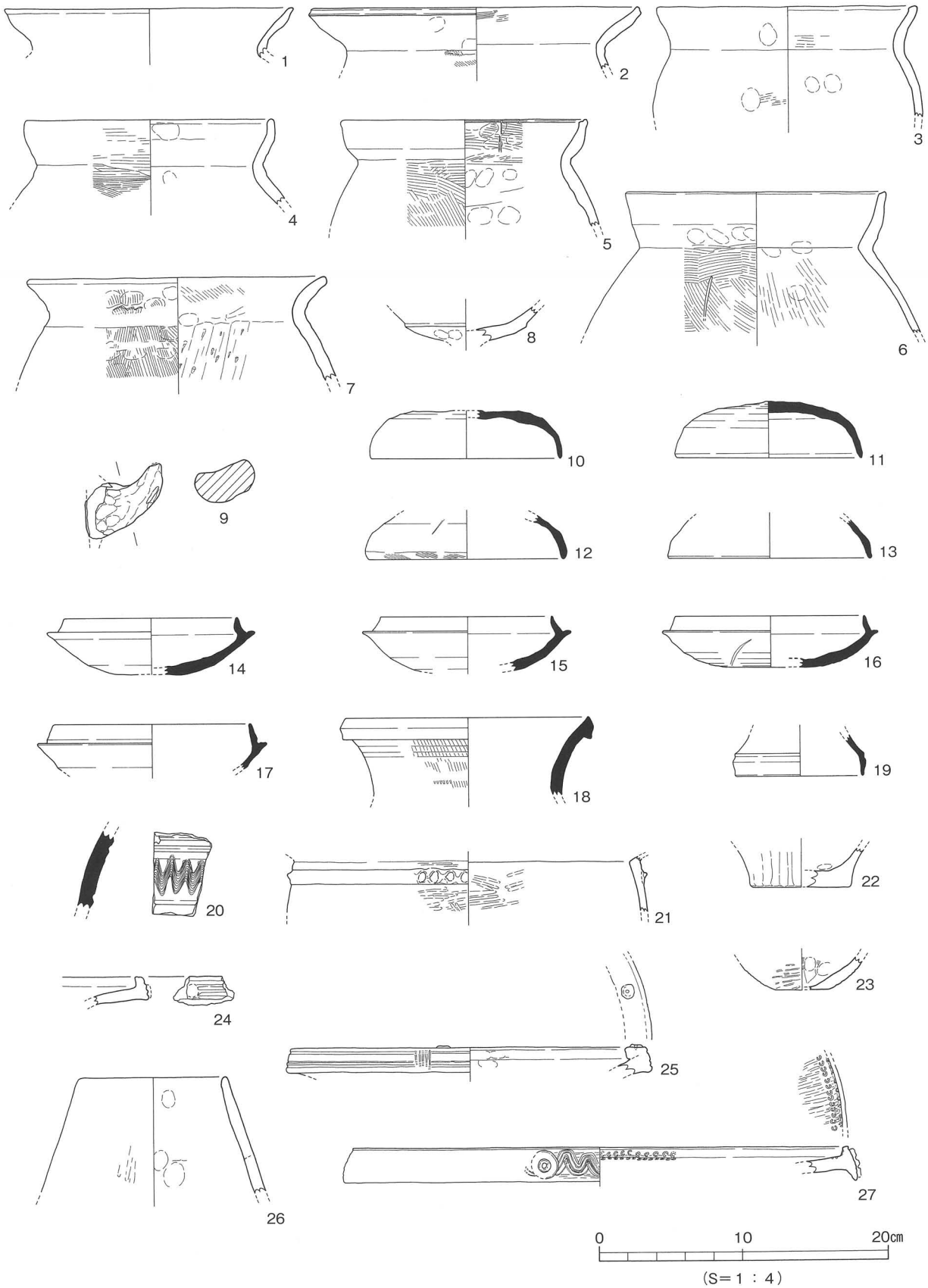
１～９は土師器である。１～７は甕の口縁部である。口縁部が内湾するもの（１～６）と、口縁部が外反するもの（７）とに分かれる。前者のうち、２以外は口縁端部が内傾する面をもつ。６は胴部に線刻による記号を施す。８は高坏の坏部片で、坏部下位に稜をもつ。９は甑の把手で断面楕円形である。10～20は須恵器である。10～13は坏蓋で、10・11は天井部が丸味を帯びる。10・12・13は口縁端部が丸く、11は口縁端部が内傾する。12は口縁端部に刻目を施す。14～17は坏身である。14～16はたちあがりが短く内傾し、16は底部にヘラ記号を施す。17は受部端に沈線状の凹みが巡り、たちあがり端部は丸い。18は壺の口縁部で口縁端部は断面三角形状に肥厚する。19は高坏の脚部片で、脚端部は下方に屈曲する。裾部外面に凹線状の凹みが巡る。20は器台の坏部片で、凹線状の凹みが２条と波状文を施す。21～27は弥生土器である。21～23は甕である。21は口縁部下に貼付凸帯文１条と凸帯文上に押圧を施す。22は平底で、外面にヘラミガキを施す。23は小さい平底で、底部外面にタタキ痕が残る。



① 黒褐色(7.5YR2/2)粘質シルトに、褐色(7.5YR4/6)粘質シルトが斑点状に混入。
② 黒褐色(7.5YR2/2)粘質シルトに、にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質シルトがブロック状(2～5㎝大)に混入。
③ にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質シルト。
④ にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質シルトに、黒褐色(10YR2/3)粘質シルトが少量混入。〔SK①・②・④・⑥、SD①埋土〕
⑤ 黒褐色(10YR4/3)粘質シルトに、にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質シルトがブロック状(1～2㎝大)に少量混入。
⑥ 黒褐色(10YR4/3)粘質シルトに、にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質シルトがブロック状(3～5㎝大)に混入。〔SP①～④埋土〕
⑦ 黒色(10Y2/2)粘質シルト。〔SK③・⑤・⑦埋土〕
⑧ 黒褐色(10YR2/3)粘質シルト。

0　1　2m
(S＝1：80)

第7図　ＳＢ１測量図



第８図　ＳＢ１出土遺物実測図(1)

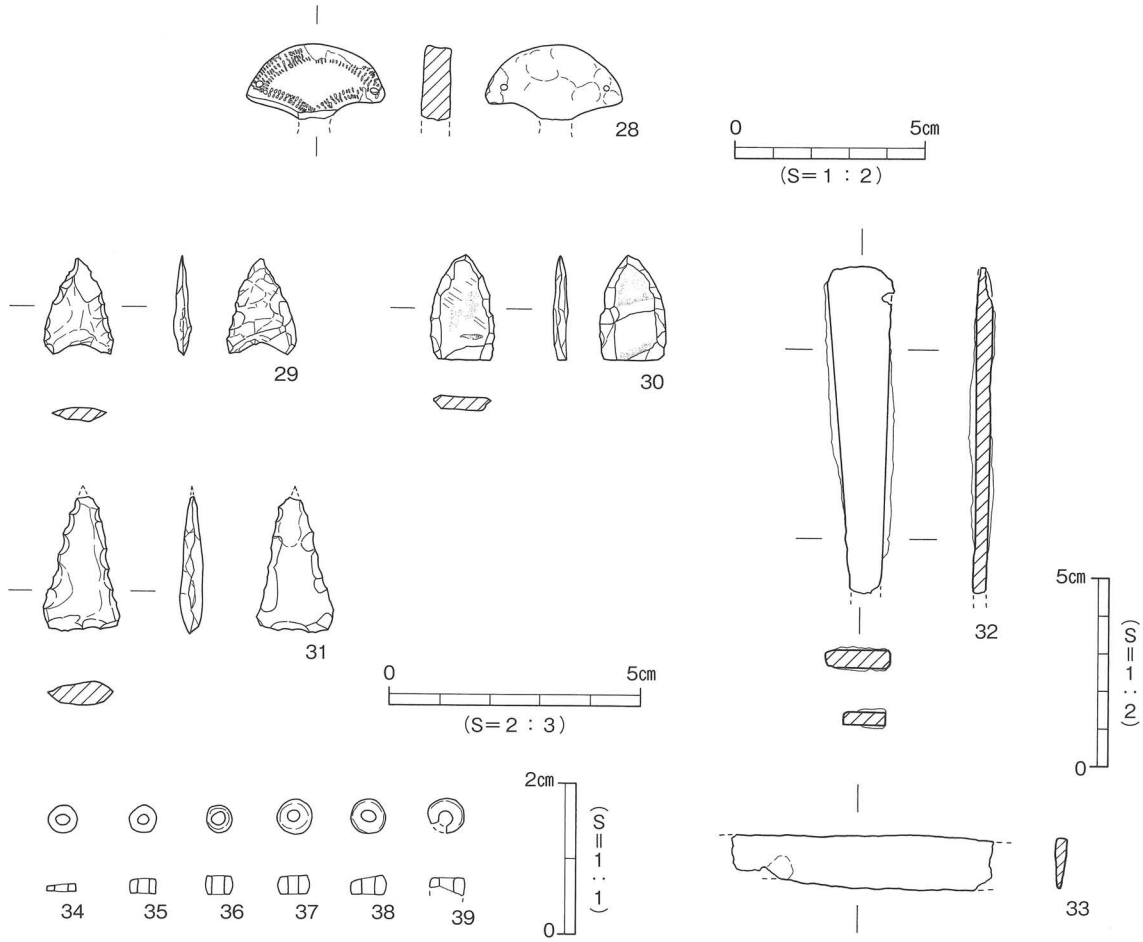
24～26は壺である。24・25は広口壺で、24は口縁端部を上方に拡張し、口縁端面に凹線文３条を施す。円形浮文のはがれ痕を看取する。25は豊後系土器で、口縁端面に沈線文３条と縦方向の沈線文を施し、口縁端部上面に円形浮文を貼付ける。26は無頸壺の口縁部である。27は器台で口縁端面に波状文５条と円形浮文を貼付け、口縁部上端に半截竹管文を施す。28は分銅形土製品で、左右２ヶ所に表面から穿孔する。表面に刺突文を施し、赤色顔料が付着する。29～31は打製石鏃で、29は凹基無茎式、30・31は平基無茎式である。材質はサヌカイトである。32・33は鉄製品で、32は鑿、33は刀子である。34～39は滑石製の臼玉で直径0.38～0.49cm、高さ0.11～0.28cm、重さ0.02～0.08ｇを測る。

時期：出土した土師器、須恵器の特徴と検出層位などから、ＳＢ１の廃棄、埋没時期は古墳時代後期後半とする。

（２）掘立柱建物

掘立１（第５・10図、図版４）

調査区中央部Ａ２～Ｂ２区に位置する。２間×２間の東西棟で、建物を構成する５基の柱穴（ＳＰ④～⑧）はＳＢ１、ＳＰ③はＳＫ１を切っている。建物方位は真北より約４°東へ振っている。規模は梁行長5.12m、桁行長4.12mを測る。各柱穴の平面形態は円～楕円形を呈し、規模は径40～70cm、深さ30～40cmを測る。柱穴掘り方埋土は黒褐色粘質シルトに、にぶい黄褐色粘質シルトがブロック状



第９図　ＳＢ１出土遺物実測図(2)

に混入するもの（①層）である。柱痕は６基の柱穴（ＳＰ①～⑤・⑧）で検出され、柱痕径は14～20cmを測る。柱痕埋土は黒褐色粘質シルト（②層）である。柱穴掘り方内からは弥生土器や土師器片、須恵器片が少量出土した。

出土遺物（第10図）

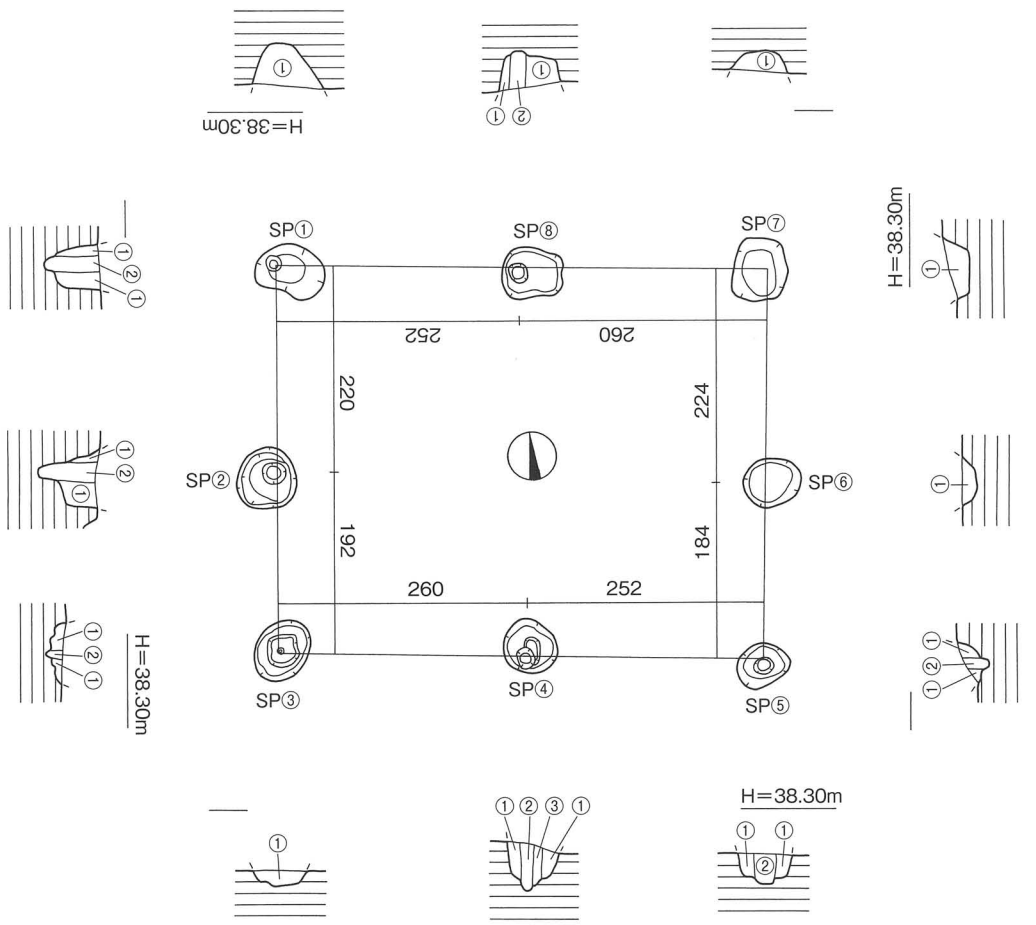
40は須恵器坏蓋である。天井部は丸く、口縁端部は内傾する。断面三角形状の明瞭な稜をもつ。

時期：出土遺物の特徴とＳＢ１を切ることから、古墳時代後期後半以降とする。

（３）溝

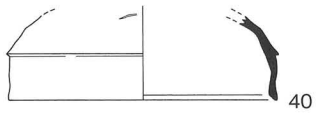
ＳＤ１（第５図）

調査区北東部、Ｃ１・２区に位置する北東－南西方向の溝である。溝東端はＳＰ59に切られ、西端



① 黒褐色(10YR2/2)粘質シルトに、にぶい黄褐色(10YR4/3)粘質シルトがブロック状に混入。
② 黒褐色(10YR2/2)粘質シルト。
③ 黒色(10YR2/2)粘質シルト。

0　1　2m
(S＝1：80)



0　10　20cm
(S＝1：4)

第10図　掘立１測量図・出土遺物実測図

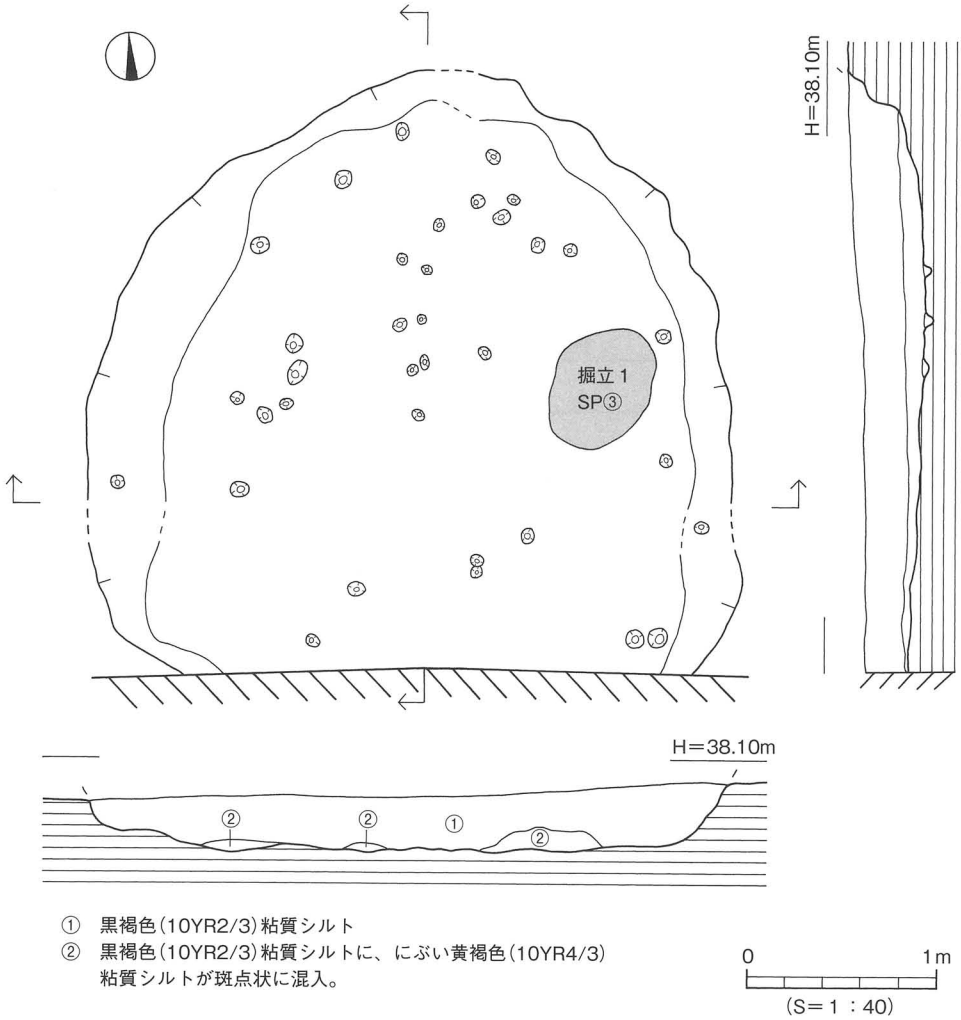
はＳＰ47を切る。規模は検出長2.06m、幅0.70m、深さ7cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は黒褐色粘質シルトに、にぶい黄褐色粘質シルトが混入する。溝底は東から西へ緩傾斜する（比高差３cm)。溝内からの遺物の出土はない。

時期：出土遺物がなく、時期特定が困難である。

（4）土　坑

ＳＫ１（第５・11図、図版３）

調査区南西部Ａ２・３区に位置する。土坑東側は掘立１柱穴（ＳＰ③）に切られ、南側は調査区外に続く。平面形態は円形を呈するものと考えられ、規模は東西長3.45m、南北検出長3.15m、深さ30cmを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、土坑西側壁体は比較的緩やかに立ち上がる。土坑埋土は２層あり、黒褐色粘質シルト（①層)、黒褐色粘質シルトに、にぶい黄褐色粘質シルトが斑点状に混入するもの(②層)である。土坑底面にて径６～10cm、深さ５～８cm大の小ピットを多数検出したが、遺構に伴うものかは判断できなかった。遺物は土坑埋土中より、土師器片や弥生土器片のほか、分銅形土製品１点が出土した。



第11図　ＳＫ１測量図

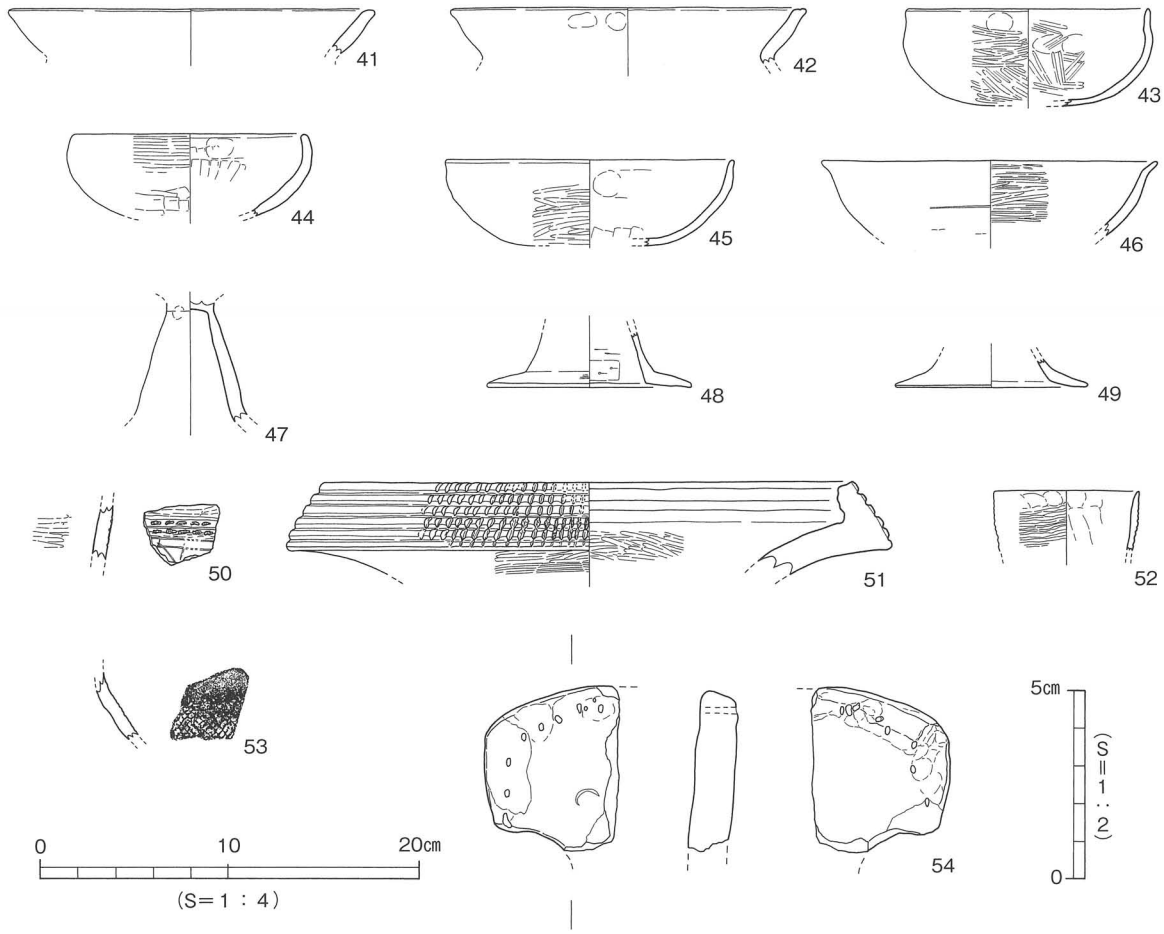
出土遺物（第12図、図版６）

41～49は土師器である。41・42は甕で、口縁部は内湾し、口縁端部は内傾する面をもつ。42は口縁端面がナデ凹む。43～45は椀で、口縁部は内湾して立ち上がる。46～49は高坏である。46は口縁部がわずかに外反する。47は坏部と脚部の接合法が差込技法である。48・49は柱裾部内面に稜をもつ。50・51は弥生土器である。50は甕の胴部小片で、沈線文５条と刺突文２列を施す。51は大型の広口壺である。口縁部を上方に拡張し、口縁端面に凹線文５条と刻目を施す。52は製塩土器で、器壁がうすい。53は軟質土器の甕の胴部片で、外面に格子タタキを施す。54は分銅形土製品である。表面に10ヵ所、裏面に８ヶ所の穿孔が看取される。

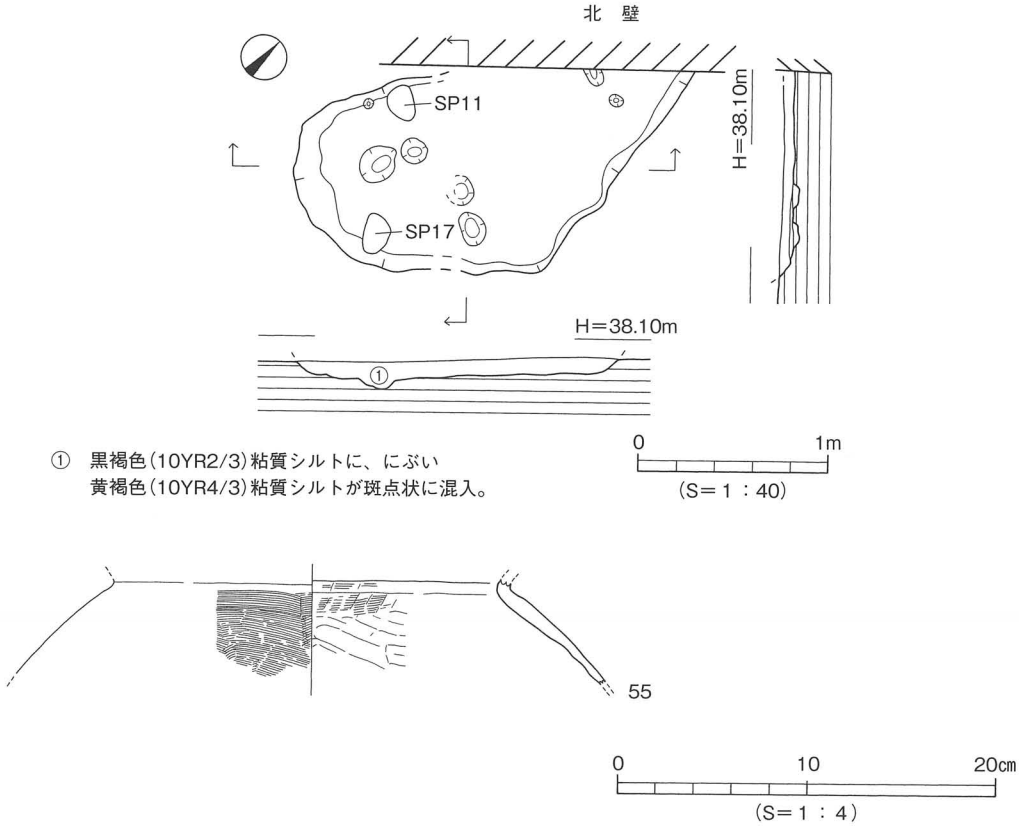
時期：出土した土師器の特徴と検出層位より、古墳時代中期後半とする。

ＳＫ２（第５・13図）

調査区西部Ａ１・２区に位置する。土坑北側はＳＰ11、南側はＳＰ17に切られ、土坑北側は調査区外に続く。平面形態は不整楕円形を呈するものと考えられ、規模は東西長1.15m、南北検出長2.11m、深さ７cmを測る。断面形態は皿状を呈する。土坑埋土は黒褐色粘質シルトに、にぶい黄褐色粘質シルトが斑点状に混入するもの（①層）である。土坑底面にて径10～15cm、深さ４～６cmの小ピットを検出したが、遺構に伴うものかは判断できなかった。遺物は土坑埋土中より、土師器片が数点出土した。



第12図　ＳＫ１出土遺物実測図



第13図　ＳＫ２測量図・出土遺物実測図

出土遺物（第13図）

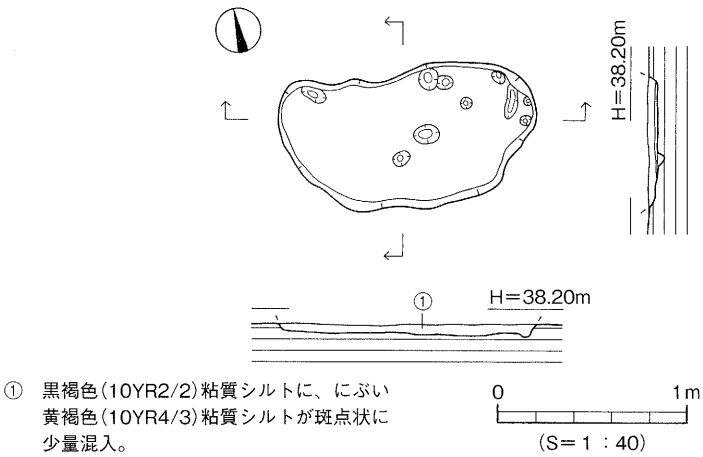
55は土師器甕の胴部片である。外面にハケメ調整、内面にヘラケズリ調整を施す。

時期：出土遺物が少なく時期特定は困難であるが、遺構埋土がＳＫ１と酷似することから概ね古墳時代中期後半とする。

ＳＫ３（第５・14図）

調査区北部Ｂ１区に位置する。平面形態は不整楕円形を呈し、規模は東西長1.33m、南北長0.70m、深さ６cmを測る。断面形態は皿状を呈する。土坑埋土は黒褐色粘質シルトに、にぶい黄褐色粘質シルトが斑点状に少量混入するもの（①層）である。土坑底面にて径６～14cm、深さ４～８cmの小ピットを数基検出したが、遺構に伴うものかは判断できなかった。土坑内からの遺物の出土はない。

時期：遺構埋土がＳＫ２と類似することから、概ね古墳時代中期後半としておく。



第14図　ＳＫ３測量図

4．その他の遺構と遺物

（1）柱　穴

本調査で検出した柱穴は、49基である。すべて第Ⅵ層上面での検出である。柱穴の平面形態は円形もしくは楕円形を呈し、径は最小30cm～最大90cmを測る。遺物は掘り方埋土中から出土し、大半が小片であるが実測可能な遺物を掲載する。埋土は５種類に分類され、黒色粘質シルト（Ａ類）と、黒色粘質シルトに黄色粘質シルトがブロック状に混入（Ｂ類）と、黒色粘質シルトに茶褐色粘質シルトがブロック状に混入（Ｃ類）と、黒色粘質シルトに灰黄色粘質シルトがブロック状に混入（Ｄ類）、灰色土（Ｅ類）である。なお、Ａ類、Ｂ類は調査地北部に分布する。

Ａ類：埋土が黒色粘質シルトであるもの……21基

Ｂ類：埋土が黒色粘質シルトに黄色粘質シルトがブロック状に混入……19基

Ｃ類：埋土が黒色粘質シルトに茶褐色粘質シルトがブロック状に混入……２基

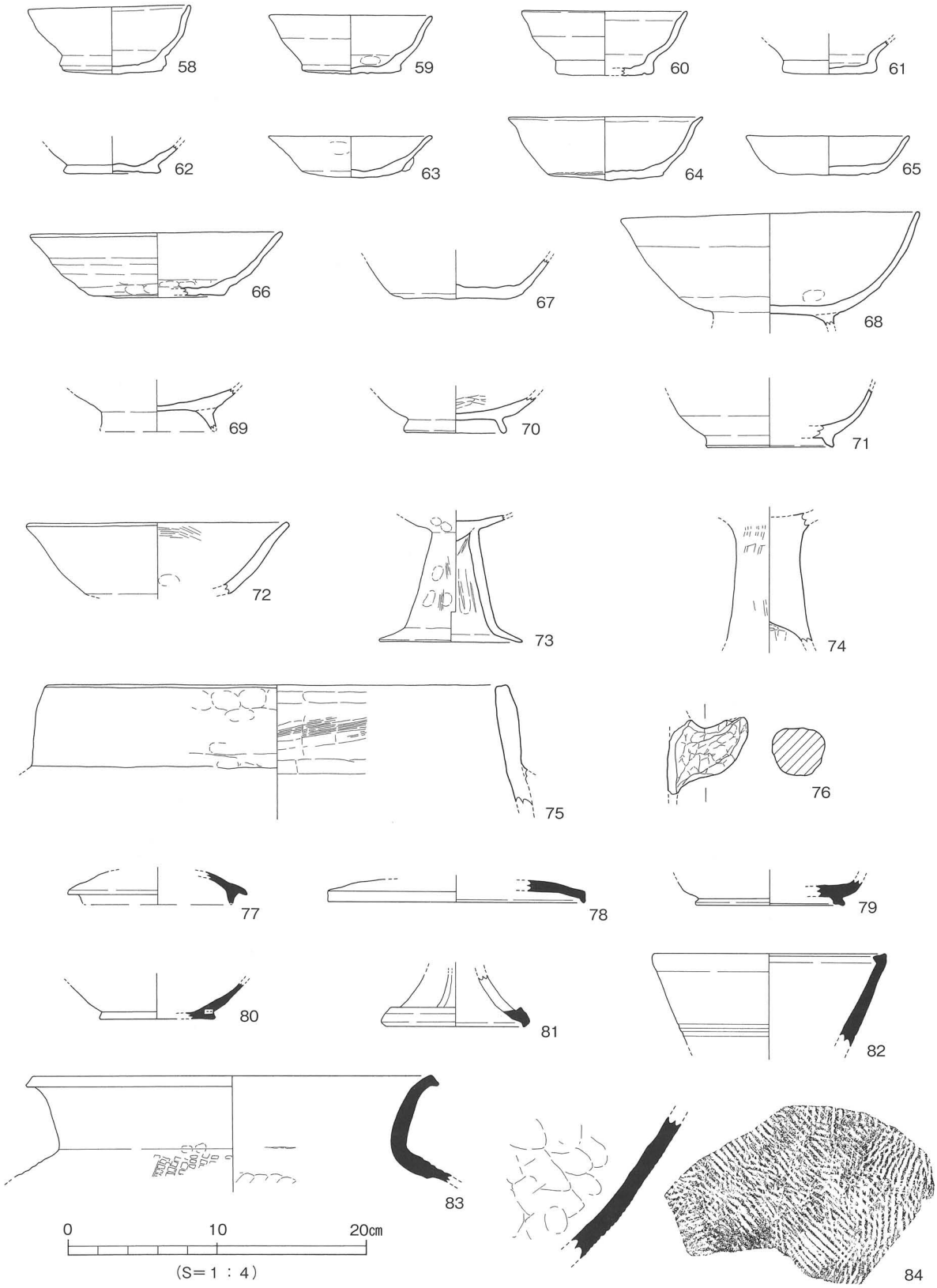
Ｄ類：埋土が黒色粘質シルトに灰黄色粘質シルトがブロック状に混入……５基

Ｅ類：埋土が灰色土であるもの……２基

出土遺物（第15図）

56はＳＰ17出土の須恵器広口壺である。口縁端部は上下方に肥厚し、断面三角形状となる。口縁部下に凸線１条と波状文を施す。57はＳＰ57出土の壺の胴部片で、沈線文２条と沈線文間に波状文を施す。

第15図　柱穴出土遺物実測図



第Ⅳ層：58～71
第Ⅴ層：72～84

第16図　包含層出土遺物実測図(1)

（2）包含層出土遺物

本調査では、第Ⅳ層及び第Ⅴ層中より、土器や石器が出土した。このうち、第Ⅳ層中からは遺存状態の良好な土師器（58～71）がまとまって出土した。調査区南壁の土層観察により、本来は第Ⅳ層中に遺構が存在しており、これらの土器は遺構に伴うものと考えられる。出土した土師器の底部切り離し技法や、形態の特徴などから、遺構は平安時代後期、11世紀代のものと考えられる。

1）第Ⅳ層出土遺物（第16図、図版６）

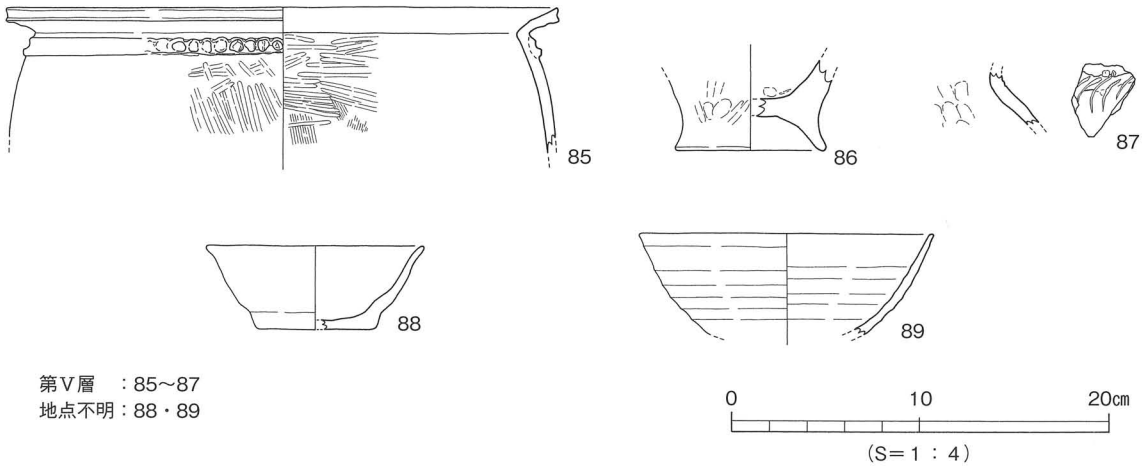
58～70は土師器である。58～67は坏である。58～62は円盤高台状の底部で、底部の切り離しは回転ヘラ切り技法である。68～70は椀で、断面三角形の高台が付く。68・70は底部切り離しが回転糸切り技法、69は回転ヘラ切り技法である。71は緑釉陶器の碗で、京都産である。

2）第Ⅴ層出土遺物（第16・17図、図版６）

72～76は土師器である。72～74は高坏で、72は口縁部がわずかに外反する。73は脚部片で、柱裾部内面に稜をもつ。柱部内面にシボリ痕を看取し、接合法は充填技法である。74は柱部片で中実となり、接合法は差込技法である。75はカマド片で、口縁部下に把手貼付痕を看取する。76は甑の把手で、断面円形である。77～84は須恵器である。77・78は坏蓋で、77はかえりが下方に短く伸びる。78は口縁部がわずかに下方に屈曲する。79・80は坏で、79は短い高台が底部のやや内側に付く。80は底部切り離しが回転糸切り技法である。81は高坏で脚端部は下方に屈曲し、裾部外面に凸線１条と透かし２ヶ所が看取される。82は擂鉢で、口縁端部は内面にわずかに肥厚する。口縁端面はナデ凹む。胴部外面に沈線２条を施す。83・84は甕で、83は口縁部が外反し口縁端部は三角形状に肥厚する。84は大型品で、外面に平行叩きを施す。85～87は弥生土器である。85・86は甕で、85は口縁端部がナデ凹む。頸部には凸帯文１条を貼付け、凸帯上に押圧を施す。86は底部で、上げ底となる。87は壺の肩部片で、貝殻文を施す。

（3）地点不明出土遺物（第17図）

88・89は土師器の坏である。88の底部切り離しは、回転ヘラ切り技法である。89は口縁部が内湾し、口縁端部は丸い。



第17図　包含層(2)・地点不明出土遺物実測図

5．小　結

今回の調査では、主に古墳時代の遺構と弥生時代から古代までの遺物を確認することができた。

中期後半では直径3.5mの円形土坑ＳＫ１が検出された。断面形態は逆台形状を呈するが、西側壁体は比較的緩やかに立ち上がる。土坑内からは土師器のほか分銅形土製品が１点と軟質土器片が出土した。後期後半では、一辺７ｍを超える比較的大型の方形住居ＳＢ１が検出された。住居は改築が施されており、住居の北側で70cm拡張されている。住居内からは土師器、須恵器、石器、鉄器のほか滑石製の臼玉１点が出土した。また、住居内床面土坑内からは、弥生土器のほか分銅形土製品が１点出土した。なお、分銅形土製品は形態や顔面表現が山陽地方の特徴を備えたものであった。弥生時代から古墳時代にかけて、調査地周辺では多数の集落関連遺構や遺物が確認されており、今回の調査結果は、該期の集落が樽味地区の南方に展開していることを示唆するものとなった。また、軟質土器や分銅形土製品の出土は、当時の樽味地区と他地域との交流を知るうえで、好資料となるものである。このほか、包含層資料であるが、平安時代後期の土師器がまとまって出土したことから、古代集落の存在を知る手がかりを得ることもできた。

遺構・遺物一覧　－凡例－

（１）以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

（２）遺物観察表の各記載について。

法量欄　（　）：復元推定値

調整欄　土器の各部位名称を略記した。

例）口→口縁部、天→天井部、頸→頸部、胴→胴部、脚→脚部、底→底部。

胎土・焼成欄　胎土欄では混和剤を略記した。

例）石→石英、長→長石、金→金ウンモ、密→精製土、角→角閃石。

（　）の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例）石・長（１～４）→「１～４mm大の石英・長石を含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表２　竪穴住居一覧

竪穴(SB)	時期	平面形	規　模（m）長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋　土	床面積(㎡)	主柱穴(本)	内部施設 高床	内部施設 土坑	内部施設 炉	内部施設 カマド	周壁溝	備　考
1	不明	方形	(6.70＋α)×(5.60＋α)×0.16	黒褐色粘質シルトに、にぶい黄褐色粘質シルトがブロック状に少量混入	37.52	4	—	○	—	—	—	構築時掘立１に切られる。
1	古墳時代後期後半	方形	(7.70＋α)×(6.30＋α)×0.32	黒褐色粘質シルトに、褐色粘質シルトが斑点状に混入、等	48.51	—	—	○	—	—	—	改築時

表３　掘立柱建物一覧

掘立	規模(間)	方向	桁　行 実長(m)	桁　行 柱間寸法(m)	梁　行 実長(m)	梁　行 柱間寸法(m)	方　位	床面積(㎡)	時期	備　考
1	２×３	東西	4.12	2.20・1.92	5.12	2.60・2.52	N－4°－E	21.09	古墳時代後期後半以降	SB1・SK1を切る。

表４　溝一覧

溝(SD)	地区	断面形	規　模（m）長さ×幅×深さ	方　向	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
1	Ｃ１・２	皿状	2.06×0.70×0.07	北東－南西	黒褐色粘質シルトに、にぶい黄褐色粘質シルトが混入	—	不明	SP59に切られ、SP47を切る。

表５　土坑一覧

土坑(SK)	地区	平面形	断面形	規　模（m）長さ(長径)×幅(短径)×深さ	床面積(㎡)	埋　土	出土遺物	時　期	備　考
1	Ａ２・３	円形	逆台形	3.45×(3.15＋α)×0.30	8.64	黒褐色粘質シルト、等	土師器 弥生土器 分銅形土製品	古墳時代中期後半	掘立１に切られる。
2	Ａ１・２	不整楕円形	皿状	(2.11＋α)×1.15×0.07	1.33	黒褐色粘質シルトに、にぶい黄褐色粘質シルトが斑点状に混入	土師器	古墳時代中期後半	SP11・17に切られる。
3	Ｂ１	不整楕円形	皿状	1.33×0.70×0.06	0.72	黒褐色粘質シルトに、にぶい黄褐色粘質シルトが斑点状に少量混入	—	古墳時代中期後半	

表６　ＳＢ１出土遺物観察表　土製品

（1）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
1	甕	口径(19.9) 残高　3.4	口縁部は内湾し、口縁端部は内傾する面をもつ。	マメツ (ヨコナデ)	ヨコナデ	淡褐色 淡茶褐色	石・長(1～3)金 ◎		
2	甕	口径(22.3) 残高　4.3	口縁部は内湾し、口縁端部はナデにより凹む。	胴マメツ (ハケ)	ハケ (マメツ)	淡茶褐色 淡灰褐色	石・長(1～3)金 ◎		
3	甕	口径(18.0) 残高　7.7	口縁部は内湾し、口縁端部は内傾する面をもつ。	マメツ (ハケ)	口ハケ (マメツ)	暗褐色 暗褐色	石・長(1～3)金 ◎	黒斑	5
4	甕	口径(17.1) 残高　6.9	口縁部は内湾し、口縁端部は内傾する面をもつ。	口ハケ→ヨコナデ 胴ハケ	ヨコナデ ナデ	灰黄褐色 暗灰褐色	石・長(1～5)金 ◎	煤付着	
5	甕	口径(16.8) 残高　7.5	口縁部は内湾し、口縁端部は内傾する面をもつ。端面は沈線状に凹む。	口ヨコナデ 胴ハケ(5本/cm)	口ハケ(5本/cm) 胴ナデ・板ナデ	茶褐色 暗茶褐色	石・長(1～3)金 ◎		
6	甕	口径　17.6 残高　9.8	口縁部は内湾し、口縁端部は内傾する面をもつ。胴上位にヘラ記号。	口ヨコナデ・ナデ 胴ハケ(5本/cm)	口ヨコナデ 胴ハケ	明茶色 暗茶褐色	石・長(1～4)金・角 ◎		5
7	甕	口径(20.4) 残高　7.2	口縁部は外反し、口縁端部は丸い。	ハケ(5本/cm) →ナデ・ヨコナデ	口ハケ→ヨコナデ 胴ケズリ	淡灰褐色 淡褐色	石・長(1～4)金 ◎	黒斑	
8	高坏	残高　2.3	坏部片。	ナデ ヨコナデ	マメツ	黄褐色 淡茶褐色	密・金 ◎		
9	甑	残高　5.1	把手。断面楕円形。	ナデ	ナデ	乳茶褐色 乳茶褐色	石・長(1～4) ◎		
10	坏蓋	口径(13.0) 残高　3.3	天井部は丸味があり、口縁端部は丸い。	天回転ヘラケズリ	天ケズリ？ →回転ナデ・ナデ	暗灰色 灰色	密 ◎		
11	坏蓋	口径　12.8 器高　4.0	天井部は丸く、口縁端部は内傾する。	天回転ヘラケズリ 口回転ナデ	天回転ナデ →ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎	火だすき	5
12	坏蓋	口径(13.4) 残高　3.0	口縁端部は丸い。口縁部外面に刻目。	天回転ヘラケズリ 口回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
13	坏蓋	口径(14.0) 残高　2.7	口縁端部は丸い。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 暗灰色	密 ◎		
14	坏身	口径(12.0) 残高　3.9	底部は丸く、たちあがりは短く内傾する。たちあがり端部は丸い。	口回転ナデ 底回転ヘラケズリ	底回転ナデ →ナデ	灰色 乳灰色	密 ◎		
15	坏身	口径(11.9) 残高　3.7	底部は丸く、たちあがりは低く内傾する。たちあがり端部は丸い。	口回転ナデ 底回転ヘラケズリ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		

ＳＢ１出土遺物観察表　土製品　（2）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
16	坏身	口径（12.8） 残高　3.5	底部は丸く、たちあがりは低く内傾する。たちあがり端部は丸い。底部にヘラ記号。	㊐回転ナデ ㊡回転ヘラケズリ	㊡回転ナデ →ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
17	坏身	口径（13.6） 残高　3.1	たちあがり端部は丸い。受部端に沈線状の凹み。	㊐回転ナデ ㊡回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
18	壺	口径（16.8） 残高　5.4	口縁端部は三角形状に肥厚する。	タタキ →回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 暗灰色	密 ◎		
19	高坏	底径　（8.6） 残高　2.9	脚端部は下方に屈曲する。裾部外面に凹線状の凹みが巡る。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
20	器台	残高　5.7	凹線状の凹みが巡り、凹みの間に波状文18条。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 灰色	密 ◎		
21	甕	残高　4.0	口縁下に貼付凸帯文１条＋押圧。	ヨコナデ ミガキ	㊐ヨコナデ ㊥ミガキ	茶褐色 茶褐色	石・長(1～2) ◎		
22	甕	底径　（6.8） 残高　2.7	平底。	ミガキ ㊡ナデ	ナデ(マメツ)	茶褐色 茶褐色	石・長(1～3)金 ◎		
23	甕	底径　（3.6） 残高　2.3	平底。	タタキ ㊡ナデ	ハケ→ ナデアゲ	乳褐色 乳褐色	石・長(1～4)金 ◎	黒斑	
24	壺	残高　2.0	口縁端部を上方に拡張し、端面に凹線文３条を施す。円形浮文のはがれ痕。	ハケ(6本/cm) →ヨコナデ	ヨコナデ	茶色 茶色	石・長(1～2)金 ◎		
25	壺	口径（24.6） 残高　2.1	口縁端面に沈線文３条＋縦方向の沈線文。口縁端部上面に円形浮文(φ0.7cm)。	マメツ	マメツ	淡橙茶褐色 淡橙茶褐色	石・長(1) ◎		5
26	壺	口径　10.0 残高　8.2	無頸壺。	マメツ （ミガキ？）	㊐ヨコナデ ㊥ナデ	黄茶褐色 明茶褐色	石・長(1～2)金 ◎		5
27	器台	口径（34.2） 残高　2.3	口縁端面に波状文５条＋円形浮文(φ2.0cm、上からφ0.8cmの竹管文押圧)。口縁上端に半截竹管文(φ0.35cm)。	ミガキ	ナデ ヨコナデ	赤茶色 赤茶色	石・長(1～2)金 ◎	黒斑	5
28	分銅形土製品	残長　2.0	左右2ヶ所に表面から裏面に穿孔(貫通)。表面に刺突文(上方3列、下方2列)。赤色顔料付着。	ナデ	—	茶色	石・長(1)金 ◎		巻頭2 5

表７　ＳＢ１出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
29	打製石鏃	ほぼ完存	サヌカイト	1.9	1.3	0.3	0.7	凹基無茎式	5
30	打製石鏃	完存	サヌカイト	2.0	1.2	0.2	1.0	平基無茎式	5
31	打製石鏃	ほぼ完存	サヌカイト	2.6	1.4	0.4	1.5	平基無茎式	5

表８　ＳＢ１出土遺物観察表　金属製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
32	鑿	茎部欠失	鉄	8.6	1.8	0.6	19.3		5
33	刀子	身部	鉄	1.6	6.9	0.3	8.0		5

表９　ＳＢ１出土遺物観察表　玉類

番号	器種	残存	材質	色	法量 直径(cm)	法量 高さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
34	臼玉	完形	滑石	灰色	0.39	0.11	0.02		5
35	臼玉	完形	滑石	灰色	0.38	0.20	0.04		5
36	臼玉	完形	滑石	灰色	0.38	0.28	0.05		5
37	臼玉	完形	滑石	灰色	0.45	0.25	0.08		5
38	臼玉	完形	滑石	灰色	0.48	0.26	0.08		5
39	臼玉	１／２	滑石	灰色	0.49	0.22	0.04		5

表10　掘立１出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
40	坏蓋	口径（14.1） 残高　4.4	天井部は丸く、口縁端部は内傾する。断面三角形状の明瞭な稜をもつ。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		

表11　ＳＫ１出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
41	甕	口径（18.8） 残高　2.3	口縁部は内湾し、口縁端部は内傾する面をもつ。	ヨコナデ	ヨコナデ	茶褐色 茶褐色	石(1～2) ○		
42	甕	口径（18.5） 残高　2.9	口縁部は内湾し、口縁端部は内傾する面をもつ。口縁端面がナデ凹む。	ヨコナデ	マメツ	明茶褐色 明茶褐色	石・長(1)金 ○		
43	椀	口径（12.5） 残高　5.1	口縁部は内湾し、立ち上がる。口縁端部は丸い。	口ヨコナデ ミガキ	口ヨコナデ ミガキ	暗茶褐色 暗茶褐色	密・金 ◎	黒斑 煤付着	6
44	椀	口径（12.4） 残高　4.3	口縁部は内湾し、立ち上がる。口縁端部は丸い。	ミガキ ケズリ	口ヨコナデ ミガキ？	茶褐色 茶褐色	石(1～5) ◎		
45	椀	口径（15.2） 残高　4.5	口縁部は内湾し、立ち上がる。口縁端部は丸い。	口ヨコナデ ミガキ	ヨコナデ 底工具痕	茶色 茶褐色	石・長(1～5)金 ◎	煤付着	
46	高坏	口径（17.6） 残高　3.9	坏部片。口縁部はわずかに外反する。	ヨコナデ	口ヨコナデ ミガキ	淡明茶色 淡茶褐色	石・長(1～2)金 ◎		
47	高坏	残高　5.9	脚部片。差込技法。	ナデ(マメツ)	マメツ	淡茶褐色 淡灰黄褐色	石・長(1)金 ◎		
48	高坏	底径（10.8） 残高　2.9	柱裾部境内面に稜をもつ。裾部は水平。	マメツ(ナデ) ヨコナデ	脚ケズリ 底ヨコナデ	淡褐色 茶褐色	石・長(1)金 ◎		6
49	高坏	底径（10.1） 残高　1.5	柱裾部境内面に稜をもつ。	ヨコナデ	脚工具ナデ 底ヨコナデ	淡茶褐色 淡褐色	密 ◎		
50	甕	残高　2.8	沈線文５条＋刺突文２列。	ミガキ	ナデ (ミガキ？)	茶褐色 茶色	石・長(1～3) ◎		
51	壺	口径（27.7） 残高　4.9	大型品。口縁部は上方に拡張し、端面に凹線文５条と刻目。	ハケ→ミガキ	ヨコナデ →ミガキ	淡茶色 灰褐色	石・長(1)金 ◎	黒斑 煤付着	
52	製塩土器	口径　(7.6) 残高　3.2	器壁うすい。	ナデ タタキ	ナデ	淡灰褐色 淡灰褐色	密・金 ◎		
53	甕	残高　2.9	胴部片。軟質土器。	格子タタキ	ハクリ	黄褐色 暗灰色	石・長(1～3) ◎		6
54	分銅形土製品	残長　4.3 幅　3.5	表面に10ヶ所穿孔(7ヶ貫通)。裏面に８ヶ所穿孔(6ヶ貫通)。目の表現あり。	ナデ	—	乳黄褐色	石・長(1) ◎		巻頭2 6

表12　ＳＫ２出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
55	甕	残高　5.5	胴部小片。	頸ヨコナデ 胴ハケ(7本/cm)	頸ヨコナデ 胴ハケ→ヘラケズリ	黄褐色 暗褐色	石・長(1～2)金 ◎		

表13　柱穴出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
56	壺	口径（18.2） 残高　3.4	口縁部上下方は三角形に肥厚する。口縁部下に凸線1条を施す。凸線下位に波状文10条。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 暗灰色	密 ◎	SP17	
57	壺	残高　2.3	胴部片。沈線文２条と沈線文間に波状文５～７条を施す。	回転ナデ	回転ナデ カキメ	灰色 灰色	密 ◎	SP57	巻頭2

表14　第Ⅳ層出土遺物観察表　土製品　（1）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
58	坏	口径　10.7 器高　4.6	回転ヘラ切り。２/３の残存。スノコ痕。	ヨコナデ	ヨコナデ 底ナデ	暗灰褐色 暗褐色	密 ◎	黒斑？	6
59	坏	口径（10.9） 器高　3.9	回転ヘラ切り。１/３の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ 底ナデ	乳灰褐色 乳茶褐色	密 ◎	煤付着	
60	坏	口径（11.0） 器高　4.3	回転ヘラ切り。１/３の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳灰褐色 淡灰褐色	密 ◎		
61	坏	底径　6.2 残高　2.2	回転ヘラ切り。スノコ痕。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳茶褐色 乳灰褐色	密 ◎		
62	坏	底径　6.2 残高　1.9	回転ヘラ切り。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳茶褐色 乳茶褐色	石・長(1～2) ◎		
63	坏	口径（10.7） 器高　2.8	２/３の残存。	マメツ	マメツ	淡灰褐色 乳白褐色	密 ◎	黒斑	6
64	坏	口径　12.9 器高　4.2	回転ヘラ切り。２/３の残存。スノコ痕。	ヨコナデ	ヨコナデ 底ヨコナデ→ナデ	暗灰褐色 暗灰褐色	密 ◎	煤付着	6
65	坏	口径（10.9） 器高　2.6	回転ヘラ切り。２/３の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ	暗灰褐色 黒灰色	密 ◎		6
66	坏	口径（16.8） 器高　4.3	回転ヘラ切り。１/２の残存。	ヨコナデ	ヨコナデ 底ヨコナデ→ナデ	乳茶褐色 乳茶褐色	密 ◎		

第Ⅳ層出土遺物観察表　土製品　（2）

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
67	坏	底径 6.9 残高 2.7	回転ヘラ切り。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳白褐色 乳白褐色	密 ◎		
68	椀	口径 19.8 残高 7.6	体部が丸味をもつ。回転糸切り。	ヨコナデ	ヨコナデ （マメツ）	乳白茶色 暗灰褐色	密 ◎	黒斑 煤付着	6
69	椀	残高 2.7	体部が丸味をもつ。回転ヘラ切り。	マメツ	ヨコナデ	乳白褐色 乳白褐色	石・長(1～2)金 ◎		
70	椀	底径 6.5 残高 2.4	回転糸切り。	ヨコナデ	ヨコナデ →ミガキ	淡黄白色 淡黄灰色	密 ◎		
71	碗	底径 (8.4) 残高 3.9	緑釉陶器。ヘラ切り。京都産。	施釉	施釉	淡緑色 淡緑色	密 ◎	胎土： 灰白色	巻頭2

表15　第Ⅴ層出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
72	高坏	口径 (17.2) 残高 4.8	坏部片。口縁部はわずかに外反する。	マメツ	マメツ	明橙茶褐色 橙茶褐色	石・長(1～3) ○		
73	高坏	底径 (9.6) 残高 8.4	脚部片。内面にシボリ痕。充填技法。	ハケ・ナデ マメツ	工具ナデ ナデ(マメツ)	乳黄茶色 乳黄茶色	石・長(1～3) ◎		
74	高坏	残高 8.6	柱部片。中実。差込技法。	マメツ	㊞板ナデ状	乳茶色 茶色	石・長(1～2) ◎		
75	カマド	口径 (30.6) 残高 8.1	口縁部下に把手貼付痕を看取。	ナデ ヨコナデ	ハケ→ナデ ヨコナデ	灰茶褐色 乳茶褐色	石・長(1～6) ◎	煤付着	6
76	甑	残高 5.1	把手。断面円形。	マメツ(ナデ)	ナデ(マメツ)	橙茶色 橙茶色	密 ◎		
77	坏蓋	残高 2.1	かえりは下方に伸びる。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
78	坏蓋	口径 (17.2) 残高 1.4	口縁部はわずかに下方に屈曲する。	回転ナデ	回転ナデ	赤茶色 灰赤茶色	密 ◎		
79	坏	底径 (9.8) 残高 1.7	体部は丸味を帯びる。高台は短く、底部の内側に付く。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	密 ◎		
80	坏	底径 (7.7) 残高 2.3	回転糸切り。	回転ナデ	回転ナデ	灰白色 白灰色	密 ◎		
81	高坏	底径 (9.2) 残高 3.5	脚端部は下方に屈曲して尖る。裾部外面に凸線1条。透かし2ヶ所看取。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 青灰色	密 ◎		
82	擂鉢	口径 (15.6) 残高 6.1	口縁端部は内面にわずかに肥厚する。口縁端面はナデ凹む。胴部中位に沈線文2条。	回転ナデ	回転ナデ	赤茶色 赤茶色	密 ◎		6
83	甕	口径 (26.6) 残高 7.1	大型品。外反口縁。口縁端部の外面を三角形に肥厚する。	㊀頸胴格子叩き →回転ナデ	回転ナデ・ナデ ㊀胴叩き	灰色 灰色	密 ◎		
84	甕	残高 9.4	大型品。	平行叩き →烏足形？	ナデ	灰白色 灰白色	密 ◎	煤付着	
85	甕	口径 (28.9) 残高 7.6	口縁端面はナデにより凹む。押圧凸帯文1条。	㊀ヨコナデ ㊀胴ミガキ	㊀ヨコナデ ㊀胴ハケ→ミガキ	茶褐色 茶褐色	石・長(1～3) ◎	黒斑	6
86	甕	底径 (7.8) 残高 4.8	上げ底。	ミガキ・ナデ ㊀底ヨコナデ・ナデ	ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1～3) ◎		6
87	壺	残高 2.7	肩部片。貝殻文。	ナデ	ナデ	淡茶色 淡茶色	密 ◎		

表16　地点不明出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量（cm）	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調（外面）（内面）	胎土 焼成	備考	図版
88	坏	口径 (11.5) 器高 4.4	1／4の残存。回転ヘラ切り。	ヨコナデ	ヨコナデ	乳茶褐色 乳白褐色	石・長(1～2)金 ◎		
89	坏	口径 (15.5) 残高 5.1	口縁部は内湾し、口縁端部は丸い。	ヨコナデ	ヨコナデ	灰白色 白灰色	密 ◎		

第３章　樽味四反地遺跡13次調査

１．調査の経緯

（１）調査の経緯

調査は2005（平成17）年11月１日から2006（平成18）年３月30日までの間に実施した。以下、調査工程を略記する。発掘調査は申請者の協力のもと、調査地東側隣接地を調査事務所及び廃土置き場として使用した。10月18日から調査事務所の設置や発掘機材の運搬をする。11月１日、重機にて耕作土、床土、包含層の順番で掘削し、土の種類ごとに排土置き場においてビニールシートで養生する。11月４日からは包含層を掘り下げ、土層ごとに遺物を取り上げる。11月16日、遺構検出面と調査壁面の精査をし、第Ⅷ層上面にて竪穴住居、土坑、溝、柱穴を検出する。11月22日、測量業者に４級基準点測量を委託し、調査地内に５ｍ四方のグリットを設定する。その後、調査地南半分で検出した竪穴住居を中心に掘り下げ作業をおこなう。住居群調査終了後、北半分で検出した竪穴住居と溝を中心に、掘り下げ及び測量作業をおこなう。第Ⅷ層以下の土層確認のため、調査区北壁、南壁及び西壁沿いに深掘りトレンチを設定する。2006（平成18）年１月16日より、溝、土坑、柱穴の掘り下げ及び測量作業をおこない、併行して調査壁土層図を作成する。２月10日、高所作業車を使用し、遺構完掘状況写真を撮影する。２月18日、樽味四反地遺跡12次調査と13次調査とを合わせて、一般市民対象の現地説明会を開催し、100名を超える参加者を得た。２月20日より、遺構内に設置したセクションベルトの除去や、半截の土坑や柱穴の完掘作業、及び土層や遺構の最終確認をおこなう。２月23日、最終確認作業により、新たに検出した柱穴を測量図面上に合成し、図面上及び現場での確認作業をおこなった結果、調査区南西部にて大型建物の存在を確認した。調査期間の関係上、報道関係にのみ報告をおこない、３月９日、調査を終了する。３月10日より重機による埋め戻し作業を開始する。調査地は発掘作業後も水田耕作をおこなうため、大型建物は真砂土で保護をした後、包含層、表土層の順に埋め戻し作業をおこなう。天候不良のため、埋め戻し作業に約３週間を費やす。３月27日から発掘機材や測量図面、遺物などを埋蔵文化財センターに運ぶ。３月30日、すべての埋め戻し作業が終了し発掘作業を完了する。

（２）調査組織

調 査 地　　松山市樽味４丁目231番１
遺 跡 名　　樽味四反地遺跡13次調査
調査期間　　2005（平成17）年11月１日～2006（平成18）年３月30日
調査面積　　820㎡

2．層　位

（1）基本層位（第19・20図）

調査地は標高39.2mに立地し、調査以前は水田であった。調査地の基本層位は、以下のとおりである。なお、第Ⅷ層以下は調査地西、南、北壁に設定した深掘りトレンチで確認した土層である。

第Ⅰ層：近現代の水田耕作に伴う耕作土である。土色の違いで２層に分層される。

第Ⅰ①層－青灰色（5B6/1）粘質土で、調査地全域に堆積する。層厚10～20cmを測る。

第Ⅰ②層－明青灰色（5BG7/1）粘質土で、調査地南西部と北西部に堆積する。層厚４～６cmを測る。

第Ⅱ層：近現代の水田耕作に伴う床土である。土色の違いで２層に分層される。

第Ⅱ①層－黄橙色（7.5YR7/8）粘質土で、調査地全域に堆積し、層厚８～12cmを測る。

第Ⅱ②層－オリーブ灰色（10Y6/2）粘質土で、調査地西部に堆積し、層厚８～10cmを測る。

第Ⅲ層：灰色（7.5Y6/1）粘質土で、調査地全域に堆積し、層厚６～18cmを測る。土層観察の結果、本層上面より遺構〔埋土Ⓒ〕が掘削されていることを確認した。

第Ⅳ層：褐灰色（10YR5/1）粘質土で、調査地中央部から南部に堆積し、層厚８～12cmを測る。本層中からは、古代の土師器、須恵器、陶磁器、瓦が出土した。

第Ⅴ層：灰黄褐色（10YR4/2）粘質シルトで、調査地全域に堆積し、層厚８～18cmを測る。本層中からは主に古墳時代から古代までに時期比定される土師器、須恵器のほか、石器が出土した。土層観察の結果、本層上面より遺構〔埋土Ⓑ・Ⓒ〕が掘削されていることを確認した。

第Ⅵ層：暗褐色（7.5YR3/2）粘質シルトで、調査地全域に堆積し、層厚12～26cmを測る。本層中からは、弥生土器、土師器、須恵器、石器が出土した。土層観察の結果、本層上面より遺構〔埋土Ⓑ・Ⓓ〕が掘削されていることを確認した。

第Ⅶ層：黒褐色（10YR2/3）粘質シルトで、調査地中央部から北部に堆積し、層厚８～20cmを測る。本層中からは弥生土器、石器が出土した。土層観察の結果、本層上面より遺構〔埋土Ⓐ・Ⓓ〕が掘削されていることを確認した。

第Ⅷ層：極暗褐色（7.5YR2/3）粘質シルトで、調査地北西部に堆積し、層厚７～12cmを測る。本層上面が、調査における最終遺構検出面となる。

第Ⅸ層：褐色（7.5YR4/6）粘質シルトで、調査地全域に堆積し、層厚12～36cmを測る。土層観察の結果、本層上面より遺構〔埋土Ⓐ・Ⓔ〕が掘削されていることを確認した。

第Ⅹ層：褐色（7.5YR4/6）シルトで、調査地全域に堆積し、層厚10～35cmを測る。

第Ⅺ層：褐灰色（10YR6/1）砂礫で、調査地全域に堆積する。

第Ⅷ層上面の標高を測量すると、調査地北東部が最も高く、南西部に向けて緩傾斜する（比高差28cm）。検出遺構や出土遺物から第Ⅳ層は古代、第Ⅴ層は古墳～古代、第Ⅵ・Ⅶ層は弥生～古墳時代までに堆積したものと考えられる。

（2）検出遺構・遺物（表17）

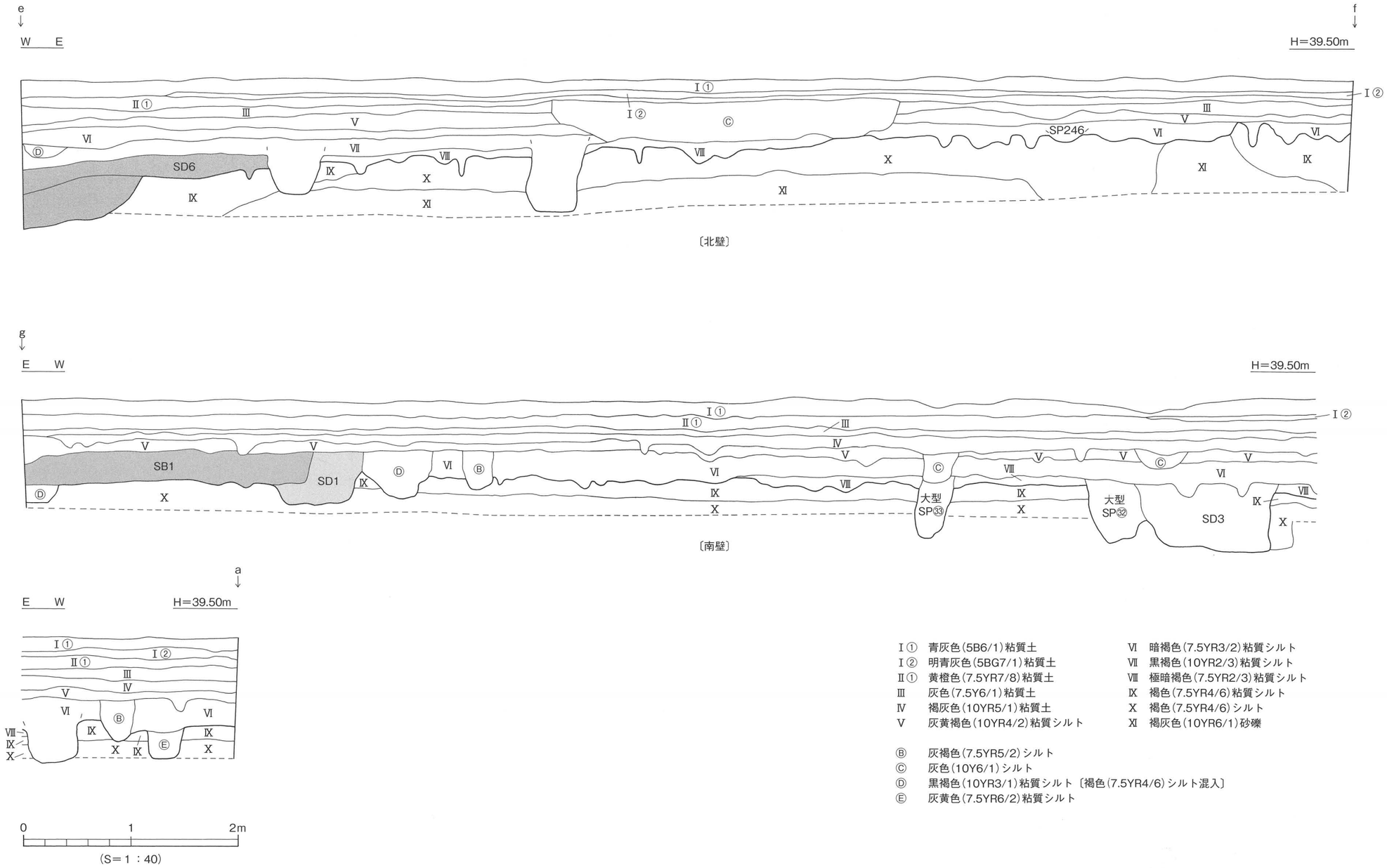
本調査で検出した遺構は竪穴住居11棟〔弥生時代：２棟、古墳時代：９棟〕、大型建物１棟〔古墳時代初頭〕、掘立柱建物１棟〔古墳時代中期後半以降〕、溝７条〔弥生時代：４条、古墳時代：２条、時期不明：１条〕、土坑８基〔弥生時代：４基、古墳時代：４基〕、柱穴276基である。出土遺物は弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、瓦、石器、鉄器、玉類（臼玉）、軟質土器、分銅形土製品１点、種子、動物遺存体（骨）である。

表17　遺構一覧

時　期	竪穴住居	掘立柱建物	溝	土 坑
弥生前期				SK１・４
弥生後期	SB２・４		SD１・３・４・７	SK６・７
古墳前期		３号大型建物	SD ２	
古墳中期	SB１・３・５・６・８・10・11	掘立１	SD ５	SK２・３・８・９
古墳後期	SB７・９			
時期不明			SD６	

（※ＳＫ５は欠番）

第18図　調査地位置図（S＝1：500）



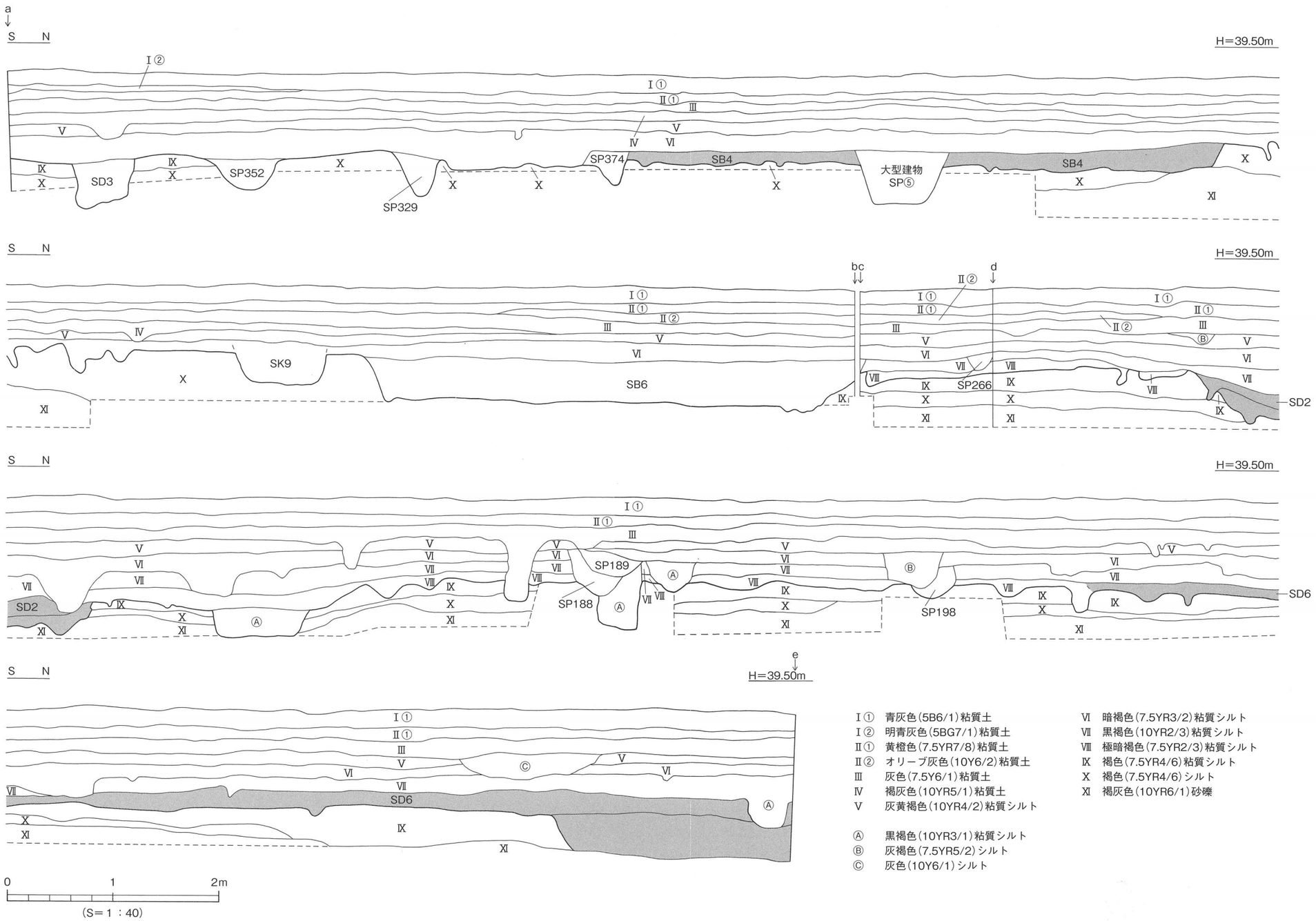
〔北壁〕

〔南壁〕

Ⅰ① 青灰色(5B6/1)粘質土
Ⅰ② 明青灰色(5BG7/1)粘質土
Ⅱ① 黄橙色(7.5YR7/8)粘質土
Ⅲ 灰色(7.5Y6/1)粘質土
Ⅳ 褐灰色(10YR5/1)粘質土
Ⅴ 灰黄褐色(10YR4/2)粘質シルト
Ⅵ 暗褐色(7.5YR3/2)粘質シルト
Ⅶ 黒褐色(10YR2/3)粘質シルト
Ⅷ 極暗褐色(7.5YR2/3)粘質シルト
Ⅸ 褐色(7.5YR4/6)粘質シルト
Ⅹ 褐色(7.5YR4/6)シルト
Ⅺ 褐灰色(10YR6/1)砂礫

Ⓑ 灰褐色(7.5YR5/2)シルト
Ⓒ 灰色(10Y6/1)シルト
Ⓓ 黒褐色(10YR3/1)粘質シルト〔褐色(7.5YR4/6)シルト混入〕
Ⓔ 灰黄色(7.5YR6/2)粘質シルト

第19図　北壁・南壁土層図

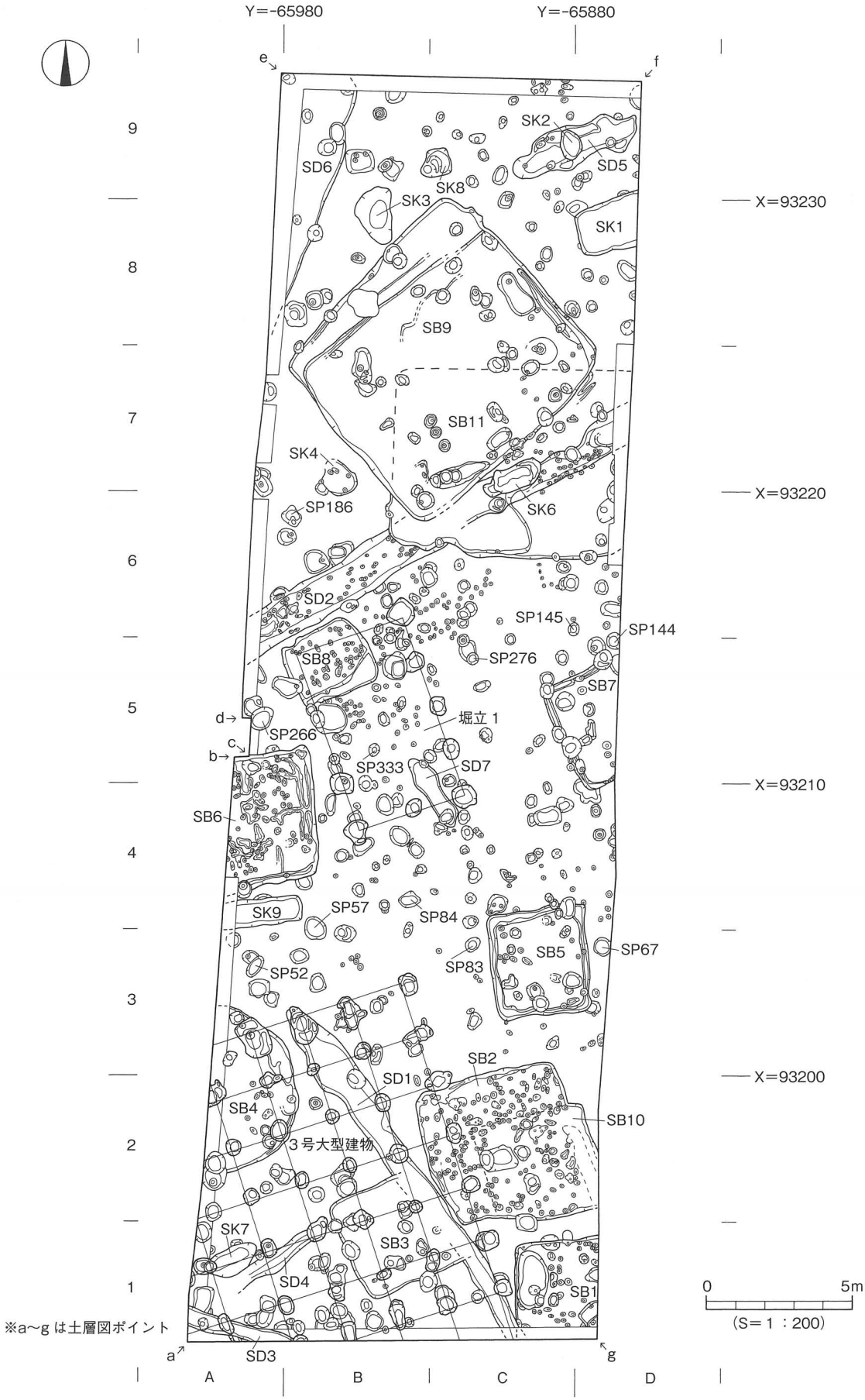


Ⅰ① 青灰色(5B6/1)粘質土
Ⅰ② 明青灰色(5BG7/1)粘質土
Ⅱ① 黄橙色(7.5YR7/8)粘質土
Ⅱ② オリーブ灰色(10Y6/2)粘質土
Ⅲ 灰色(7.5Y6/1)粘質土
Ⅳ 褐灰色(10YR5/1)粘質土
Ⅴ 灰黄褐色(10YR4/2)粘質シルト

Ⓐ 黒褐色(10YR3/1)粘質シルト
Ⓑ 灰褐色(7.5YR5/2)シルト
Ⓒ 灰色(10Y6/1)シルト

Ⅵ 暗褐色(7.5YR3/2)粘質シルト
Ⅶ 黒褐色(10YR2/3)粘質シルト
Ⅷ 極暗褐色(7.5YR2/3)粘質シルト
Ⅸ 褐色(7.5YR4/6)粘質シルト
Ⅹ 褐色(7.5YR4/6)シルト
Ⅺ 褐灰色(10YR6/1)砂礫

第20図　西壁土層図


Y=-65980
Y=-65880
X=93230
X=93220
X=93210
X=93200
9
8
7
6
5
4
3
2
1
A
B
C
D
a
b
c
d
e
f
g
SK2
SD5
SD6
SK8
SK3
SK1
SB9
SB11
SK4
SP186
SK6
SD2
SP145
SP144
SB8
SP276
SB7
SP266
堀立 1
SP333
SD7
SB6
SK9
SP57
SP84
SP67
SB5
SP83
SP52
SB2
SD1
SB10
SB4
3 号大型建物
SK7
SB3
SD4
SB1
SD3
0
5m
(S=1：200)
※a～g は土層図ポイント

第21図　遺構配置図

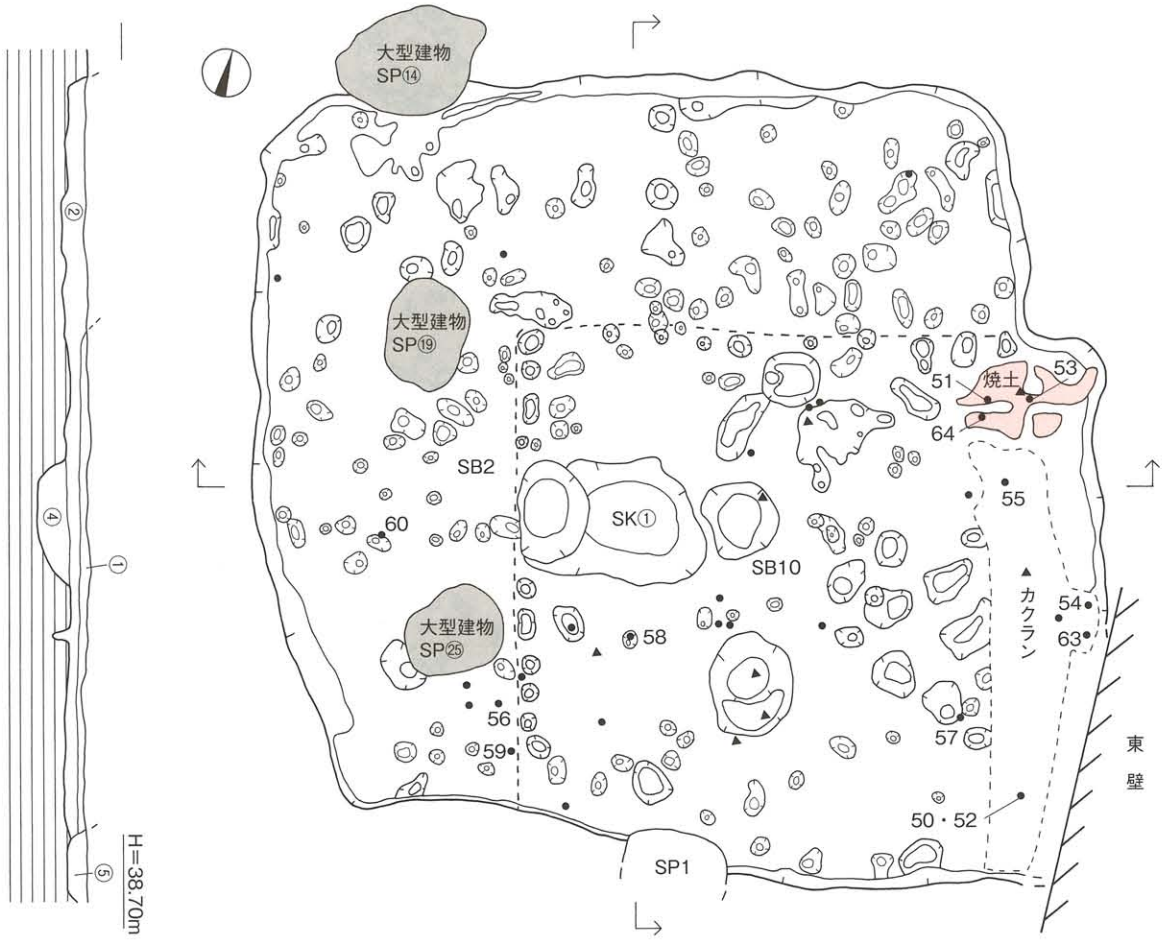
3．弥生時代の遺構と遺物

弥生時代の遺構は竪穴住居２棟、溝４条、土坑４基である。

（1）竪穴住居

ＳＢ２（第21・22図、図版10）

調査区南東部Ｂ２～Ｃ３区に位置する。住居西側は３基の３号大型建物柱穴（ＳＰ⑭・⑲・㉕）と南東側はＳＢ10、南側はＳＰ１に切られる。平面形態は隅丸方形を呈し、規模は東西長5.10m、南北

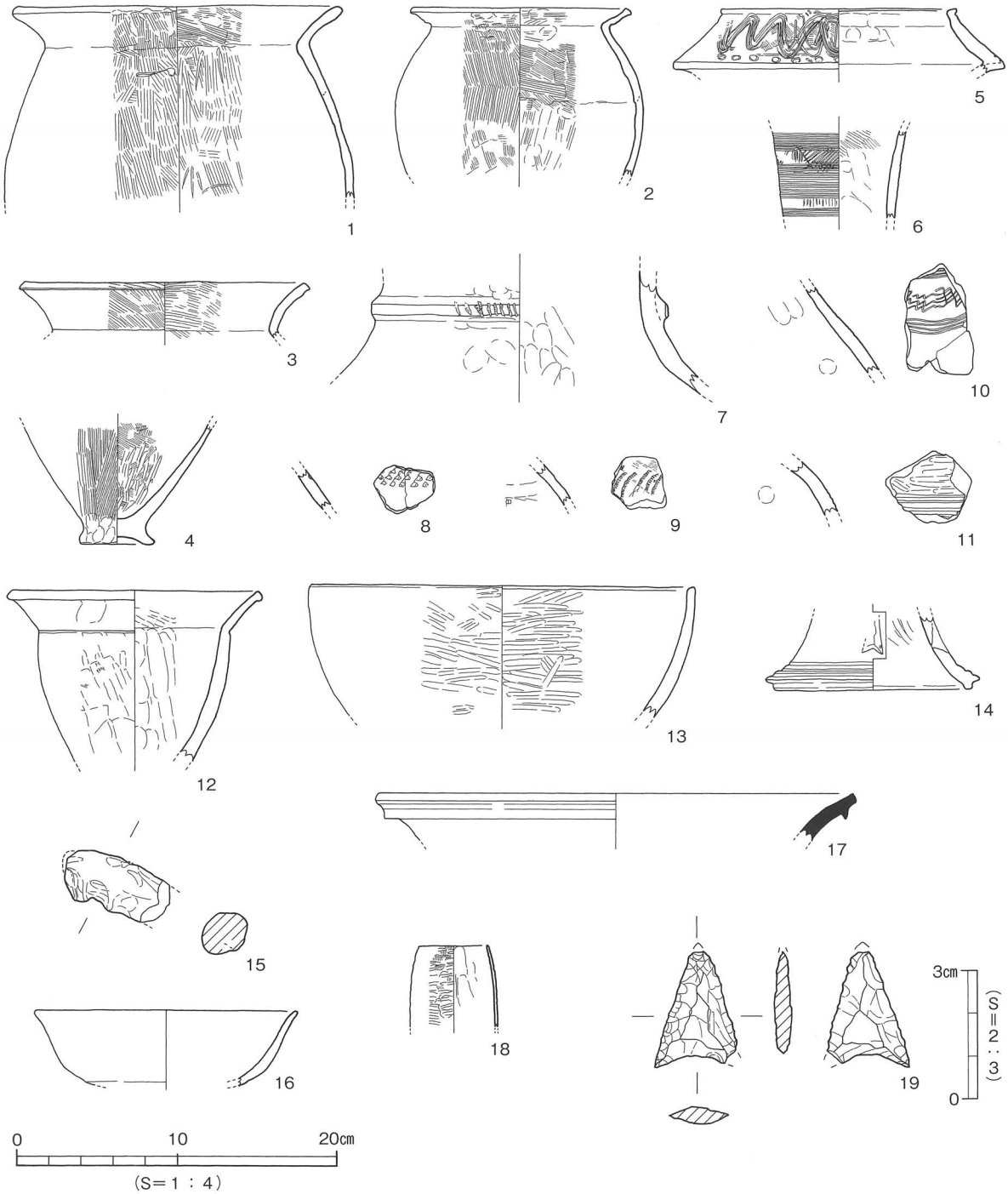


① 黒褐色(10YR3/1)粘質シルト。
② 黒褐色(10YR3/2)粘質シルト。
③ 暗褐色(7.5YR3/4)粘質シルトに少量の焼土が混入。
④ 黒色(10YR2/2)粘質シルト。〔SK①埋土〕
⑤ 黒褐色(10YR3/2)粘質シルト。〔SP1 埋土〕

0　1　2m
(S＝1：50)

第22図　ＳＢ２・10測量図

長4.75m、壁高は20cmを測る。住居埋土は黒褐色粘質シルト（②層）である。住居床面中央部にて炉址ＳＫ①を検出した。平面形態は楕円形を呈し、長径1.25m、短径0.9m、深さ20cmを測る。埋土は黒色粘質シルト（④層）である。そのほか床面にて径10～70cm大のピットを多数検出したが、主柱穴は特定することができなかった。なお、調査時はＳＢ10との切り合い関係が明確でなく、遺物は混在している可能性がある。遺物は埋土中から弥生土器と土師器、須恵器、石器が出土した。



第23図　ＳＢ２出土遺物実測図

出土遺物（第23図、図版18）

弥生土器（１～15）１～４は甕である。１～３は「く」の字状口縁で、４はやや上げ底の底部である。５～11は壺である。５は複合口縁壺で、口縁部外面に波状文と竹管文を施す。６は長頸壺の頸部で細沈線文を施す。７～11は肩部片で、７は外面に刻目凸帯文１条を施す。８・９は貝殻施文による列点文を施す。10・11はヘラ描き沈線文を施す。12・13は鉢である。12は外反口縁の鉢で、口縁端部はやや肥厚する。13は直口口縁で、内外面共にヘラミガキ調整を施す。14は高坏で、脚裾部に凹線文３条と裾端部に凹線文１条を施す。柱部に矢羽根透かし（未貫通）１ヶ所を施す。15は支脚の受部で、断面円形を呈する。

土師器（16・18）16は高坏で、口縁部はわずかに外反する。18は製塩土器で器壁がうすい。

須恵器（17）17は甕で、口縁部下位に凸線１条を施す。

石器（19）19は凹基無茎式の打製石鏃で、材質はサヌカイトである。

時期：出土した弥生土器の特徴と切り合いから、ＳＢ２の廃棄・埋没時期は弥生時代後期後半とする。

ＳＢ４（第21・24図、図版10）

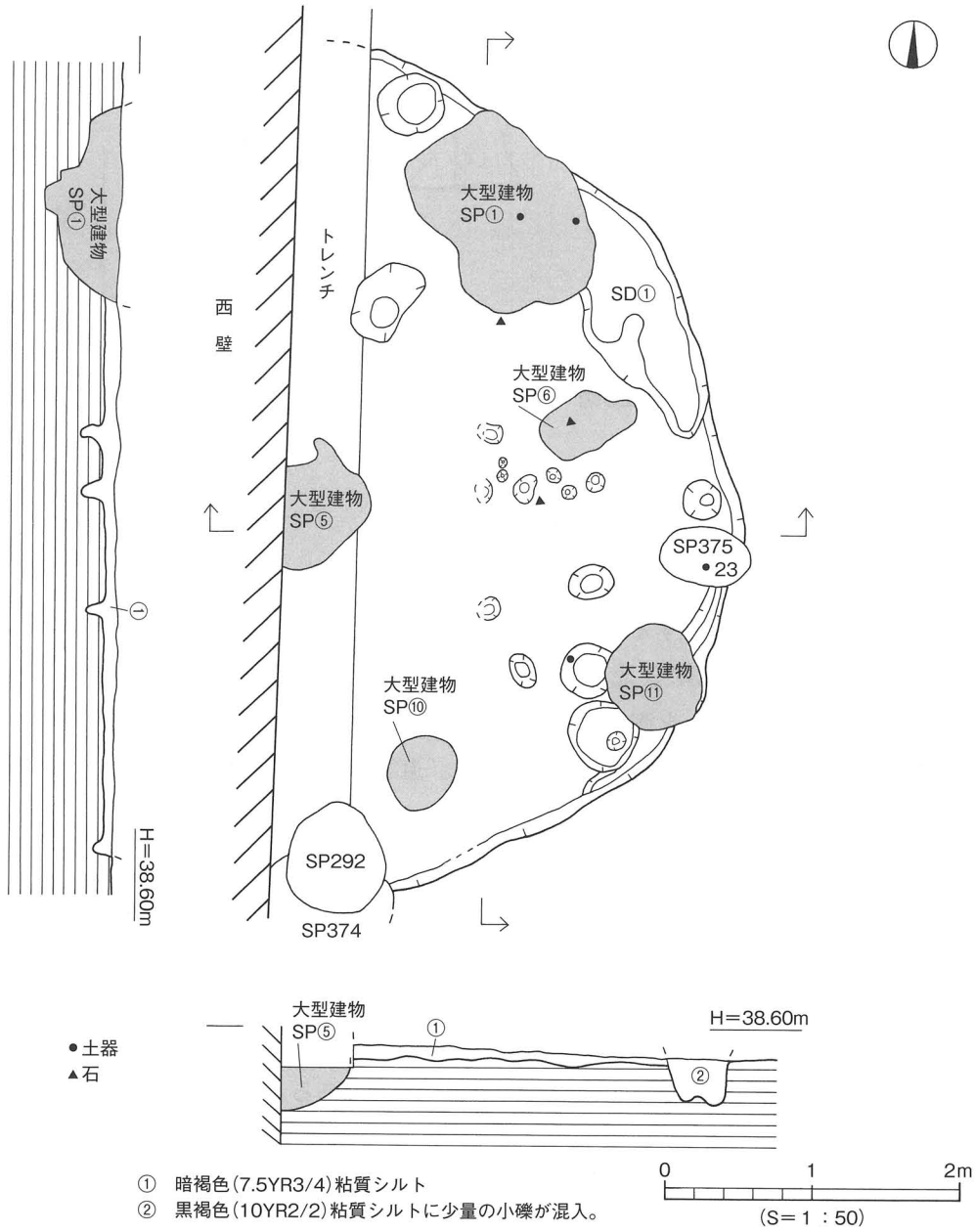
調査区南西部Ａ２～Ｂ３区に位置する。住居内部を５基の３号大型建物柱穴（ＳＰ①・⑤・⑥・⑩・⑪）とＳＰ292・374・375に切られ、西半分は調査区外に続く。平面形態は円形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長3.10m、南北長5.70m、壁高は10cmを測る。住居埋土は暗褐色粘質シルト（①層）である。住居東側壁体沿いにて、溝ＳＤ①を検出した。規模は幅22～75cm、深さ７cmを測る。溝埋土は暗褐色粘質シルト（①層）である。住居床面にて径10～50cm大のピット16基を検出したが、主柱穴を特定することはできなかった。遺物は、埋土中から弥生土器片と土師器片が出土した。

出土遺物（第25図）

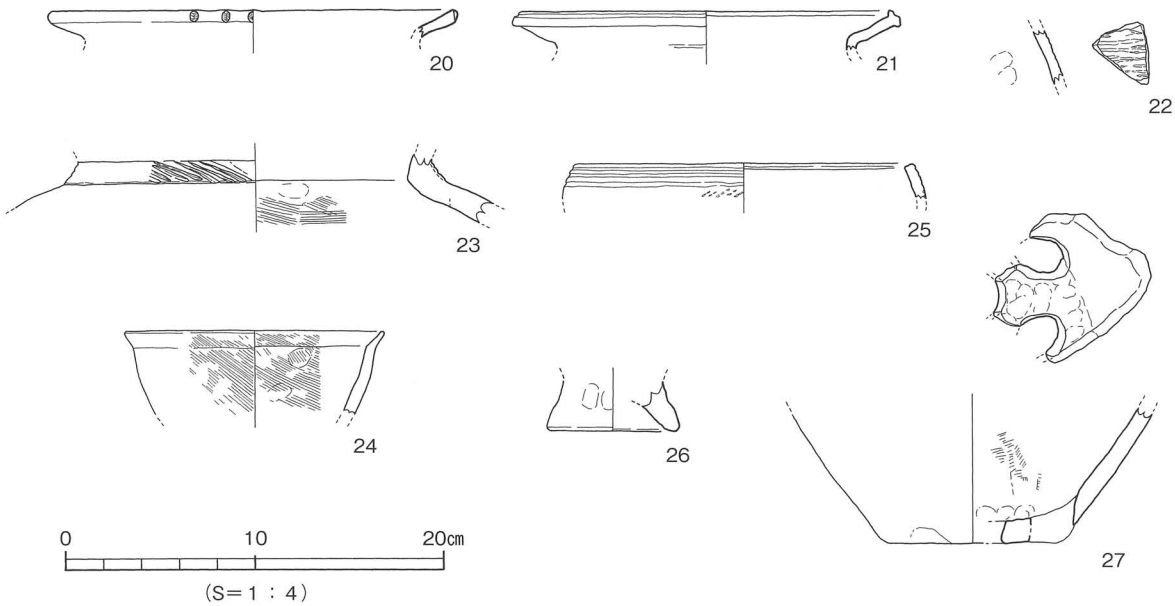
弥生土器（20～26）20～22・26は甕である。20は口縁端部に刻目を施す。21は口縁端部を上下方に拡張し、口縁端面に凹線文１条を施す。22は胴部小片でタタキ痕を残す。26は甕の底部で、上げ底となる。23は壺で、頸部に貼付凸帯文１条とヘラ描き斜線文を施す。24は鉢で、口縁部は外反する。25は高坏で、口縁部外面に凹線文３条と刺突文を施す。

土師器（27）27は甑で、楕円形の孔を３ヶ所看取する。

時期：出土した弥生土器の特徴と切り合いから、ＳＢ４の廃棄・埋没時期は弥生時代後期後半とする。


大型建物
SP①
H=38.60m
西壁
トレンチ
大型建物
SP①
SD①
大型建物
SP⑥
大型建物
SP⑤
SP375
23
大型建物
SP⑪
大型建物
SP⑩
SP292
SP374
大型建物
SP⑤
H=38.60m
●土器
▲石
① 暗褐色(7.5YR3/4)粘質シルト
② 黒褐色(10YR2/2)粘質シルトに少量の小礫が混入。
0
1
2m
(S=1：50)

第24図　ＳＢ４測量図



第25図　ＳＢ４出土遺物実測図

（２）溝

ＳＤ４（第21図）

調査区南西部Ａ・Ｂ１区に位置する、北東－南西方向の溝である。溝北側及び北東側は３号大型建物柱穴（ＳＰ㉑・㉒）とＳＰ363に、北西側はＳＫ７に切られる。溝の両端は消失する。規模は検出長2.92m、幅0.56m、深さ9～13cmを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は暗褐色粘質シルトである。溝底は南西から北東に緩傾斜する（比高差８cm）。遺物は埋土中から、弥生土器と鉄器が出土した。

出土遺物（第26図、図版18）

28・29はＳＤ４出土品である。28は弥生土器の甕で、上げ底である。29は鉄製の鎖である。重さは6.8ｇを測る。

時期：出土遺物の特徴と切り合いから、弥生時代後期後半以前とする。

ＳＤ１（第21図）

調査区南部Ｂ３～Ｃ１区に位置する、北西－南東方向の溝である。溝南西側はＳＢ３に切られ、溝北端、中央部及び南端は６基の３号大型建物柱穴（ＳＰ②・⑦・⑬・⑱・㉔・㊱）に切られる。溝の北端は消失し、南端は調査区外に続く。規模は検出長13.30m、幅1.48m、深さ15～25cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は暗褐色粘質シルトである。溝底は北西から南東へ傾斜する（比高差20cm）。遺物は埋土中から、弥生土器や土師器が出土した。

出土遺物（第26図）

30～35はＳＤ１出土品である。30は甕の口縁部で口縁端部をわずかに拡張し、口縁端面に凹線文２条、頸部に刻目凸帯文１条を施す。31は複合口縁壺、32・33は高坏の脚部である。32は柱部内面にシボリ痕を看取する。33は３方向に未貫通の矢羽根透かしを施す。34は支脚で、中空となる。35は製塩土器で器壁がうすい。

時期：出土遺物（31・34）の特徴と切り合いから、弥生時代後期後半とする。

ＳＤ３（第21図）

調査区南西隅Ａ・Ｂ１区に位置する、北西－南東方向の溝である。溝中央部は３号大型建物柱穴（ＳＰ㉖）に切られ、溝両端は調査区外に続く。規模は検出長3.86m、幅0.64m、深さ９cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は暗褐色粘質シルトである。溝底は北西から南東方向に緩傾斜する（比高差３cm）。遺物は埋土中から、弥生土器が少量出土した。

出土遺物（第26図）

36はＳＤ３出土品である。弥生土器の甕で、口縁端部を上方に拡張し、口縁端面に凹線文２条を施す。

時期：埋土がＳＤ１・４と酷似することと切り合いから、概ね弥生時代後期後半とする。

ＳＤ７（第21図）

調査区中央部Ｂ５～Ｃ４区に位置する、北西－南東方向の溝である。溝南東部は掘立１柱穴（ＳＰ⑤）に切られ、北東部はＳＰ333、南西部はＳＰ97に切られる。溝の両端は消失する。規模は検出長2.75m、幅0.86m、深さ６～10cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は暗褐色粘質シルトである。溝底は南東から北西へ緩傾斜する（比高差７cm）。遺物は、埋土中から弥生土器が少量出土した。

出土遺物（第26図）

37はＳＤ７出土品である。壺の底部で、わずかに上げ底である。

時期：埋土がＳＤ１・４と酷似することから、概ね弥生時代後期後半とする。

（３）土　坑

ＳＫ１（第21・27図）

調査区北東部Ｄ８・９区に位置する。土坑北側はＳＰ21・216を切り、東側は調査区外に続く。平面形態は隅丸長方形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長2.10m、南北長1.68m、深さ28cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は黒褐色粘質シルトに、にぶい黄褐色粘質シルトが混入するものである。土坑底面中央部には、やや凹凸がみられる。遺物は埋土中から、弥生土器や石が出土した。なお、遺物は主に土坑南西側底面付近から出土した。

出土遺物（第27図、図版18）

38は折曲口縁の甕で、口縁端部に刻目、胴部上位にヘラ描き沈線文２条を施す。39は大型壺の口縁部で、口縁部下に段をもち、口縁端面にヘラ描き沈線文１条、口縁上端部及び下端部に刻目を施す。40は大型壺の底部で、平底である。

時期：出土遺物の特徴より、弥生時代前期前半とする。

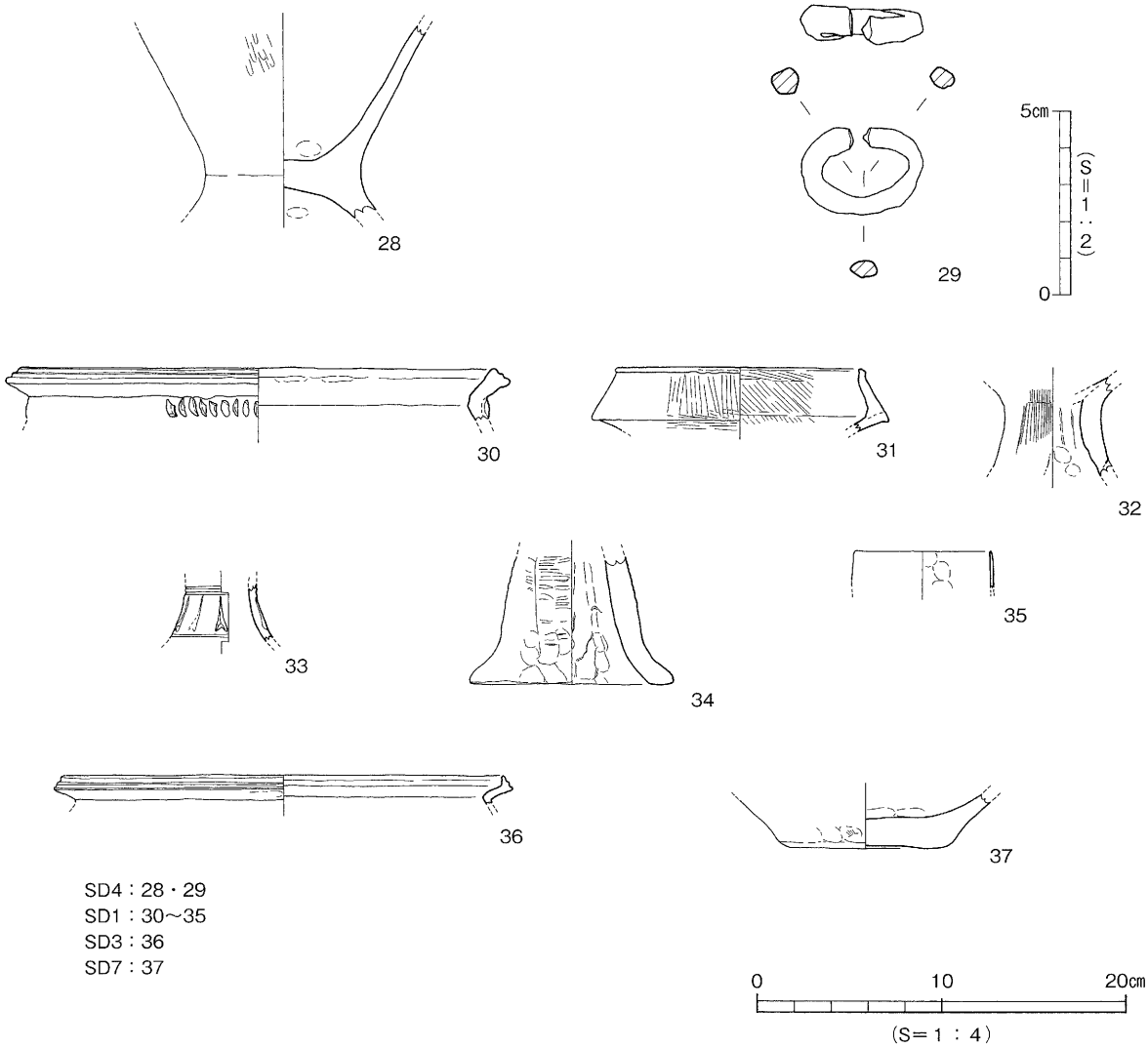
ＳＫ４（第21・28図）

調査区中央部Ｂ６・７区に位置する。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径1.15m、短径0.90m、深さ48cmを測る。断面形態は逆台形状を呈するが、西側壁体は一部袋状となる。埋土は黒色粘質土である。土坑底面は平坦で、径８～12cmの小ピット４基を検出した。ピット埋土は黒色粘質土である。遺物は埋土中から、弥生土器が出土した。

出土遺物（第28図）

41・42は甕で、41は胴部外面にヘラ描き沈線文３条と刺突文を施す。42は平底の底部で、外面にタテ方向のヘラミガキ調整を施す。43～45は壺である。43は肩部片で、ヘラ描きによる線刻を施す。44はわずかに上げ底、45は平底の底部で、外面にヨコ方向のヘラミガキ調整を施す。

時期：出土遺物の特徴より、弥生時代前期後半とする。



第26図　ＳＤ１・３・４・７出土遺物実測図

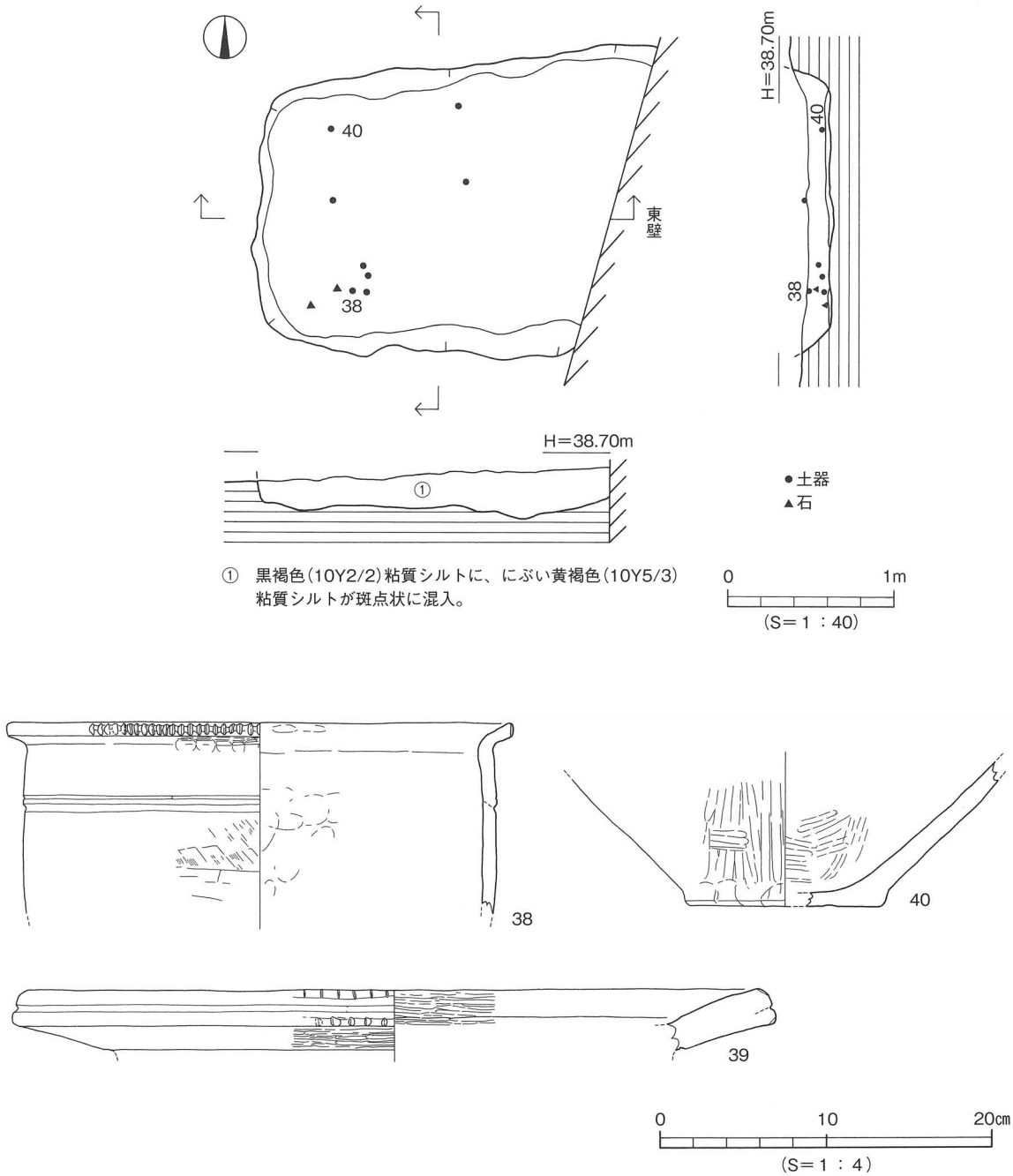
ＳＫ６（第21・29図）

調査区中央部Ｃ７区に位置し、ＳＤ２底面にて検出した。平面形態は不整形を呈し、規模は東西長2.21m、南北長0.79m、深さ40cmを測る。断面形態は船底状で、東西壁体沿いはテラス状の高まりをもつ。土坑埋土は黒褐色粘質シルトである。遺物は埋土中から、弥生土器が出土した。

出土遺物（第29図）

46は甕で、口縁端部に凹線文１条、口縁上端部及び下端部に刻目、頸部に刻目凸帯文１条を施す。47～49は壺である。47は胴部に貼付凸帯文２条を施す。48は直口口縁壺で、口縁部はわずかに内湾する。49は尖底である。

時期：出土遺物（48・49）の特徴と検出層位から、概ね弥生時代後期後半以前とする。

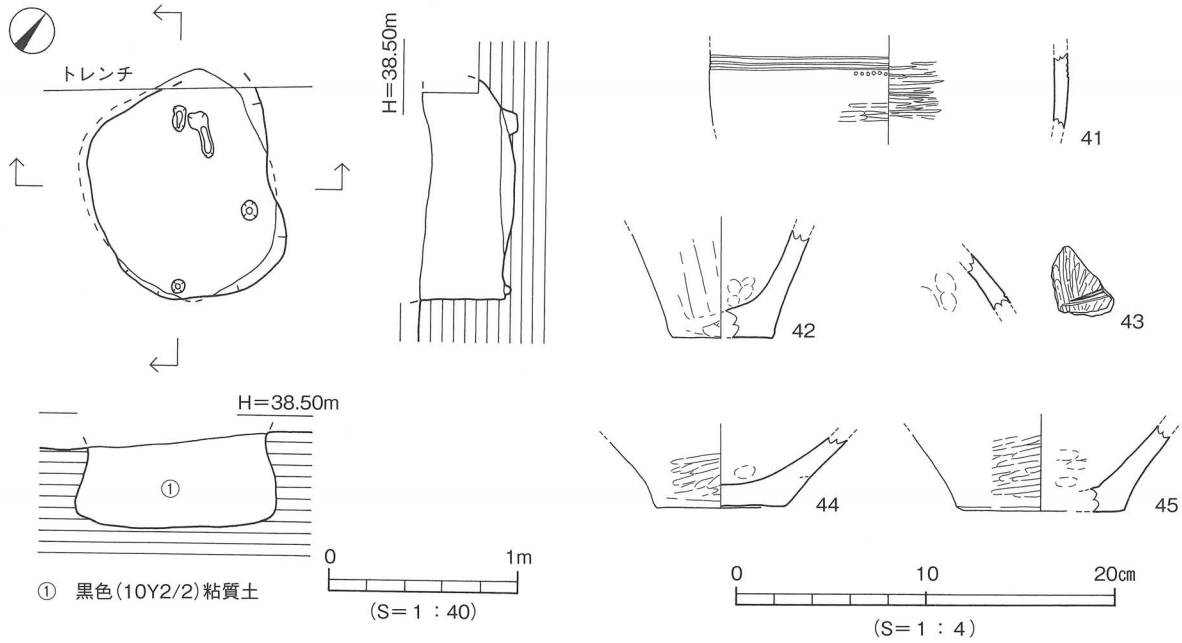


第27図　ＳＫ１測量図・出土遺物実測図

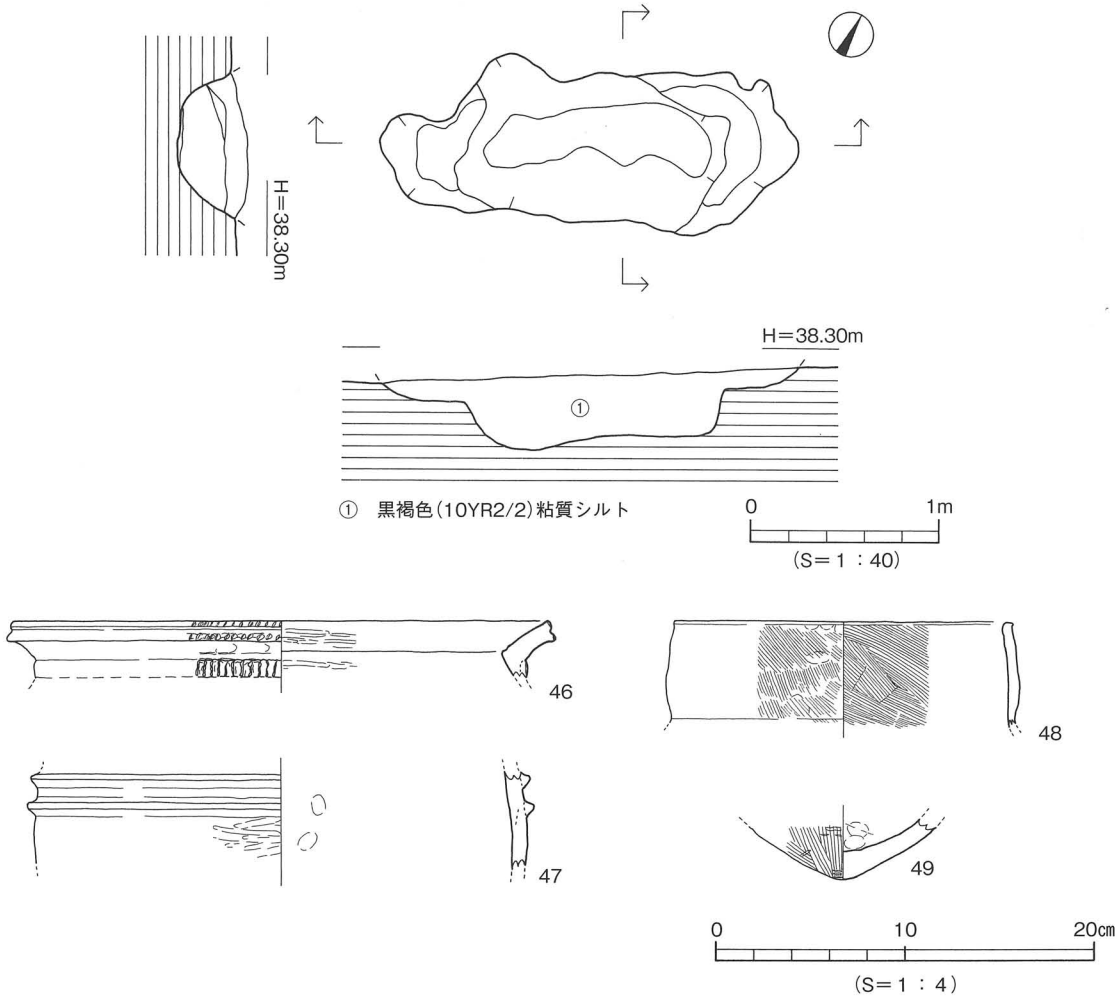
ＳＫ７（第21・30図）

調査区南西部Ａ１区に位置する。土坑西側は３号大型建物柱穴（ＳＰ⑳）に切られ、南側はＳＤ４を切る。平面形態は不整楕円形を呈するものと考えられ、規模は検出長径1.56m、短径0.92m、深さ37cmを測る。断面形態はレンズ状を呈し、埋土は暗褐色粘質土である。土坑底面は平坦である。土坑内から、遺物の出土はない。

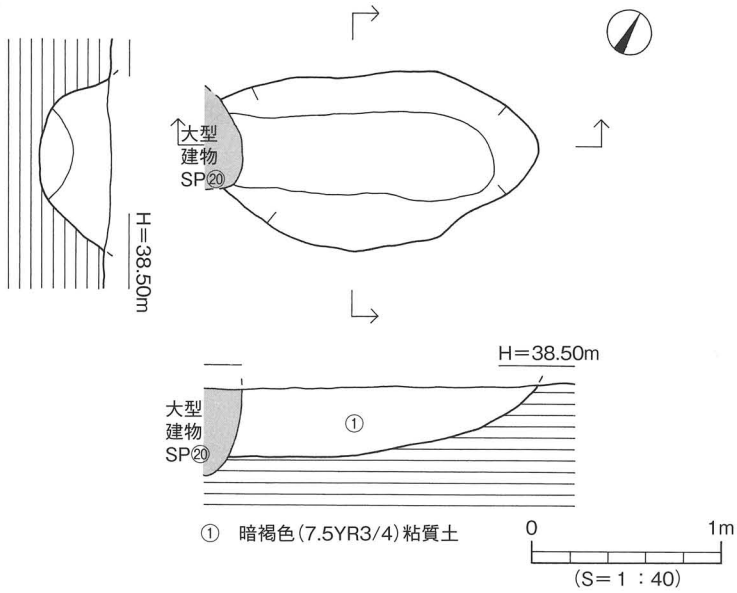
時期：出土遺物がなく時期特定は困難であるが切り合いから、概ね弥生時代後期後半以前とする。



第28図　ＳＫ４測量図・出土遺物実測図



第29図　ＳＫ６測量図・出土遺物実測図



第30図　ＳＫ７測量図

4．古墳時代の遺構と遺物

古墳時代の遺構は竪穴住居９棟、大型建物１棟、掘立柱建物１棟、溝２条、土坑４基である。

（1）竪穴住居

ＳＢ10（第21・22図、図版10）

調査区南東部Ｃ・Ｄ２区に位置する。住居西側、北側はＳＢ２を切り、南側はＳＰ１に切られ、南東側は調査区外に続く。平面形態は隅丸方形を呈するものと考えられ、規模は推定東西長3.9m、推定南北長3.7m、壁高は８cmを測る。住居埋土は黒褐色粘質シルト（①層）である。住居床面にて、径10～50cm大のピットを多数検出したが、主柱穴は特定するには至らなかった。遺物は埋土中から完形品を含む弥生土器、土師器のほか臼玉が１点出土した。遺物は住居中央部付近に弥生土器が集中して出土し、東側からは土師器が出土した。土師器の破片には、接合すると完形品や一部が欠損する完形品があった（50・51・54）。このほか、住居北東隅にて1.0m×0.5mの範囲に焼土の広がりを検出した。検出状況からカマドの残骸と考えられ、焼土内からは土師器甕（51・53）が出土した。なお、調査時はＳＢ２との切り合い関係が明確でなく、両者を同時に掘り下げたため、遺物は混在している可能性がある。

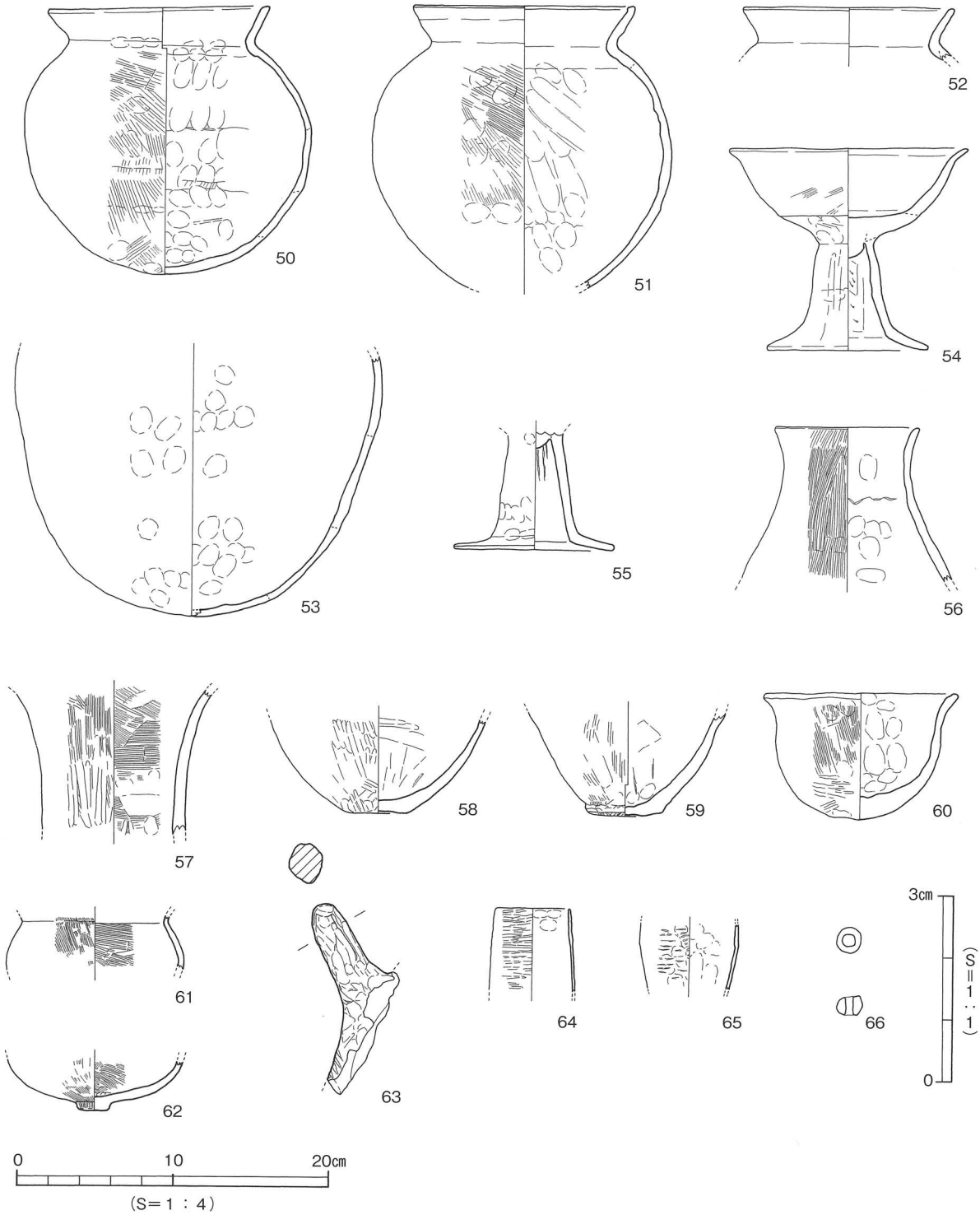
出土遺物（第31図、図版19）

土師器（50～55・64・65）50～53は甕で、50は復元完形品である。球形の胴部に口縁部は内湾し、口縁端部は内傾する面をもつ。51は底部が欠損するが、ほぼ完形品である。球形の胴部に口縁部は内湾し、口縁端部は内傾する丸味のある面をもつ。52は口縁部が外反し、口縁端部は内傾する面をもつ。53は胴部が長胴である。54は高坏の完形品である。口縁部はわずかに外反し、坏部下位外面に明瞭な稜をもつ。脚部は「ハ」の字状に開き、柱裾部内面に明瞭な稜をもつ。坏脚部の接合法は充填技法である。55は高坏の脚部で、柱裾部内面に明瞭な稜をもつ。坏脚部の接合法は充填技法である。64・65は製塩土器で、器壁がうすく、熱を受けて変形している。

弥生土器（56～63）56～58は壺で、56は広口壺、57は長頸壺である。58はわずかに上げ底の底部である。59～62は鉢である。59は平底で、わずかに突出する。60は完形品。61は胴部片で、62は突出する小さな平底である。63は支脚の受部で、断面形態は円形である。

装飾品（66）66は滑石製の臼玉で、直径0.40cm、高さ0.25cm、重さ0.05ｇを測る。

時期：出土した土師器の特徴と切り合いから、古墳時代中期前半とする。



第31図　ＳＢ10出土遺物実測図

ＳＢ１（第21・32図、図版11）

調査区南東部Ｃ・Ｄ１区に位置する。住居西側は溝ＳＤ１を切り、北側はＳＰ372・373に切られ、住居東側及び南側は調査区外に続く。平面形態は隅丸方形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長2.74m、南北検出長3.74m、壁高は18cmを測る。住居埋土は黒褐色粘質シルト（①層）である。住居床面西側にて、土坑ＳＫ①を検出した。平面形態は楕円形を呈し、長径2.0m、短径1.0m、深さ24cmを測る。埋土は黒色粘質シルト（④層）である。床面東側にて、土坑ＳＫ②を検出した。平面形態は方形を呈するものと考えられ、規模は長さ1.0m、幅0.5m、深さ12cmを測る。埋土は黒褐色粘質シルトに、にぶい黄褐色粘質シルトが少量混入するもの（②層）である。このほか、住居床面にて径10～40cm大のピット30基を検出した。遺物は埋土中から弥生土器、土師器、須恵器のほか、土錘が出土した。

出土遺物（第32図、図版20）

土師器（67～70）67・68は甕で口縁部は内湾し、口縁端部は内傾する面をもつ。69は椀で、口縁部は内湾する。70は土錘で、径0.4cmの孔を穿つ。

須恵器（71～73）71は扁平な天井部をもつ坏蓋で、口縁端部は内傾する面をもつ。72は坏身で、たちあがり端部は内傾する凹面をもつ。73は有蓋高坏の蓋で、つまみ中央部は凹み、稜は明瞭である。

弥生土器（74・75）74は壺の頸部片で、外面にヘラ描き沈線文３条を施す。75は大型壺の胴部で、外面にヘラ描き沈線文３条を施す。

時期：出土した土師器や須恵器の特徴と切り合いから、ＳＢ１の廃棄・埋没時期は古墳時代中期後半とする。

ＳＢ３（第21・33図、図版11）

調査区南部Ｂ１～Ｃ２区に位置する。住居東側はＳＤ１を切り、住居北側はＳＰ30、西側はＳＰ28・29、南側はＳＰ10に切られる。平面形態は隅丸方形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長3.30m、南北長3.67m、壁高は14cmを測る。住居埋土は黒褐色粘質シルト（①層）である。住居床面にて径15～65cm大のピット10基を検出したが、主柱穴を特定するには至らなかった。なお、住居床面にて４基の３号大型建物柱穴（ＳＰ㉓・㉔・㉙・㉚）を検出した。遺物は埋土中から弥生土器、土師器、須恵器、石器が出土した。

出土遺物（第34図、図版20）

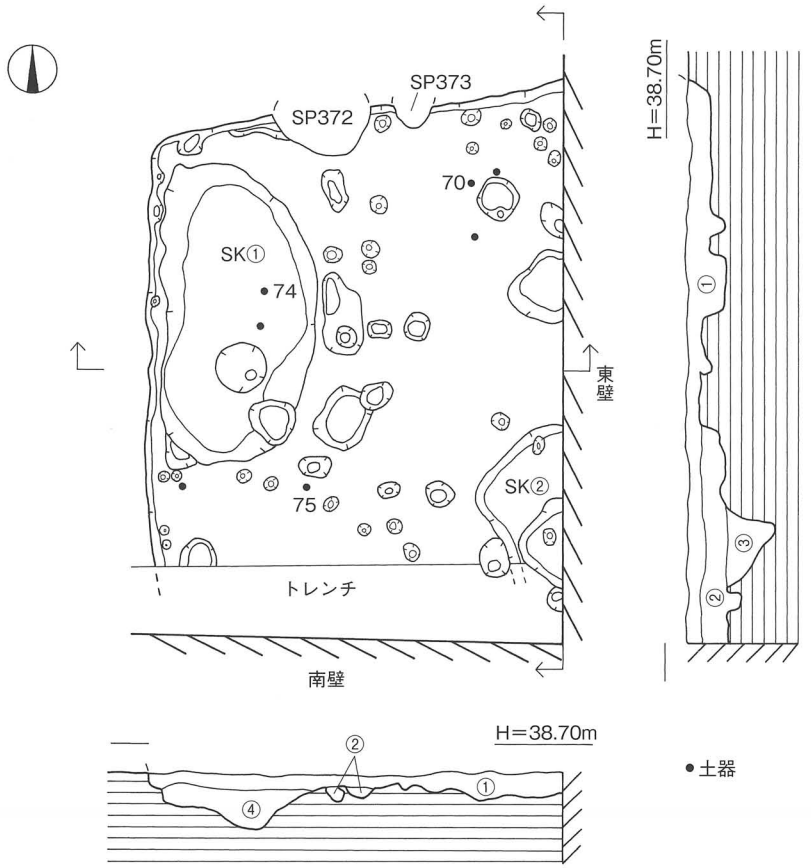
土師器（76～79）76～79は甕で、76は底部を欠損するが、ほぼ完形品である。扁球形の胴部に口縁部は内湾し、口縁端部は内傾する丸味のある面をもつ。77・78は口縁部が内湾し、口縁端部は内傾する面をもつ。79は口縁部が直立し、口縁端部は内傾する面をもつ。

須恵器（80～82）80は坏蓋で、口縁端部は内傾する凹面をなす。81は有蓋高坏の蓋である。つまみ中央部がわずかに突出し、口縁端部は内傾する。82は無蓋高坏で、坏部中位に凸線２条、凸線間に波状文３～４条を施す。脚部に長方形状の透かし２ヶ所を看取する。

弥生土器（83）折曲口縁の甕で、口縁端部に刻目を施す。

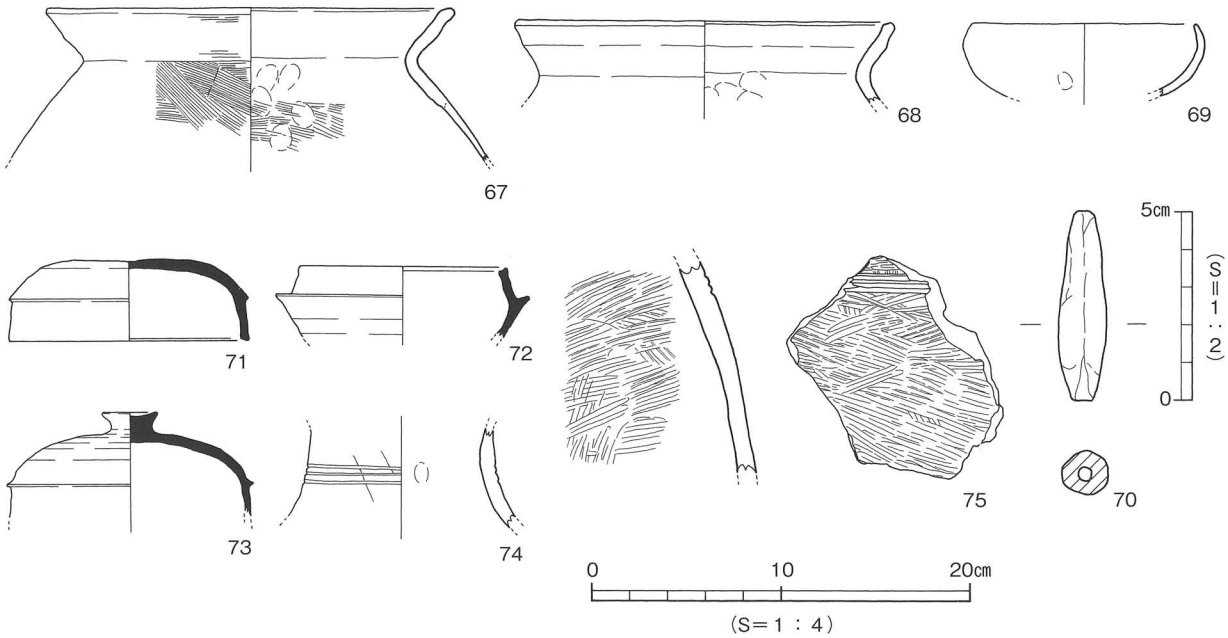
石器（84）84は緑色片岩製の石庖丁である。

時期：出土した土師器、須恵器の特徴と切り合いから、ＳＢ３の廃棄・埋没時期は古墳時代中期後半とする。



① 黒褐色(7.5YR2/2)粘質シルト。
② 黒褐色(7.5YR2/2)粘質シルトににぶい黄褐色。(10YR5/3)粘質シルトが少量混入。〔SK②埋土〕
③ 黒褐色(7.5YR2/3)粘質シルト。
④ 黒色(10Y2/2)粘質シルト。〔SK①埋土〕

0 1 2m
(S=1：50)



第32図　ＳＢ１測量図・出土遺物実測図

ＳＢ５（第21・35図、図版12）

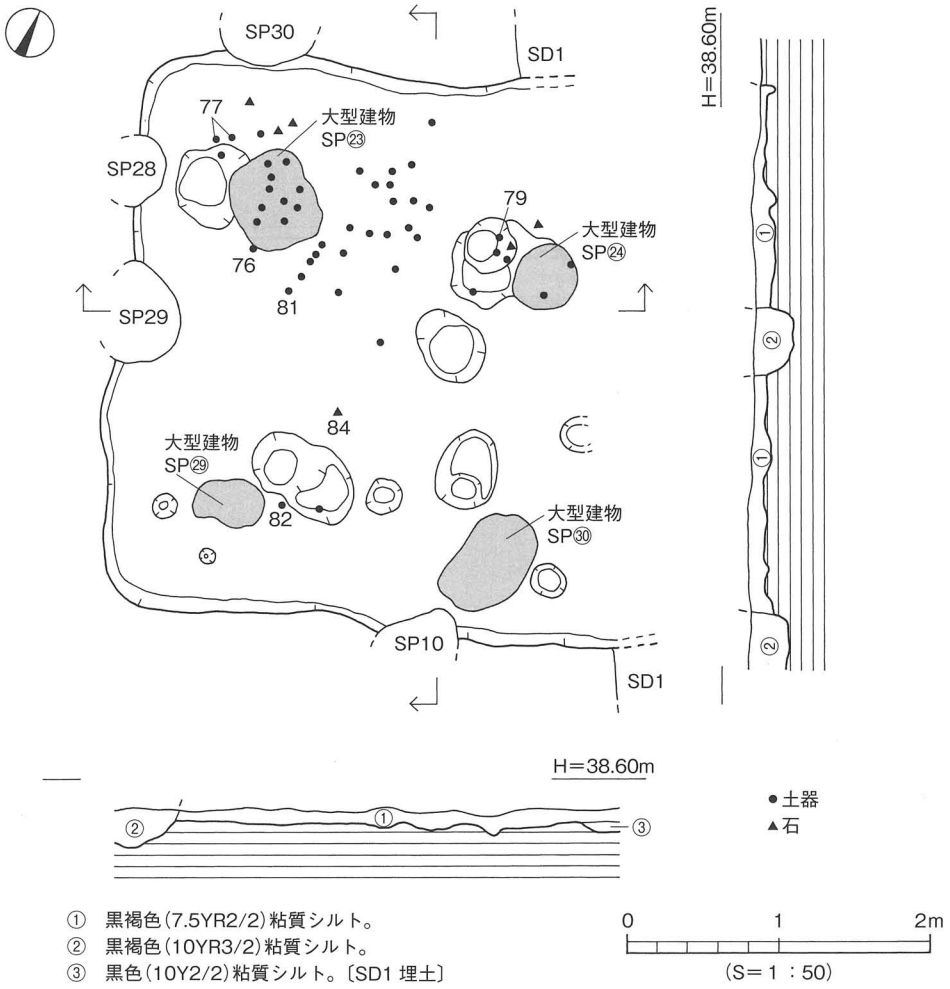
調査区南東部Ｃ３～Ｄ４区に位置する。住居北側はＳＰ68・73・74、南側はＳＰ271、東側はＳＰ277に切られる。平面形態は隅丸方形を呈し、規模は東西長3.35m、南北長3.55m、壁高は８cmを測る。住居埋土は暗褐色粘質シルト（①層）である。主柱穴はＳＰ①～④の４本を確認した。各柱穴の平面形態は円形～楕円形を呈し、規模は径25～30cm、深さ25～40cmを測る。柱穴掘り方埋土は暗褐色粘質シルトに、にぶい黄褐色粘質シルトがブロック状に混入するもの（②層）である。住居壁体沿いに溝を検出した。規模は幅10～31cm、深さ９cmを測る。溝埋土は暗褐色粘質シルト（①層）である。遺物は埋土中から、土師器と須恵器が出土した。

出土遺物（第35図）

土師器（85～88）85～87は椀で、口縁部が内湾してたちあがる。86の底部外面にヘラ記号を看取する。88は直口口縁で、口縁端部はわずかに内傾する。

須恵器（89・90）89は坏蓋で、口縁端部は内傾する凹面をなす。90は坏身で底部は丸味をもち、たちあがり端部は内傾し、受部端に沈線状の凹みが巡る。

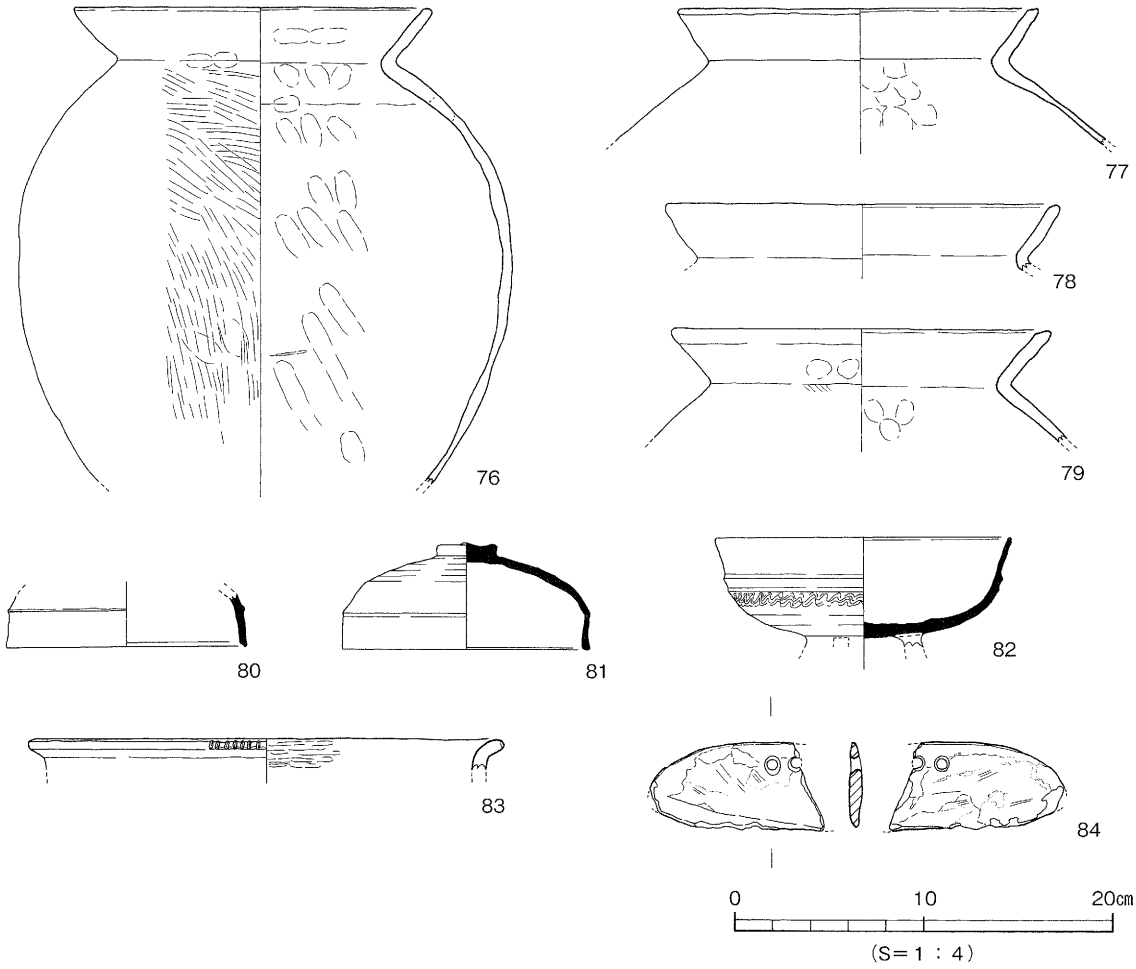
時期：出土遺物の特徴から、ＳＢ５の廃棄・埋没時期は古墳時代中期後半とする。



① 黒褐色(7.5YR2/2)粘質シルト。
② 黒褐色(10YR3/2)粘質シルト。
③ 黒色(10Y2/2)粘質シルト。〔SD1 埋土〕

0　1　2m
(S＝1：50)

第33図　ＳＢ３測量図



第34図　ＳＢ３出土遺物実測図

ＳＢ６（第21・36図、図版13）

調査区中央部西側Ａ４～Ｂ５区に位置する。住居南側はＳＰ86に切られ、西側は調査区外に続く。平面形態は方形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長3.00m、南北長4.50m、壁高は30cmを測る。住居埋土は暗褐色粘質シルト（①層）である。住居壁体沿いに周壁溝を検出した。周壁溝は幅12～15cm、深さ３～６cmを測る。埋土は暗褐色粘質シルト（①層）である。住居床面にて数条の溝を検出した。溝は幅８～12cm、深さ３～６cmを測る。溝埋土は暗褐色粘質シルト（①層）である。このほか住居底面にて大小40基のピットを検出したが、主柱穴を特定するには至らなかった。遺物は床面中央部西側の埋土下位付近から、ほぼ完形の小型壺（93）や土師器片、須恵器片などが出土したほか、埋土上位より弥生土器、鉄器、石器と径10～20cm大の円礫がまとまって出土した。

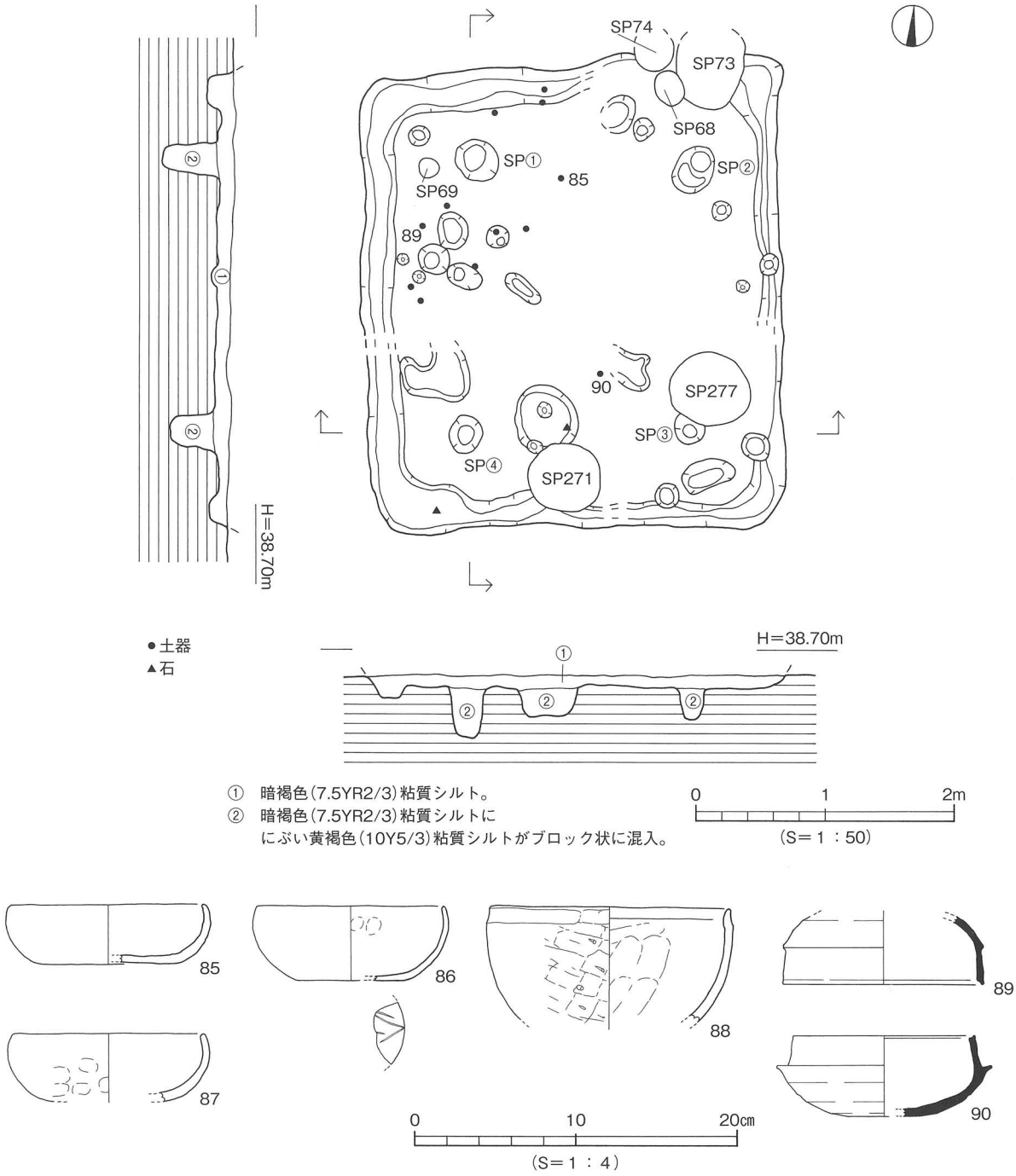
出土遺物（第37図、図版21）

土師器（91～105）91は甕で、口縁部は外反し口縁端部は丸い。口縁部中位に不明瞭な稜をもつ。92～98は壺である。92は直口口縁壺で、口縁端部は「コ」の字状である。93～98は小型壺である。93は完形品で、口縁部は外反し口縁部中位に明瞭な稜をもつ。94は口縁部が直立気味で、口縁端部は丸い。95～98は胴部片である。97・98は内面にヘラケズリ調整を施す。99はミニチュア品。100は椀で、口縁部は外傾して立ち上がる。101～105は高坏である。101・102は坏部で、口縁部はわずかに外反し、

坏部下位に不明瞭な稜をもつ。103～105は脚部である。103・104は柱裾部内面に明瞭な稜をもつ。105の坏脚部接合法は充填技法である。

須恵器（106～108）106は坏蓋で口縁端部は内傾し、わずかに凹面をなす。107・108は瓶である。107は口縁部に凸線１条と波状文３条を施す。108は胴部中位に径1.6cmの孔を穿つ。

瓦質土器（109）109は瓦質土器で、口縁部は断面形態が三角形状に肥厚する。口縁端部下位に波状文３条を施す。



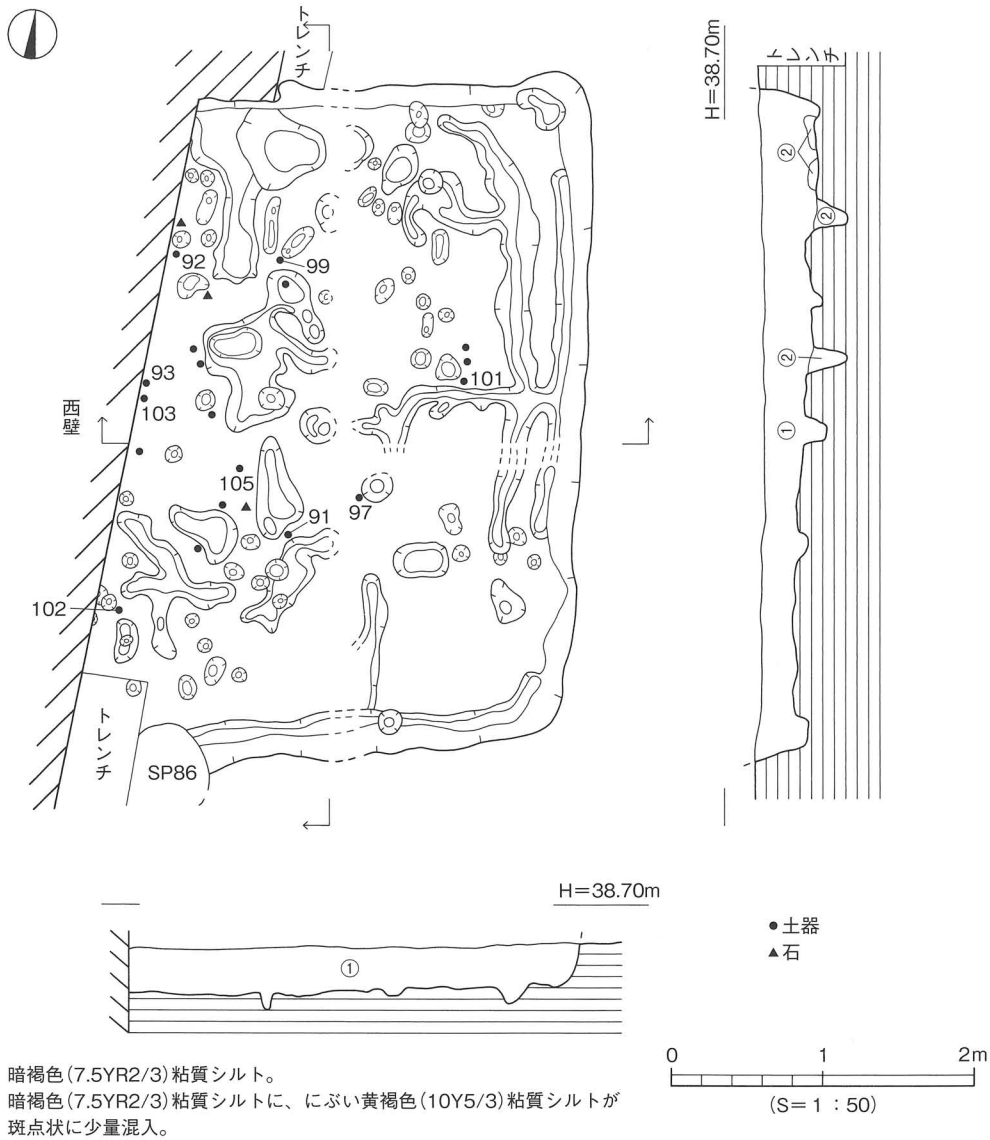
第35図　ＳＢ５測量図・出土遺物実測図

弥生土器（110～113）110・111は甕の口縁部で、110は口縁端面に凹線文１条と頸部に押圧凸帯文１条を施す。112・113は壺である。112は広口壺で口縁端部を上下方に拡張し、口縁端面に凹線文４条を施す。113は肩部片で刺突文を施す。

石器（114・115）114・115はサヌカイト製の打製石鏃である。

鉄器（116・117）116・117は器種不明の鉄器である。116は重量3.4ｇ、117は2.3ｇを測る。

時期：出土した土師器、須恵器の特徴から、ＳＢ６の廃棄・埋没時期は古墳時代中期後半とする。



① 暗褐色(7.5YR2/3)粘質シルト。
② 暗褐色(7.5YR2/3)粘質シルトに、にぶい黄褐色(10Y5/3)粘質シルトが斑点状に少量混入。

第36図　ＳＢ６測量図

ＳＢ８（第21・38図、図版12）

調査区中央部西側Ｂ５・６区に位置する。住居内部を掘立１、西側はＳＰ262、南側はSP127・130・131に切られる。平面形態は隅丸方形を呈し、規模は東西長2.8m、南北長2.4m、壁高は35cmを測る。住居埋土は２層に分層され、上層は黒色粘質シルト（①層）、下層は黒色粘質シルトに、にぶい黄褐色粘質シルトが斑点状に混入するもの（②層）、にぶい黄褐色粘質シルト（③層）である。住居南側から南東部にかけてテラス状の段を検出した。規模は幅0.4～1.0m、高さ15cmを測る。このほか、住居底面にて径10～20cm大のピットを32基検出したが、主柱穴を特定するには至らなかった。遺物は埋土中より弥生土器、土師器、須恵器が出土した。

出土遺物（第38図、図版21）

土師器（118・119）118は甕で口縁部は内湾し、口縁端部は「コ」の字状を呈する。119は甕で、胴部に貝殻文を施す。

須恵器（120・121）120は坏身で、たちあがり端部は内傾する面をもつ。121は高坏で、脚部に長方形状の透かし３ヶ所を施す。

弥生土器（122～124）122は底部を欠損するほぼ完形の広口壺である。口縁端部を上方に拡張し、口縁端面に凹線文２条と頸部に刻目を施す。123・124は高坏である。123は口縁部に凹線文２条と凹線文間に貝殻文を施す。124は口縁部に凹線文２条と凹線文上に刻目を施す。

時期：出土した土師器、須恵器の特徴から、ＳＢ８の廃棄・埋没時期は古墳時代中期後半とする。

ＳＢ11（第21・39図、図版14）

調査区北部Ｂ６～Ｄ７区に位置する。住居北西側はＳＢ９、南側はＳＤ２を切り、西側はＳＰ187、南側はＳＰ149・195・382に切られ、東側は調査区外に続く。平面形態は方形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長8.0m、南北検出長6.4m、壁高は20cmを測る。住居埋土は暗褐色粘質シルトに、にぶい黄褐色粘質シルトが混入するものである。住居底面にて40～80cm大のピット４基を検出したが、主柱穴を特定するには至らなかった。遺物は埋土中から弥生土器、須恵器、土師器、石器、臼玉が出土した。

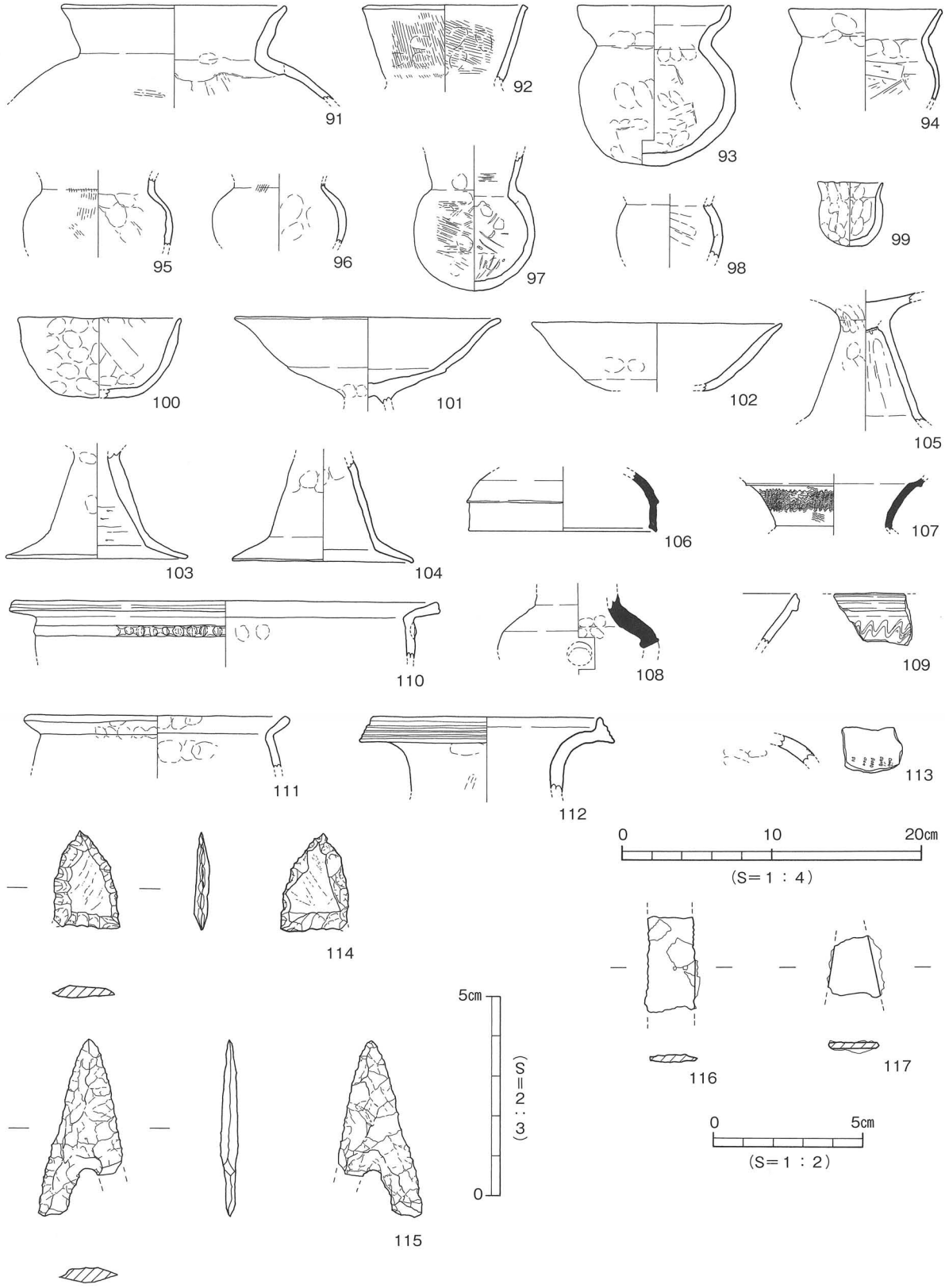
出土遺物（第40・41図）

土師器（125～127・151）125は甕で、口縁部は内湾し口縁端部は内傾する面をもつ。126・127は高坏である。127は脚部で、坏脚部の接合法は差込技法である。151は製塩土器で器壁がうすい。

須恵器（128～138）128～130は坏蓋である。128は天井部が丸く、口縁端部は内傾する凹面をなし、稜は明瞭である。129・130は口縁端部が丸く、130は稜が凹線状に凹む。131・132は坏身である。両者共に底部は丸味をもち、たちあがり端部は内傾する凹面をなす。133～135は高坏である。133は無蓋高坏で、坏部中位に凸線２条と波状文を施す。134・135は脚部で、134は長方形状の透かし１ヶ所を看取する。135は脚端部を下方に屈曲し、透かし１ヶ所を看取する。136・137は広口壺である。両者共に口縁端部は丸味のある長方形状に肥厚する。138は甕で、口縁端部を三角形状に肥厚する。

弥生土器（139～150）139～141は甕である。139・140は口縁端面に凹線文、頸部に押圧凸帯文１条を施す。141は折曲口縁で、口縁端部に刻目を施す。142～145は複合口縁壺である。142は半截竹管文と竹管文を施す。144は刻目、145は波状文を施す。146・147は広口壺である。146は口縁部を上下方に拡張し、口縁端面に凹線文２条と刻目を施す。147は口縁端部を上下方に拡張し、口縁端面に凹線文４条と山形文を施す。大型品。148は甕の底部で、上げ底である。149は支脚の受部で、中空となる。150は器種不明品である。

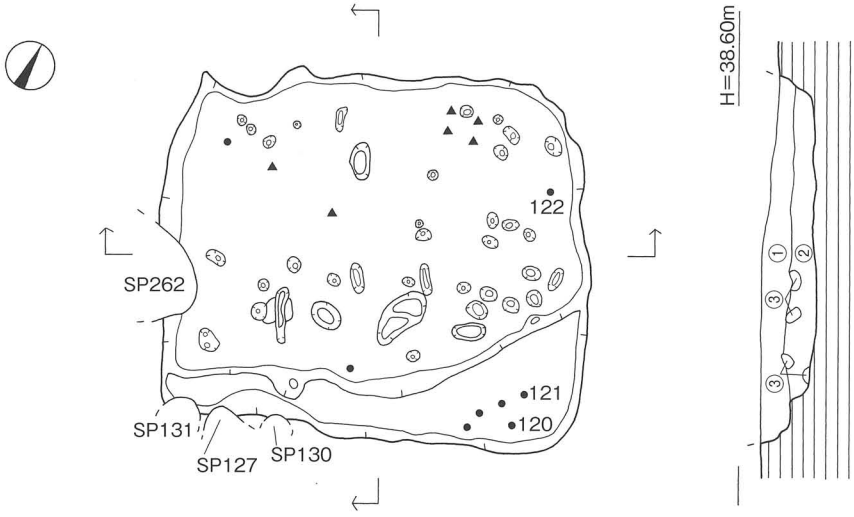
石器（152）152は緑色片岩製の石庖丁で、１／３の残存である。



第37図　ＳＢ６出土遺物実測図

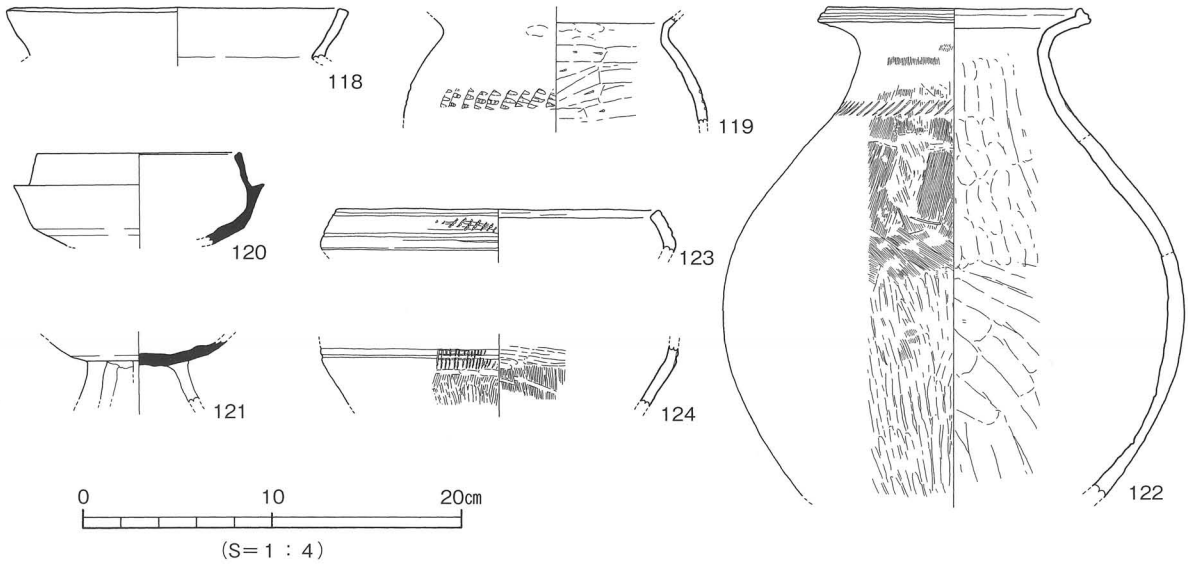
装飾品（153）153は滑石製の臼玉で、直径0.70cm、高さ0.20cm、重さ0.14ｇを測る。

時期：出土した土師器、須恵器の特徴と切り合いから、ＳＢ11の廃棄・埋没時期は古墳時代中期後半とする。



① 黒色(10Y2/2)粘質シルト。
② 黒色(10Y2/2)粘質シルトに、にぶい黄褐色(10Y5/3)粘質シルトが斑点状に混入。
③ にぶい黄褐色(10Y5/3)粘質シルト。
④ 黒褐色(10YR2/3)粘質シルト。

0　1　2m
(S＝1：50)



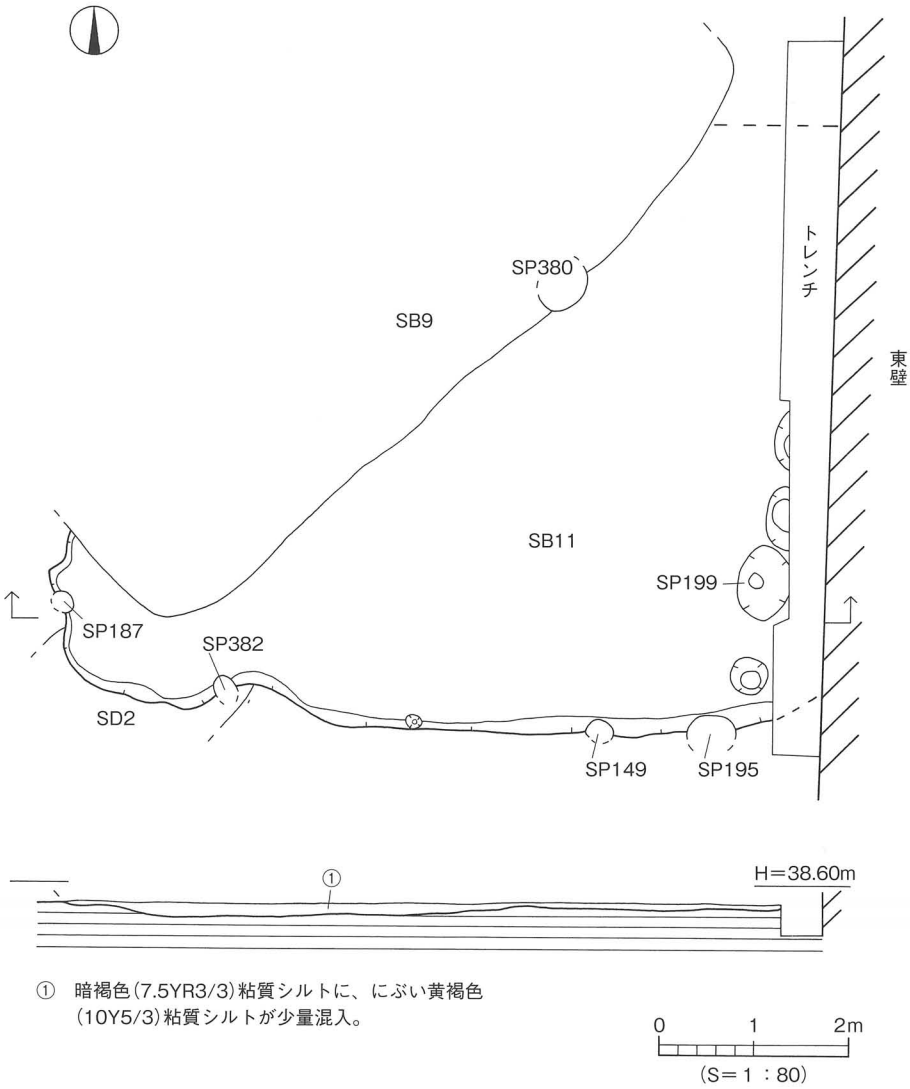
第38図　ＳＢ８測量図・出土遺物実測図

ＳＢ９（第21・42図、図版14）

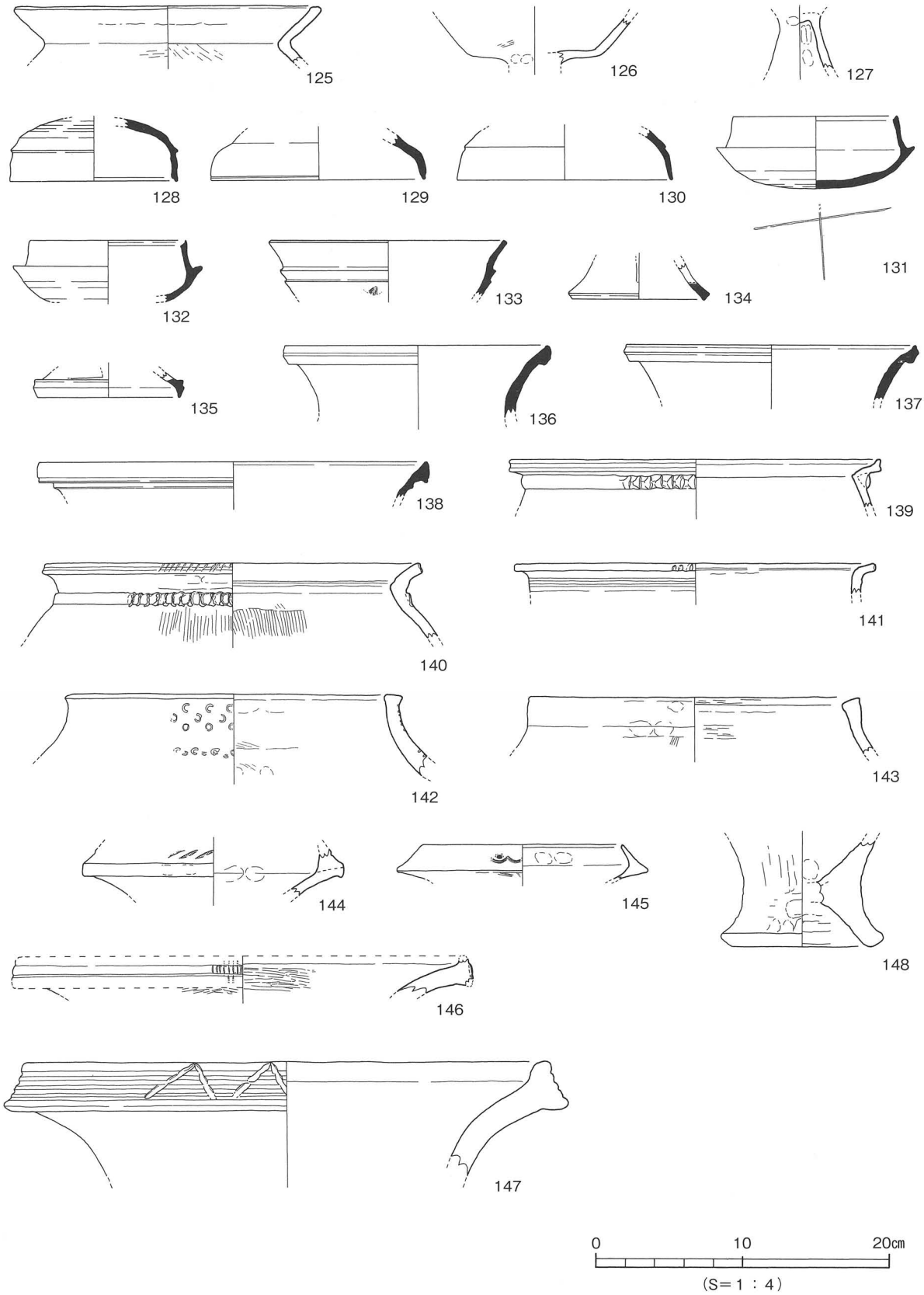
ＳＢ９は調査区北部Ｂ６～Ｄ８区に位置する。調査当初は、住居北東隅がやや突出する方形プランの住居と考え埋土の掘り下げをおこなった。埋土を掘り下げた時点で、方形プランをなす住居（改築時）を確認し、２棟の重複住居であることがわかった。

その後土層観察の結果、先行する時期の住居は埋土②、後出する時期の住居は主に埋土①の住居であることがわかった。なお、重複か建替なのか判断しがたいが、住居床面の標高値や住居形態から建替と考えた。なお、出土遺物は埋土下位で取り上げたもの（154～174）と埋土上位で取り上げたもの（175～208）とを、別々で掲載した。ここでは、構築時と改築時（縮小）とに分けて説明する。

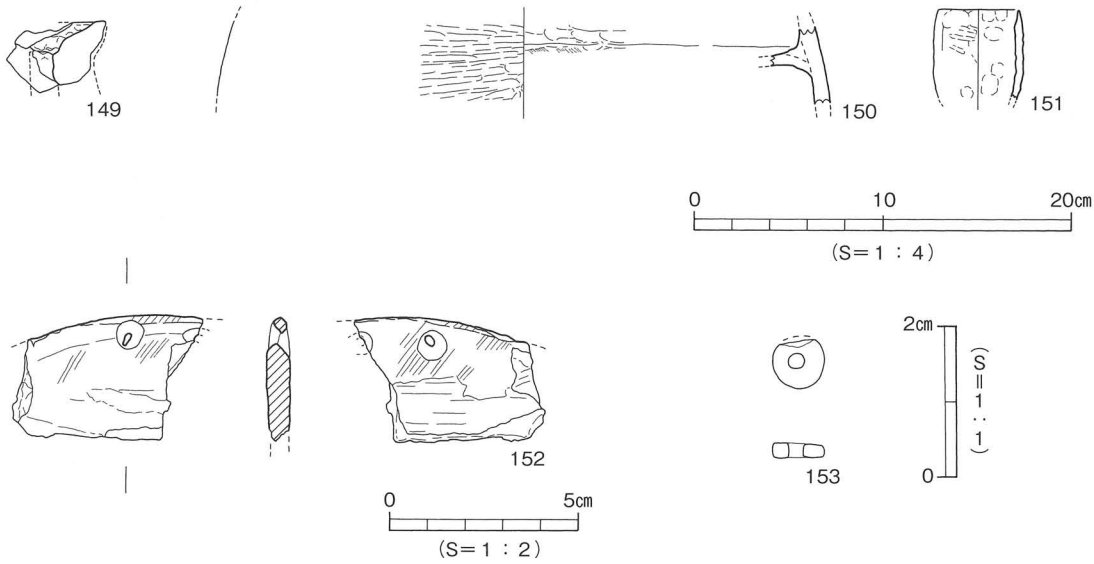
ｉ）**構築時**：住居南東側はＳＢ11、南側はＳＤ２を切り、５基の柱穴（ＳＰ257・261・304・379・380）に切られる。平面形態は方形を呈するものと考えられ、規模は北東－南西長8.2m、北西－南東長7.8m、壁高24cm、床面積64㎡を測る。住居埋土は黒褐色粘質シルトに、にぶい黄褐色粘質シルトがブロック状に少量混入するもの（②層）である。住居床面にて径40cmのピット１基を検出したが、主柱穴は不明である。



第39図　ＳＢ11測量図



第40図　ＳＢ11出土遺物実測図(1)



第41図　ＳＢ11出土遺物実測図(2)

ⅱ）**改築時**：平面形態は方形を呈し、規模は北東－南西長8.6m、北西－南東長6.6m、壁高20cm、床面積56㎡を測る。住居埋土は黒褐色粘質シルト（①層）である。主柱穴はＳＰ①～④の４本を確認した。各柱穴の平面形態は円形～楕円形を呈し、規模は径30～60cm、深さ20cmを測る。柱穴掘り方埋土は黒褐色粘質シルトに、灰黄色粘質シルトが少量混入するもの（⑤層）である。周壁溝は住居北西側と北東側で検出した。規模は幅15～30cm、深さ10cmを測る。埋土は暗褐色粘質シルトに、灰色砂が少量混入するもの（④層）である。このほか、住居床面にて柱穴30基を検出した。平面形態は円形～楕円形を呈し、規模は径40～80cm、深さ15cmを測る。埋土は黒色土である。また、住居北東側で土坑ＳＫ①を検出した。平面形態は不整楕円形を呈し、規模は長径1.6m、短径0.6m、深さ16cmを測る。埋土は暗褐色粘質シルトに、灰色砂が少量混入するもの（④層）である。構築時及び改築時の北壁付近には、径1.2mの範囲に焼土塊を検出したが、おそらくカマドの残骸ではないかと推測される。遺物は住居南東部の埋土中位付近から、ほぼ完形の須恵器坏身２点（181・182）と、埋土中より土師器片や須恵器片、臼玉、鉄器片、紡錘車、土錘が出土した。

出土遺物（第43・44図、図版22・23）

①埋土下位出土品

土師器（154～172・174）154～165は甕である。口縁部が内湾するもの（154～156・158～165）と外反するもの（157）に分けられる。口縁部が内湾するものには、口縁部中位に稜をもつもの（159～165）、稜をもたないもの（154～156、158）がある。166は椀で、口縁部は内湾して立ち上がり、口縁端部は丸い。167・168は高坏である。168は柱裾部内面に稜をもつ。169～172は甑である。170は楕円形孔を１ヶ所看取する。171・172は把手で、断面形態は楕円形を呈する。174は製塩土器で器壁がうすく、口縁端部は尖る。

須恵器（173）173は須恵器の広口壺で、口縁端部下に凸線１条を施す。

②埋土上位出土品

須恵器（175～196）175～177は坏蓋である。175は天井部がやや扁平で、口縁端部は内傾する凹面をなす。176・177は天井部が丸く、口縁端部は内傾する凹面をなす。178～182は坏身である。181・

182は完形品。178・180は底部が扁平で、179・181・182は丸い。たちあがり端部は、すべて内傾する凹面をなす。183～189は高坏である。183・184は有蓋高坏の蓋で、つまみ中央部が凹み、183は口縁端部が内傾する凹面をなす。185～187は無蓋高坏である。185は台形状の透かし３ヶ所を看取する。186・187は口縁部中位に凸線と下位に波状文を施す。188は脚部に長方形状の透かし２ヶ所、189は１ヶ所を施す。190・191は椀である。190は胴部中位に凸線２条と凸線間に波状文を施す。191は凸線１条と波状文を施す。192・193は甕である。両者共に胴部中位に沈線２条と沈線間に波状文を施す。194は短頸壺で口縁部は短く直立し、端部は丸い。195・196は甕で、195は口縁端部を長方形に肥厚する。196は口縁部下位に凸線１条を施す。

土師器（197・204）197は甑の把手で、断面形態は楕円形を呈する。204は土錘で、径0.4cm大の孔を穿つ。

弥生土器（198～203）198は甕の底部で、平底である。外面にタタキ調整を施す。199～203は壺である。199は広口壺で口縁部を上方に拡張し、口縁端面に凹線文３条を施す。200～203は肩部片である。200は沈線文２条と貝殻文、201は貝殻文、202はヘラ描きによる線刻、203は刺突文を施す。

石器（205）205は完形の有孔円板である。滑石製。

鉄器（206）206は鉄製の刀である。長さ10.1cm、幅2.0cm、厚さ0.6cm、重さ20.3g を測る。

装飾品（207・208）207・208は滑石製の臼玉で、直径0.46～0.60cm、高さ0.30～0.41cm、重さ0.10～0.20ｇである。

時期：埋土上位出土品の特徴より、ＳＢ９の廃棄・埋没時期は古墳時代後期前半とする。

ＳＢ７（第21・45図）

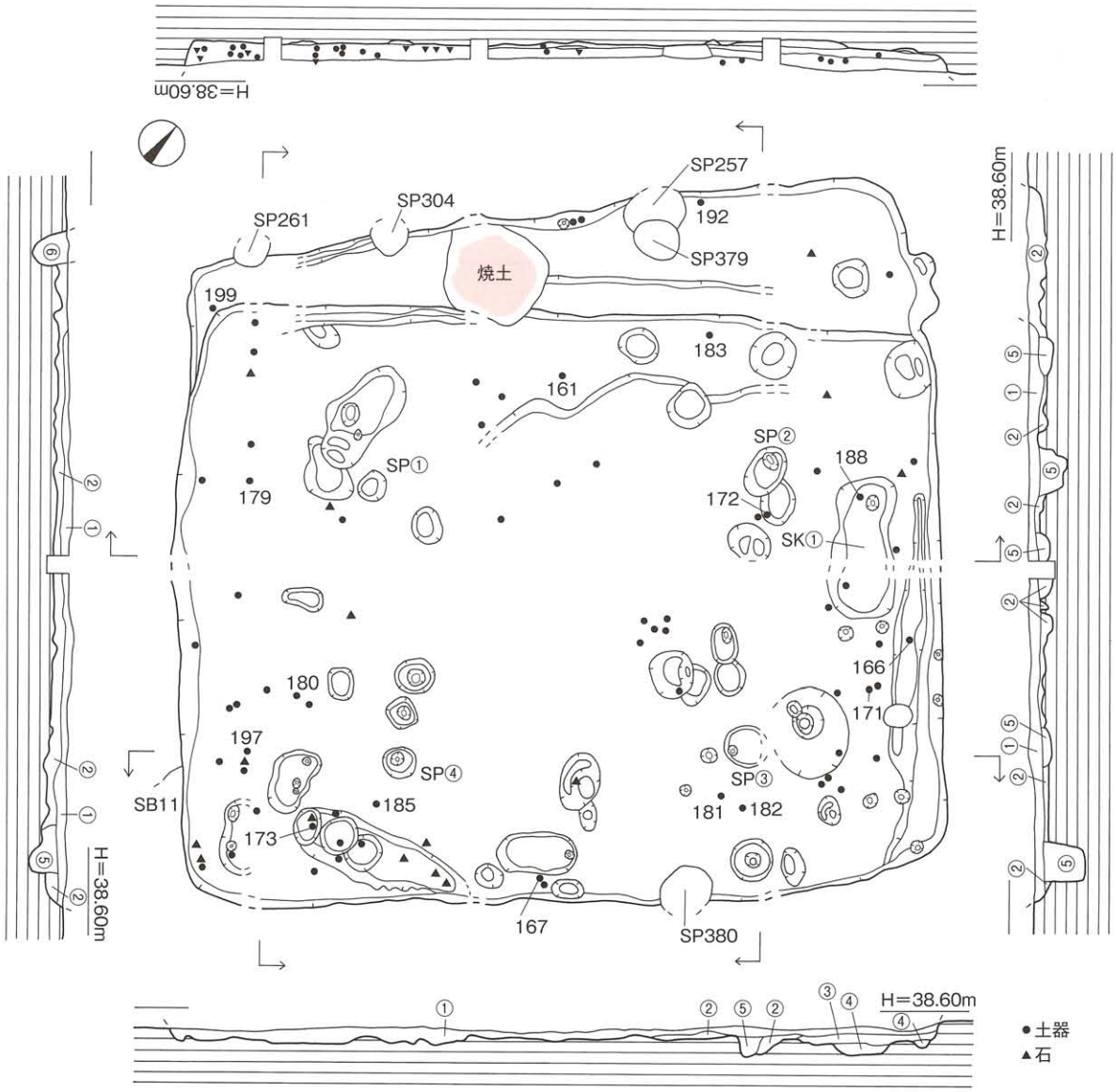
調査区中央部東側Ｃ・Ｄ５区に位置する。住居北側はＳＰ140・300・311・376、西側はＳＰ113・114・115・135・378に切られ、住居東側は調査区外に続く。平面形態は隅丸方形を呈し、規模は東西検出長2.8m、南北長3.8m、壁高は10cmを測る。住居埋土は極暗褐色粘質シルト（①層）である。周壁溝は住居北・西・南側で検出した。規模は幅12～24cm、深さ18cmを測る。埋土は極暗褐色粘質シルト（①層）である。床面にて径15～45cm大のピットを５基検出したが、主柱穴は特定できなかった。遺物は埋土中から土師器片、須恵器片が少量出土した。

出土遺物（第45図）

土師器（209）209は土師器の高坏で、坏部下位に明瞭な稜をもつ。

須恵器（210）210は坏蓋片で、口縁端部は内傾する凹面をなす。

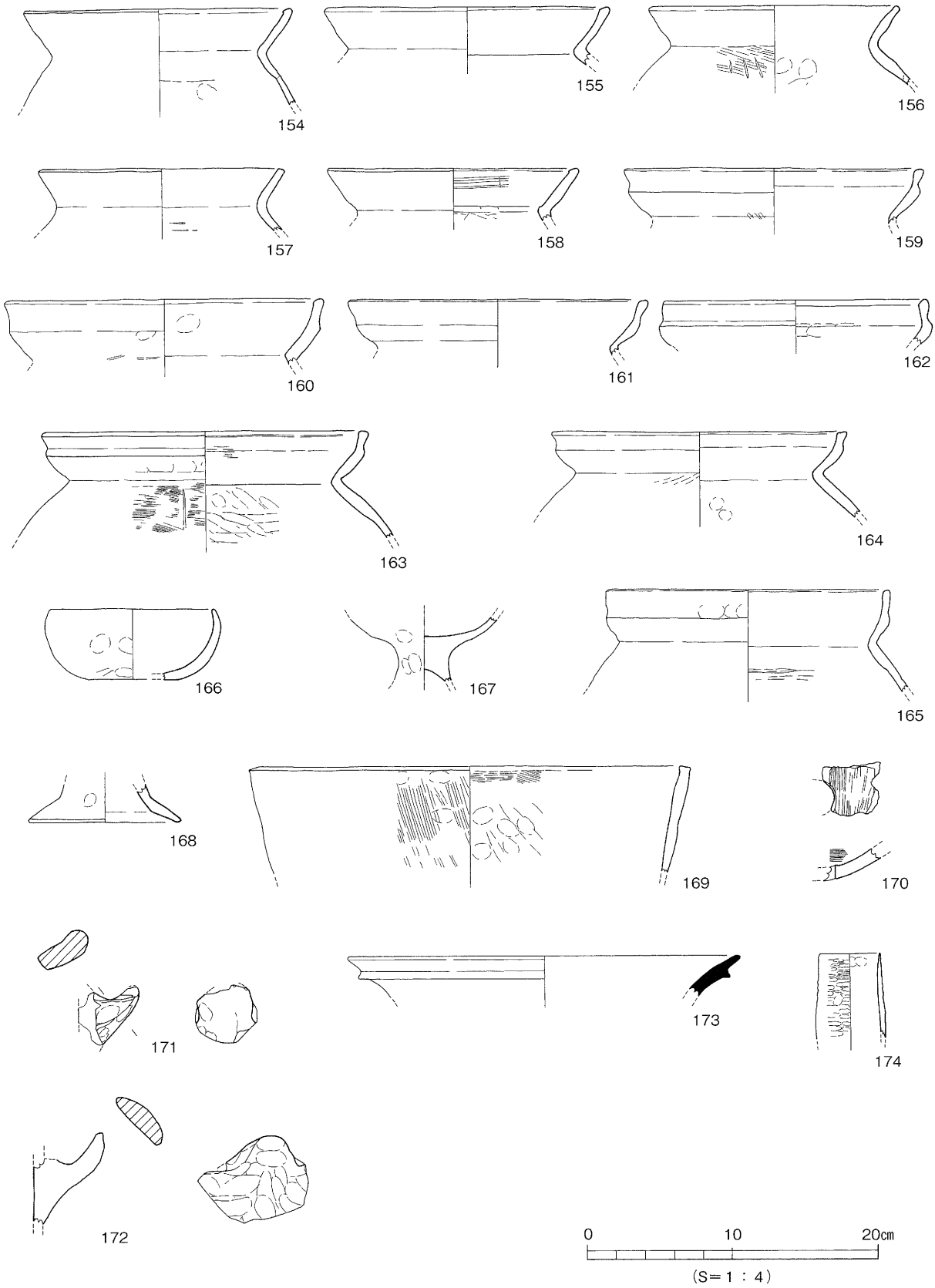
時期：出土遺物が少なく時期特定は難しいが、出土遺物の特徴より、ＳＢ７の廃棄・埋没時期は、概ね古墳時代後期前半とする。



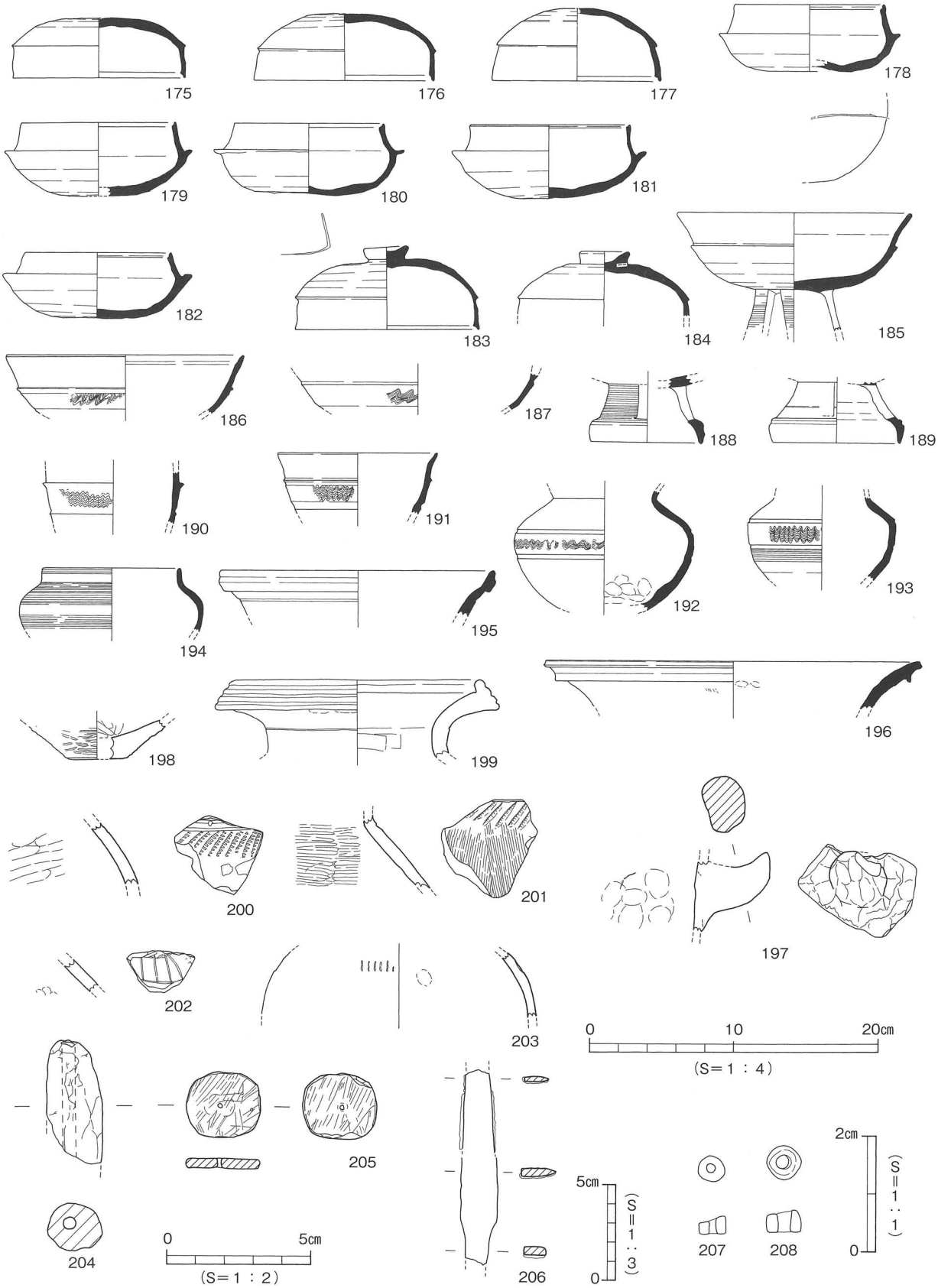
① 黒褐色(10YR2/3)粘質シルト。
② 黒褐色(10YR2/3)粘質シルトに、にぶい黄褐色(10Y5/3)粘質シルトがブロック状に少量混入。
③ 暗褐色(7.5YR3/4)粘質シルトに、にぶい黄褐色(10Y5/3)粘質シルトが斑点状に混入。
④ 暗褐色(7.5YR3/4)粘質シルトに、灰色(7.5Y6/1)砂が少量混入。〔周壁溝埋土、SK①埋土〕
⑤ 黒褐色(7.5YR2/2)粘質シルトに、灰黄色(7.5Y6/2)粘質シルトが少量混入。〔SP①～④埋土〕
⑥ 黒色(10Y2/2)粘質シルト。

0 1 2m
(S=1：80)

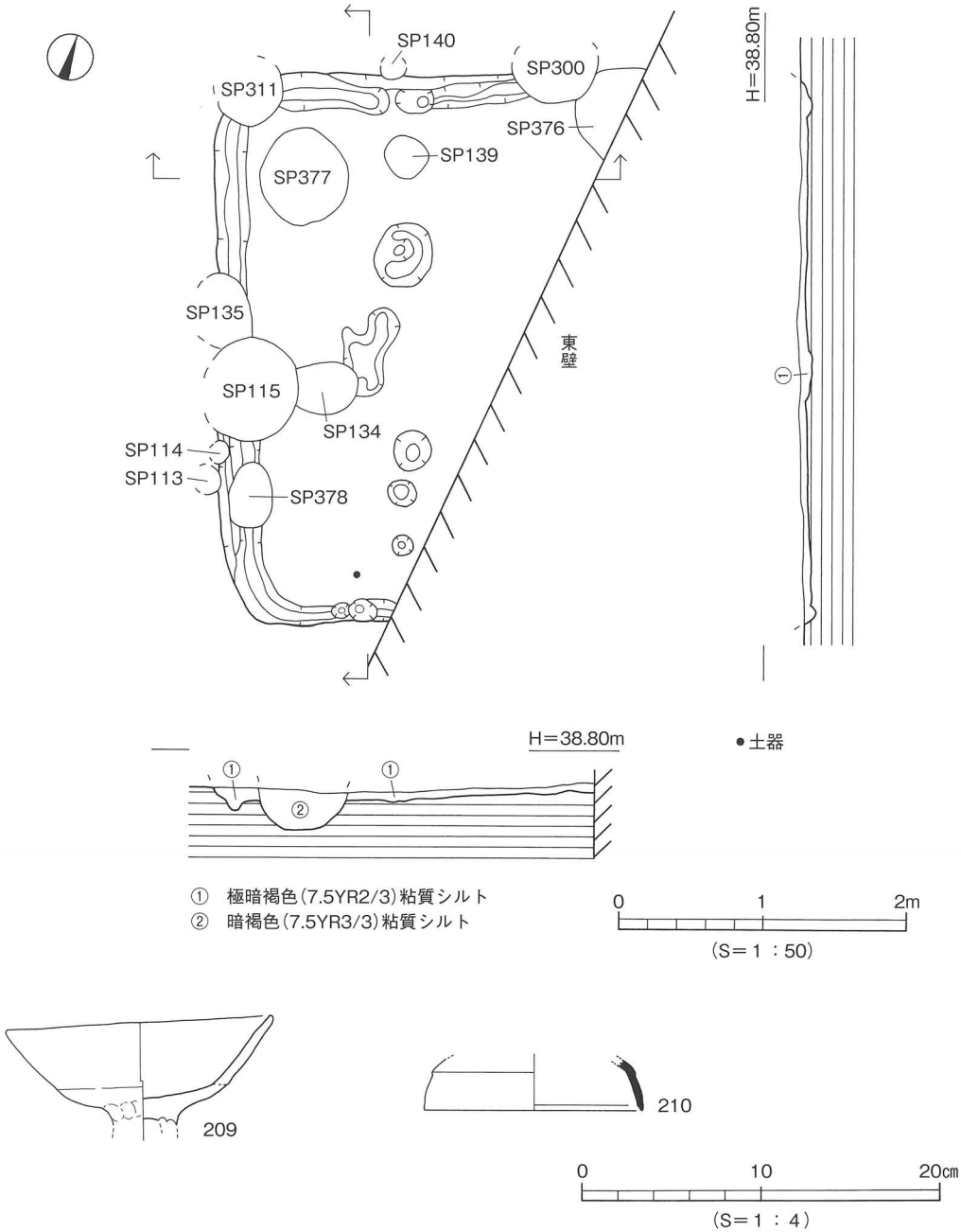
第42図　ＳＢ９測量図



第43図　ＳＢ９埋土下位出土遺物実測図



第44図　ＳＢ９埋土上位出土遺物実測図



第45図　ＳＢ７測量図・出土遺物実測図

（２）掘立柱建物

樽味四反地遺跡ではこれまでの調査において、樽味四反地遺跡６次調査（平成10年度：１号大型建物と呼称）、同８次調査（平成15年度：２号大型建物と呼称）で、それぞれ大型建物が発見されている。今回検出した大型建物は樽味地区において３例目となるため、３号大型建物と呼称して報告する。調査当初は３号大型建物を構成する36基の柱穴のうち、10基が竪穴住居の床面で検出したため、竪穴住居に伴う主柱穴と判断して調査をおこなった。各柱穴完掘後、調査終了時点で柱穴が並ぶことがわかり、これらの柱穴も大型建物の柱穴であることが判明した。その時点において各柱穴は完掘状態であり、土層断面図は作成できていないため、土層堆積状況は不明である。なお、各柱穴は、東西列と南北列のエレベーション図の測量のみをおこなった。大型建物の断面ポイントは、東西列がＡ～Ｇライン、南北列はＨ～Ｍラインの断面図を掲載する。

３号大型建物（第21・46～48図、図版15・16）

調査区南西部Ａ１～Ｃ２区に位置する。南北６間（11.06m）、東西５間以上（9.6m）を測る総柱建物で、建物方位は真北よりやや西に振っている。建物を構成する柱穴の一部はＳＢ２・４（弥生時代後期後半）、ＳＢ３（５世紀後半）掘り下げ後の床面にて検出された。ＳＰ②・⑦・⑬・⑱・㊱はＳＤ１、ＳＰ⑳はＳＫ７、ＳＰ㉑はＳＤ４、ＳＰ㉖はＳＤ３を切り、建物西側及び南側は調査区外に続く。調査では36基の柱穴を検出した。側柱を構成する柱穴は平面形態が隅丸長方形～楕円形を呈しており、さらに建物東側の側柱は東西に長い長方形を呈し、北側と南側は南北に長い長方形を呈する。規模は径90～120cm、深さ45～55cmを測る。なお、柱穴は建物内側部分がテラス状となっており、柱抜き取りの際の掘り方ではないかと推測される。遺物は14基の柱穴内から弥生土器片、土師器片が出土した。各柱穴内からは、主に甕形土器の胴底部片（タタキ調整あり）が数多く出土している。

〔建物を構成する柱穴〕

ＳＰ①：建物北西部に位置する側柱で、ＳＢ４床面にて検出した。平面形態は隅丸長方形を呈し、規模は長軸140cm、短軸96cm、深さ52cmを測る。断面形態は北側と東側がテラス状になる。柱穴内から、遺物の出土はない。

ＳＰ②：建物北西部に位置する側柱で、ＳＤ１を切る。平面形態は不整楕円形を呈し、長径130cm、短径80cm、深さ56cmを測る。断面形態は北側と南側がテラス状になる。遺物は、甕の胴部片や壺の頸部片が出土した。

ＳＰ③：建物北東部に位置する側柱である。平面形態は不整形を呈し、長径110cm、短径56cm、深さ64cmを測る。断面形態は北側と南側がテラス状になる。柱穴内から、遺物の出土はない。

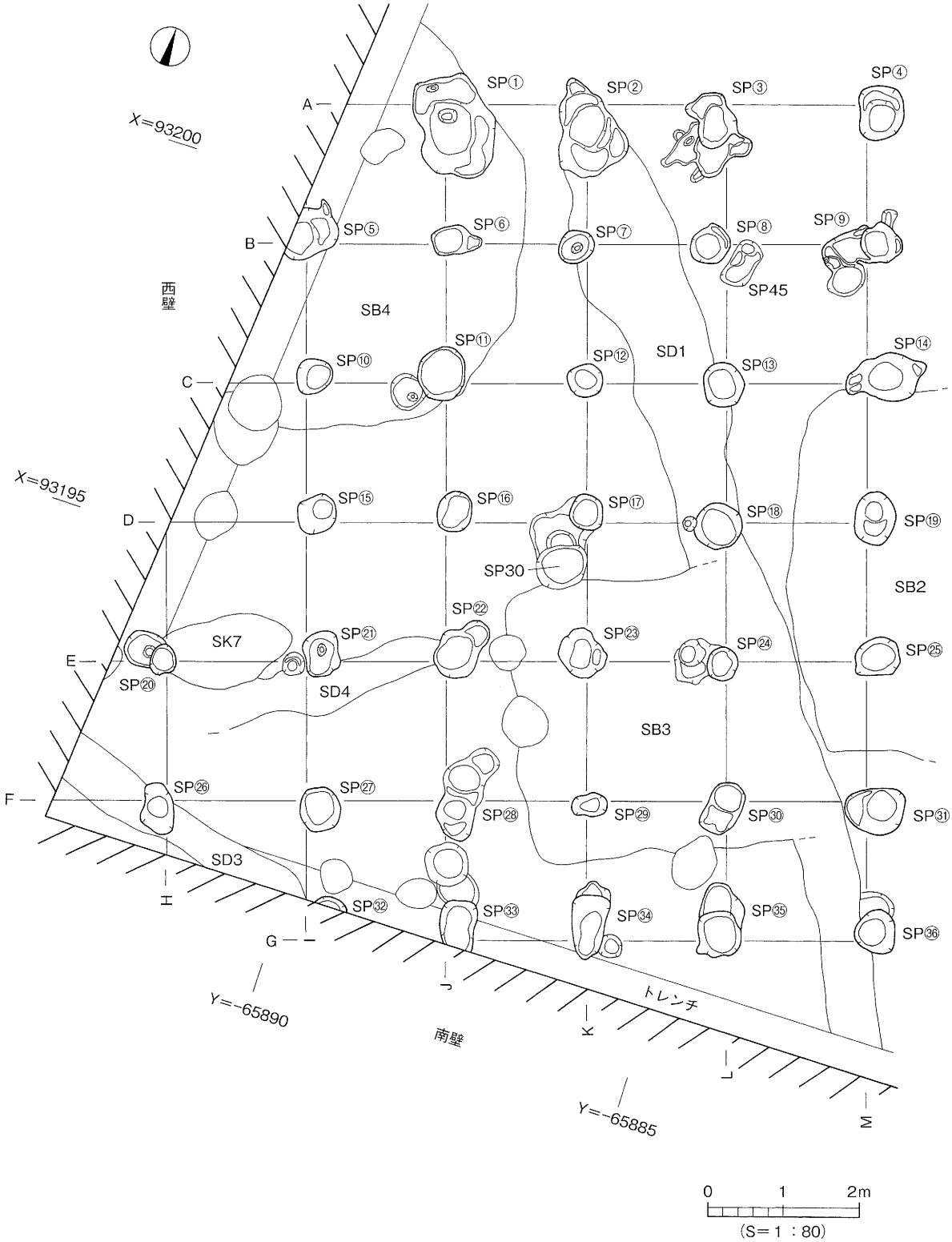
ＳＰ④：建物北東隅に位置する側柱である。平面形態は隅丸方形を呈し、長軸70cm、短軸60cm、深さ50cmを測る。断面形態は北側がテラス状になる。柱穴内から、遺物の出土はない。

ＳＰ⑤：建物北西部に位置する束柱で、西側は調査区外に続く。平面形態は楕円形を呈し、検出長径70cm、短径70cm、深さ30cmを測る。埋土は黒褐色粘質シルト（①層）である。断面形態は北東側がテラス状になる。柱穴内から、遺物の出土はない。

ＳＰ⑥：建物北西部に位置する束柱であり、ＳＢ４床面にて検出される。平面形態は楕円形を呈し、長径66cm、短径36cm、深さ32cmを測る。埋土は黒褐色粘質シルト（①層）である。断面形態は東側がテラス状になる。柱穴内から、遺物の出土はない。

ＳＰ⑦：建物北西部に位置する束柱で、ＳＤ１を切る。平面形態は円形を呈し、径44cm、深さ20cmを測る。埋土は黒褐色粘質シルト（①層）である。柱穴内から、遺物の出土はない。

ＳＰ⑧：建物北東部に位置する束柱である。平面形態は円形を呈し、径56cm、深さ36cmを測る。柱



第46図　３号大型建物測量図

穴内から、遺物の出土はない。

ＳＰ⑨：建物北東部に位置する側柱である。平面形態は隅丸長方形を呈し、長軸100cm、短軸44cm、深さ50cmを測る。西側がテラス状になる。遺物は、甕の胴部片が数点出土した。

ＳＰ⑩：建物中央部西側に位置する束柱で、ＳＢ４床面にて検出した。平面形態は楕円形を呈し、長径50cm、短径44cm、深さ44cmを測る。埋土は黒褐色粘質シルト（①層）である。柱穴内から、遺物の出土はない。

ＳＰ⑪：建物中央部西側に位置する束柱で、ＳＢ４の床面で検出した。平面形態は楕円形を呈し、長径76cm、短径60cm、深さ28cmを測る。埋土は黒褐色粘質シルト（①層）である。遺物は、タタキ痕が施される甕と壺の胴部片が出土した。

ＳＰ⑫：建物中央部に位置する束柱である。平面形態は円形を呈し、径40cm、深さ30cmを測る。埋土は黒褐色粘質シルト（①層）である。遺物は、須恵器坏蓋の小片が出土した。

ＳＰ⑬：建物中央部東側に位置する束柱で、ＳＤ1を切る。平面形態は円形を呈し、径60cm、深さ40cmを測る。柱穴内から、遺物の出土はない。

ＳＰ⑭：建物中央部東側に位置する側柱で、ＳＢ２を切る。平面形態は不整楕円形を呈し、長径110cm、短径64cm、深さ44cmを測る。柱穴内から、遺物の出土はない。

ＳＰ⑮：建物中央部西側に位置する束柱である。平面形態は円形を呈し、径50cm、深さ48cmを測る。埋土は黒褐色粘質シルト（①層）である。遺物は、タタキ痕が残る鉢の胴部片が出土した。

ＳＰ⑯：建物中央部西側に位置する束柱である。平面形態は楕円形を呈し、長径60cm、短径40cm、深さ38cmを測る。埋土は黒褐色粘質シルト（①層）である。柱穴内から、遺物の出土はない。

ＳＰ⑰：建物中央部西側に位置する束柱である。平面形態は円形を呈し、径40cm、深さ36cmを測る。断面形態は西側がテラス状になる。遺物は、タタキ痕が残る鉢の胴部片が出土した。

ＳＰ⑱：建物中央部東側に位置する束柱で、ＳＤ１を切る。平面形態は円形を呈し、径56cm、深さ30cmを測る。柱穴内から、遺物の出土はない。

ＳＰ⑲：建物中央部東側に位置する側柱で、ＳＢ２床面にて検出した。平面形態は楕円形を呈し、長径76cm、短径58cm、深さ28cmを測る。埋土は黒褐色粘質シルト（①層）である。断面形態は南側がテラス状になる。柱穴内から、遺物の出土はない。

ＳＰ⑳：建物南西部に位置する束柱で、ＳＫ７を切る。平面形態は円形を呈し、径30cm、深さ48cmを測る。断面形態は西側がテラス状になる。遺物は、甕の口縁部と底部が出土した。

ＳＰ㉑：建物南西部に位置する束柱で、ＳＤ４を切る。平面形態は楕円形を呈し、長径60cm、短径44cm、深さ44cmを測る。柱穴内から、遺物の出土はない。

ＳＰ㉒：建物南西部に位置する束柱で、ＳＤ４を切る。平面形態は楕円形を呈し、長径60cm、短径50cm、深さ40cmを測る。断面形態は北東側がテラス状になる。遺物は、甕の口縁部片、甑の把手、須恵器の坏身片が出土した。

ＳＰ㉓：建物南東部に位置する束柱で、ＳＢ３床面にて検出した。平面形態は楕円形を呈し、長径64cm、短径50cm、深さ30cmを測る。埋土は暗褐色粘質シルト（②層）である。断面形態は東側がテラス状になる。遺物は、タタキ甕の胴部片が数点出土した。

ＳＰ㉔：建物南東部に位置する束柱で、ＳＢ３床面にて検出した。平面形態は円形を呈し、径40cm、深さ20cmを測る。埋土は２層あり、暗褐色粘質シルト（②層）と黒褐色粘質シルト（③層）である。遺物は、弥生土器の壺の口縁部片、鉢の口縁部片が出土した。

ＳＰ㉕：建物南東部に位置する側柱で、ＳＢ２床面にて検出した。平面形態は楕円形を呈し、長径

60cm、短径48cm、深さ36cmを測る。埋土は黒褐色粘質シルト（①層）である。柱穴内から、遺物の出土はない。

ＳＰ㉖：建物南西部に位置する束柱で、ＳＤ３を切る。平面形態は楕円形を呈し、長径64cm、短径40cm、深さ60cmを測る。柱穴内から、遺物の出土はない。

ＳＰ㉗：建物南西部に位置する束柱で、平面形態は円形を呈し、径60cm、深さ36cmを測る。柱穴内から、遺物の出土はない。

ＳＰ㉘：建物南西部に位置する束柱である。平面形態は不整楕円形を呈し、長径80cm、短径50cm、深さ44cmを測る。遺物は、鉢の口縁部片が出土した。

ＳＰ㉙：建物南東部に位置する束柱である。平面形態は楕円形を呈し、長径50cm、短径30cm、深さ32cmを測る。埋土は暗褐色粘質シルト（②層）である。柱穴内から、遺物の出土はない。

ＳＰ㉚：建物南東部に位置する束柱である。平面形態は楕円形を呈し、長径70cm、短径44cm、深さ24cmを測る。埋土は暗褐色粘質シルト（②層）である。柱穴内から、遺物の出土はない。

ＳＰ㉛：建物南東部に位置する側柱である。平面形態は楕円形を呈し、長径80cm、短径60cm、深さ58cmを測る。断面形態は西側がテラス状になる。遺物は、弥生土器、土師器、須恵器の小片が少量出土した。

ＳＰ㉜：建物南西部に位置する側柱で、南側は調査区外に続く。東西長42cm、南北検出長16cm、深さ20cmを測る。埋土は黒褐色粘質シルトに、にぶい黄褐色シルトがブロック状に混入するもの(④層)である。柱穴内から、遺物の出土はない。

ＳＰ㉝：建物南西部に位置する側柱で、南側は調査区外に続く。平面形態は隅丸方形を呈し、長軸62cm、短軸48cm、深さ22cmを測る。埋土は褐灰色粘質シルトに、にぶい黄褐色シルトがブロック状に混入するもの（⑤層）である。遺物は、タタキ痕が施される甕の胴部片が数点出土する。

ＳＰ㉞：建物南東部に位置する側柱である。平面形態は隅丸長方形を呈し、長軸100cm、短軸42cm、深さ50cmを測る。埋土は２層あり、黒褐色粘質シルト（①層）と暗褐色粘質シルト（②層）である。断面形態は北側がテラス状になる。遺物は、弥生土器、土師器の小片が出土する。

ＳＰ㉟：建物南東部に位置する側柱である。平面形態は隅丸長方形を呈し、長軸96cm、短軸60cm、深さ60cmを測る。断面形態は北側がテラス状になる。柱穴内から、遺物の出土はない。

ＳＰ㊱：建物南東部に位置する側柱で、ＳＤ１を切る。平面形態は楕円形を呈し、長径60cm、短径50cm、深さ60cmを測る。断面形態は北側がテラス状になる。柱穴内から、遺物の出土はない。

出土遺物（第49・50図、図版23）

ＳＰ②（211・212）211・212は弥生土器である。211は甕の胴部片で、タタキ調整を施す。212は壺の頸部片で、貼付凸帯文１条と凸帯上に斜格子目文を施す。

ＳＰ⑨（213）213は弥生土器甕の胴部小片で、タタキ調整を施す。

ＳＰ⑪（214～216）214～216は弥生土器である。214は甕の胴部小片で、タタキ痕が顕著である。215は甕の底部片で、平底である。216は壺の胴部小片である。

ＳＰ⑫（217）217は須恵器坏蓋の口縁部小片である。

ＳＰ⑮（218）218は弥生土器鉢の胴部小片で、タタキ調整を施す。

ＳＰ⑰（219～222）219～222は弥生土器である。219は広口壺の口縁部片、220は壺の胴部小片である。221は鉢の胴部小片で、外面にタタキ調整を施す。222は支脚の受部で、断面は楕円形を呈する。

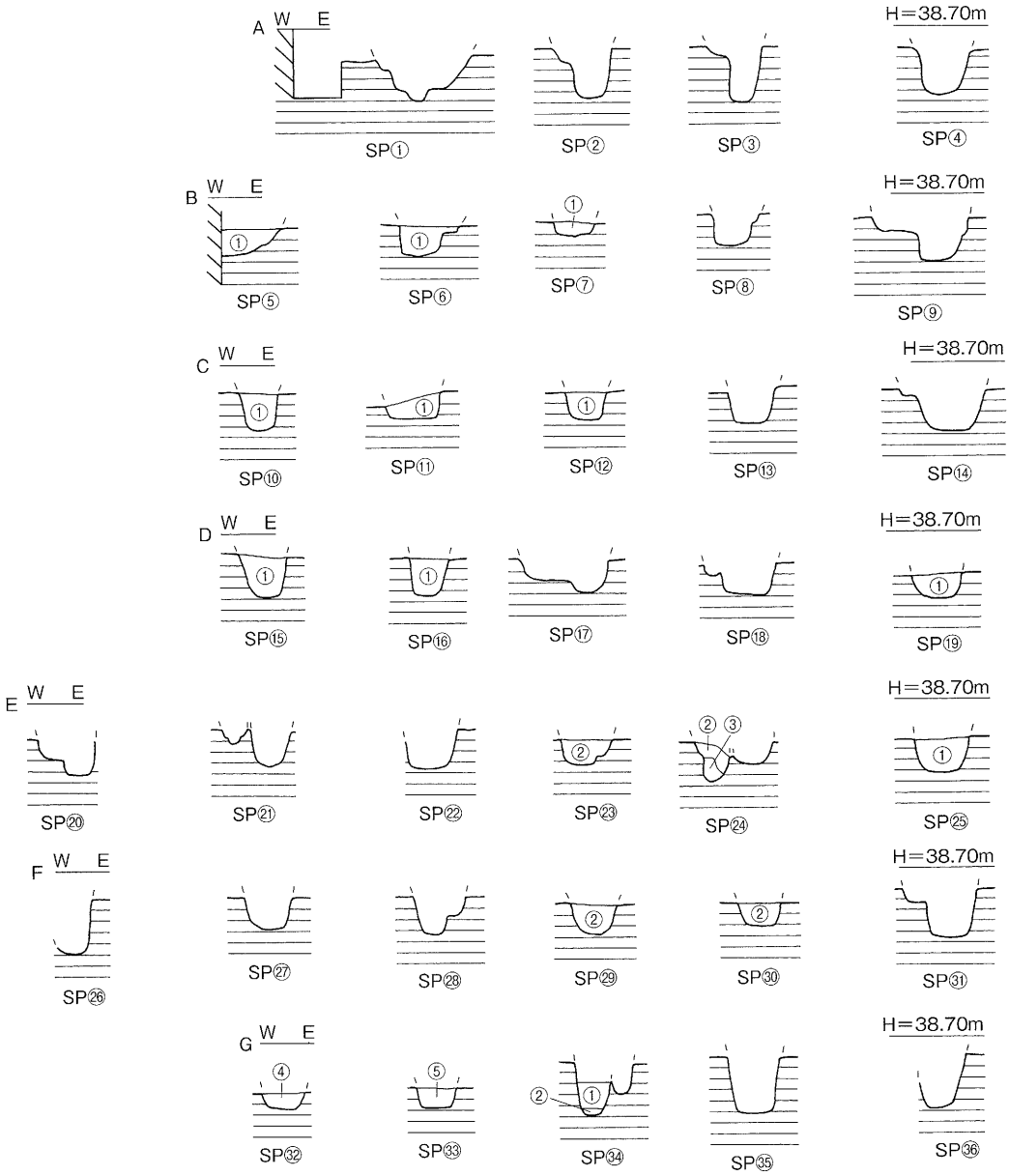
ＳＰ⑳（223・224）223・224は弥生土器である。223は甕の口縁部小片、224は底部片で、タタキ調整を施す。

ＳＰ㉒（225～227）225は土師器甕の口縁部小片で、口縁端部は内傾する面をもつ。226は土師器甑の把手である。227は須恵器坏身の小片である。

ＳＰ㉓（228・229）228・229は弥生土器である。228は甕の胴部片で、タタキ調整を施す。229は複合口縁壺の口縁部である。

ＳＰ㉔（230・231）230・231は弥生土器である。230は広口壺で口縁端部を下方に拡張し、口縁端面に波状文５条を施す。231は鉢の口縁部小片である。

ＳＰ㉘（232）232は弥生土器鉢の小片で、口縁部は直立する。



※A～Gは断面図作成ライン

① 黒褐色(10YR3/1)粘質シルト。
② 暗褐色(7.5YR3/4)粘質シルト。
③ 黒褐色(10YR2/2)粘質シルト。
④ 黒褐色(10YR3/1)粘質シルトに、にぶい黄褐色(10Y5/3)シルトがブロック状に混入。
⑤ 褐灰色(7.5YR4/1)粘質シルトに、にぶい黄褐色(10Y5/3)シルトがブロック状に混入。

0 1 2m
(S＝1：80)

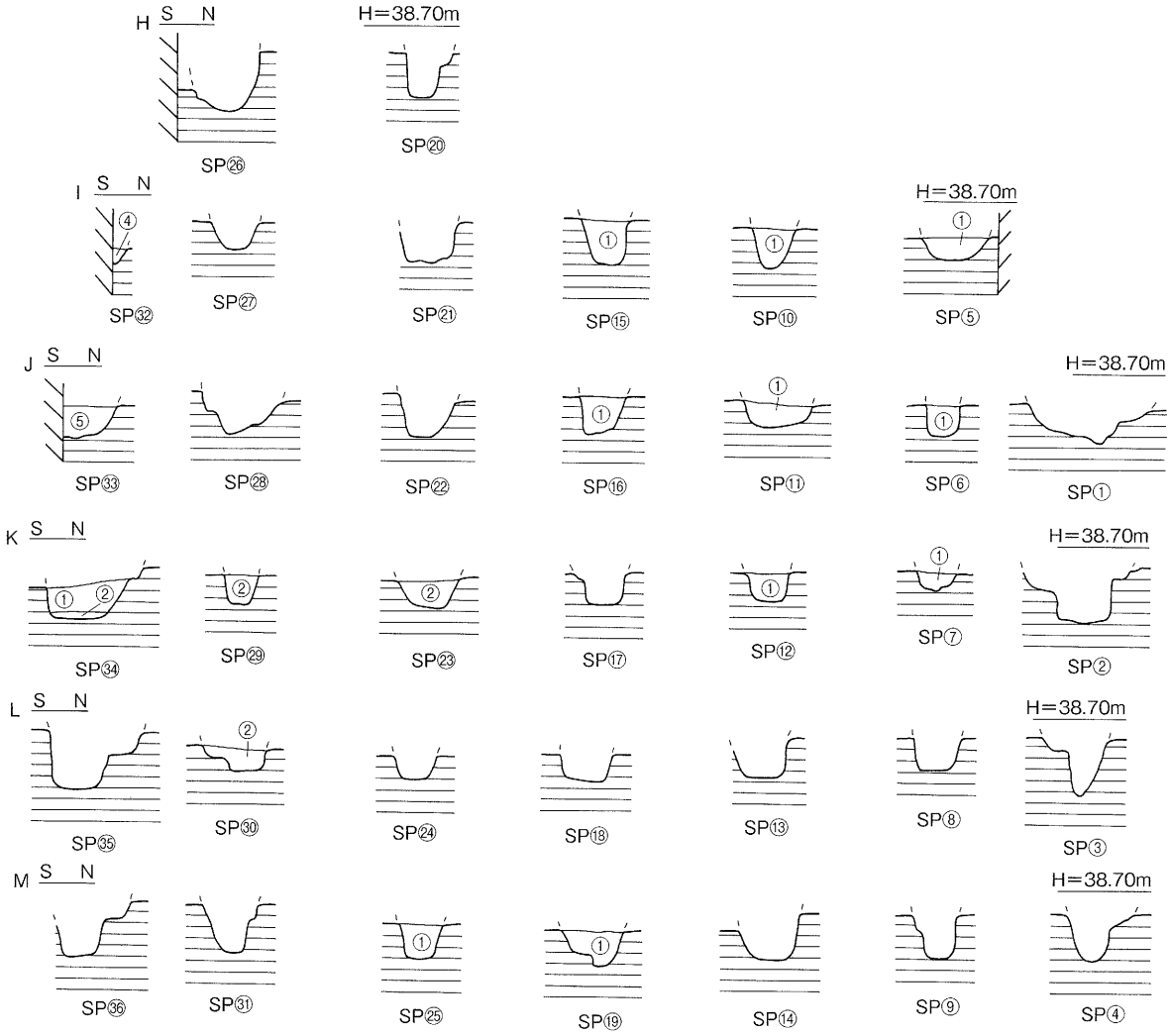
第47図　３号大型建物柱穴断面図(1)

ＳＰ㉛（233～235）233は土師器高坏の坏部小片で、234は弥生土器の甕で上げ底の底部である。235は須恵器坏蓋の小片で、稜は明瞭である。

ＳＰ㉝（236～238）236・237は弥生土器である。236は甕の胴部小片で、タタキ痕が残る。237は折曲口縁の鉢小片である。238は須恵器坏身の小片である。

ＳＰ㉞（239～243）239～242は弥生土器である。239は甕の口縁部、240は壺の肩部小片で、貝殻文を施す。241は突出する鉢の底部片である。242は支脚片で中空となる。243は土師器の高坏で、柱裾部内面に明瞭な稜をもつ。

時期：出土遺物の特徴と遺構の切り合い等から、古墳時代初頭とする。

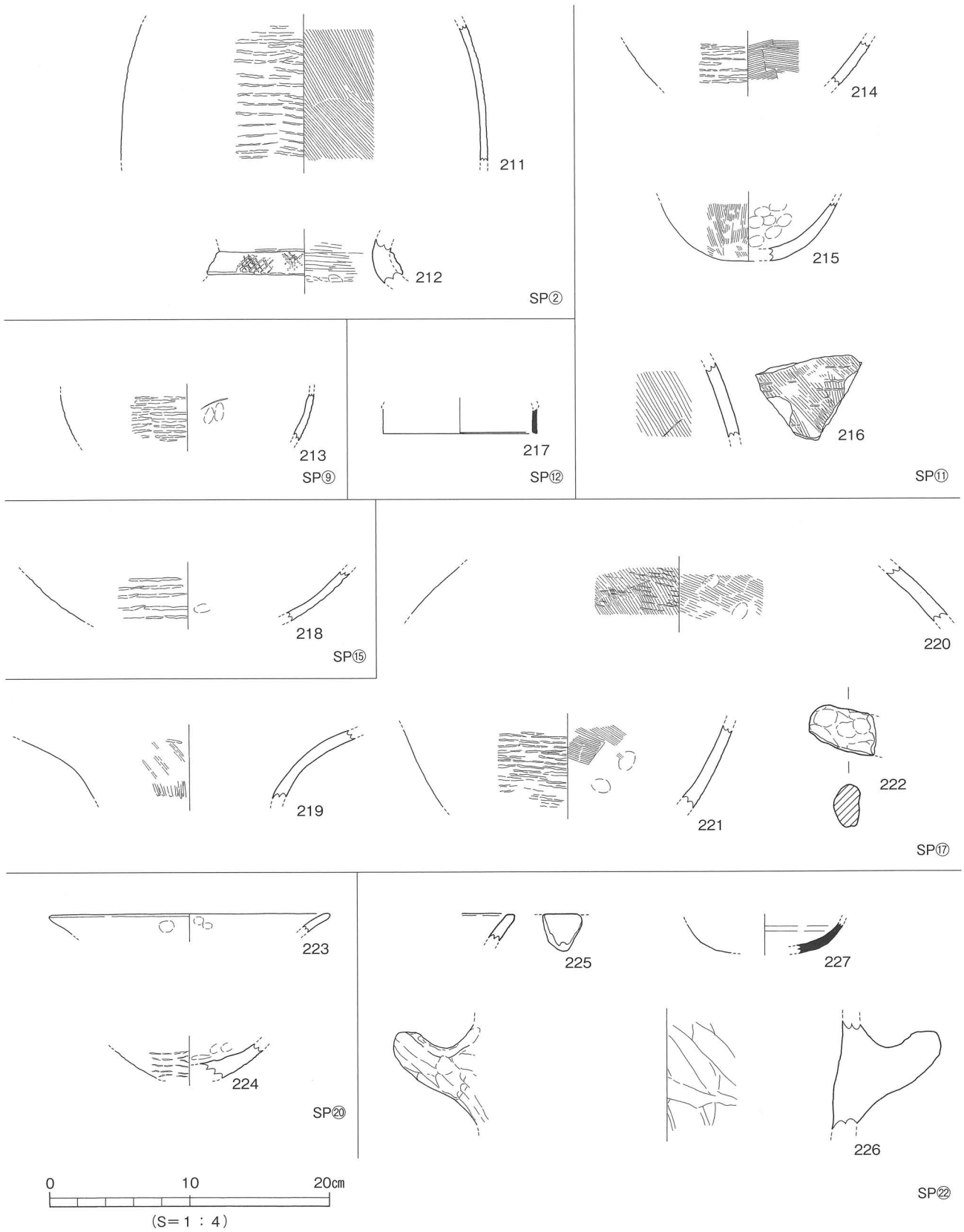


※H～Mは断面図作成ライン

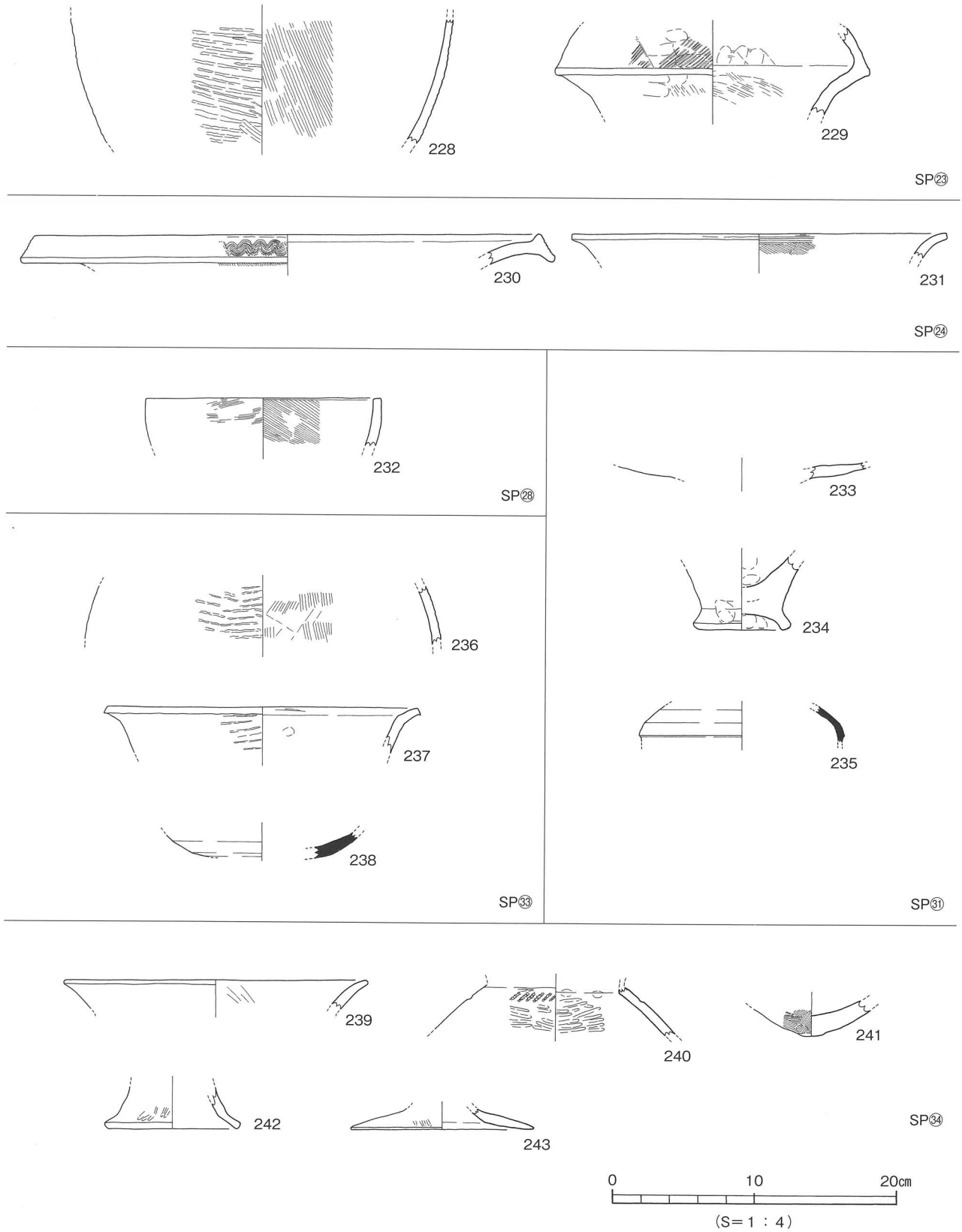
① 黒褐色(10YR3/1)粘質シルト。
② 暗褐色(7.5YR3/4)粘質シルト。
③ 黒褐色(10YR2/2)粘質シルト。
④ 黒褐色(10YR3/1)粘質シルトに、にぶい黄褐色(10Y5/3)シルトがブロック状に混入。
⑤ 褐灰色(7.5YR4/1)粘質シルトに、にぶい黄褐色(10Y5/3)シルトがブロック状に混入。

0 1 2m
(S＝1：80)

第48図　３号大型建物柱穴断面図(2)



第49図　３号大型建物出土遺物実測図(1)



第50図　３号大型建物出土遺物実測図(2)

掘立１（第21・51図）

調査区中央部西側Ｂ・Ｃ４～Ｂ６区に位置する。２間×４間の南北棟で、３基の建物柱穴（ＳＰ⑩～⑫）はＳＢ８を切り、ＳＰ②はＳＰ160に切られる。建物方位は真北より19°西へ振っている。規模は桁行長3.70m、梁行長6.40mを測る。各柱穴の平面形態は円～楕円形を呈し、規模は径60～90cm、深さ10～20cmを測る。柱穴掘り方埋土は暗褐色粘質シルト（①層）である。柱痕はＳＰ⑧で検出され、柱痕径は15cmを測る。柱痕埋土は黒褐色粘質シルト（②層）である。遺物は柱穴掘り方内から、弥生土器片や土師器片が少量出土した。

出土遺物（第51図）

244は弥生土器である。広口壺の口縁部で、口縁端部を上方に拡張し口縁端面に凹線文３条を施す。245・246は土師器である。245は小型壺で、内外面共にナデ調整を施す。246は高坏の坏部で、口縁部はわずかに外反する。

時期：出土した土師器の特徴と遺構の切り合い等から、古墳時代中期後半以降とする。

（３）溝

ＳＤ２（第21・52図、図版16・17）

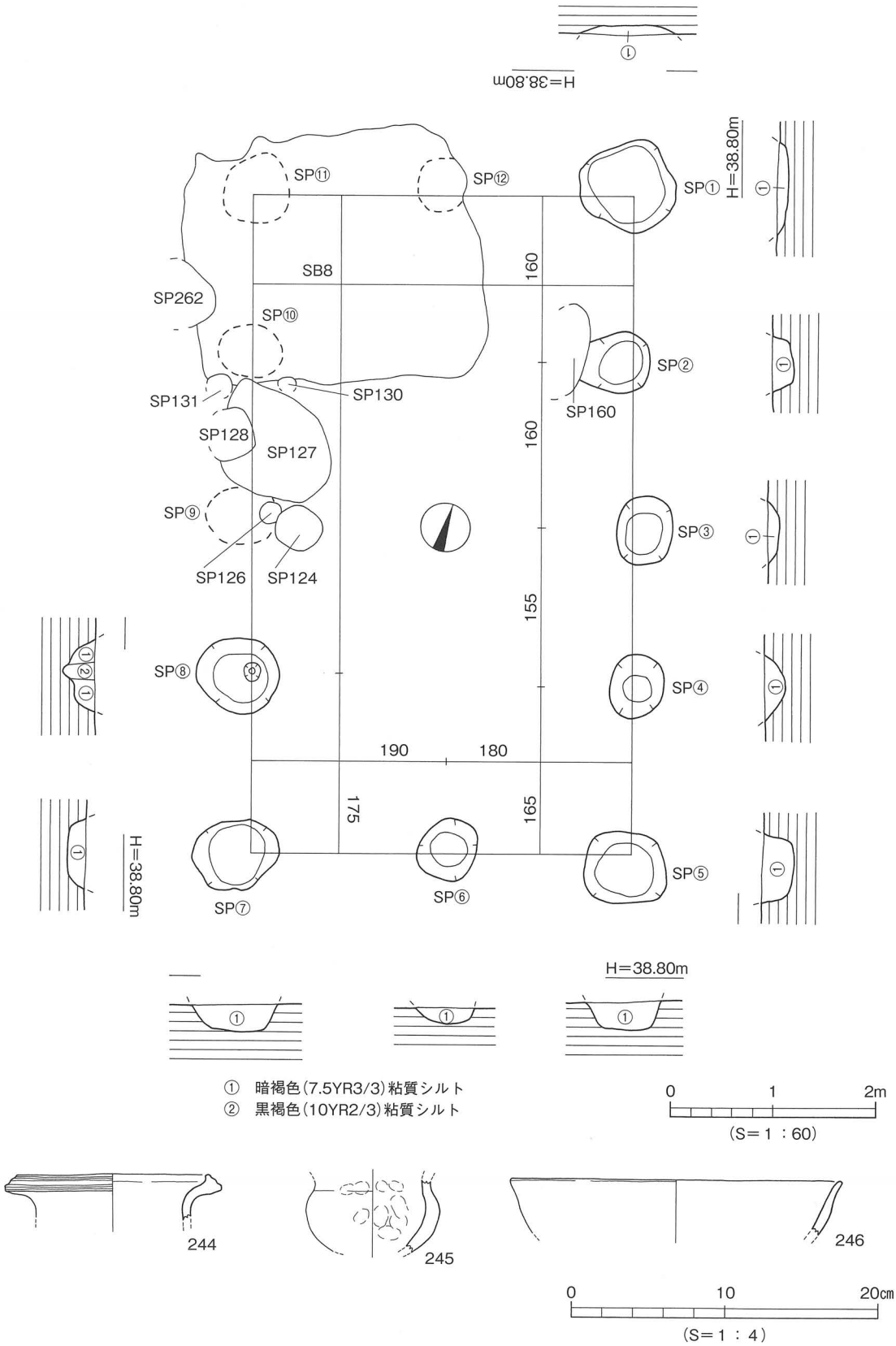
調査区中央部、Ａ５～Ｄ７区に位置する北東－南西方向の溝である。ＳＤ２は、平成10年度に実施した樽味四反地遺跡６次調査検出の溝ＳＤ００１の延長部分である。

溝中央部はＳＢ９・11、北側はＳＰ183・384・385、南側はＳＰ182・383に切られ、両端は調査区外に続く。溝は第Ⅸ層上面で検出し、溝上面は第Ⅶ層が覆う。規模は検出長14.5m、幅0.80～1.50m、深さ20～38cmを測る。断面形態はレンズ状を呈する。埋土は３層に分層され、上層は黒褐色粘質土（①層）で、厚さ15～20cm（第Ⅶ層上面下）、下層は黒褐色粘質土に直径１cm大の石が混入するもので、下位には直径５～20cm大の河原石が多量に出土した（②層）。厚さ20cmを測る。最下層は黒褐色粘質土に、にぶい褐色土がブロック状に混入するもの（③層）で、厚さ５cmを測る。溝は①層・②層・③層の順で掘り下げをおこない、遺物を取り上げた。溝西側の１区、２区では①層を掘り下げた後、②層上面にて径10～20cm大の河原石（礫層）が出土した。溝東側及び西側底面では径10～50cm大のピット35基を検出した。溝底はほぼ平坦である。遺物は上層、下層、礫層、及び調査時に設定したセクションベルト、トレンチ内から出土した。すべての地点からは、弥生時代中期後半から古墳時代の土器が混在して出土した。このうち、下層出土品には分銅形土製品が１点含まれる。

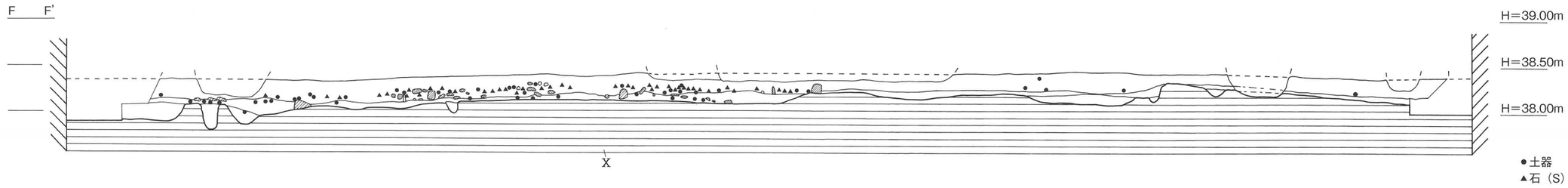
出土遺物

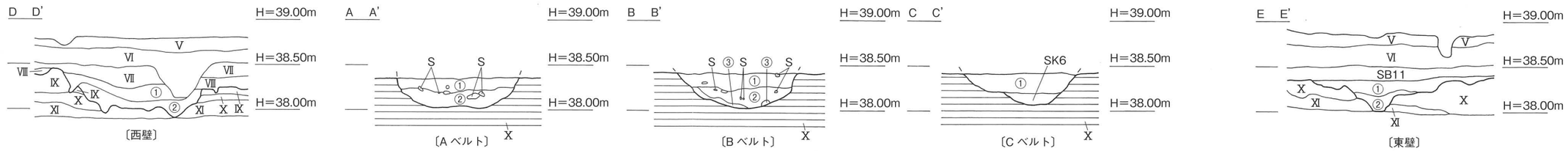
ｉ）１区下層出土品（第53・54図、図版23）

弥生土器（247～263・265～276）247～257は甕である。247は折曲口縁で、口縁端部に刻目を施す。248は口縁部下に貼付凸帯文１条と、凸帯上に押圧を施す。249は口縁部が「く」の字状を呈し、口縁端部はナデにより凹む。251～253は口縁部が「く」の字状を呈し、口縁端部は丸い。254～256は底部で、254・255は平底、256は上げ底である。外面にタテ方向のヘラミガキ調整を施す。257は長胴で、底部は小さな平底となる。胴部外面にタタキ調整を施す。258～268は壺である。258～261は広口壺の口縁部で、258は口縁端部に刻目、口縁内面に貼付凸帯文１条を施す。大型品。259～261は口縁端部を上下方に拡張し、口縁端面に凹線文を施す。262は複合口縁壺で、口縁部に波状文４条を施す。263は長頸壺で、頸部にヘラ描き沈線文６条及び貼付凸帯文１条と凸帯上に貝殻文を施す。265～268は底部である。265は平底、266・267はわずかに上げ底である。268は大型壺の底部で、突出する平底である。269～273は鉢である。269・270は口縁部が外反し、271・272は突出する小さな平底である。



第51図　掘立１測量図・出土遺物実測図





① 黒褐色(10YR3/1)粘質土
② 黒褐色(10YR3/2)粘質土に、直径1㎝大の石が20%程度混入。
直径5～20㎝大の河原石（花崗岩）が多量に出土。
③ 黒褐色(10YR3/2)粘質土に、にぶい褐色(7.5YR5/4)土がブロック状に混入する。

0 1 2m
(S=1：50)

第52図　ＳＤ２測量図

274・275は高坏である。274は口縁部に凹線文を施し、凹線文下に刻目を施す。275は脚部で、坏部と脚部の接合法は差込技法である。277は分銅形土製品で、眉毛と目の表現がある。裏面から径0.3cmの孔を穿つ。

土師器（264・276）264は小型壺で、口縁部は直立し頸部内面に稜をもつ。276は器台である。

石器（278）278は緑色片岩製の石庖丁の未製品である。

ⅱ）２区下層出土品（第55図、図版24）

弥生土器（279～297）279～286は甕である。279は口縁端面に凹線文１条と刻目、頸部に押圧凸帯文１条を施す。280は胴部外面に刺突文を施す。281～286は底部である。281・282は平底で、外面にタテ方向のヘラミガキ調整を施す。283・284は上げ底である。285・286は平底で、外面にタタキ調整を施す。287～293は壺である。287は広口壺で、口縁部は外反し口縁端部を上下方に拡張後、口縁端面に凹線文３条を施す。288は長頸壺の口縁部で、わずかに外反する。289は底部が欠損するほぼ完形品の小型の壺で、口縁部が外反し口縁端部は先細りする。290は大型壺の肩部で、外面に刺突文を施す。291は頸部に刻目凸帯文１条を施す。292は胴部片、293は大型壺の底部で平底となる。底部外面にタタキ調整を施す。294・295は鉢である。294は口縁部を上下方に拡張し、口縁端面に凹線文２条を施す。頸部に刺突文を施す。295は底部で、小さな平底である。底部外面にタタキ調整を施す。296は高坏の脚部で、脚部内面にシボリ痕を残す。297は器台の脚部で、裾部外面に凹線文５条以上を施す。

石器（298）298は、ほぼ完形品の砥石である。

ⅲ）１区上層出土品（第56図、図版24）

弥生土器（299～324）299～305は甕で、299は口縁部が「く」の字状を呈し、口縁端部は「コ」字状となる。300は口縁部が直立し、口縁端部は面をもつ。301は頸部内面に明瞭な稜をもつ。302は胴部片、303・304は底部片である。304は平底で、底部外面にヘラミガキ調整を施す。305は上げ底の底部である。306～316は壺である。306・307は広口壺で、306は口縁部が外反し、口縁端部を上下方に拡張し、口縁端面に凹線文４条を施す。307は小型品で口縁部が外反し、口縁端部を上下方に拡張し、口縁端部に凹線文３条を施す。308は広口壺で、口縁部は下方に垂下し、口縁端面にヘラ描き斜線文を施す。309は複合口縁壺で、口縁拡張部外面に刻目を施す。311・312は鉢である。311は口縁部が外反し、口縁端部は先細りする。頸部内外面に不明瞭な稜をもつ。312は口縁部が直口し、口縁端部は丸い。頸部内外面に明瞭な稜をもつ。313は頸部に貼付凸帯文１条と刻目を施す。314・315は平底の底部である。314は底部内外面共にヘラミガキ調整を施す。316は口縁外面に凹線文５条以上と、口縁端面に２条を施す。317～320は高坏である。317は裾部外面に凹線文３条と裾端面に凹線文１条を施す。柱部下位に矢羽根透かし（未貫通）１ヶ所を看守する。318は坏部下位に稜をもつ。319は脚部片で、柱部内面にシボリ痕を看守する。320は裾部小片で、赤色顔料が付着する。321～323は支脚である。321は受部片で、322・323は中空となる。323は外面にタタキ調整を施す。324は器種不明品で、円形浮文上に押圧竹管文を施す。

ⅳ）２区上層出土品（第57図、図版24）

弥生土器（325～336）325～328は甕である。325は小型品で、口縁端部を上方に拡張し、口縁端面に凹線文１条を施す。326は口縁部が「く」の字状口縁を呈し、口縁端部は丸い。327は「く」の字状口縁を呈し、口縁端部は先細りする。328は胴部片である。329～334は壺である。329・330は広口壺の大型品である。329は口縁部が外反し、口縁端面に凹線文３条と頸部に刻目凸帯文１条を施す。330は口縁部が大きく外反し、口縁端部を上下方に拡張後、口縁端面に凹線文３条を施す。331は頸部に

刻目凸帯文１条を施す。332～334は平底の底部である。332は底部外面にヘラミガキ調整を施す。335・336は支脚である。335は角状に伸びる受部で、断面楕円形である。336は受部片である。

須恵器(337)337は高坏で、柱裾部に凹線状の凹み２条と、脚部に長方形状の透かし３ヶ所を施す。

ⅴ）３区上層出土品（第57図）

弥生土器（338～346）338・339は甕である。338は折曲口縁で、口縁端部に刻目と胴部上位にヘラ描き沈線文３条以上を施す。339は口縁部が外反し、口縁端部は「コ」の字状である。内面に籾圧痕が残る。340～343は壺である。341は広口壺で、口縁部は外反し、口縁端部は平坦である。340・342・343は底部で、342はわずかに上げ底、343は平底である。343は底部外面にヘラミガキ調整を施す。344・345は高坏の脚部である。344は柱部に沈線文８条以上を施し、脚部に矢羽根透かし１ヶ所を看取する。345は裾部に凹線文４条を施す。346は器台もしくは壺の口縁部片で、口縁端部を上下方に拡張し、口縁端面に凹線文３条以上を施す。

ⅵ）礫層出土品（第58図、図版24）

弥生土器(347～360)347～352は壺である。347～349は広口壺で、347は口縁端部を上下方に拡張し、口縁端面に凹線文３条を施す。348は口縁端面が平坦で、349は口縁端部が丸い。350・351は複合口縁壺で、350は沈線文５条と波状文５条を施す。351は頸部に貼付凸帯文１条と凸帯上に斜格子文を施す。352は頸部に貼付凸帯文１条と凸帯上に刻目を施す。353～355は甕である。353は胴部外面にタタキ調整を施す。354は上げ底、355は平底である。356・357は壺の底部平底となる。358は鉢の底部である。359は高坏で柱部にヘラ描き沈線文８条と刻目、柱部に矢羽根透かしを施す。吉備地方からの搬入品。360は支脚で、中空となる。

ⅶ）ベルト出土品（第58図）

弥生土器（361～367）361は広口壺で、口縁部を上下方に拡張し、口縁端面に凹線文３条を施す。362は複合口縁壺で、貝殻施文による刻目を看取する。363は無頸壺で、沈線文３条と刻目を施す。364は胴部上位に櫛描きによる波状文と沈線文を施す。365は大型鉢で、口縁部は外反する。366はわずかに突出する鉢の底部である。367は高坏で、口縁部外面に凹線文２条と竹管文を施す。

ⅷ）トレンチ出土品（第58図、図版24）

弥生土器（368～372）368・369は広口壺で、口縁部は外反する。368は口縁部内面に竹管文２列を施す。369は貼付凸帯文１条に布目押圧を施す。370は肩部片で外面に貝殻文を施す。371・372は高坏で、371は柱部内面にシボリ痕を残す。372は裾部に凹線文４条を施し、径0.7cm大の円孔を３ヶ所看取する。搬入品。形態は吉備地方のものに類似する。

時期：出土遺物や切り合いから、ＳＤ２は弥生時代末から古墳時代前期前半とする。

ＳＤ５（第21図）

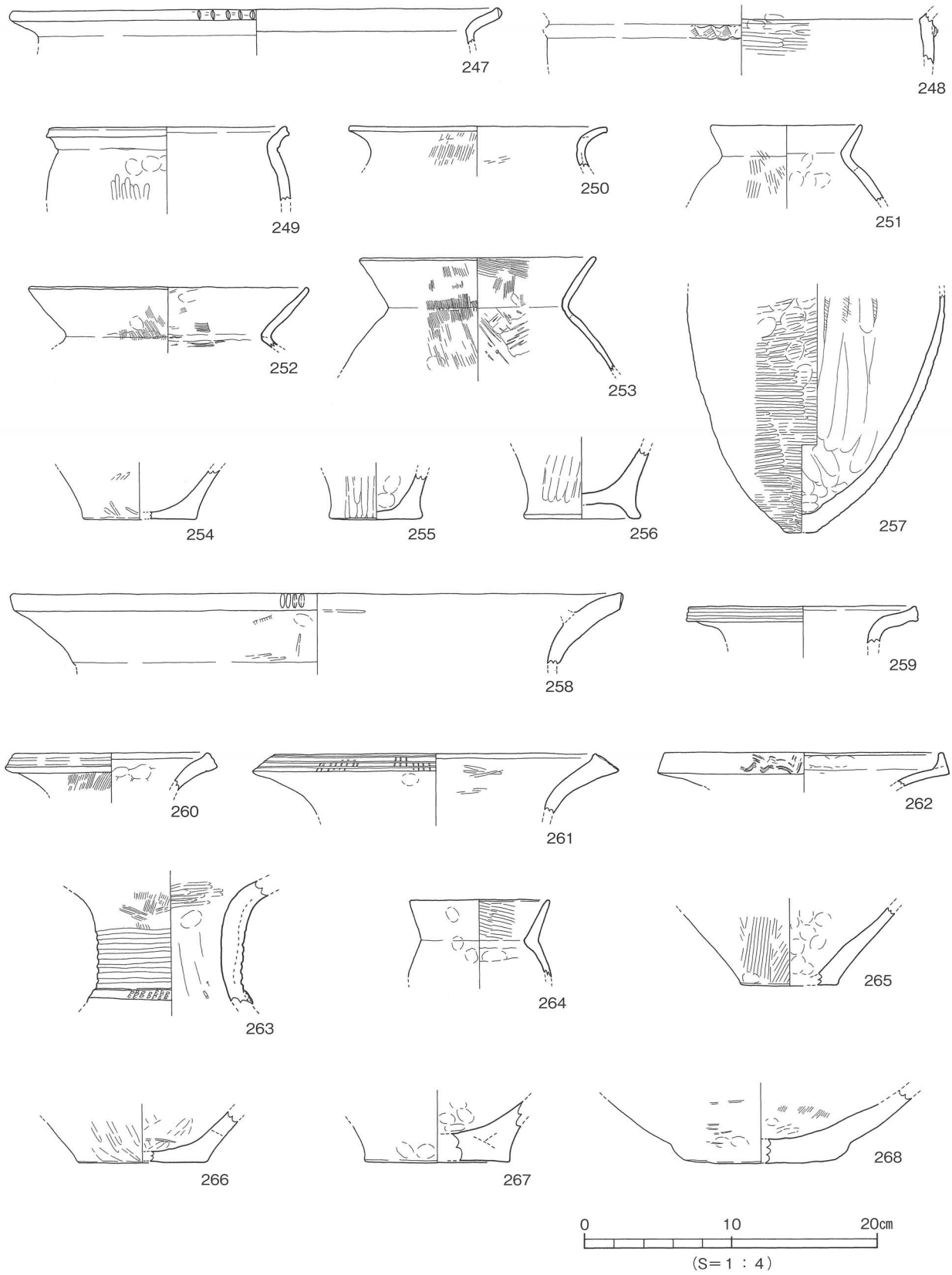
調査区北東部Ｃ・Ｄ９区に位置する、北東－南西方向の溝である。溝中央部をＳＫ２、溝の一部は柱穴に切られ、両端は消失する。溝の規模は検出長4.54m、幅1.52m、深さ30cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は暗褐色粘質シルトである。溝底は北東から南西へ傾斜する（比高差18cm）。遺物は埋土中より須恵器片、土師器片が少量出土した。

出土遺物（第59図）

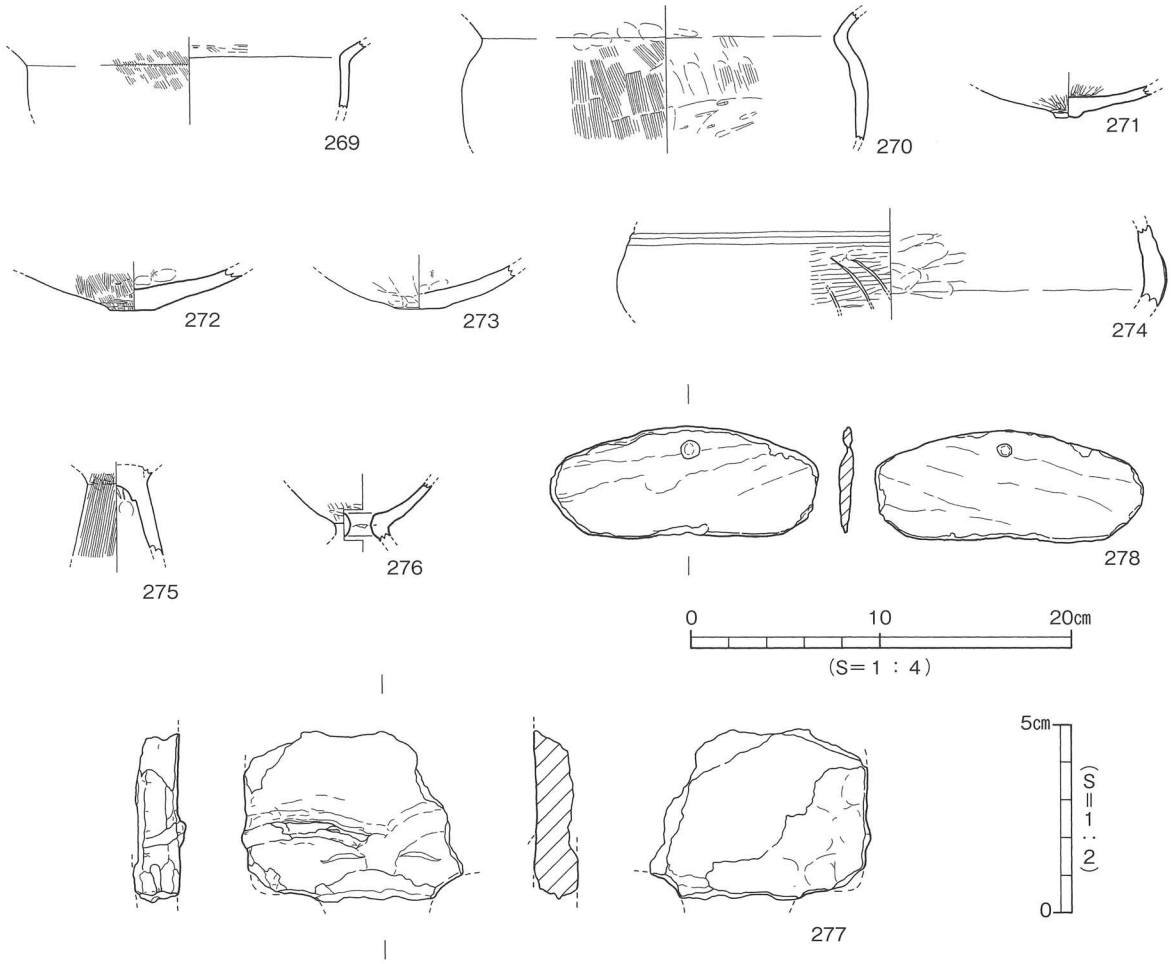
須恵器（373）373は坏蓋片で、口縁端部は内傾する。

土師器（374・375）374は甕の口縁部片で、口縁端部は内傾する面をもつ。375は高坏で、裾部内面に明瞭な稜をもつ。

時期：出土遺物の特徴や切り合いから、古墳時代中期後半とする。



第53図　ＳＤ２ １区下層出土遺物実測図(1)



第54図　ＳＤ２　１区下層出土遺物実測図(2)

（4）土　坑

ＳＫ９（第21・60図）

調査区中央部西側Ａ・Ｂ４区に位置し、土坑西側は調査区外に続く。平面形態は隅丸長方形を呈するものと考えられ、規模は東西検出長2.23m、南北長0.94m、深さ28cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は暗褐色粘質シルトである。遺物は埋土中より、土師器片、須恵器片が少量出土した。

出土遺物（第60図）

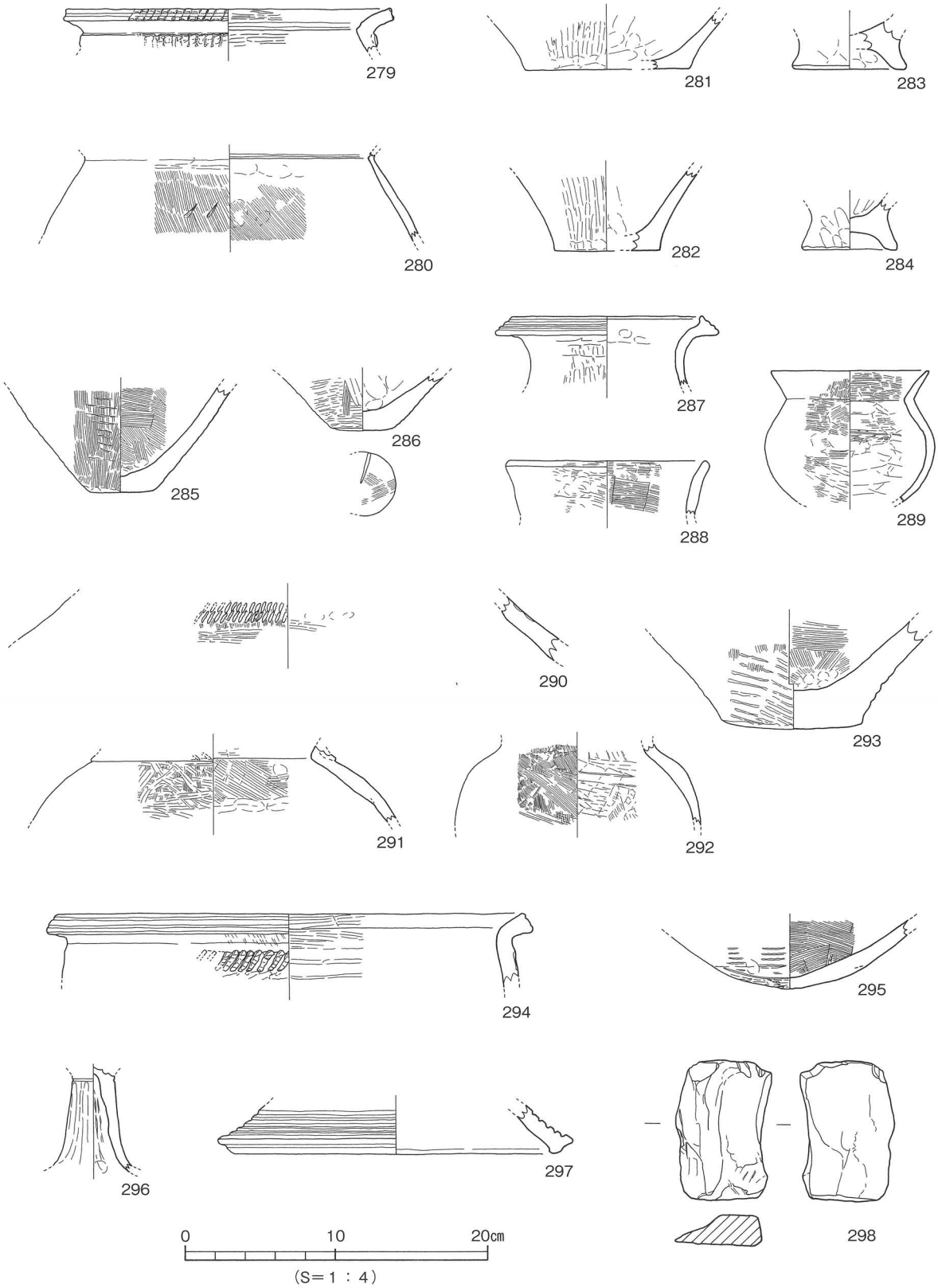
376は土師器椀で、口縁端部はわずかに内湾する。377は須恵器坏身で底部は丸く、たちあがり端部は内傾する凹面をなす。

時期：出土遺物の特徴から、古墳時代中期後半とする。

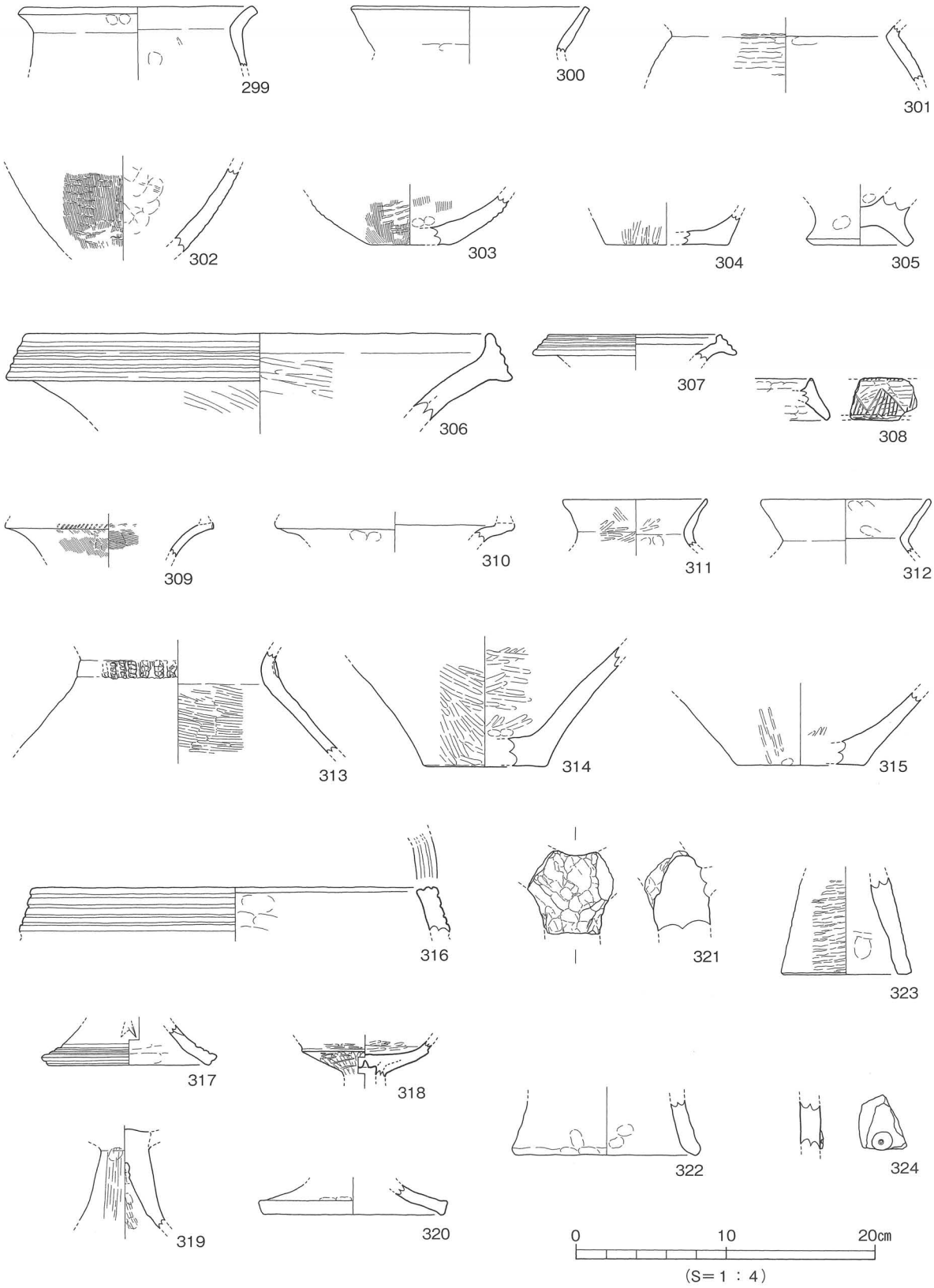
ＳＫ２（第21・61図）

調査区北東部Ｃ・Ｄ９区に位置し、ＳＤ５を切る。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径1.05m、短径0.74m、深さ８cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は褐色粘質シルトである。土坑内から遺物の出土はない。

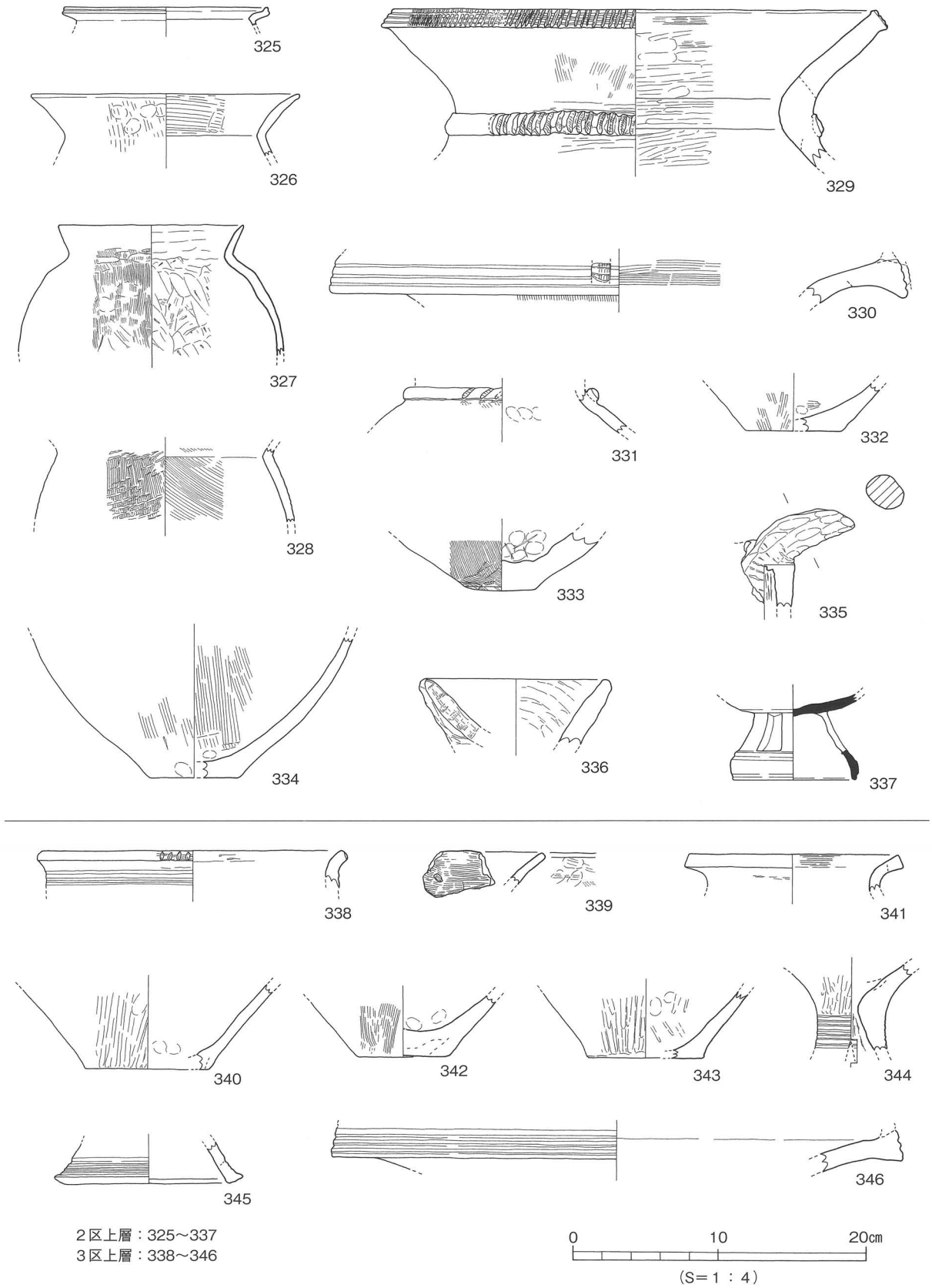
時期：出土遺物がなく時期特定はしかねるが、ＳＤ５との切り合いから、概ね古墳時代中期後半以降とする。



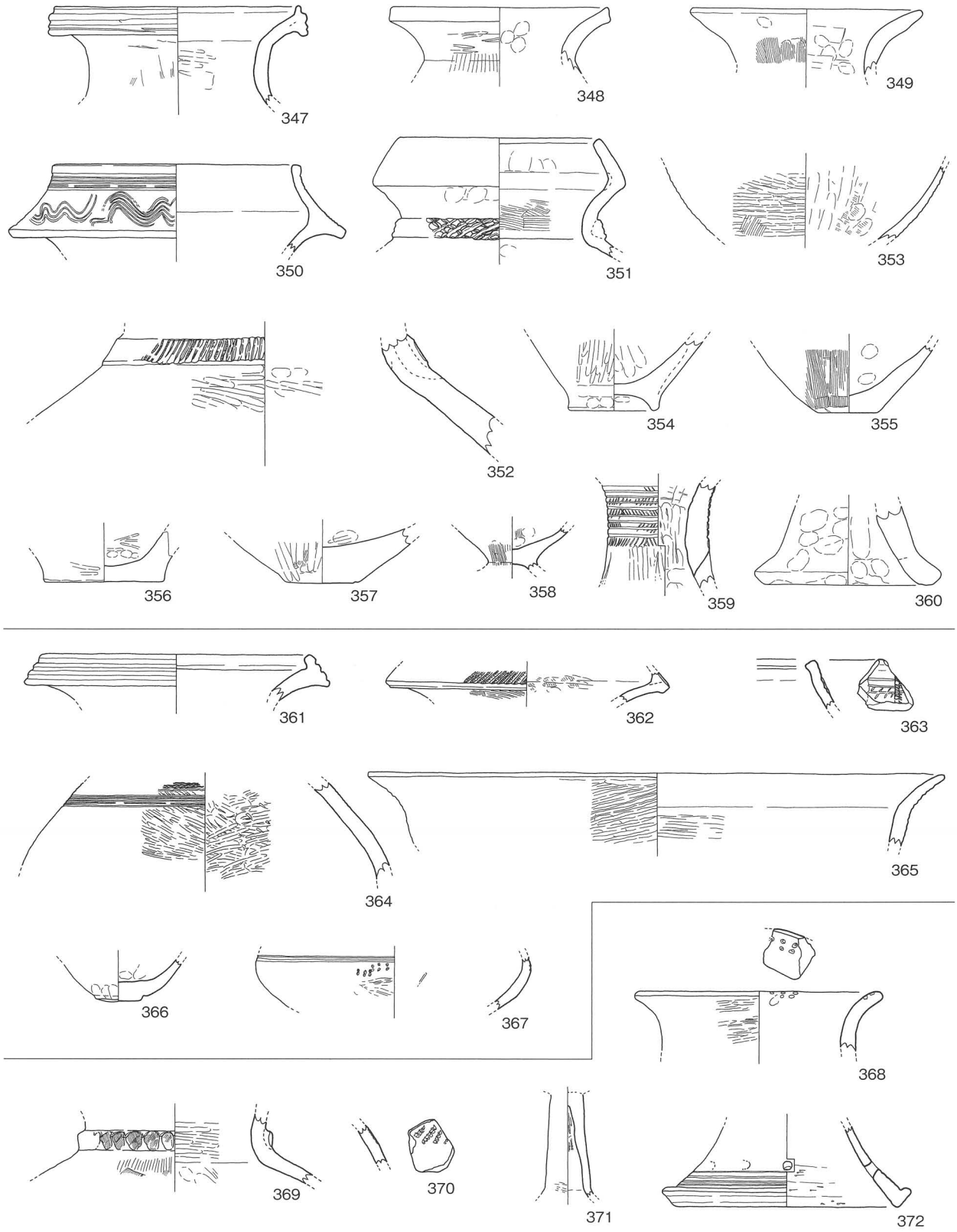
第55図　ＳＤ２ ２区下層出土遺物実測図



第56図　ＳＤ２ １区上層出土遺物実測図



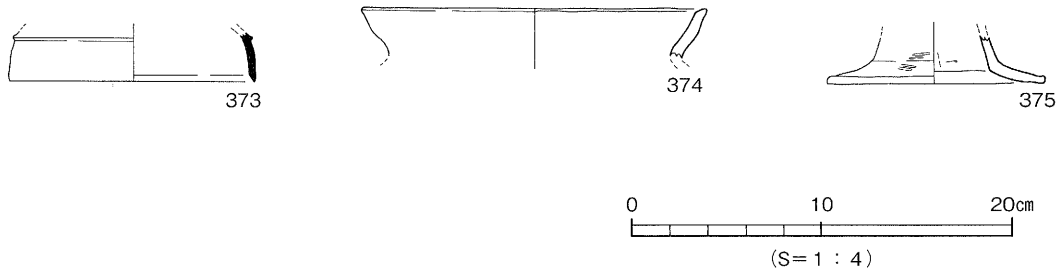
第57図　ＳＤ２　２区上層・３区上層出土遺物実測図



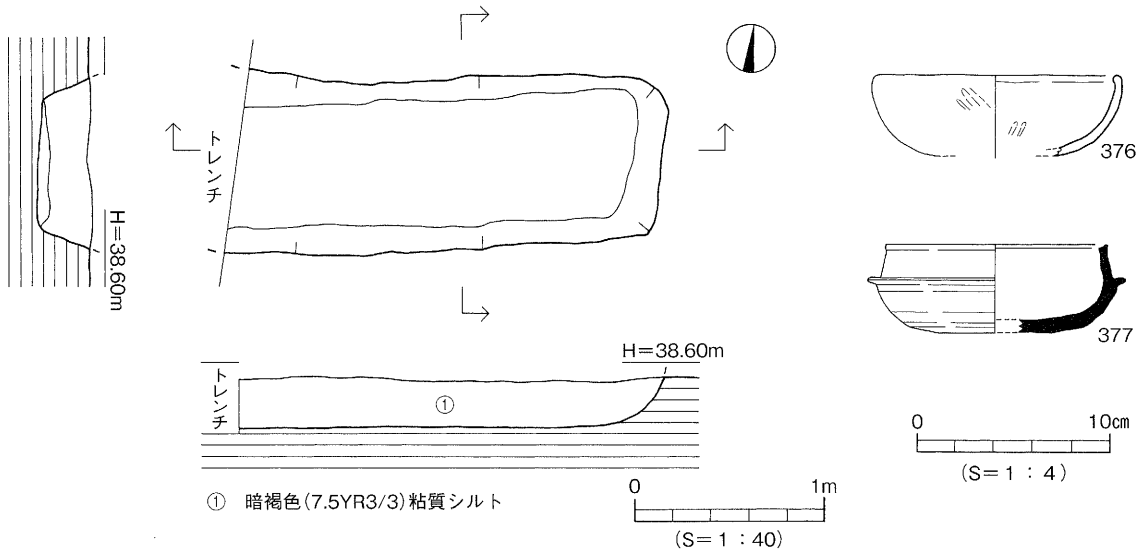
礫　　層：347～360
ベ ル ト：361～367
トレンチ：368～372

0　10　20cm
（S＝1：4）

第58図　ＳＤ２ 礫層・ベルト・トレンチ出土遺物実測図



第59図　ＳＤ５出土遺物実測図



第60図　ＳＫ９測量図・出土遺物実測図

ＳＫ８（第21・61図）

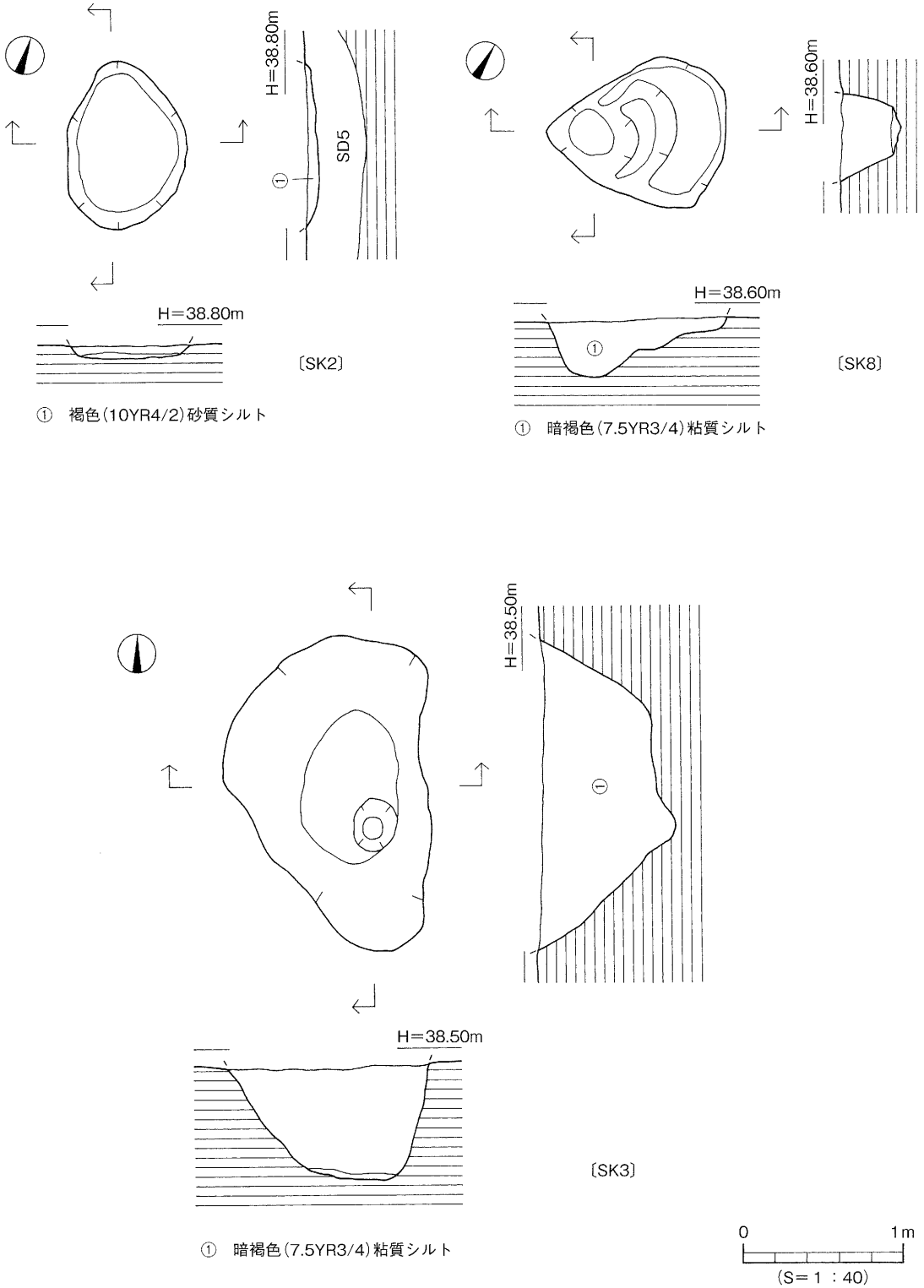
調査区北部Ｂ・Ｃ９区に位置する。平面形態は不整形を呈し、規模は東西長1.11m、南北長0.95m、深さ34cmを測る。断面形態は船底状を呈し、埋土は暗褐色粘質シルトである。土坑内から遺物の出土はない。

時期：埋土がＳＫ９と酷似することから、概ね古墳時代中期後半頃の遺構とする。

ＳＫ３（第21・61図）

調査区北西部Ｂ８・９区に位置する。平面形態は不整形を呈し、規模は東西長1.24m、南北長1.95m、深さ72cmを測る。断面形態は逆台形状を呈し、埋土は暗褐色粘質シルトである。土坑内から遺物の出土はない。

時期：埋土がＳＫ９と酷似することから、概ね古墳時代中期後半頃の遺構とする。



第61図　ＳＫ２・３・８測量図

5．その他の遺構と遺物

（1）時期判断が困難な遺構

ＳＤ６（第21図）

調査区北西部Ａ８～Ｂ９区に位置し、溝東側は柱穴に切られ、両端は消失する。溝の規模は検出長7.50m、検出幅1.80m、深さ10cmを測る。断面形態は皿状を呈し、埋土は極暗褐色粘質シルトである。溝底は南から北へ緩傾斜する（比高差４cm）。溝内から遺物の出土はない。

（2）柱　穴

調査で検出された柱穴は276基である。埋土の違いにより、少なくとも３分類（Ａ・Ｂ・Ｃ類）される。柱穴の平面形は円形もしくは楕円形を呈し、柱穴径は最小20cm、最大80cmを測る。Ａ類は調査区全域に分布がみられ、Ｂ類及びＣ類は散在する。

Ａ類　埋土が黒褐色粘質シルトであるもの ……245基

Ｂ類　埋土が灰褐色粘質シルトであるもの……25基

Ｃ類　埋土が黒色土であるもの……６基

なお、図化しうる遺物が出土した柱穴は、以下のとおりである。

Ａ類：ＳＰ266・199・333・161・83・57・67・276・186・30・120・144・84・25・52・145

Ｂ類：ＳＰ149

Ｃ類：ＳＰ96

遺物は掘り方埋土中から出土したもので、大半が小片であるが、ここでは実測可能な遺物を掲載する。

出土遺物（第62図、図版24）

土師器（378～384・398）378は甕で口縁部は外反し、頸部内面に不明瞭な稜をもつ。379は鉢で、口縁部は短く直立する。380～384は椀である。380～382は口縁部が内湾し立ち上がる。380は底部に葉脈痕を看取する。384は口縁端部が内傾する面をもつ。398は製塩土器で、２次焼成痕を看取する。

須恵器（385～393）385は坏蓋で、稜は明瞭である。386は坏身で、底部は丸く、たちあがり端部は内傾する凹面をなす。387～390は高坏である。387は脚端部を下方に屈曲し、柱部中位に円孔を３ヶ所穿つ。388はたちあがり端部が内傾する凹面をなす。柱部中位に円孔を穿つ。389は長方形状の透かしを２ヶ所看取する。390は低脚で、円孔を２ヶ所施す。391は椀で、胴部中位に凸線１条、下位に波状文を施す。392は広口壺で、口縁端部は三角形状に肥厚する。393は器台の坏部で、凸線４条と凸線間に波状文を施す。

弥生土器(394～397)394は甕で、貼付凸帯文１条と凸帯上に指頭押圧を施す。395は甕の大型品で、ヘラ描き沈線文１条を施す。396は甕の底部でわずかに上げ底を呈し、２次焼成痕を看取する。397は直口口縁の鉢である。

石器（399）399は緑色片岩製の石庖丁である。

鉄器（400・401）400は鉄鏃で、長さ4.2cm、幅2.0cm、厚さ0.3cm、重さ4.2ｇを測る。401は鉄滓で、重さ29.2ｇを測る。

（3）包含層出土遺物

第Ⅵ層出土遺物（第63図、図版25）

土師器（402～405・427）402は甕の口縁部で、口縁端部は内傾する面をもつ。403～405は甑である。405は把手で、断面楕円形を呈する。427は厚みのある壺の底部であり、内外面共に赤色顔料が付着する。

須恵器（406～415）406は鉢で、口縁部は外反する。407～409は坏蓋である。天井部が扁平で、口縁端部は内傾する凹面をなす。稜は明瞭である。410は坏身で、たちあがりは短く内傾する。底部外面にヘラ切り痕が残る。411は有蓋高坏の蓋で、つまみ中央部は凹み、口縁端部は内傾する。412・413は高坏である。412は無蓋高坏で、胴部中位に凸線１条と下位に波状文を施す。413は低脚の脚部で、脚部中位に円孔を施す。414は甑で、円孔１ヶ所を看取する。415は器台で、凸線２条と波状文を施す。

弥生土器（416～426）416は甕で、口縁部は内湾し、口縁端部をわずかに肥厚する。417～424は壺である。417・420・421は広口壺で、417は口縁端部を上下方に拡張し、口縁端面に凹線文３条を施す。420・421は口縁端面に波状文を施す。418・419は複合口縁壺で、418は頸部に貼付凸帯文と凸帯上に斜格子目文を施す。419は波状文と斜格子目文を施す。422は大型壺で、口縁部内面に貼付凸帯文を施す。423はヘラ描き沈線文と貝殻文を施す。424は短頸壺で、口縁部は短く外反する。425は高坏の脚部で、内外面にヘラミガキ調整を施す。426は甕の底部で平底となる。

第Ⅳ層出土遺物（第64図）

土師器（428・429）428は羽釜で、断面形態が長方形状を呈する鍔が付く。429は坏で、底部の切り離しは回転ヘラ切り技法による。

須恵器（430～432）430は坏で、底部の切り離しは回転ヘラ切り技法による。431は坏の底部である。432は横瓶で、外面に格子叩きを施す。

（4）地点不明出土遺物（第64・65図・図版25）

弥生土器（433～436）433は甕の胴部で、胴部上位にヘラ描き沈線文４条を施す。434・435は壺である。434は口縁部を下方に垂下し、口縁端面に波状文５条を施す。435は大型壺で、胴部上位にヘラ描き沈線文１条を施す。436は支脚で、タタキ痕が顕著である。

土師器（437～439）437は坏で、底部切り離しは回転ヘラ切り技法による。438は椀で、口縁部は内湾して立ち上がる。439は土釜で、口縁部下に断面形態が三角形状を呈する鍔が付く。

陶磁器（440）440は碗で、断面三角形状の高台が付く。

須恵器（441～445）441は坏蓋で天井部は丸味を帯び、口縁端部は丸い。442・443は坏身である。442は底部が丸く、たちあがり端部は内傾する凹面をもつ。443はたちあがりが短く内傾する。444は器台で、櫛描き波状文10～12条を施す。非陶色系。445は広口壺で、口縁端部を三角形状に肥厚し、口縁端部下に凸線１条と波状文７条を施す。

石器（446～448）446は滑石製の紡錘車である。447は緑色片岩製の石斧である。完形品。448はサヌカイト製の打製石鏃である。

鉄器（449～451）449は鉄鏃で残存１／２である。450・451は鉄滓で、重さ44.6～48.0ｇを測る。

6．小　結

今回の調査では、弥生時代から古墳時代までの遺構と弥生時代から中世までの遺物を確認することができた。

（1）弥生時代

前期：前期前半では方形土坑ＳＫ１、前期後半では楕円形土坑ＳＫ４をそれぞれ検出した。これまで前期の遺構は検出例が少ないものの、これら土坑の検出は調査地周辺において前期集落が存在する可能性を示す資料となる。

中期：遺構は未検出であるが、古墳時代前期前半のＳＤ２、古墳時代中期後半ＳＢ６・８・11や古墳時代後期前半のＳＢ９、掘立１から弥生時代中期後半の遺物が出土している。

後期：後期後半では円形住居ＳＢ４と隅丸方形住居ＳＢ２を検出した。松山平野において、該期の竪穴住居は平面形態が方形と円形とがあることから、これまでの調査結果を追認する結果となった。

（2）古墳時代

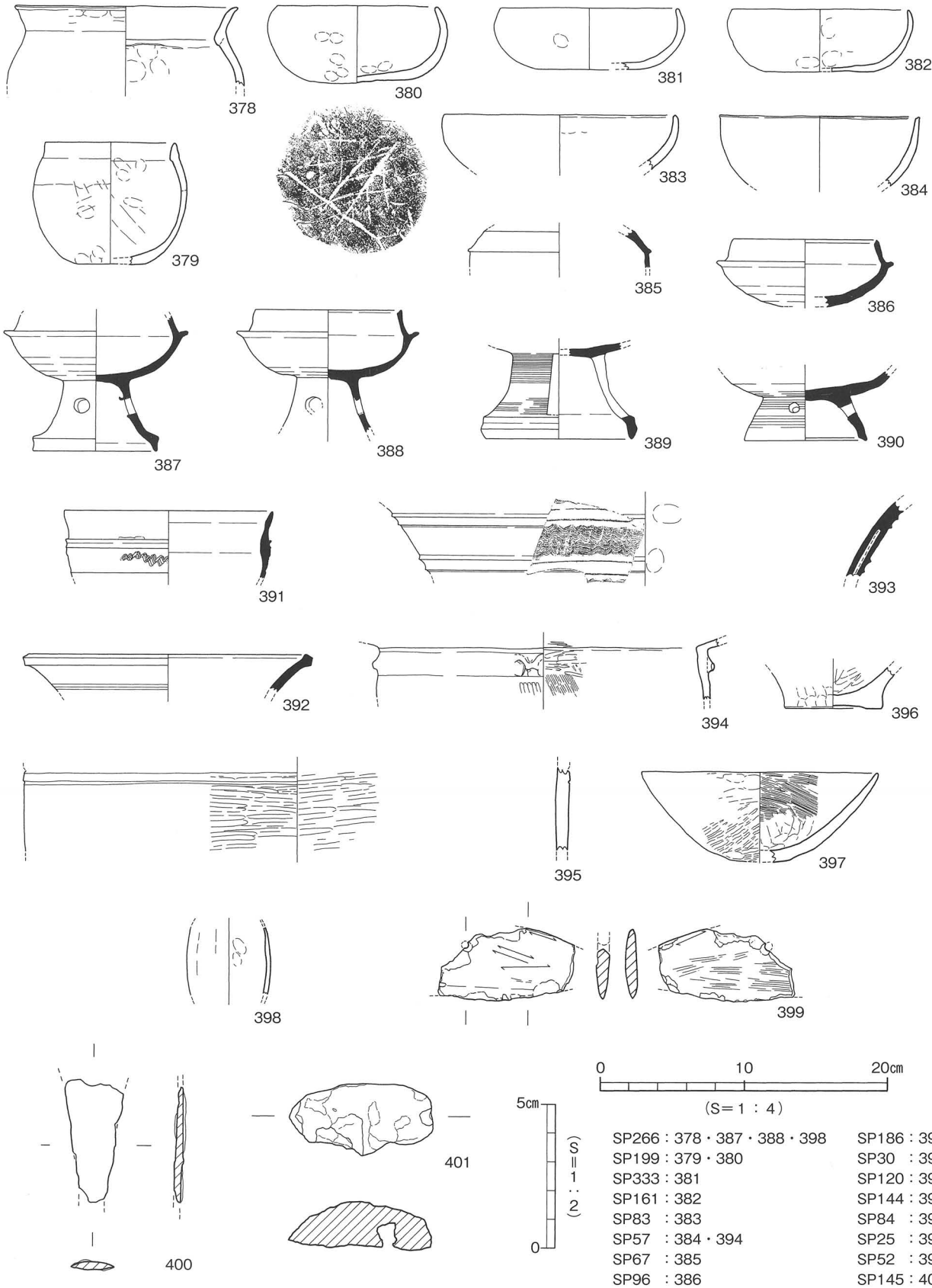
前期：前期では大型建物を検出した。これまでの調査において、大型建物２棟が検出されている。樽味四反地遺跡６次調査において平成10年度には１号大型建物、同８次調査において平成15年度には２号大型建物がそれぞれ検出され、今回検出した大型建物（３号大型建物と呼称）は樽味地区において３例目となる。３号大型建物は６間×５間以上を測る総柱構造を呈し、床面積100㎡前後を測る。建物を構成する各柱穴は側柱が長軸60～140cm、短軸50～100cm、深さ64cmを測る隅丸長方形及び楕円形を呈し、一方、束柱は長径45～70cm、短径40～70cm、深さ20～60cmを測る円形及び楕円形を呈している。柱穴内からは弥生時代中期後半から古墳時代前期の遺物が出土している。このほか、溝ＳＤ２を検出した。これは調査地に隣接する樽味四反地遺跡６次調査（平成10年度）で検出した溝ＳＤ００１の延長部である。長さ14.5m、幅0.80～1.50m、深さ20～38cmを測る北東－南西方向の溝で出土遺物より、大型建物と併存していた可能性が非常に高い遺構である。溝内からは弥生時代中期後半から古墳時代前期の土器が混在して出土した。樽味地区では竪穴住居廃絶時に埋め戻し行為をおこなっている事例が多数確認されている。今回の溝ＳＤ２も土層の堆積や遺物出土状況などから、人為的に埋め戻しがおこなわれたものと考えられる。

中期：７棟の竪穴住居を検出した。中期前半ではＳＢ10、中期後半ではＳＢ１・３・５・６・８・11を検出した。平面形態は方形～隅丸方形を呈し、規模は３～４ｍを測るものが中心となる。またＳＢ10・11内からは臼玉が出土した。これまでの調査でも住居内からガラス小玉や臼玉が出土する例が多数あり、住居廃絶時の祭祀行為と考えられている。

後期：後期前半ではＳＢ７・９の２棟を検出した。このうち、ＳＢ９は一辺が８ｍを超える大型住居である。ＳＢ９からは、土師器、須恵器の他に、滑石製の有孔円板や臼玉が出土している。

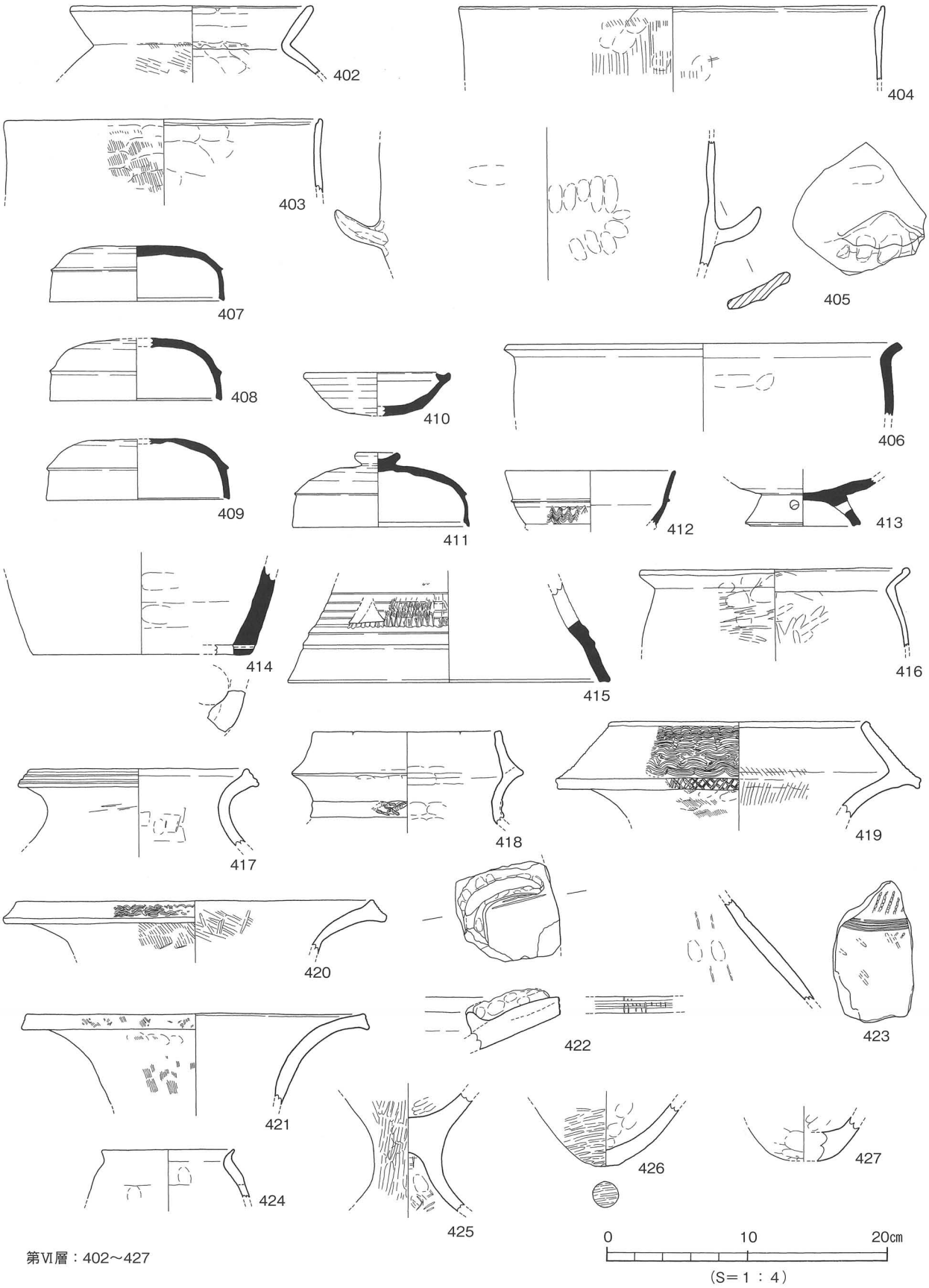
（3）古代～中世

古代や中世の遺構は未検出であるが、第Ⅳ層中から飛鳥時代から室町時代までの遺物が出土した。古代では７世紀中頃の須恵器坏（410）や平安時代の土師器坏（429・439）が出土した。中世では13世紀の土師器の羽釜（428）や土釜（439）のほか、陶磁器（440）が出土した。そのほか地点不明ではあるが須恵器の器台（444）と滑石製の紡錘車（446）が出土した。



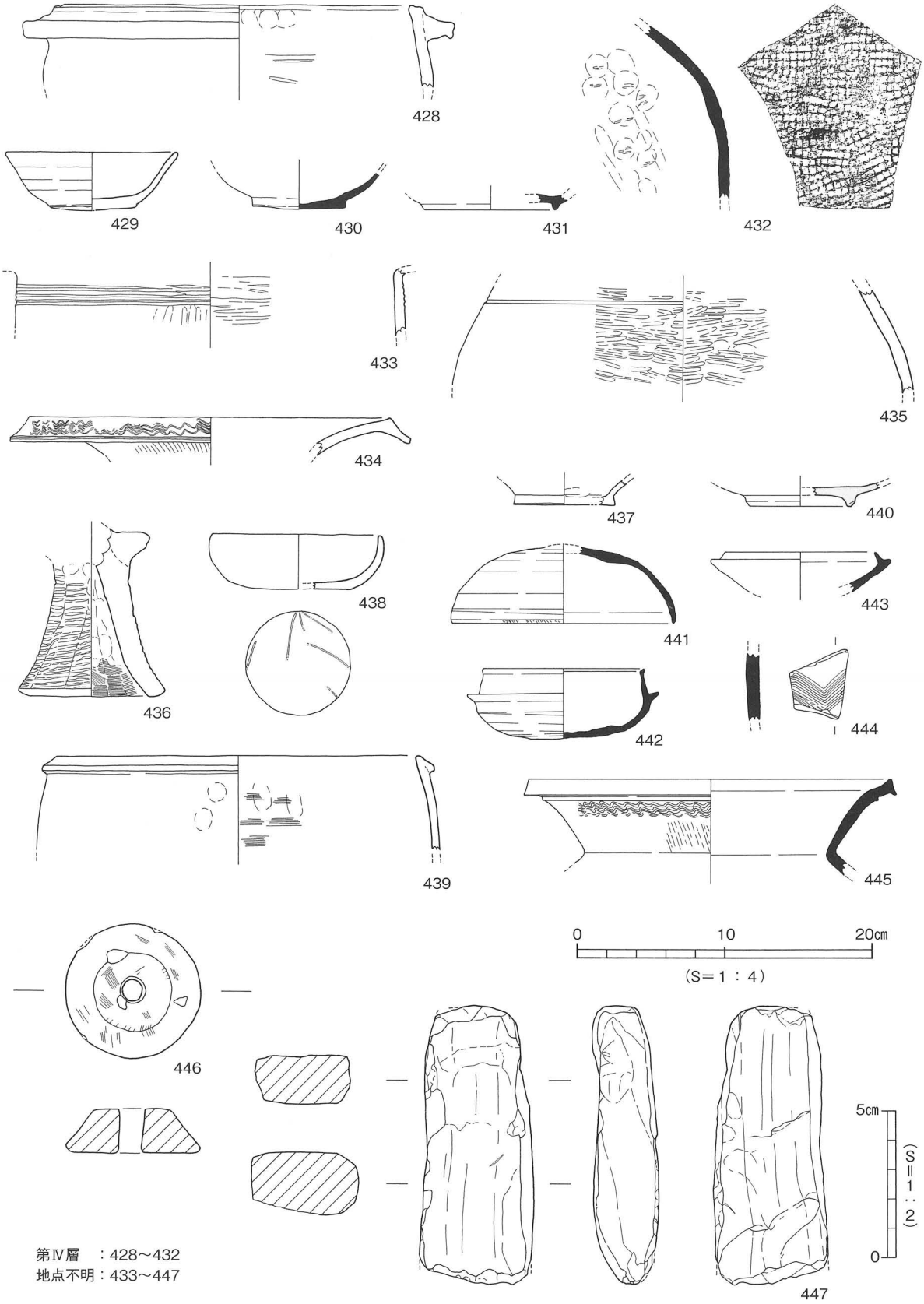
SP266：378・387・388・398
SP199：379・380
SP333：381
SP161：382
SP83　：383
SP57　：384・394
SP67　：385
SP96　：386
SP276：389
SP186：390
SP30　：391・397
SP120：392
SP144：393
SP84　：395
SP25　：396
SP52　：399
SP145：400
SP149：401

第62図　柱穴出土遺物実測図

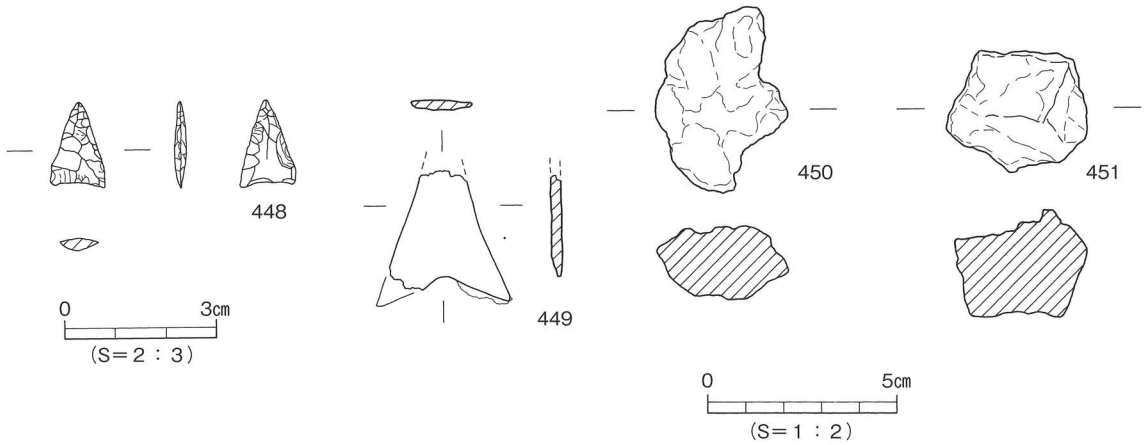


第Ⅵ層：402～427

第63図　包含層出土遺物実測図(1)



第64図　包含層(2)・地点不明(1)出土遺物実測図



第65図　地点不明出土遺物実測図(2)

遺構・遺物一覧　－凡例－

（1）以下の表は、本調査地検出の遺構・遺物の計測値及び観察一覧である。

（2）遺物観察表の各記載について。

法量欄　　（　）：復元推定値

調整欄　　土器の各部位名称を略記した。

例）口→口縁部、口端→口縁端部、天→天井部、頸→頸部、胴→胴部、体→体部、脚→脚部、底→底部。

胎土・焼成欄　胎土欄では混和剤を略記した。

例）石→石英、長→長石、金→金ウンモ、銀→銀ウンモ、密→精製土、角→角閃石。

（　）の中の数値は混和剤粒子の大きさを示す。

例）石・長（1～4）→「1～4㎜大の石英・長石を含む」である。

焼成欄の略記について。◎→良好、○→良、△→不良。

表18　竪穴住居一覧

竪穴(SB)	時期	平面形	規模(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	埋土	床面積(㎡)	主柱穴(本)	内部施設 高床	土坑	炉	カマド	周壁溝	備考
1	古墳時代中期後半	隅丸方形	(3.74+α)×(2.74+α)×0.18	黒褐色粘質シルト	(10.25)	—	—	○	—	—	—	SD1を切る。
2	弥生時代後期後半	隅丸方形	5.10×4.75×0.20	黒褐色粘質シルト	24.23	—	—	—	○	—	—	3号大型建物に切られる。
3	古墳時代中期後半	隅丸方形	3.67×(3.30+α)×0.14	黒褐色粘質シルト	(12.11)	—	—	—	—	—	—	3号大型建物に切られる。
4	弥生時代後期後半	円形	5.70×(3.10+α)×0.10	暗褐色粘質シルト	(14.13)	—	—	—	—	—	—	3号大型建物に切られる。
5	古墳時代中期後半	隅丸方形	3.55×3.35×0.08	暗褐色粘質シルト	11.90	4	—	—	—	—	—	SP68·73·74·271·277に切られる。
6	古墳時代中期後半	方形	4.50×(3.00+α)×0.30	暗褐色粘質シルト	(13.50)	—	—	—	—	—	南壁東壁	間仕切り溝
7	古墳時代後期前半	隅丸方形	3.80×(2.80+α)×0.10	極暗褐色粘質シルト	(8.00)	—	—	—	—	—	北·西南壁	SP113·114·115·135·140·300·311·376·378に切られる。
8	古墳時代中期後半	隅丸方形	2.80×2.40×0.35	黒色粘質シルト、等	6.72	—	○	—	—	—	—	掘立1に切られる。
9	古墳時代後期前半以前	方形	8.20×7.80×0.24	黒褐色粘質シルトに、にぶい黄褐色粘質シルトがブロック状に少量混入	(64.00)	—	—	—	—	○	—	構築時
9	古墳時代後期前半	方形	8.60×6.60×0.20	黒褐色粘質シルト	56.70	4	—	○	—	○	北西壁北東壁	改築時
10	古墳時代中期前半	隅丸方形	3.90×3.70×0.08	黒褐色粘質シルト	14.43	—	—	—	—	○	—	SB2を切る。
11	古墳時代中期後半	方形	(8.00+α)×(6.40+α)+0.20	暗褐色粘質シルトに、にぶい黄褐色粘質シルトが混入	(25.60)	—	—	—	—	—	—	SB9·SD2を切る。

表19　掘立柱建物一覧

掘立	規模(間)	方向	桁行 実長(m)	桁行 柱間寸法(m)	梁行 実長(m)	梁行 柱間寸法(m)	方位	床面積(㎡)	時期	備考
1	2×4	南北	3.70	1.90·1.80	6.40	1.60·1.60·1.55·1.65	N−19°−W	23.68	古墳時代中期後半以降	SB8を切る。SP160に切られる。

表20　溝一覧

溝(SD)	地区	断面形	規模(m) 長さ×幅×深さ	方向	埋土	出土遺物	時期	備考
1	B3～C1	皿状	13.30×1.48×0.25	北西−南東	暗褐色粘質シルト	弥生土器	弥生時代後期後半	3号大型建物に切られる。
2	A5～D7	レンズ状	14.50×0.80～1.50×0.38	北東−南西	黒褐色粘質土、等	弥生土器 分銅形土製品	古墳時代前期前半	SB9·11に切られる。
3	A·B1	皿状	3.86×0.64×0.09	北西−南東	暗褐色粘質シルト	弥生土器	弥生時代後期後半	3号大型建物に切られる。
4	A·B1	レンズ状	2.92×0.56×0.13	北東−南西	暗褐色粘質シルト	弥生土器 鉄器	弥生時代後期後半	3号大型建物に切られる。
5	C·D9	皿状	4.54×1.52×0.30	北東−南西	暗褐色粘質シルト	須恵器 土師器	古墳時代中期後半	SK2、SP364·365·366·367·368·369に切られる。
6	A8～B9	皿状	7.50×1.80×0.10	—	極暗褐色粘質シルト	—	不明	SP255·314·315·331·370·371に切られる。
7	B5～C4	皿状	2.75×0.86×0.10	北西−南東	暗褐色粘質シルト	弥生土器	弥生時代後期後半	掘立1に切られる。

表21　土坑一覧

土坑(SK)	地区	平面形	断面形	規模(m) 長さ(長径)×幅(短径)×深さ	床面積(㎡)	埋土	出土遺物	時期	備考
1	D8·9	隅丸長方形	逆台形	(2.10+α)×1.68×0.28	3.43	黒褐色粘質シルトに、にぶい黄褐色粘質シルトが混入	弥生土器	弥生時代前期前半	SP21·216を切る。
2	C·D9	楕円形	皿状	1.05×0.74×0.08	0.60	褐色粘質シルト	—	古墳時代中期後半以降	SD5を切る。
3	B8·9	不整形	逆台形	1.95×1.24×0.72	1.56	暗褐色粘質シルト	—	古墳時代中期後半	
4	B6·7	楕円形	逆台形	1.15×0.90×0.48	0.96	黒色粘質土	弥生土器	弥生時代前期後半	
5	欠番								
6	C7	不整形	船底状	2.21×0.79×0.40	0.96	黒褐色粘質シルト	弥生土器	弥生時代後期後半以前	SD2底面で検出。
7	A1	不整楕円形	レンズ状	(1.56+α)×0.92×0.37	1.28	暗褐色粘質土	—	弥生時代後期後半	3号大型建物に切られる。
8	B·C9	不整形	船底状	1.11×0.95×0.34	0.63	暗褐色粘質シルト	—	古墳時代中期後半	
9	A·B4	隅丸長方形	逆台形	(2.23+α)×0.94×0.28	1.98	暗褐色粘質シルト	土師器·須恵器	古墳時代中期後半	SP85を切る。

表22　ＳＢ２出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
1	甕	口径 (19.5) 残高 12.0	「く」の字状口縁。口縁端部は「コ」の字状。	(口端)ヨコナデ ハケ(7～10本/cm)	(口)ハケ (胴)ハケ(工具痕)	暗褐色 黒褐色	石・長(1～2)金 ◎	黒斑	18
2	甕	口径 (13.0) 残高 10.4	「く」の字状口縁。口縁端部は「コ」の字状。	(胴)ハケ(9～10本/cm)→ナデ	(胴)ハケ→ナデ ナデアゲ→ナデ	淡黄褐色 淡黄褐色	石・長(1～3)金 ◎	煤付着	
3	甕	口径 (17.2) 残高 3.5	「く」の字状口縁。口縁端部は「コ」の字状。	ハケ(9～10本/cm)	ハケ(7本/cm)	暗茶褐色 茶褐色	石・長(1～5) ◎		
4	甕	底径 4.6 残高 7.5	上げ底。	ハケ(12本/cm) (底)ナデ	ハケ(12本/cm) →ミガキ	黄茶褐色 黒色	石・長(1～2)金 ◎	黒斑	18
5	壺	口径 (12.6) 残高 4.0	複合口縁壺。波状文４～６条＋竹管文(φ0.4cm)１列。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡茶色 淡茶色	石・長(1～2)金 ◎		18
6	壺	残高 5.5	長頸壺。細沈線文３段(９条以上、15条、４条以上)。	ミガキ	ハケ(6本/cm) ナデ	淡黄茶色 淡黄茶色	石・長(1) ◎		
7	壺	残高 7.7	肩部小片。貼付凸帯文１条＋刻目。	ヨコナデ ナデかミガキ	ナデ・ヨコナデ	明茶色 明茶色	石・長(1～3)金 ◎	黒斑	
8	壺	残高 1.9	肩部小片。貝殻施文による列点文(３ヶ１組)。	ナデ	ナデ	茶色 明茶色	石・長(1～2) ◎	黒斑	
9	壺	残高 2.6	肩部小片。貝殻施文。	板ナデ？	ナデ	茶色 茶色	石・長(1～3) ◎		
10	壺	残高 5.3	肩部小片。ヘラ描き沈線文(３条以上、３～４条、４条)。	ナデ	ナデ	暗褐色 暗褐色	石・長(1～2)金 ◎		
11	壺	残高 3.2	肩部小片。ヘラ描き沈線文４条以上を施す。	ミガキ	ナデ	明茶色 明茶色	石・長(1～4)金 ◎		
12	鉢	口径 (15.2) 残高 10.6	外反口縁。口縁端部はやや肥厚する。	(口)ナデ (胴)板ナデ？	(口)ミガキ (胴)ナデアゲ	淡茶褐色 茶褐色	石・長(1～4)金 ◎	黒斑	18
13	鉢	口径 (23.5) 残高 8.1	直口口縁。	(口)ヨコナデ (胴)ミガキ(マメツ)	(口)ヨコナデ (胴)ミガキ(マメツ)	茶褐色 茶褐色	石・長(1～2)金 ◎	煤付着	
14	高坏	底径 (12.0) 残高 4.5	脚部片。脚裾部に凹線文4条(外面3条、端部1条)、柱部に矢羽根透かし(未貫通)1ヶ所。	(脚)ミガキ(マメツ) (底)ヨコナデ	ナデ・シボリ痕 (底)ヨコナデ	茶色 茶色	石・長(1～3)金 ◎		
15	支脚	残高 4.4	受部。断面円形。	ナデ	—	灰黄褐色	石・長(1～2)金 ◎		
16	高坏	口径 (16.2) 残高 4.6	坏部片。口縁部はわずかに外反する。	ヨコナデ (マメツ)	マメツ(ナデ)	淡褐色 明茶褐色	石(1～4)金 ◎		
17	甕	口径 (29.3) 残高 2.9	口縁部下位に凸線１条を施す。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 暗緑色	密 ◎	自然釉	
18	製塩土器	口径 (4.2) 残高 5.0	器壁うすい。	タタキ (一部ハケ？)	ナデ	淡明茶色 淡明茶色	密・金 ◎		

表23　ＳＢ２出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
19	打製石鏃	ほぼ完存	サヌカイト	2.7	1.8	0.4	1.6	凹基無茎式	18

表24　ＳＢ４出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
20	甕	口径 (21.2) 残高 1.5	口縁端部に刻目。	ヨコナデ	ナデ	淡茶色 明茶色	石(1～3) ◎		
21	甕	口径 (19.4) 残高 2.1	口縁端部を上下方に拡張し、端面に凹線文１条を施す。	ヨコナデ ハケ	ヨコナデ	明茶色 明茶色	石・長(1～2) ◎		
22	甕	残高 2.9	胴部小片。	タタキ	ナデ	乳茶色 乳茶色	石・長(1) ◎		
23	壺	残高 3.6	頸部片。貼付凸帯文１条＋ヘラ描き斜線文。	ナデ(マメツ)	ヨコナデ ハケ(5本/cm)	明橙色 暗灰色	石・長(1～4)金 ◎	黒斑	
24	鉢	口径 (13.6) 残高 4.4	外反口縁。口縁端部は丸い。	ハケ(9本/cm)	ハケ(7～9本/cm) →ナデ	淡黄褐色 淡黄褐色	石(1～2)金 ◎		
25	高坏	口径 (17.7) 残高 1.8	口縁部外面に凹線文３条＋刺突文(２ヶ１組、３ヶ１組)。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡茶褐色 茶色	石(1～3) ◎		
26	甕	底径 (6.6) 残高 2.6	上げ底。	マメツ(ナデ)	マメツ	茶色 茶色	石・長(1～3) ◎		
27	甑	底径 (8.7) 残高 7.2	楕円形の孔(2.0×3.0cm)３ヶ所看取。	マメツ	ハケ(マメツ)	黄茶色 黄茶色	密 ◎	黒斑	

表25　ＳＤ４出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
28	甕	残高 10.4	上げ底。	ミガキ (マメツ)	マメツ (底)ナデ	乳褐色 淡黄褐色	石・長(1～4)金 ◎	黒斑	18

表26　ＳＤ４出土遺物観察表　金属製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
29	鎖？	完存	鉄	2.4	3.3	0.7	6.8		18

表27　ＳＤ１出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
30	甕	口径 (25.4) 残高 2.8	口縁端部をわずかに拡張し、端面に凹線文2条を施す。貼付凸帯文1条+刻目。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡褐色 淡茶色	石・長(1～2) ◎		
31	壺	口径 (13.2) 残高 3.4	複合口縁壺。	ハケ(3～5本/cm) →ナデ	(口端)ヨコナデ ハケ(4本/cm)	淡茶色 暗茶褐色	石・長(1～2)金 ◎		
32	高坏	残高 5.4	柱部内面にシボリ痕。透かし痕。	ハケ	シボリ痕・ナデ	茶色 茶色	石・長(1～3) ◎		
33	高坏	残高 3.1	柱部小片。矢羽根透かし(未貫通)３ヶ所看取。	マメツ	マメツ	茶褐色 茶褐色	石・長(1) ◎		
34	支脚	底径 (11.0) 残高 7.2	中空。内面にシボリ痕。	タタキ (底)ナデ	シボリ痕・ナデ	黄茶褐色 茶色	石・長(1～3) ◎		
35	製塩土器	口径 (7.3) 残高 2.0	器壁うすい。	マメツ(ナデ)	マメツ(ナデ)	淡褐色 黒色	密 ◎		

表28　ＳＤ３出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
36	甕	口径 (23.7) 残高 1.5	口縁端部を上方に拡張し、端面に凹線文２条を施す。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡茶色 淡茶色	石・長(1～2) ◎		

表29　ＳＤ７出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
37	壺	底径 (8.8) 残高 3.0	わずかに上げ底。	マメツ	マメツ	淡桃褐色 淡灰褐色	石・長(1～3)金・角 ◎		

表30　ＳＫ１出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
38	甕	口径 (30.0) 残高 11.4	折曲口縁。口縁端部に刻目。胴部上位にヘラ描き沈線文２条を施す。	(口)ヨコハケ・ナデ (胴)板ナデ状	ナデ	乳白褐色 乳白褐色	石・長(1～3)金 ◎		18
39	壺	口径 (43.2) 残高 3.7	大型品。口縁端面にヘラ描き沈線文1条、口縁上端部及び下端部に刻目を施す。	ミガキ	ミガキ	乳褐色 乳褐色	石・長(1～2) ◎	黒斑	
40	壺	底径 (11.2) 残高 8.6	大型品。平底。	ミガキ	ナデ→ミガキ	茶褐色 明茶褐色	石・長(1～4)金 ◎		18

表31　ＳＫ４出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
41	甕	残高 4.0	胴部片。ヘラ描き沈線文３条＋刺突文。	ミガキ (マメツ)	ミガキ	茶褐色 明茶褐色	石・長(1～3)金 ◎		
42	甕	底径 (5.0) 残高 5.5	平底。	ミガキ・マメツ (工具痕)	ナデ	淡灰茶色 黄茶褐色	石・長(1～3)金 ◎		
43	壺	残高 3.0	肩部片。ヘラ描き沈線文３条を施す。	ミガキ	ナデ	乳茶色 乳茶色	石・長(1～2)金 ◎		
44	壺	底径 6.7 残高 3.6	わずかに上げ底。	ミガキ (マメツ)	ナデ	淡黄褐色 乳褐色	石・長(1～3)金 ◎	黒斑	
45	壺	底径 (8.8) 残高 4.6	平底。	ミガキ (底)ナデ	マメツ	乳黄茶褐色 淡灰黄褐色	石・長(1～4)金 ◎		

表32　ＳＫ６出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
46	甕	口径 (28.0) 残高 3.0	口縁端部に凹線文１条、口縁上端部及び下端部に刻目を施す。貼付凸帯文１条＋刻目。	ヨコナデ	ヨコナデ ミガキ	黄茶褐色 黄茶褐色	石・長(1～3) ◎		
47	壺	残高 5.2	貼付凸帯文２条。	ミガキ	ナデ	暗茶褐色 暗灰褐色	石・長(1～2)金・角 ◎	黒斑？	
48	壺	口径 (17.0) 残高 5.5	直口口縁壺。	ナデ→ハケ (9～10本/cm)	ハケ (9～10本/cm)	橙茶色 淡灰褐色	石・長(1～3) ◎		
49	壺	底径 1.3 残高 3.2	尖底。	ハケ(6本/cm)→タタキ (底)ナデ	ナデ	淡黄褐色 灰褐色	石・長(1～3)金 ◎	黒斑	

表33　ＳＢ10出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
50	甕	口径 (14.0) 器高 17.3	復元完形品。球形の胴部。口縁部は内湾し、端部は内傾する面をもつ。	(口)ヨコナデ (胴)ナデ→ハケ(マメツ)	(口)ヨコナデ (胴)ナデ(指頭痕)	灰黄褐色 灰褐色	石・長(1～3) ◎	黒斑 煤付着	19
51	甕	口径 14.0 残高 18.1	底部が欠損するほぼ完形品。球形の胴部。口縁部は内湾し、端部内面は内傾する面をもつ。	(口)ヨコナデ (胴)ハケ	(口)ヨコナデ (胴)ナデ	灰黄褐色 淡褐色	石・長(1～3)金 ◎	黒斑	19
52	甕	口径 (13.6) 残高 3.3	外反口縁。端部は内傾する面をもつ。	マメツ	マメツ	灰黄褐色 灰黄褐色	石・長(1～2)金 ◎		
53	甕	底径 8.0 残高 16.8	長胴。	ナデかハケ？ (マメツ)	ナデ	黄灰褐色 黄灰褐色	石・長(1～3)金 ◎	黒斑 煤付着	19
54	高坏	口径 15.3 器高 10.3	完形品。口縁部はわずかに外反する。柱裾部内面に明瞭な稜をもつ。充填技法。	(口)ヨコナデ(ハケ) (脚)ミガキ・ハケ	(坏)ナデ (脚柱)ケズリ	明橙褐色 明橙褐色	石・長(1～3)金 ◎	黒斑	19
55	高坏	底径 10.1 残高 7.7	柱裾部内面に明瞭な稜をもつ。内面にシボリ痕。充填技法。	マメツ (ナデ・ミガキ？)	シボリ痕	淡茶褐色 淡茶褐色	密・金 ◎		19
56	壺	口径 (9.0) 残高 9.9	広口壺。	ハケ(8本/cm)	ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1～6)金 ◎		
57	壺	残高 9.4	長頸壺。	ハケ→ミガキ	ハケ(10本/cm) →ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1～2)金 ◎		
58	壺	底径 (3.8) 残高 6.0	わずかに上げ底。	板ナデ状→ミガキ (底)ナデ	板ナデ (マメツ)	茶褐色 茶褐色	石・長(1～3) ◎		
59	鉢	底径 5.0 残高 6.6	わずかに突出する平底。	(胴)ハケ(一部ナデ) (底)ケズリ痕	板ナデ	乳黄褐色 淡乳褐色	石・長(1～3)金 ◎		
60	鉢	口径 12.4 器高 8.1	完形品。外反口縁。	ハケ・タタキ	ナデ	黄茶褐色 黄茶褐色	石・長(1～4)金 ◎	黒斑	19
61	鉢	残高 3.4	胴部片。	ハケ(12～13本/cm) (マメツ)	ハケ (8～11本/cm)	茶褐色 黒色	石・長(1～2)金 ◎	黒斑	
62	鉢	底径 2.0 残高 3.2	突出する小さな平底。	ハケ(11本/cm) (底)ナデ	ハケ (9～10本/cm)	茶褐色 黒色	石・長(1～3)金 ◎	黒斑	
63	支脚	残高 12.2	受部。断面円形。	ナデ・ハケ(6本/cm) タタキ	ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1～3)金 ◎		
64	製塩土器	口径 (4.6) 残高 5.3	器壁うすい。	タタキ (マメツ)	ナデ	茶褐色 茶褐色	密・金 ◎		19
65	製塩土器	残高 4.2	器壁うすい。	マメツ (タタキ)	マメツ (ナデ)	灰茶色 灰茶色	密 ◎		

表34　ＳＢ10出土遺物観察表　玉類

番号	器種	残存	材質	色	法量 直径(cm)	法量 高さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
66	臼玉	完形	滑石	緑灰色	0.40	0.25	0.05		19

表35　ＳＢ１出土遺物観察表　土製品　(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
67	甕	口径 (21.6) 残高 8.1	口縁部は内湾し、端部は内傾する面をもつ。	(口)ヨコナデ (胴)ハケ	(口)ヨコナデ (胴)ハケ・ナデ	灰黄褐色 灰黄褐色	石・長(1～4)金 ◎		20
68	甕	口径 (19.7) 残高 4.3	口縁部は内湾し、端部は内傾する面をもつ。	ヨコナデ	ヨコナデ・ナデ	淡褐色 淡褐色	石・長(1)金 ◎	黒斑	
69	椀	口径 (11.6) 残高 3.8	口縁部は内湾し、端部は丸い。	ナデ	ナデ	茶褐色 茶褐色	密・金 ◎	黒斑	
70	土錘	長さ 5.0 幅 1.3	穿孔(φ0.4cm)。	ナデ	工具ナデ	淡灰褐色 淡灰褐色	石・長(1)金 ◎	煤付着	20
71	坏蓋	口径 (12.6) 器高 4.3	扁平な天井部をもち、口縁端部は内傾する面をもつ。	(天)回転ヘラケズリ (口)回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		20

ＳＢ１出土遺物観察表　土製品　（2）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
72	坏身	口径 (10.9) 残高 3.7	たちあがり端部は内傾する凹面をなす。受部は上外方にのびる。	口回転ナデ 体回転ヘラケズリ	回転ナデ	暗灰色 青灰色	密 ◎		
73	蓋	つまみ径 2.9 残高 5.5	有蓋高坏の蓋。つまみ中央部は凹む。稜は明瞭。	つまみ回転ナデ 天回転ヘラケズリ	回転ナデ	暗灰色 灰色	密 ◎		
74	壺	残高 5.2	頸部片。ヘラ描き沈線文３条を施す。	ナデ(ハケ痕)	ナデ	暗灰茶褐色 暗灰褐色	石・長(1～3)金 ◎	黒斑	20
75	壺	残高 11.4	大型品。ヘラ描き沈線文３条を施す。	ミガキ	ミガキ	灰褐色 乳黄褐色	石・長(1～2)金 ◎		20

表36　ＳＢ３出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
76	甕	口径 18.7 残高 25.0	扁球形の胴部。口縁部は内湾し、端部は内傾する丸味のある面をもつ。	口マメツ(ナデ) 胴マメツ(ハケ)	口ヨコナデ(マメツ) 胴ナデ(マメツ)	灰黄褐色 灰黄褐色	石・長(1～3)金 ◎	煤付着	20
77	甕	口径 (18.4) 残高 7.2	口縁部は内湾し、端部は内傾する面をもつ。	口ヨコナデ(マメツ) 胴マメツ	口ヨコナデ・ナデ 胴ナデ(マメツ)	黄茶褐色 黄茶褐色	石・長(1～4)金 ○	黒斑	20
78	甕	口径 (20.4) 残高 3.5	口縁部は内湾し、端部は内傾する面をもつ。	マメツ	マメツ	茶褐色 茶褐色	石(1～3)金 ○		
79	甕	口径 (20.0) 残高 5.9	口縁部は直立し、端部は内傾する面をもつ。	マメツ(ハケ)	口端ヨコナデ マメツ	淡黄褐色 灰黄褐色	石(1～3)金 ◎		
80	坏蓋	口径 (12.4) 残高 2.7	口縁端部は内傾する凹面をなす。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
81	蓋	つまみ径 3.2 器高 5.6	有蓋高坏の蓋。つまみ中央部がわずかに突出する。口縁端部は内傾する。	つまみ回転ナデ 天回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰白色 乳褐色	密 △		20
82	高坏	口径 (15.5) 残高 5.7	坏部中位に凸線を2条、凸線間に波状文3～4条を施す。脚部に長方形状の透かし2ケ所看取。	口回転ナデ 坏底回転ヘラケズリ	坏回転ナデ 脚叩き→ナデ	暗灰色 暗灰色	密 ◎	自然釉	20
83	甕	口径 (24.8) 残高 1.6	折曲口縁。口縁端部に刻目。	ヨコナデ	ヨコミガキ	淡乳褐色 淡乳褐色	石・長(1～2) ◎		

表37　ＳＢ３出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
84	石庖丁	2／3	緑色片岩	4.6	9.2	0.6	47.1		20

表38　ＳＢ５出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
85	椀	口径 (11.8) 器高 3.7	口縁部は内湾し、立ち上がる。	口マメツ 底マメツ(工具痕)	マメツ	茶褐色 茶褐色	石・長(1～3) ○		
86	椀	口径 (11.6) 器高 4.6	口縁部は内湾し、立ち上がる。底部外面にヘラ記号。	口ナデ(マメツ)	ナデ(マメツ)	乳茶褐色 乳茶褐色	石・長(1～4)金 ◎		
87	椀	口径 (11.6) 残高 4.2	口縁部は内湾し、立ち上がる。	マメツ(ナデ)	ヨコナデ (マメツ)	茶褐色 茶褐色	密 ◎		
88	椀	口径 (14.7) 残高 7.0	直口口縁。口縁端部はわずかに内傾する。	口ヨコナデ 胴板ナデケズリ状	口マメツ(ヨコナデ) 胴マメツ(ナデ)	暗茶色 暗茶褐色	石・長(1～3)金 ◎	黒斑？	
89	坏蓋	口径 (12.3) 残高 4.2	口縁端部は内傾する凹面をなす。	天回転ヘラケズリ 口回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
90	坏身	口径 (11.2) 器高 5.0	底部は丸味をもち、たちあがり端部は内傾し、受部端に沈線状の凹みが巡る。	口回転ナデ 底回転ヘラケズリ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		

表39　ＳＢ６出土遺物観察表　土製品　（1）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
91	甕	口径 (14.5) 残高 6.2	口縁部は外反し、口縁端部は丸い。	ヨコナデ	口ヨコナデ 胴ナデ	淡黄褐色 淡黄褐色	密 ◎	黒斑	21
92	壺	口径 (10.3) 残高 5.1	直口口縁壺。口縁端部は「コ」の字状。	口端ヨコナデ 口ハケ→ナデ	口端ヨコナデ 口ハケ→ナデ	乳黄白色 乳黄白色	密・金 ◎		
93	壺	口径 10.0 器高 10.7	完形品。口縁部は外反し直立する。口縁部中位に明瞭な稜をもつ。	胴ナデ 底ナデアゲ？	口ヨコナデ 胴ナデ(工具)	淡黄褐色 淡赤茶色	石・長(1～2) ◎	黒斑	21
94	壺	口径 (10.0) 残高 6.1	小型品。口縁部が直立し、口縁端部は丸い。	ナデ	口ヨコナデ 胴ナデ・ケズリ	明茶褐色 明茶褐色	密 ◎		
95	壺	残高 4.7	小型品。胴部小片。	ハケ(6本/cm) マメツ	ナデ	黄茶褐色 灰黄褐色	石・長(1～2)金 ◎		

ＳＢ６出土遺物観察表　土製品　（２）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
96	壺	残高　4.0	小型品。胴部小片。	(頸)ハケ→ヨコナデ (胴)マメツ(ハケ?)	マメツ	淡黄褐色 淡灰色	石・長(1〜2) ◎		
97	壺	底径　1.0 残高　9.1	小型丸底壺。内面に手持ちヘラケズリによる調整。	(口)ナデ (胴)ハケ	(口)ハケ(マメツ) (胴)ナデ・ケズリ	淡灰褐色 淡灰褐色	石・長(1〜3)金 ◎	黒斑？	
98	壺	残高　3.6	小型壺。内面に手持ちヘラケズリによる調整。	ナデ	ナデ・ケズリ	乳灰褐色 淡灰色	石・長(1) ◎		
99	ミニチュア	口径　4.2 器高　4.2	ミニチュア品。	ナデ	ナデ	茶褐色 淡黄褐色	石・長(1)金 ◎	黒斑	21
100	椀	口径 (10.6) 器高　5.3	口縁部は外傾し、立ち上がる。	ナデ(指頭痕)	ナデ	褐色 褐色	密・金 ◎		
101	高坏	口径 (17.5) 残高　5.7	口縁部はわずかに外反する。坏部下位に明瞭な稜をもつ。組合せ技法。	(口)ヨコナデ(マメツ) (坏)ナデ(マメツ)	(口)ヨコナデ(マメツ) (坏)ナデ(マメツ)	淡褐色 淡褐色	密 ◎		
102	高坏	口径 (16.5) 残高　4.5	口縁部はわずかに外反する。	マメツ	マメツ	淡黄茶褐色 黄茶色	密 ◎		
103	高坏	底径 (11.9) 残高　7.1	柱裾部内面に明瞭な稜をもつ。	マメツ	ケズリ	茶褐色 茶褐色	密 ◎	黒斑	21
104	高坏	底径 (12.1) 残高　6.8	柱裾部内面に明瞭な稜をもつ。	ナデ・マメツ	マメツ	乳黄褐色 乳黄褐色	密 ○	黒斑	
105	高坏	残高　7.8	充填技法。	ナデ(マメツ)	(坏)マメツ (脚)シボリ痕・ナデ	淡褐色 淡褐色	石・長(1〜2) ◎		
106	坏蓋	口径 (12.3) 残高　4.9	口縁端部は内傾し、わずかに凹面をなす。	(天)回転ヘラケズリ (口)回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
107	𤭯	残高　3.4	凸線１条＋波状文３段(２条、16〜19条、５条)。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	密 ◎		
108	𤭯	残高　3.7	胴中位に円孔(φ1.6cm)。	回転ナデ	ナデ 回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
109	壺	残高　3.3	口縁部が三角形状に肥厚する。口縁端部下位に波状文3条以上。瓦質。	マメツ	マメツ	灰白色 灰白色	密 ○		
110	甕	口径 (28.1) 残高　3.7	口縁端面に凹線文１条を施す。貼付凸帯文１条＋指頭押圧。	マメツ	マメツ	淡黄褐色 淡灰褐色	石・長(1〜2) ◎		
111	甕	口径 (17.1) 残高　3.4	口縁端部は丸い。	(口)ヨコナデ (胴)マメツ	(口)ヨコナデ・ナデ (胴)ナデ	淡褐色 淡褐色	石・長(1〜2) ○		
112	壺	口径 (15.0) 残高　4.9	口縁端部を上下方に拡張し、端面に凹線文４条を施す。	(口)ヨコナデ (頸)ナデ(ハケ?)	ヨコナデ	茶褐色 灰茶褐色	石・長(1〜3) ◎		
113	壺	残高　1.8	刺突文(４ヶ、３ヶ、２ヶ)。	マメツ	ナデ(マメツ)	淡黄褐色 淡黄褐色	石・長(1〜3) ◎		

表40　ＳＢ６出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	図版
114	打製石鏃	ほぼ完存	サヌカイト	2.4	1.6	0.3	1.5	平基無茎式	21
115	打製石鏃	５／６	サヌカイト	4.4	1.8	0.4	2.4		21

表41　ＳＢ６出土遺物観察表　金属製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	図版
116	不明	—	鉄	3.2	1.8	0.2	3.4		21
117	不明	—	鉄	2.1	1.9	0.3	2.3		21

表42　ＳＢ８出土遺物観察表　土製品　（１）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
118	甕	口径 (17.1) 残高　2.7	口縁部は内湾し、端部は「コ」の字状。	ヨコナデ	ナデ(マメツ)	暗灰褐色 茶褐色	石・長(1〜2)金 ◎	黒斑	
119	甕	残高　5.6	貝殻文(３ヶ１組)。	ヨコナデ	(頸)ヨコナデ・ナデ (胴)ケズリ	乳白色 乳白色	密 ◎		21
120	坏身	口径 (10.6) 残高　4.5	たちあがり端部は内傾する面をもつ。	(口)回転ナデ (底)回転ヘラケズリ	回転ナデ	青灰色 暗灰色	密 ◎		
121	高坏	残高　3.2	長方形状の透かし３ヶ所。	(坏)回転ヘラケズリ (脚)回転ナデ	(坏)同心円叩き痕 (脚)回転ナデ	暗灰色 灰色	密 ◎		
122	壺	口径 (13.4) 残高　25.7	ほぼ完形品。口縁端部を上方に拡張し、端面に凹線文2条と頸部に刻目。	(口)ハケ→ヨコナデ (胴)ハケ→ミガキ	(口)ヨコナデ (胴)ナデアゲ	暗茶色 茶褐色	石・長(1〜4)金 ◎	黒斑 煤付着	

ＳＢ８出土遺物観察表　土製品　（2）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
123	高坏	口径 (16.1) 残高 2.1	口縁部に凹線文２条を施す。凹線文間に貝殻文(４ヶ１組)。	ナデ(ハケ痕)	ヨコナデ (ハケ痕)	暗茶褐色 暗茶褐色	石・長(1～2)金 ◎	黒斑	21
124	高坏	残高 3.3	口縁部に凹線文２条以上を施す。凹線文上に刻目。	ハケ→ミガキ	ハケ(10本/cm) 一部ミガキ	茶褐色 茶褐色	石・長(1～3) ◎		21

表43　ＳＢ11出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
125	甕	口径 (20.8) 残高 3.9	口縁部は内湾し、端部は内傾する面をもつ。	㊐ヨコナデ ㊐ハケ	㊐ヨコナデ ㊐ハケ	茶褐色 茶褐色	石・長(1～3)金 ◎		
126	高坏	残高 3.1	坏部片。	マメツ	マメツ	乳褐色 乳褐色	密 ◎		
127	高坏	残高 3.7	脚部片。差込技法。	マメツ	ナデ	乳黄褐色 乳黄褐色	密 ◎		
128	坏蓋	口径 (11.4) 残高 4.2	天井部は丸く、口縁端部は内傾する凹面をなす。稜は明瞭。	㊥回転ヘラケズリ ㊐回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 青灰色	密 ◎	自然釉	
129	坏蓋	口径 (14.4) 残高 3.1	口縁端部は丸い。	㊥回転ヘラケズリ ㊐回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
130	坏蓋	口径 (14.6) 残高 3.3	口縁端部は丸い。稜は凹線状に凹む。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰褐色	密 ○		
131	坏身	口径 (11.2) 器高 4.9	底部は丸味があり、たちあがり端部は内傾し凹面をなす。	㊐回転ナデ ㊢回転ヘラケズリ	回転ナデ	白灰色 白灰色	密 ◎		
132	坏身	口径 (10.4) 残高 4.1	底部は丸味があり、たちあがり端部は内傾し凹面をなす。	㊐回転ナデ ㊢回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
133	高坏	口径 (15.8) 残高 3.9	無蓋高坏。坏部中位に凸線２条、下位に波状文５条以上を施す。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 暗灰色	密 ◎		
134	高坏	底径 (8.9) 残高 2.5	脚部片。長方形状の透かし１ヶ所看取。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
135	高坏	底径 (9.6) 残高 1.7	脚端部は下方に屈曲する。脚端面に凹線文１条、透かし１ヶ所看取。	回転ナデ	回転ナデ	黒灰色 灰色	密・金 ◎	自然釉	
136	壺	口径 (17.5) 残高 5.3	口縁端部は丸味のある長方形状に肥厚する。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
137	壺	口径 (19.4) 残高 3.7	口縁端部は長方形状に肥厚する。口縁端部内面をわずかにつまみ上げる。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 暗灰色	密 ◎		
138	甕	口径 (26.2) 残高 2.4	口縁端部は三角形状に肥厚する。口縁端部下位に凹線文1条と凸線文1条を施す。	回転ナデ	回転ナデ	黒灰色 灰色	密 ◎		
139	甕	口径 (25.0) 残高 3.2	口縁端部は上方に拡張し、端面に凹線文１条を施す。貼付凸帯文1条+指頭押圧。	ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1～3)金 ◎	煤付着	
140	甕	口径 (25.2) 残高 5.1	口縁端部に凹線文1条+刻目。貼付凸帯文1条+指頭押圧。口縁部内面に凹線状のナデ凹み。	㊐ヨコナデ ㊐ハケ(4本/cm)	㊐ヨコナデ ㊐ハケ	灰褐色 茶褐色	石・長(1～2) ◎		
141	甕	口径 (24.2) 残高 2.1	折曲口縁。口縁端部に刻目。	ヨコナデ	ヨコナデ マメツ	黄茶褐色 黄茶褐色	石・長(1～2)金 ◎		
142	壺	口径 (22.8) 残高 5.5	複合口縁壺。半截竹管文と竹管文を施す(２列、１列、２列)。	ヨコナデ	ヨコナデ ハケ→ヨコナデ	黄茶褐色 黄褐色	石・長(1～2)金 ◎		
143	壺	口径 (20.0) 残高 3.8	複合口縁壺。口縁端部は「コ」の字状。	ナデ	ハケ→ヨコナデ	淡褐色 淡茶褐色	石・長(1～3)金 ◎		
144	壺	残高 3.2	複合口縁壺。刻目。	ヨコナデ マメツ	マメツ	茶褐色 茶褐色	石・長(1～3)金 ◎		
145	壺	口径 (13.6) 残高 2.3	複合口縁壺。波状文５条以上を施す。	ハケ→ナデ	マメツ	橙茶褐色 橙茶褐色	石・長(1～2)金 ◎		
146	壺	残高 2.3	口縁部は上下方に拡張し、端面に凹線文２条+刻目を施す。	ミガキ	ヨコナデ ミガキ	茶色 茶褐色	石・長(1～2)金 ◎		
147	壺	口径 (34.8) 残高 7.7	大型品。口縁部は上下方に拡張し、端面に凹線文4条+山形文を施す。	マメツ	マメツ	淡赤褐色 淡黄褐色	石・長(1～3) ◎		
148	甕	底径 (9.5) 残高 7.2	上げ底。	ミガキ ヨコナデ	工具ナデ ナデ	茶褐色 暗茶色	石・長(1～3)金 ◎	黒斑	
149	支脚	残高 3.8	受部片。中空。	ナデ	ナデ	淡褐色 淡褐色	石・長(1～4) ◎		
150	不明	残高 4.1	器種不明。	ミガキ	ヨコナデ ナデ	淡褐色 茶褐色	石・長(1～5)金 ◎	黒斑	
151	製塩土器	口径 (4.2) 残高 4.7	器壁うすい。	ナデ→タタキ	ナデ マメツ	灰黄褐色 灰茶色	密 ◎		

表44　ＳＢ11出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量				備考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
152	石庖丁	1／3	緑色片岩	3.2	4.3	0.6	17.0		

表45　ＳＢ11出土遺物観察表　玉類

番号	器種	残存	材質	色	法量			備考	図版
					直径(cm)	高さ(cm)	重さ(g)		
153	臼玉	3／4	滑石	黒灰色	0.70	0.20	0.14		

表46　ＳＢ９出土遺物観察表　土製品　（1）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整		色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
				外面	内面				
154	甕	口径 (18.2) 残高 6.6	口縁部は内湾し、端部は内傾する面をもつ。	マメツ	㊐ヨコナデ ㊐ナデ(マメツ)	乳黄褐色 乳黄褐色	石・長(1～3)金 ◎		
155	甕	口径 (19.0) 残高 4.0	口縁部は内湾し、端部は内傾する面をもつ。	ヨコナデ (マメツ)	マメツ	黄茶褐色 茶褐色	密・金 ◎		
156	甕	口径 (16.6) 残高 5.5	口縁部は内湾し、端部は丸い。胴上位にヘラ記号。	㊐マメツ ㊐ハケ	マメツ	淡褐色 淡褐色	密・金 ◎		22
157	甕	口径 (16.0) 残高 4.3	口縁部は外反し、端部は「コ」の字状。	マメツ	マメツ	乳赤褐色 淡灰赤褐色	石・長(1～3) ◎	黒斑	
158	甕	口径 (17.1) 残高 3.6	口縁部は内湾し、端部は内傾する面をもつ。	ヨコナデ	ヨコナデ 板ナデ	褐色 赤褐色	石・長(1～3)金 ◎		
159	甕	口径 (19.8) 残高 3.8	口縁部は内湾し、端部は内傾する面をもつ。	マメツ	マメツ	淡黄茶色 淡褐色	密 ◎		
160	甕	口径 (21.1) 残高 4.4	口縁部は内湾し、端部は内傾する面をもつ。	ヨコナデ (工具痕？)	マメツ	明茶褐色 明茶褐色	密 ◎		
161	甕	口径 (19.5) 残高 3.8	口縁部は内湾し、端部は内傾する面をもつ。	ヨコナデ (マメツ)	ヨコナデ	淡褐色 灰褐色	長(1～2) ◎	煤付着	
162	甕	口径 (17.8) 残高 3.1	口縁部は内湾し、端部は内傾する面をもつ。	マメツ	ヨコナデ	灰茶褐色 灰褐色	石・長(1～2)金 ○		
163	甕	口径 (22.0) 残高 7.4	口縁部は内湾し、端部は「コ」の字状。	㊐ヨコナデ ㊐ハケ	ヨコナデ	乳白褐色 乳白褐色	石・長(1)金 ◎		22
164	甕	口径 (19.8) 残高 5.9	口縁部は内湾し、端部は内傾する面をもつ。	㊐ヨコナデ ㊐ハケ(マメツ)	マメツ	明茶褐色 明茶色	石・長(1～4) ◎		
165	甕	口径 (18.6) 残高 6.0	口縁部は内湾し、端部は内傾する面をもつ。	マメツ	㊐マメツ ㊐ハケ?(マメツ)	乳黄褐色 乳黄褐色	石・長(1～3)金 ◎		
166	椀	口径 (11.0) 器高 4.8	口縁部は内湾して立ち上がり、端部は丸い。	マメツ (工具痕)	ヨコナデ	明茶色 乳褐色	密・金 ◎		
167	高坏	残高 4.4	坏脚部片。	マメツ	マメツ	橙茶色 橙茶色	密 ◎		
168	高坏	底径 (10.4) 残高 2.6	柱裾部内面に稜をもつ。	ナデ ヨコナデ	ナデ	明茶色 明茶色	石・長(1～2)金 ◎		
169	甑	口径 (28.8) 残高 7.3	口縁部は平坦面をもつ。	㊐ナデ ㊐ハケ(5本/cm)	㊐ハケ(8本/cm) ㊐ナデ	淡灰褐色 淡灰褐色	石・長(1～3)金 ◎		
170	甑	残高 2.1	楕円形孔１ヶ所看取。	ハケ (6～7本/cm)	ハケ (6～7本/cm)	茶褐色 茶褐色	密 ◎	黒斑	
171	甑	残高 3.9	把手。断面楕円形。	ナデ	マメツ	黄茶褐色 黄茶褐色	石・長(1～2)金 ◎		
172	甑	残高 5.9	把手。断面楕円形。	ナデ	マメツ(ナデ)	暗灰褐色 淡黄褐色	密 ◎		22
173	壺	口径 26.7 残高 2.8	口縁端部下に凸線１条を施す。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		22
174	製塩土器	口径 (4.2) 残高 5.8	器壁うすい。	マメツ (タタキ)	マメツ	淡赤茶色 淡茶色	密 ◎		
175	坏蓋	口径 (11.8) 器高 4.1	天井部は扁平で、口縁端部は内傾する凹面をなす。稜は明瞭。	㊤回転ヘラケズリ ㊐回転ナデ	回転ナデ	黄灰色 青灰色	密 ◎	自然釉	
176	坏蓋	口径 12.3 器高 4.7	天井部は丸く、口縁端部は内傾する凹面をなす。稜は明瞭。	㊤回転ヘラケズリ ㊐回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		22
177	坏蓋	口径 (11.5) 器高 5.0	天井部は丸く、口縁端部は内傾する凹面をなす。稜は明瞭。	㊤回転ヘラケズリ ㊐回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎	自然釉	
178	坏身	口径 (10.4) 残高 4.6	底部は扁平で、たちあがり端部は内傾する凹面をなす。底部にヘラ記号。	㊐回転ナデ ㊐回転ヘラケズリ	回転ナデ ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
179	坏身	口径 (10.6) 残高 5.1	底部は丸く、たちあがり端部は内傾する凹面をなす。	㊐回転ナデ ㊐回転ヘラケズリ	回転ナデ	白灰色 白灰色	密 ◎		

ＳＢ９出土遺物観察表　土製品　（2）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
180	坏身	口径 (10.2) 器高 5.0	底部は扁平で、たちあがり端部は内傾する凹面をなす。底部にヘラ記号。	㊤回転ナデ ㊞回転ヘラケズリ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
181	坏身	口径 10.8 器高 5.1	底部は丸く、たちあがり端部は内傾する凹面をなす。	㊤回転ナデ ㊞回転ヘラケズリ	回転ナデ	暗灰色 青灰色	密 ◎		22
182	坏身	口径 10.0 器高 4.5	底部は丸く、たちあがり端部は内傾する凹面をなす。受部内側に沈線状の凹みを施す。	㊤回転ナデ ㊞回転ヘラケズリ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		22
183	蓋	口径 12.5 器高 5.7	有蓋高坏の蓋。つまみ中央部が凹む。口縁端部は内傾する凹面をなす。稜は明瞭。	㊦回転ヘラケズリ ㊤回転ナデ	回転ナデ	黒灰色 青灰色	密 ◎		22
184	蓋	つまみ径 3.5 残高 4.4	有蓋高坏の蓋。つまみ中央部が凹む。稜は明瞭。	(つまみ)回転ナデ ㊦回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 青灰色	密 ◎		
185	高坏	口径 (16.2) 残高 8.2	無蓋高坏。台形状透かし３ヶ所。稜は明瞭。	回転ナデ・回転ヘラケズリ (脚)カキメ	回転ナデ	暗灰色 灰色	密 ◎		
186	高坏	口径 (16.1) 残高 4.0	無蓋高坏。口縁中位に凸線１条を施す。下位に波状文７条。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	密 ◎		
187	高坏	残高 2.5	無蓋高坏。口縁中位に凸線１条を施す。下位に波状文11条。	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	暗灰色 灰色	密 ◎		
188	高坏	底径 (7.5) 残高 4.7	脚端部は下方に屈曲する。長方形状の透かし２ヶ所看取。	カキメ (脚端)回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 青灰色	密 ◎		
189	高坏	底径 (8.9) 残高 4.2	脚端部は下内方に屈曲する。長方形状の透かし１ヶ所看取。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 暗灰色	密 ◎		
190	椀	残高 3.6	胴部中位に凸線２条と凸線間に波状文８～９条を施す。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 暗灰色	密 ◎		
191	椀	口径 (10.9) 残高 4.2	胴部中位に凸線１条と沈線１条を施す。凸線と沈線間に波状文10条。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 灰色	密 ◎	自然釉	
192	瓶	残高 8.3	胴部中位に沈線２条を施す。沈線間に波状文７～８条。	回転ナデ ㊞ナデ	(頸)ナデ (胴)回転ナデ	青灰色 灰色	密 ◎	自然釉	22
193	瓶	残高 5.7	胴部中位に沈線２条、沈線間に波状文７～８条を施す。	(胴下)カキメ ㊞回転ヘラケズリ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎	自然釉	
194	壺	口径 (9.5) 残高 4.3	短頸壺。口縁部は短く直立し、端部は丸い。	カキメ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
195	甕	口径 (18.8) 残高 3.1	口縁端部を長方形状に肥厚する。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
196	甕	口径 (25.6) 残高 3.3	外反口縁。口縁部下位に凸線１条を施す。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	密 ◎		
197	甑	残高 6.4	把手。断面楕円形。	ナデ	ナデ	淡黄褐色 淡黄褐色	密 ◎		
198	甕	底径 (4.3) 残高 2.7	平底。	タタキ ㊞ナデ	ナデ	灰褐色 茶褐色	石・長(1～3) ◎	黒斑	
199	壺	口径 (16.8) 残高 5.3	口縁部は上方に拡張し、端面に凹線文３条を施す。頸部に沈線１条。	ヨコナデ	(口端)ヨコナデ ㊤マメツ	茶褐色 黄褐色	石・長(1～3)金 ◎		
200	壺	残高 4.2	肩部小片。沈線文２条＋貝殻文。	ナデ	ヨコナデ	明灰茶褐色 乳茶褐色	密 ◎		
201	壺	残高 4.9	肩部小片。貝殻文。	ナデ	ナデ→ミガキ	灰黄褐色 褐黒色	石・長(1～4) ◎		
202	壺	残高 2.3	肩部小片。ヘラ横沈線文６条(タテ４条、ヨコ２条)。	ナデ	ナデ	茶褐色 黒色	石・長(1～4) ◎	黒斑	
203	壺	残高 4.4	肩部小片。刺突文。	ナデ	ナデ	淡乳褐色 淡灰褐色	石・長(1～3) ◎		
204	土錘	長さ 4.2 幅 1.9	円孔(φ0.4cm)。	ナデ	工具ナデ	淡茶褐色 淡茶褐色	石・長(1～2)金 ◎		23

表47　ＳＢ９出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
205	有孔円板	完存	滑石	2.3	2.5	0.3	4.6		23

表48　ＳＢ９出土遺物観察表　金属製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
206	刀？	—	鉄	10.1	2.0	0.6	20.3		23

表49　ＳＢ９出土遺物観察表　玉類

番号	器種	残存	材質	色	法量 直径(cm)	法量 高さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
207	臼玉	完形	滑石	緑灰色	0.46	0.30	0.10		23
208	臼玉	完形	滑石	黒灰色	0.60	0.41	0.20		23

表50　ＳＢ７出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
209	高坏	口径 (14.7) 残高 6.1	坏部下位に稜をもつ。	ヨコナデ マメツ	ヨコナデ ナデ	明茶色 明茶色	密 ◎	黒斑	
210	坏蓋	口径 (12.0) 残高 2.8	天井部は丸く、口縁端部は内傾する凹面をなす。	回転ナデ	回転ナデ	淡褐灰色 淡褐灰色	密 ◎		

表51　３号大型建物出土遺物観察表　土製品　（１）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
211	甕	残高 9.8	胴部片。	タタキ (マメツ)	ハケ (5～6本/cm)	黄褐色 淡黄褐色	石・長(1～4) ◎	SP② 黒斑	23
212	壺	残高 3.2	貼付凸帯文１条＋斜格子目文。	ヨコナデ	ハケ(3本/cm) ナデ	茶褐色 黒色	石・長(1～3) ◎	SP② 黒斑	
213	甕	残高 3.4	胴部小片。	タタキ	ナデ	淡茶褐色 淡灰褐色	石・長(1)金 ◎	SP⑨	
214	甕	残高 3.2	胴部小片。	タタキ	ハケ (8～10本/cm)	乳灰茶色 淡灰褐色	石・長(1～3)金 ◎	SP⑪ 煤付着	
215	甕	底径 (4.0) 残高 4.1	平底。	ハケ(6本/cm)	ナデ	茶褐色 黄茶褐色	石・長(1～4) ◎	SP⑪ 黒斑	
216	壺	残高 5.3	胴部小片。	タタキ→ ハケ(5本/cm)	ハケ(4本/cm)	淡茶色 暗灰色	石・長(1～3) ◎	SP⑪ 黒斑	
217	坏蓋	口径 (10.8) 残高 1.8	口縁部小片。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎	SP⑫	
218	鉢	残高 3.4	胴部小片。	タタキ	ナデ(マメツ)	淡黄褐色 淡黄褐色	石・長(1～2) ◎	SP⑮ 黒斑	
219	壺	残高 4.9	口縁部片。	ハケ・ミガキ	マメツ	明茶色 淡橙色	石・長(1～3)金 ◎	SP⑰	
220	壺	残高 3.9	胴部小片。	タタキ→ ハケ(4～5本/cm)	ハケ(4～5本/cm) (マメツ)	淡茶褐色 乳褐色	石・長(1) ◎	SP⑰	
221	鉢	残高 5.9	胴部小片。	タタキ	ハケ(10本/cm)	乳褐色 淡茶色	石・長(1～3)金 ◎	SP⑰ 黒斑	
222	支脚	残高 3.6	受部。断面楕円形。	ナデ	—	淡褐色	石・長(1～4)金 ◎	SP⑰	
223	甕	口径 (19.6) 残高 1.4	口縁部小片。	ナデ	ナデ	黄茶褐色 暗褐色	石・長(1～2)金 ◎	SP⑳ 黒斑	
224	甕	残高 2.5	底部片。	タタキ (マメツ)	ナデ	淡褐色 黒色	長(1～2) ◎	SP⑳ 黒斑	
225	甕	残高 2.6	口縁端部は内傾する面をもつ。	マメツ	マメツ	黄茶褐色 黄褐色	石・長(1～2)金 ◎	SP㉒	
226	甑	残高 7.7	把手。	ナデ	ナデ	黄褐色 黒色	石・長(1～2) ◎	SP㉒ 黒斑・煤付着	
227	坏身	残高 2.2	小片。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 青灰色	密 ◎	SP㉒	
228	甕	残高 8.7	胴部片。	タタキ	ハケ (5～6本/cm)	淡褐色 淡黄褐色	石・長(1～3) ◎	SP㉓	23
229	壺	残高 6.2	複合口縁壺。	マメツ(ハケ)	ハケ→ナデ ヨコナデ	橙茶色 黒灰色	石・長(1～2) ○	SP㉓ 黒斑	23
230	壺	口径 (35.8) 残高 2.1	口縁端部を下方に拡張し、端面に波状文５条を施す。	(口)ヨコナデ (口頭)ハケ(5本/cm)	マメツ	黄褐色 暗黄褐色	石・長(1～3) ◎	SP㉔ 黒斑	23
231	鉢	口径 (26.3) 残高 1.8	口縁部小片。	ヨコナデ	ハケ (6～8本/cm)	茶褐色 茶褐色	石・長(1～5)金 ◎	SP㉔	
232	鉢	口径 (15.5) 残高 3.4	口縁部は直立する。	ハケ(マメツ)	(口端)ヨコナデ (口)ハケ(5～8本/cm)	淡茶褐色 淡黄褐色	石・長(1～2)金 ◎	SP㉘ 黒斑	
233	高坏	残高 1.2	坏部小片。	マメツ	マメツ	淡橙色 暗茶色	石(1) ◎	SP㉛	
234	甕	底径 (5.8) 残高 5.1	上げ底。	ナデ→ ヨコナデ	ナデ	暗黄茶色 灰褐色	石・長(1～3) ◎	SP㉛	
235	坏蓋	残高 2.5	小片。	(天)回転ヘラケズリ (口)回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎	SP㉛	

３号大型建物出土遺物観察表　土製品　（２）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
236	甕	残高 4.1	胴部片。	タタキ	ハケ(5～6本/cm) 板ナデ	灰茶褐色 淡黄褐色	石・長(1～2)金 ◎	SP㉝	
237	鉢	口径 (21.7) 残高 3.2	口縁部はわずかに外反する。	口ナデ 胴タタキ	口ハケ？ 胴ヨコナデ	乳茶褐色 乳茶褐色	密 ◎	SP㉝	
238	坏身	残高 1.8	底部片。	回転ナデ 回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	SP㉝	
239	甕	口径 (21.2) 残高 2.6	口縁端部は丸い。	ナデ	ハケ(マメツ)	乳灰褐色 乳灰褐色	石・長(1) ◎	SP㉞	
240	壺	残高 3.4	肩部小片。貝殻文。	ミガキ (マメツ)	ナデ ミガキ	茶褐色 茶褐色	石・長(1～4) ◎	SP㉞ 黒斑？	
241	鉢	底径 1.6 残高 2.5	突出する小さな平底。	ハケ(10本/cm)	ナデ	黒色 黒褐色	石・長(1～2)金 ◎	SP㉞ 黒斑	
242	支脚	底径 (9.0) 残高 2.9	中空。	ミガキ (マメツ)	マメツ	茶褐色 茶褐色	石・長(1～2) ◎	SP㉞	
243	高坏	底径 (12.8) 残高 1.4	柱裾部内面に明瞭な稜をもつ。	ミガキ (マメツ)	マメツ	淡橙色 乳黄褐色	密 ◎	SP㉞	

表52　掘立１出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
244	壺	口径 (12.2) 残高 3.2	口縁端部を上方に拡張し、端面に凹線文３条を施す。	ヨコナデ	ヨコナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1～3) ◎		
245	壺	残高 4.7	小型壺。	ナデ	ナデ	暗灰褐色 暗灰色	密 ◎	黒斑 煤付着	
246	高坏	口径 (21.2) 残高 3.5	口縁部はわずかに外反する。	ヨコナデ (マメツ)	ヨコナデ (マメツ)	淡橙褐色 淡橙褐色	密 ◎		

表53　ＳＤ２(１区下層)出土遺物観察表　土製品　（１）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
247	甕	口径 (33.2) 残高 2.5	折曲口縁。口縁端部に刻目。	ヨコナデ	ヨコナデ (マメツ)	茶褐色 茶色	石・長(1～2) ◎		
248	甕	残高 3.6	貼付凸帯文１条＋押圧。	ヨコナデ ナデ	口ヨコナデ 胴ミガキ	茶色 茶色	石・長(1) ◎		
249	甕	口径 (15.8) 残高 5.0	「く」の字状口縁。口縁端部はナデ凹む。	口ヨコナデ 胴ナデ・ミガキ	口ヨコナデ 胴ナデ	灰茶褐色 茶色	石・長(1～3) ◎	黒斑	
250	甕	口径 (17.4) 残高 2.7	口縁部が外反し、口縁端部は丸い。	ナデ ハケ(マメツ)	マメツ	乳褐色 乳褐色	長(1～4) ◎		
251	甕	口径 (10.1) 残高 5.2	「く」の字状口縁。口縁端部は丸い。	口ヨコナデ 胴ハケ(マメツ)	口ヨコナデ 胴ナデ	淡褐色 淡褐色	石・長(1～4) ◎		
252	甕	口径 (18.6) 残高 4.1	「く」の字状口縁。口縁端部は丸い。	ハケ(10本/cm) →ヨコナデ	口ハケ→ヨコナデ 胴ケズリ	灰褐色 淡褐色	石・長(1～2)金 ◎	煤付着	
253	甕	口径 (15.6) 残高 7.8	「く」の字状口縁。口縁端部は丸い。	ハケ(10～12本/cm) →ヨコナデ	口ハケ(8～12本/cm) 胴ケズリ	灰褐色 黄褐色	石・長(1～4)金 ◎	黒斑	
254	甕	底径 (7.5) 残高 3.4	平底。	ミガキ(マメツ)	マメツ	淡茶褐色 淡茶褐色	石・長(1～2) ◎	黒斑	
255	甕	底径 6.1 残高 3.1	平底。	ミガキ	ナデ	茶褐色 暗茶褐色	石・長(1～3)金 ◎	黒斑	
256	甕	底径 (7.6) 残高 4.8	上げ底。	ミガキ→ヨコナデ 底ナデ	マメツ	茶色 茶褐色	石・長(1～4)金 ◎		
257	甕	底径 2.3 残高 16.3	長胴。小さな平底。	タタキ 底ナデ	ハケ(7本/cm) →ナデアゲ	赤褐色 淡褐色	石・長(1～4)金 ◎	黒斑 煤付着	23
258	壺	口径 (41.0) 残高 4.8	大型品。広口壺。口縁端部に刻目。口縁内面に貼付凸帯文１条。	ナデ ミガキ？	ヨコナデ →ミガキ？	淡褐色 乳褐色	石・長(1～4) ◎		
259	壺	口径 (15.4) 残高 2.5	広口壺。口縁端部を上下方に拡張し、端面に凹線文２条を施す。	口ヨコナデ 頸ナデ	口ヨコナデ 頸ナデ	茶色 灰茶色	石・長(1～2) ◎		
260	壺	口径 (13.2) 残高 2.6	広口壺。口縁端部を上下方に拡張し、端面に凹線文２条を施す。	ヨコナデ ハケ(10本/cm)	ヨコナデ ナデ	茶色 茶色	石・長(1～3)金 ◎		
261	壺	口径 (22.0) 残高 4.1	広口壺。口縁端部を上下方に拡張し、端面に凹線文３条と刻目を施す。	マメツ	口端ヨコナデ ミガキ(マメツ)	赤茶色 赤褐色	石・長(1～2) ◎		
262	壺	口径 (19.1) 残高 2.3	複合口縁壺。口縁部に波状文４条を施す。	ナデ ヨコナデ	ヨコナデ	淡褐色 淡褐色	石・長(1～2)金 ◎	黒斑	
263	壺	残高 8.4	頸部にヘラ描き沈線文６条、ヘラ描き沈線文下に貼付凸帯文１条＋貝殻文。	ハケ(マメツ) ヨコナデ(マメツ)	ミガキ ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1～5) ◎		23
264	壺	口径 (9.5) 残高 5.3	小型壺。口縁部は直立し、口縁端部は丸い。	ナデ	口ハケ(5本/cm) 胴ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1～3)金 ◎		

ＳＤ２（１区下層）出土遺物観察表　土製品　（2）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
265	壺	底径 (6.7) 残高 5.3	平底。	ハケ(5本/cm) ㊞ナデ	ナデ	淡黄褐色 灰褐色	石・長(1～3) ◎	黒斑	
266	壺	底径 (8.5) 残高 3.4	わずかに上げ底。	ミガキ・ナデ ㊞ミガキ	工具ナデ →ナデ	淡灰褐色 淡褐色	石・長(1～3) ◎	黒斑	
267	壺	底径 (10.0) 残高 4.1	わずかに上げ底。	ナデ(ミガキ)	ナデ	明茶色 黒色	石・長(1～3)金 ◎	黒斑	
268	壺	底径 (10.5) 残高 5.0	大型品。突出する平底。	タタキ(マメツ)	ハケ→ナデ (マメツ)	暗灰色 乳灰褐色	石・長(1～3)金 ◎	黒斑	
269	鉢	残高 3.5	外反口縁。	ハケ(21本/cm) マメツ	㊞ハケ・ナデ ㊞マメツ	茶褐色 茶褐色	密 ◎		
270	鉢	残高 6.7	外反口縁。	㊞ナデ ㊞ハケ(8本/cm)	ハケ→ナデ ケズリ	淡黄褐色 淡黄褐色	石・長(1～3)金 ◎		
271	鉢	底径 1.2 残高 1.7	突出する小さな平底。	ミガキ ㊞ナデ	ミガキ	暗茶褐色 茶褐色	石・長(1～2)金 ◎	黒斑	
272	鉢	底径 2.4 残高 2.1	小さな平底。	ハケ(8～10本/cm) ㊞ナデ	ハケ・ナデ	黒褐色 暗灰褐色	石・長(1～3)金 ◎	黒斑	
273	鉢	底径 (2.6) 残高 2.3	小さな平底。	マメツ(ナデ)	ハケ→ナデ	淡茶色 乳白褐色	石・長(1～2)金 ◎		
274	高坏	残高 4.3	口縁部外面に凹線文２条以上を施し、下位に刻目。	ミガキ	ナデ	淡灰褐色 茶色	石・長(1～2) ◎		
275	高坏	残高 4.8	差込技法。	ハケ(12本/cm)	ナデ 工具痕	乳茶褐色 乳茶褐色	石・長(1～3)金 ◎	黒斑	
276	器台	残高 3.1		ハケ→ミガキ	ヨコナデ ナデ	暗褐色 淡褐色	密 ◎	煤付着	
277	分銅形土製品	残長 4.5	裏面から円孔(φ0.3cm)。	ナデ	—	暗灰褐色	石・長(1～2)金 ◎	黒斑	巻頭2 23

表54　ＳＤ２（１区下層）出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
278	石庖丁	完存	結晶片岩	5.6	13.8	0.7	85.7	未製品	

表55　ＳＤ２（２区下層）出土遺物観察表　土製品　（1）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
279	甕	口径 (21.3) 残高 2.9	口縁端面に凹線文１条を施し、凹線文上に刻目。貼付凸帯文１条＋押圧。	ヨコナデ	ミガキ→ヨコナデ ミガキ	茶褐色 茶褐色	石・長(1～3) ◎		24
280	甕	残高 5.9	胴部上位に刺突文。	㊞ヨコナデ ㊞ハケ(10本/cm)	ヨコナデ ハケ(10本/cm)	茶褐色 暗茶褐色	石・長(1～2) ◎		
281	甕	底径 (11.0) 残高 3.6	平底。	ミガキ→ヨコナデ ㊞ナデ	ナデ	淡茶褐色 乳茶褐色	石・長(1～3)金 ◎		
282	甕	底径 (7.0) 残高 5.2	平底。	ミガキ→ヨコナデ ㊞ナデ・ミガキ?	ナデ	淡茶褐色 茶色	石・長(1～2)金 ◎		
283	甕	底径 (7.6) 残高 3.2	上げ底。	ナデ ヨコナデ	マメツ(ナデ)	茶色 暗茶色	石・長(1～3) ◎		
284	甕	底径 (6.2) 残高 3.3	上げ底。	ナデ ㊞ヨコナデ	ナデ	淡茶褐色 乳褐色	石・長(1～2)金 ◎		
285	甕	底径 4.4 残高 7.0	平底。	タタキ→ハケ(9本/cm) ㊞ナデ	ハケ(9～10本/cm) ㊞ナデ→ハケ	淡褐色 淡灰褐色	石・長(1～4) ◎	黒斑	
286	甕	底径 (4.2) 残高 3.5	平底。	タタキ→ハケ ㊞ハケ・ナデ	ナデ	灰黄色 暗灰色	石・長(1～3)金 ◎	黒斑	
287	壺	口径 (12.4) 残高 4.6	広口壺。口縁端部を上下方に拡張し、端面に凹線文３条を施す。	ヨコナデ ミガキ	ナデ ヨコナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1～3) ◎		24
288	壺	口径 (11.1) 残高 3.7	長頸壺。口縁部はわずかに外反する。	ハケ→ヨコナデ	ハケ(7～8本/cm) →ヨコナデ	乳褐色 淡灰褐色	石・長(1～2)金 ◎	黒斑	
289	壺	口径 (10.4) 残高 8.7	ほぼ完形品。小型壺。	ハケ(8本/cm) →ナデ	㊞ハケ(7本/cm) ㊞板ナデ・ナデ	暗褐色 茶褐色	石・長(1～3)金 ◎	黒斑	
290	壺	残高 4.3	大型品。刺突文２列。	ハケ→ナデ ハケ→ミガキ	ナデ・ミガキ (マメツ)	茶色 茶色	石・長(1～2) ◎		
291	壺	残高 5.1	貼付凸帯文１条＋刻目。	ハケ→ミガキ	㊞ハケ(6本/cm) →ナデ	淡茶褐色 乳茶褐色	石・長(1～3)金 ◎		
292	壺	残高 5.4	胴部片。	ハケ (8～10本/cm)	ケズリ	黒褐色 黒色	石・長(1～3)金 ◎	黒斑	
293	壺	底径 9.2 残高 7.2	大型品。平底。	タタキ→ハケ	ハケ(9～10本/cm) ナデ	茶褐色 灰褐色	石・長(1～5)金 ◎	黒斑	24

SD２(２区下層)出土遺物観察表　土製品　（２）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
294	鉢	口径 (30.6) 残高 4.9	口縁端部を上下方に拡張し、端面に凹線文2条を施す。貼付凸帯文1条+刺突文。	ハケ→ヨコナデ ナデ(ミガキ？)	(口)ハケ(4本/cm) (胴)ヨコナデ	茶色 茶色	石・長(1～3) ◎		24
295	鉢	底径 (2.0) 残高 4.6	小さな平底。	タタキ→ナデ (底)ケズリ・ハケ	ハケ(8本/cm)	乳褐色 乳褐色	石・長(1～4)金 ◎	黒斑	
296	高坏	残高 6.4	脚部内面にシボリ痕。脚部上位に沈線文１条。	ミガキ	ナデ・シボリ痕	灰褐色 灰褐色	石・長(1～2)金 ◎	黒斑	
297	器台	底径 (21.0) 残高 3.2	裾部外面に凹線文５条以上。	ヨコナデ	ヨコナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1～2)金 ◎	黒斑	

表56　SD２(２区下層)出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
298	砥石	ほぼ完存	不明	9.3	5.7	2.5	—		

表57　SD２(１区上層)出土遺物観察表　土製品　（１）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
299	甕	口径 (15.0) 残高 4.0	「く」の字状口縁。口縁端部は「コ」の字状。	ヨコナデ ナデ(マメツ)	ナデ	灰茶褐色 灰黄褐色	石・長(1～2) ◎	黒斑	
300	甕	口径 (15.4) 残高 3.0	口縁部が直立し、口縁端部は丸味のある面をもつ。	ヨコナデ	マメツ (ヨコナデ)	乳白褐色 乳白褐色	石・長(1)金 ◎		
301	甕	残高 3.7	胴部片。	タタキ	ナデ	淡茶褐色 淡黄褐色	石・長(1～3) ◎		
302	甕	残高 5.7	胴部片。	タタキ→ ハケ(8本/cm)	ナデ	淡褐色 淡灰色	石・長(1～3) ◎		
303	甕	底径 (5.1) 残高 3.3	平底。	タタキ→ ハケ(7本/cm)	ハケ(6本/cm) →ナデ	暗褐色 暗褐色	石・長(1～2) ◎	黒斑	
304	甕	底径 (8.1) 残高 2.1	平底。	ミガキ	ナデ	茶褐色 暗褐色	石・長(1～2)金 ◎	黒斑	
305	甕	底径 (6.0) 残高 3.3	上げ底。	ナデ・ヨコナデ	ナデ	茶色 黒色	石・長(1～3)金 ◎	黒斑	
306	壺	口径 (34.5) 残高 5.8	大型品。広口壺。口縁端部を上下方に拡張し、端面に凹線文４条を施す。	ヨコナデ ハケ	ヨコナデ ミガキ	明茶色 明茶色	石・長(1～2)金 ◎	黒斑	24
307	壺	口径 (11.3) 残高 1.8	広口壺。口縁端部を上下方に拡張し、端面に凹線文３条を施す。	ヨコナデ	ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1～3)金 ◎		
308	壺	残高 2.8	広口壺。口縁端部は下方に垂下し、端面にヘラ描き沈線文(斜線)を施す。	ミガキ	ヨコナデ	乳茶褐色 乳茶褐色	石・長(1～3)金 ◎		
309	壺	残高 2.4	複合口縁壺。口縁拡張部外面に刻目。	ハケ(16本/cm) →ナデ	マメツ ハケ(12本/cm)	暗赤茶色 淡茶褐色	石・長(1) ◎		
310	壺	残高 1.3	口縁端部を上方に拡張する。	ナデ(マメツ)	ヨコナデ	淡茶褐色 淡茶褐色	長(1～3) ◎		
311	鉢	口径 (9.4) 残高 3.2	小型壺。口縁部が外反する。	ミガキ(マメツ)	ヨコナデ ミガキ？	茶褐色 茶褐色	石・長(1～2)金 ◎		
312	鉢	口径 (11.2) 残高 3.6	小型壺。口縁部が直立する。	ナデ(マメツ)	ナデ(マメツ)	乳白褐色 乳白褐色	密 ◎		
313	壺	残高 6.8	貼付凸帯文１条＋刻目。	マメツ・ハクリ	(胴)ミガキ	淡灰茶色 茶色	石・長(1～2)金 ◎		
314	壺	底径 (8.0) 残高 8.0	平底。	ミガキ (底)ナデ	ミガキ ナデ	暗褐色 茶色	石・長(1～3) ◎	黒斑	
315	壺	底径 (8.4) 残高 4.9	平底。	マメツ(ミガキ) (底)ナデ	マメツ ミガキ	茶褐色 茶褐色	石・長(1～3) ◎		
316	壺	口径 (26.8) 残高 3.0	口縁部外面に５条以上、口縁端部に２条の凹線文。	ナデ	ナデ	乳褐色 淡茶褐色	石・長(1～2) ◎		
317	高坏	底径 (10.7) 残高 2.7	裾部外面に3条、裾端部に1条の凹線文。脚部下位に矢羽根透かし1ヶ所(未貫通)。	マメツ	ヨコナデ	淡茶色 淡茶色	石・長(1～2) ◎		
318	高坏	残高 2.4	坏部片。坏部下位に稜をもつ。	ミガキ	(坏底)ミガキ (脚)工具ナデ？	淡褐色 淡褐色	石・長(1～2)金 ◎		
319	高坏	残高 6.7	柱部内面にシボリ痕。差込技法。	ナデ・ハケ (マメツ)	(坏底)ナデ (脚)ハケ・ナデ	黄褐色 黄褐色	石・長(1～4)金 ◎		
320	高坏	底径 (12.0) 残高 2.0	裾部片。赤色顔料付着。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡茶褐色 淡茶褐色	石・長(1)金 ◎		巻頭2
321	支脚	残高 5.6	受部。	ナデ	—	明黄茶褐色	石・長(1～4)金 ◎		
322	支脚	底径 (12.0) 残高 3.4	中空。	ナデ(マメツ)	ナデ(マメツ)	淡黄茶色 淡黄茶色	石・長(1～3) ◎		

ＳＤ２（１区上層）出土遺物観察表　土製品　（２）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
323	支脚	底径 (8.6) 残高 6.5	中空。	タタキ	ナデ	灰茶褐色 灰茶褐色	石・長(1～2)金 ◎	黒斑	
324	不明	残高 3.2	円形浮文(φ1.3cm)、上からφ0.3cmの押圧竹管文。	ナデ	マメツ(ナデ)	淡黄茶色 淡黄茶色	石・長(1～2) ◎		

表58　ＳＤ２（２区上層）出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
325	甕	口径 (13.8) 残高 1.2	小型品。口縁端部は上方に拡張し、端面に凹線文１条を施す。	ヨコナデ	ヨコナデ	淡褐色 淡茶褐色	石・長(1) ◎	黒斑	
326	甕	口径 (18.0) 残高 4.2	「く」の字状口縁。口縁端部は丸い。	マメツ(ハケ)	口ハケ(4本/cm) ナデ	乳褐色 乳黄茶色	石(1～3) ◎		
327	甕	口径 (12.4) 残高 8.5	「く」の字状口縁。口縁端部は先細り。	口ヨコナデ 胴ハケ(10本/cm)	口ヨコナデ 胴ケズリ	乳褐色 暗灰褐色	石・長(1～2)金 ◎		
328	甕	残高 5.0	胴部片。	タタキ→ ハケ(8本/cm)	ハケ(6本/cm)	明茶色 灰茶色	石(1～3) ◎		
329	壺	口径 (32.5) 残高 10.8	大型品。広口壺。口縁端面に凹線文３条を施す。凹線文上に刻目。貼付凸帯文１条+刻目。	ヨコナデ ハケ	口ハケ→ミガキ 鎖ミガキ	茶褐色 茶褐色	石・長(1～2) ◎		24
330	壺	残高 3.0	大型品。広口壺。口縁端部を上下方に拡張し、端面に凹線文３条以上を施す。	ハケ ナデ	ハケ(5本/cm)	乳茶褐色 淡黄褐色	石・長(1～2)金 ◎		
331	壺	残高 3.0	貼付凸帯文１条＋刻目。	ハケ→ナデ	ナデ	茶色 黒色	石・長(1～2) ◎	黒斑	
332	壺	底径 (6.4) 残高 3.3	平底。	ミガキ (マメツ)	マメツ (ミガキ？)	明茶色 明茶色	石・長(1～2)金 ◎		
333	壺	底径 4.9 残高 4.0	平底。	ハケ(12本/cm) 底ハケ・ナデ	ナデ 工具痕	乳黄茶色 褐灰色	石・長(1～3)金 ◎		
334	壺	底径 (6.0) 残高 9.6	平底。	ハケ(マメツ)	ハケ (6～7本/cm)	乳灰褐色 乳灰褐色	石・長(1～2) ◎	黒斑	
335	支脚	残高 6.7	受部。断面楕円形。	受ナデ 脚タタキ	シボリ痕	乳茶褐色 灰茶色	石(1～3)金 ◎	黒斑	
336	支脚	受部径 (12.3) 残高 4.5	受部。	ナデ	ナデ	灰茶色 淡灰茶色	石・長(1～3)金 ◎		
337	高坏	底径 8.1 残高 5.9	柱裾部に凹線文２条。長方形状の透かし３ヶ所。	坏回転ヘラケズリ 脚回転ナデ	回転ナデ	青灰色 暗灰色	密 ◎		

表59　ＳＤ２（３区上層）出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
338	甕	口径 (20.4) 残高 2.5	折曲口縁。口縁端部に刻目。胴部上位にヘラ描き沈線文３条以上。	ヨコナデ	口端ヨコナデ ナデ	乳茶褐色 乳茶褐色	石・長(1～2)金 ◎		
339	甕	残高 2.2	口縁端部は「コ」の字状。籾圧痕。	マメツ(ハケ)	口端ハケ→ナデ ハケ(8～10本/cm)	淡茶褐色 淡茶褐色	石・長(1～3) ◎		
340	壺	底径 (8.4) 残高 5.8	平底。	ミガキ	ナデ ナデアゲ	明茶色 灰茶褐色	石・長(1)金 ◎	黒斑	
341	壺	口径 (14.2) 残高 2.6	広口壺。口縁部は外反し、端部は平坦面をもつ。	マメツ (ヨコナデ)	ヨコナデ ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1) ◎		
342	壺	底径 (6.0) 残高 4.2	わずかに上げ底。	ハケ(7本/cm) →ナデ	ナデ	黄茶褐色 暗灰茶色	石(1～4)金 ◎	黒斑	
343	壺	底径 (7.8) 残高 4.6	平底。	ミガキ	ナデ ミガキ	茶色 茶色	石・長(1～3)金 ◎	黒斑	
344	高坏	残高 5.8	柱部に沈線文８条以上。内面にシボリ痕。矢羽根透かし１ヶ所看取。	ミガキ	坏ナデ 脚シボリ痕	茶褐色 灰褐色	石・長(1～4) ◎	黒斑？	
345	高坏	底径 (11.2) 残高 2.8	裾部に凹線文４条。	マメツ	ヨコナデ	乳灰色 乳灰褐色	長(1) ◎		
346	器台	残高 2.4	大型品。口縁端部を上下方に拡張し、端面に凹線文３条以上を施す。	マメツ	マメツ	明茶褐色 明茶褐色	石・長(1～3) ◎		

表60　ＳＤ２（礫層）出土遺物観察表　土製品　（１）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
347	壺	口径 (16.6) 残高 6.7	広口壺。口縁端部を上下方に拡張し、凹線文３条を施す。	ハケ→ナデ	ミガキ	乳褐色 乳褐色	石・長(1～2)金 ◎	黒斑	
348	壺	口径 (14.6) 残高 4.6	広口壺。口縁部は外反し、口縁端部は平坦面をもつ。	ミガキ→ナデ ハケ	ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1～3)金 ◎		

ＳＤ２(礫層)出土遺物観察表　土製品　(2)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
349	壺	口径 (15.6) 残高 4.0	広口壺。口縁部は外反し、口縁端部は丸い。	ヨコナデ ハケ(10～12本/cm)	板ナデ →ヨコナデ	褐色 褐色	石・長(1～3)金 ◎		
350	壺	口径 (16.9) 残高 6.0	複合口縁壺。沈線文５条＋波状文５条を施す。	ヨコナデ	マメツ	淡黄褐色 淡黄褐色	石・長(1～5)金 ◎		
351	壺	口径 (13.6) 残高 8.2	複合口縁壺。貼付凸帯文１条＋斜格子目文。	ヨコナデ	ヨコナデ ハケ(6～7本/cm)	乳褐色 灰黄褐色	石・長(1～5) ◎		
352	壺	残高 8.3	貼付凸帯文１条＋刻目。	ミガキ	ミガキ (マメツ)	茶褐色 黒色	石・長(1～6) ◎	黒斑	
353	甕	残高 5.1	胴部片。	タタキ→ハケ	ハケ→ナデ	乳白褐色 淡茶色	石・長(1～3) ◎		
354	甕	底径 6.0 残高 4.8	上げ底。	ミガキ ナデ	ナデ	暗茶褐色 茶色	石・長(1～4) ◎	黒斑	
355	甕	底径 4.0 残高 4.6	平底。	ハケ (ケズリ状)	ナデ (ハケ痕)	明茶褐色 明茶褐色	石・長(1～4) ◎		
356	壺	底径 (8.0) 残高 3.4	平底。	ミガキ？ (底)工具ナデ	ナデ ミガキ？	灰褐色 淡褐色	石・長(1～3)金 ◎	黒斑	
357	壺	底径 5.0 残高 3.8	平底。	ミガキ (ハケ痕)	ナデ (ミガキ痕)	淡褐色 淡灰褐色	石・長(1～4)金 ◎	黒斑	
358	鉢	残高 2.9	底部片。	ナデ ハケ	ハケ→ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1～3)金 ◎		
359	高坏	残高 7.3	柱部に沈線文８条以上。沈線文上に刻目。矢羽根透かし３ヶ所看取。内面にシボリ痕。	ミガキ	ナデ シボリ痕	乳黄白色 乳黄白色	石・長(1～2)金 ◎		24
360	支脚	底径 (12.8) 残高 5.4	中空。	ナデ	ナデ	乳黄褐色 淡黄褐色	石・長(1～4) ◎		

表61　ＳＤ２(ベルト)出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
361	壺	口径 (18.1) 残高 3.2	広口壺。口縁部上下方を拡張し、端面に凹線文３条を施す。	ヨコナデ	ヨコナデ マメツ	淡黄茶色 淡茶褐色	石・長(1～2)金 ◎		
362	壺	残高 2.1	複合口縁壺。貝殻施文による刻目。	ハケ(5本/cm)	ハケ→ナデ	淡茶色 淡灰褐色	石・長(1～3)金 ◎		
363	壺	残高 3.4	無頸壺。沈線文３条＋刻目。貼付凸帯文１条を施す。	マメツ	ヨコナデ マメツ	乳白色 乳黄灰色	石(1) ◎		
364	壺	残高 6.7	胴部上位に櫛描波状文５条＋櫛描沈線文５～６条。	ミガキ	ミガキ	茶褐色 暗灰茶色	石・長(1～3) ◎		
365	鉢	口径 (39.2) 残高 4.9	大型品。口縁部は外反する。	タタキ	マメツ (ミガキ)	乳橙褐色 乳橙褐色	石・長(1～3) ◎		
366	鉢	底径 3.2 残高 2.9	わずかに突出する平底。	マメツ	ナデ(マメツ)	乳橙色 橙褐色	石(1～4) ◎		
367	高坏	残高 3.6	口縁部外面に凹線文２条を施す。凹線文下位に竹管文(３ヶ１組を２列)。	ナデ→ミガキ	ナデ	灰茶褐色 淡茶色	石・長(1～2) ◎		

表62　ＳＤ２(トレンチ)出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
368	壺	口径 (16.3) 残高 4.1	広口壺。口縁部は外反し、口縁内面に竹管文２列を施す。	ミガキ	ナデ	茶褐色 褐色	石・長(1～2)金 ◎		
369	壺	残高 5.0	貼付凸帯文１条＋布目押圧。	ヨコナデ ハケ	ミガキ ナデ	茶褐色 茶褐色	石・長(1～3)金 ◎		
370	壺	残高 2.7	肩部片。貝殻文。	ミガキ	マメツ	明茶色 明茶色	石・長(1～2) ◎		
371	高坏	残高 7.2	柱部内面にシボリ痕。差込技法。	マメツ (ハケ？)	シボリ痕 ヨコナデ	乳白色 乳白色	石・長(1) ◎		
372	高坏	底径 (15.0) 残高 5.5	裾部外面に凹線文４条を施す。円孔(φ0.7cm)３ヶ所看取。	ナデ (脚端)ヨコナデ	ケズリ	暗褐色 乳黄褐色	石・長(1)金・角 ◎	黒斑	24

表63　ＳＤ５出土遺物観察表　土製品　(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
373	坏蓋	口径 (12.7) 残高 2.6	口縁端部は内傾する面をもつ。	回転ナデ	回転ナデ	青灰色 灰色	密 ◎		
374	甕	口径 (17.5) 残高 3.0	口縁部は内湾し、口縁端部は内傾する面をもつ。	ヨコナデ (マメツ)	ヨコナデ (マメツ)	灰茶褐色 灰茶褐色	石・長(1～3)銀 ◎		

ＳＤ５出土遺物観察表　土製品　（2）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
375	高坏	底径 (11.1) 残高 2.5	柱裾部内面に明瞭な稜をもつ。	ミガキ (脚端)ヨコナデ	ケズリ？ ヨコナデ	黒褐色 灰褐色	石(2) ◎		

表64　ＳＫ９出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
376	椀	口径 (12.2) 残高 4.3	口縁端部はわずかに内湾し、端部は丸い。	ミガキ (マメツ)	ミガキ (マメツ)	淡黄褐色 淡黄褐色	長(1) ◎		
377	坏身	口径 (11.4) 器高 4.6	底部は丸く、たちあがり端部は内傾する凹面をなす。	(口)回転ナデ (底)回転ヘラケズリ	回転ナデ	灰色 白灰色	密 ○		

表65　柱穴出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
378	甕	口径 (15.2) 残高 5.4	口縁部は外反し、口縁端部は丸い。	マメツ	(口)マメツ (胴)ナデ	灰黄褐色 茶褐色	石・長(1～2)金 ◎	SP266 煤付着	
379	鉢	口径 (8.8) 器高 8.4	口縁部は短く直立する。	(口)ヨコナデ ナデ(工具痕)	(口)ヨコナデ ナデ(マメツ)	明黄茶色 乳黄褐色	長(1～3)金 ◎	SP199	24
380	椀	口径 (11.6) 器高 5.4	口縁部は内湾し、立ち上がる。底部に葉脈痕。	ナデ	ナデ	茶褐色 乳茶褐色	石・長(1～2)金 ◎	SP199	24
381	椀	口径 (12.2) 器高 4.2	口縁部は内湾し、立ち上がる。口縁端部は先細る。	(口)ヨコナデ (体)ナデ	マメツ	黄茶褐色 黄茶褐色	石・長(1)金 ◎	SP333 黒斑	
382	椀	口径 (12.1) 器高 4.3	口縁部は内湾し、立ち上がる。口縁端部は先細る。	マメツ	マメツ(ナデ)	黄茶褐色 黄茶褐色	石・長(1～4) ◎	SP161	
383	椀	口径 (15.9) 残高 3.8	口縁端部は丸い。	ヨコナデ	ヨコナデ	茶色 茶色	石・長(1) ◎	SP83	
384	椀	口径 (13.8) 残高 4.7	口縁端部は内傾する面をもつ。	(口)ヨコナデ ナデ(マメツ)	(口)ヨコナデ ナデ	茶色 茶色	石・長(1) ◎	SP57	
385	坏蓋	残高 2.6	坏蓋片。稜は明瞭。	回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 暗灰色	密 ◎	SP67	
386	坏身	口径 (9.9) 残高 4.6	底部は丸く、たちあがり端部は内傾する凹面をなす。	(口)回転ナデ (底)回転ヘラケズリ	回転ナデ (底)ナデ	灰色 灰色	密 ◎	SP96	
387	高坏	底径 8.4 残高 9.4	脚端部は下方に屈曲する。柱部中位に円孔(φ1.2cm)３ヶ所。	回転ナデ (坏底)回転ヘラケズリ	回転ナデ	暗灰色 青灰色	密 ◎	SP266	
388	高坏	口径 (10.0) 残高 8.4	たちあがり端部は内傾する凹面をなす。柱部中位に円孔(φ1.0cm)３ヶ所。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	SP266	
389	高坏	底径 (10.0) 残高 6.6	脚端部は下方に屈曲する。長方形状の透かし２ヶ所看取。	(脚)カキメ 回転ナデ	回転ナデ	暗灰色 青灰色	密 ◎	SP276	
390	高坏	底径 (8.4) 残高 4.7	脚上位に円孔(φ0.8cm)２ヶ所看取。	(坏底)回転ヘラケズリ (脚)カキメ	(坏底)ナデ 回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎	SP186	
391	椀	口径 (14.3) 残高 4.7	胴部中位に凸線１条を施す。下位に波状文３～５条。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	SP30 自然釉	
392	壺	口径 (19.1) 残高 2.7	広口壺。口縁端部は三角形状に肥厚する。	回転ナデ カキメ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎	SP120	
393	器台	残高 5.2	凸線２条２段、凸線間に波状文を施す。	回転ナデ	ナデ	黒灰色 灰色	密 ◎	SP144	
394	甕	残高 4.1	貼付凸帯文１条＋指頭押圧。	(口)ヨコナデ (胴)ミガキ	(口)ナデ→ミガキ (胴)ミガキ・ハケ	茶褐色 茶褐色	石・長(1～2)金 ◎	SP57	
395	甕	残高 5.8	大型品。胴部にヘラ描き沈線文１条。	ミガキ	ミガキ	乳褐色 明茶色	石・長(1～3)金 ◎	SP84	
396	甕	底径 6.6 残高 2.9	わずかに上げ底。２次焼成痕。	マメツ (底)ナデ(マメツ)	ミガキ (工具痕)	暗褐色 暗灰褐色	石・長(1～4)金 ○	SP25 黒斑	
397	鉢	口径 (16.4) 残高 6.2	直口口縁。	(口)ナデ タタキ	ハケ(7本/cm) (底)ナデ	茶色 黄茶褐色	石・長(1～3) ◎	SP30	
398	製塩土器	残高 4.7	器壁うすい。２次焼成痕。	マメツ	マメツ	赤茶色 暗灰茶褐色	密 ◎	SP266	

表66　柱穴出土遺物観察表　石製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
399	石庖丁	1／2	緑色片岩	4.8	9.5	8.5	60.3	SP52	24

表67　柱穴出土遺物観察表　金属製品

番号	器　種	残　存	材　質	法　量				備　　考	図版
				長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
400	鉄鏃	ほぼ完存	鉄	4.2	2.0	0.3	4.2	SP145	24
401	鉄滓	—	鉄	2.4	5.0	1.5	29.2	SP149	24

表68　第Ⅵ層出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調　整		色調(外面)(内面)	胎　土 焼　成	備考	図版
				外　面	内　面				
402	甕	口径 (17.1) 残高　4.9	口縁部は内湾し、口縁端部は内傾する面をもつ。	口ヨコナデ 胴ハケ	口ヨコナデ 胴板ナデ→ナデ	灰茶褐色 灰茶褐色	石・長(1～2)金 ◎		
403	甑	口径 (22.2) 残高　5.2	口縁端部は内傾する凹面をなす。	口端ヨコナデ ハケ(8本/cm)	ヨコナデ	灰褐色 淡茶色	石・長(1～2)金 ◎		
404	甑	口径 (29.9) 残高　5.2	口縁端部は内傾する面をなす。	ナデ ハケ(5本/cm)	マメツ(ハケ)	淡褐色 淡褐色	石・長(1～2)金 ◎		
405	甑	残高　9.3	把手で断面は楕円形。	ナデ	ナデ	乳黄褐色 乳灰褐色	石・長(1～4)金 ◎		
406	鉢	口径 (27.5) 残高　5.1	口縁部は外反する。	マメツ	口ヨコナデ 胴ナデ	灰色 灰色	密 ◎		
407	坏蓋	口径 (12.3) 器高　3.9	天井部は扁平で、口縁端部は内傾する凹面をなす。稜は明瞭。	天回転ヘラケズリ 口回転ナデ	天ナデ 口回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		25
408	坏蓋	口径 (12.0) 器高　4.9	天井部は扁平で、口縁端部は内傾する凹面をなす。稜は明瞭。	天回転ヘラケズリ 口回転ナデ	回転ナデ	灰色 青灰色	密 ◎		
409	坏蓋	口径　12.8 器高　4.3	天井部は扁平で、口縁端部は内傾する凹面をなす。稜は明瞭。	天回転ヘラケズリ 口回転ナデ	回転ナデ	灰色 青灰色	密 ◎		
410	坏身	口径 (10.1) 残高　5.1	たちあがりは短く内傾する。底部外面にヘラ切り痕が残る。	口回転ナデ 底回転ヘラ切り	回転ナデ 底ナデ	白灰色 白灰色	密 ◎		25
411	蓋	口径 (12.4) 器高　5.3	有蓋高坏の蓋。つまみ中央部は凹む。口縁端部は内傾する。	天回転ヘラケズリ 回転ナデ	回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
412	高坏	口径 (11.9) 残高　3.8	無蓋高坏。胴部中位に凸線1条。下位に波状文8～10条。	回転ナデ	回転ナデ	黒灰色 黒灰色	密 ◎		
413	高坏	底径　7.3 残高　3.3	脚中位に円孔(φ0.7cm)4ヶ所。	坏底回転ヘラケズリ 回転ナデ	坏底ナデ 回転ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
414	甑	底径 (15.3) 残高　6.3	円孔(φ3.0cm)1ヶ所看取。	マメツ	ヨコナデ ナデ	乳灰褐色 淡灰褐色	密 ○		
415	器台	底径 (22.5) 残高　7.0	沈線文4条以上。沈線文上に波状文。脚部下位に凸線2条。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 白灰色	密 ◎		
416	甕	口径 (18.4) 残高　5.6	口縁部は内湾し、口縁端部はわずかに肥厚する。	口ヨコナデ 胴ナデ・ミガキ	口ハケ・ヨコナデ 胴ミガキ	暗茶褐色 灰茶褐色	石・長(1～3) ◎	黒斑	
417	壺	口径 (15.3) 残高　5.5	口縁端部を上下方に拡張し、端面に凹線文3条を施す。	ヨコナデ 工具痕	口ヨコナデ 頸板ナデ(工具痕)	茶褐色 茶褐色	石・長(1) ◎		
418	壺	口径 (13.0) 残高　6.6	複合口縁壺。貼付凸帯文1条＋斜格子目文。	ヨコナデ	ヨコナデ ナデ	明黄茶色 乳茶色	石・長(1～2) ◎		
419	壺	口径 (18.2) 残高　6.8	複合口縁壺。波状文18条(6条1組)、斜格子目文を施す。	ヨコナデ ハケ(8本/cm)	ヨコナデ ハケ(4本/cm)	明茶褐色 明茶褐色	石・長(1～2)金 ◎		
420	壺	口径 (25.0) 残高　3.8	広口壺。口縁端部を上下方に拡張し、端面に波状文6条を施す。	ヨコナデ ハケ(7本/cm)	ヨコナデ ハケ・ミガキ	明茶褐色 淡褐色	石・長(1)金 ◎	黒斑	
421	壺	口径 (23.8) 残高　6.3	広口壺。口縁端部を下方に拡張し、端面に波状文4条を施す。	マメツ (ナデ・ハケ)	マメツ	明茶褐色 明茶褐色	石・長(1～4) ◎		
422	壺	残高　4.2	大型品。内面貼付凸帯文1条。凸帯横にヘラ描き沈線文。口縁端面に沈線文2条＋刻目。	ナデ	ナデ	乳白褐色 乳白褐色	石・長(1～4) ◎		
423	壺	残高　7.2	胴部片。ヘラ描き沈線文5条＋貝殻文。	ミガキ (マメツ)	ナデ 工具痕	茶色 茶色	石・長(1～2) ◎		
424	壺	口径　(9.3) 残高　3.5	短頸壺。	ナデ	口ヨコナデ ナデ	黄褐色 淡褐色	石・長(1～2)金 ◎		
425	高坏	残高　8.4	脚部片。	ミガキ	坏ミガキ 脚ナデ	暗灰褐色 暗灰褐色	石・長(1～4) ◎	黒斑	
426	甕	底径　1.7 残高　4.5	平底。	タタキ	ナデ	淡黄褐色 淡黄褐色	石・長(1～2)金 ◎	黒斑 煤付着	
427	壺	残高　3.2	内外面に赤色顔料付着。	ナデ	ナデ	淡茶色 淡茶色	石・長(1)金 ◎		巻頭2

表69　第Ⅳ層出土遺物観察表　土製品　(1)

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調　整		色調(外面)(内面)	胎　土 焼　成	備考	図版
				外　面	内　面				
428	羽釜	口径 (23.1) 残高　5.5	断面長方形状の鍔が付く。	ヨコナデ (マメツ)	ヨコナデ ナデ	淡灰褐色 乳褐色	石・長(1～4)金 ○		

第Ⅳ層出土遺物観察表　土製品　（2）

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
429	坏	口径 (11.6) 器高 3.9	回転ヘラ切り技法。	ヨコナデ	マメツ (ヨコナデ)	淡茶色 乳灰褐色	石・長(1) ◎	黒斑 煤付着	
430	坏	底径 (6.3) 残高 2.5	回転ヘラ切り技法。	マメツ	マメツ	白灰褐色 白灰褐色	密 ○		
431	坏	底径 (8.9) 残高 1.1	底部片。	ナデ？	マメツ	白灰色 白灰色	密 ◎		
432	横瓶	残高 12.7	胴部片。	格子叩き	当て具痕(無文) →ナデ消し	灰褐色 灰色	密 ◎		

表70　地点不明出土遺物観察表　土製品

番号	器種	法量(cm)	形態・施文	調整 外面	調整 内面	色調(外面)(内面)	胎土 焼成	備考	図版
433	甕	残高 4.6	折曲口縁。胴部上位にヘラ描き沈線文４条を施す。	ヨコナデ ミガキ(マメツ)	ミガキ	乳白褐色 乳白褐色	石・長(1～3)金 ◎		
434	壺	口径 (24.1) 残高 2.5	口縁端部を下方に垂下し、端面に波状文５条を施す。	ヨコナデ ハケ(5本/cm)	マメツ	黄茶褐色 黄茶褐色	長(1～5) ◎		
435	壺	残高 7.1	大型品。胴部上位にヘラ描き沈線文１条を施す。	ミガキ	ミガキ	淡黄褐色 淡黄褐色	石・長(1～3)金 ◎		
436	支脚	底径 (8.2) 残高 11.4	タタキ痕が顕著。中空。	タタキ	ナデ ハケ(13本/cm)	淡褐色 淡褐色	石・長(1～6) ◎	黒斑	
437	坏	底径 (6.8) 残高 1.7	回転ヘラ切り技法。	ヨコナデ	ヨコナデ	茶褐色 茶褐色	密 ◎		
438	椀	口径 (11.3) 器高 3.7	口縁部は内湾し、立ち上がる。端部は丸い。	マメツ	マメツ	茶褐色 淡茶褐色	石(1) ○		
439	土釜	口径 (24.4) 残高 6.3	口縁部下に断面三角形状の鍔が付く。	(口端)ヨコナデ ナデ	ハケ・ナデ (マメツ)	灰茶褐色 灰茶褐色	石・長(1～2)金 ◎	煤付着	
440	碗	底径 (6.9) 残高 1.6	断面三角形状の高台。	施釉	施釉	灰緑色 淡灰色	密 ◎	胎土: 灰色	
441	坏蓋	口径 (14.9) 残高 5.1	天井部は丸く、口縁端部は丸い。	(天)回転ヘラケズリ (口)回転ナデ	(天)ナデ (口)回転ナデ	灰色 白灰色	密 ◎		
442	坏身	口径 10.8 器高 4.8	底部は丸い。たちあがり端部は内傾する凹面をなす。	(口)回転ナデ (底)回転ヘラケズリ	(口)回転ナデ (底)ナデ	青灰色 青灰色	密 ◎		
443	坏身	口径 (10.0) 残高 2.7	たちあがりは短く内傾する。	回転ナデ	回転ナデ	白灰色 白灰色	密 ◎		
444	器台	残高 4.6	櫛描き波状文10～12条を施す。	回転ナデ	回転ナデ	灰色 灰色	密 ◎		巻頭2 25
445	壺	口径 (24.3) 残高 6.5	口縁端部は三角形状に肥厚する。口縁端部下位に凸線1条。凸線下に波状文7条。	(口端)回転ナデ 叩き→回転ナデ	回転ナデ	青灰色 緑灰色	密 ◎	自然釉	

表71　地点不明出土遺物観察表　石製品（1）

番号	器種	残存	材質	法量 直径(cm)	法量 孔径(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
446	紡錘車	完存	滑石	4.5	0.8	1.5	44.2		25

表72　地点不明出土遺物観察表　石製品（2）

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
447	石斧	ほぼ完存	緑色片岩	9.4	3.9	2.3	147.7		25
448	打製石鏃	完存	サヌカイト	1.7	1.0	0.2	0.3		

表73　地点不明出土遺物観察表　金属製品

番号	器種	残存	材質	法量 長さ(cm)	法量 幅(cm)	法量 厚さ(cm)	法量 重さ(g)	備考	図版
449	鉄鏃	1／2	鉄	3.3	3.2	0.3	4.7		25
450	鉄滓	—	鉄	5.0	3.5	1.9	44.6		25
451	鉄滓	—	鉄	3.3	3.7	2.8	48.0		25

第４章　調査の成果と課題

今回の調査では弥生時代から古墳時代の遺構と古代の遺物を検出した。12次調査では主に古墳時代中期から後期の遺構と古代（平安時代後期）の遺物を検出した。13次調査では弥生時代前期と古墳時代中期から後期までの遺構を検出した。ここでは両遺跡で確認された遺構をもとに集落変遷を中心にまとめをおこなう。

（１）集落変遷

１）弥生時代

13次調査では前期前半の土坑ＳＫ１と前期後半の土坑ＳＫ４を検出した。このうち、ＳＫ４は直径１ｍ、深さ48cmを測る楕円形土坑で土坑壁体が一部袋状となることから貯蔵穴の可能性がある。前期前半では樽味遺跡1次調査から溝と土坑、前期中頃では樽味遺跡５次調査から竪穴住居が検出されている。前期末～中期初頭では樽味立添遺跡３次調査から大溝が検出されており、樽味地区東部で前期集落が存在する可能性が示唆されている。中期の遺構は未検出であるが、後世の竪穴住居や土坑、溝などから中期後半の遺物が出土している。樽味地区では、弥生時代後半から古墳時代の遺構内から該期の遺物が出土する事例が多く、埋戻しによる流入遺物と考えられている。後期では前半の遺構は未検出であるが、後半では13次調査において、直径5.70ｍを測る円形住居ＳＢ４と、一辺５ｍを測る隅丸方形住居ＳＢ２が検出されている。該期の遺構は調査地南東～北東側の樽味四反地遺跡８・９次調査、樽味高木遺跡８・９・11次調査から竪穴住居と土坑などを多数検出していることから、集落経営が順調であったことが窺われる。遺物では12次調査検出のＳＢ１とＳＫ１及び13次調査検出のＳＤ２から分銅形土製品が出土した。松山平野では道後地区から分銅形土製品の出土例が多いが、樽味地区でも遺構内から分銅形土製品の出土する割合は比較的高く、他地域との交流が盛んであったことを示唆するものである。

２）古墳時代

特筆すべき遺構は、１号大型建物、２号大型建物に続く３号大型建物を検出したことである。樽味地区では平成10年度に樽味四反地遺跡６次調査において１号大型建物、平成15年度には樽味四反地遺跡８次調査において２号大型建物がそれぞれ検出されている。今回検出された大型建物は総柱構造を呈し、床面積100㎡前後を越える。弥生時代後期後葉の竪穴住居に後出して検出されたことから、少なくとも建物の上限は弥生時代後期後葉以降と考えられる。なお、詳細は（２）大型建物で説明する。前期前半では13次調査において溝ＳＤ２を検出した。溝内からは、弥生時代中期後半から古墳時代前期に時期比定される遺物が混在して出土した。出土状況からは人為的に埋戻されたものと推測される。出土遺物より、大型建物と併存していた可能性が非常に高い遺構であり、大型建物と密接な関係にある可能性も高い。前期後半では樽味高木遺跡16次調査にて一辺６ｍを測るＳＢ１が検出されている。中期後半では13次調査にて一辺３～４ｍを測る方形住居ＳＢ３・５・６・８、後期前半では８ｍを超える方形住居ＳＢ９、後期後半では12次調査にて一辺７ｍを超える方形住居ＳＢ１を検出した。樽味立添遺跡１次調査や樽味四反地遺跡２～４・６・８次調査からは掘立柱建物が検出されており、竪穴住居から掘立柱建物に移行されていったことが窺える。竪穴住居の重複や切り合いが多数みられることから、樽味地区では古墳時代中期から後期にかけて、集落経営が盛んにおこなわれていたことがわかる。

今回の調査で検出した12次調査のＳＢ１や13次調査のＳＢ９～11からは滑石製の臼玉が出土した。樽味地区では住居内から臼玉やガラス小玉が出土する事例が多く、住居廃絶における祭祀遺物として使用された可能性も考えられる。

３）古　代

12次調査からは包含層資料であるが、平安時代後期の遺物が出土した。樽味四反地遺跡８次調査や樽味森ノ木遺跡１次調査から10～11世紀代の土坑が検出されているほか、樽味四反地遺跡１・５次調査では自然流路が検出されている。

遺物は樽味四反地遺跡５次調査から円面硯や奈良三彩の小壺が出土している。古代の遺構は検出事例が少ないものの、これらの遺物から樽味地区において官衙や寺院関係の遺構の存在が想定される。

（２）大型建物

古墳時代初頭の大型建物を検出した。これまでの調査において、樽味四反地遺跡６次調査（平成10年度：１号大型建物と呼称）、同８次調査（平成15年度：２号大型建物と呼称）で、それぞれ大型建物が発見されている。大型建物（３号大型建物と呼称）は樽味地区において３例目となるが、前述の２棟の建物と今回検出した大型建物と比較すると共通点と相違点がある。共通点では建物方位（軸線）、建物を構成する側柱や束柱の平面形態があげられる。平面形態では、側柱は柱抜き取りのために隅丸長方形を呈するのに対し、束柱は円形または楕円形を呈する点である。一方、相違点は、建物規模、柱穴規模などである（表74参照）。建物規模は床面積から、２号建物が最も大きく、３号建物の約1.5倍、次いで１号建物が３号建物の1.3倍となる。柱穴規模では、１号及び２号建物は側柱が長さ２ｍを超えるのに対し、今回検出のそれは最大のもので1.4ｍである。柱痕規模でも２号建物が最も大きく、３号建物のそれは２号建物の約１／２である。建物の時期は判断しえないが、３棟が同時期に併存していたか、あるいは一時期の併存か、もしくは時期を隔てて存在したかは今後の議論の焦点となる。

今回の調査における最大の成果は、３号大型建物の検出である。しかしながら、天候不良等のため調査進行が当初の予定より遅れたことで建物を構成する、すべての柱穴を測量することができず、１・２号大型建物で確認できた柱穴抜き取り痕や堆積状況などの詳細な記録を取れなかったことに対しては、課題が残る結果となった。

そのほか、注目される遺構にはＳＢ９がある。ＳＢ９は一辺８ｍを超える比較的大きな竪穴住居で、調査当初に切り合いや、建て替えがあるものと考え掘り下げをおこなった。その結果、住居の建て替えは判断できたが、遺物の取り上げは区別することができなかったため、住居の詳細な時期や、内部施設の解明には至らなかった。今後、樽味地区における大型竪穴住居の調査は、注意する必要がある。

これからは、１号、２号、３号大型建物の構造や同時期の遺構確認をし、樽味地区における重要遺跡確認調査を進めていく必要がある。

表74　大型建物一覧

遺 跡 名	樽味四反地遺跡13次		樽味四反地遺跡８次		樽味四反地遺跡６次	
調査年度	平成17年度		平成15年度		平成10年度	
建物名称	３号大型建物		２号大型建物		１号大型建物	
建物規模	６間×５間？ （10.6m×9.6m）		６間×６間 （14.2m×11.4m）		６間×６間 （12.7m×10.1m）	
床 面 積	101.76㎡		161.88㎡		128.60㎡	
柱穴形態	側柱	隅丸長方形～ 楕円形	側柱	隅丸長方形～ 楕円形	側柱	隅丸長方形～ 楕円形
	束柱	円～楕円形	束柱	円～楕円形	束柱	円～楕円形
柱穴規模	側柱	長辺：60～140cm 短辺：50～100cm 深さ：64cm	側柱	長辺：107～255cm 短辺：93～160cm 深さ：100cm	側柱	長辺：98～220cm 短辺：60～100cm 深さ：60cm
	束柱	長径：45～70cm 短径：40～70cm 深さ：20～60cm	束柱	長径：70～140cm 短径：60～80cm 深さ：30～70cm	束柱	長径：50～120cm 短径：45～70cm 深さ：15～25cm
柱痕規模	20cm		40cm		30cm	

写 真 図 版

写真図版データ

1．遺構は、主な状況については、4×5判や6×7判の白黒ネガフィルム・カラーリバーサルフィルムで撮影し、35㎜判で補足している。一部の撮影には高所作業車を使用した。

使用機材：

カメラ	トヨフィールド45A	レンズ	スーパーアンギュロン90㎜他
	アサヒペンタックス67		ペンタックス67　55㎜他
	ニコンニュー FM 2		ズームニッコール28～85㎜他
フィルム	白　黒　ネオパン SS・アクロス		
	カラー　アスティア100F		

2．遺物は、4×5判で撮影した。すべて白黒ネガフィルムを使用しているが、一部はカラーリバーサルフィルムでも撮影している。

使用機材：

カメラ	トヨビュー 45G
レンズ	ジンマー S 240㎜ F 5.6他
ストロボ	コメット /CA32・CB2400
スタンド等	トヨ無影撮影台・ウエイトスタンド101
フィルム	ネオパンアクロス・エクタクローム EPP

3．単色図版は、白黒プリントを等倍で使用できるように焼き付けている。

使用機材：

引伸機	ラッキー 45MD・90MS
レンズ	エル・ニッコール135㎜ F5.6A・50㎜ F2.8N
印画紙	イルフォードマルチグレードⅣ RC ペーパー

4．製版　写真図版175線

印刷　オフセット印刷

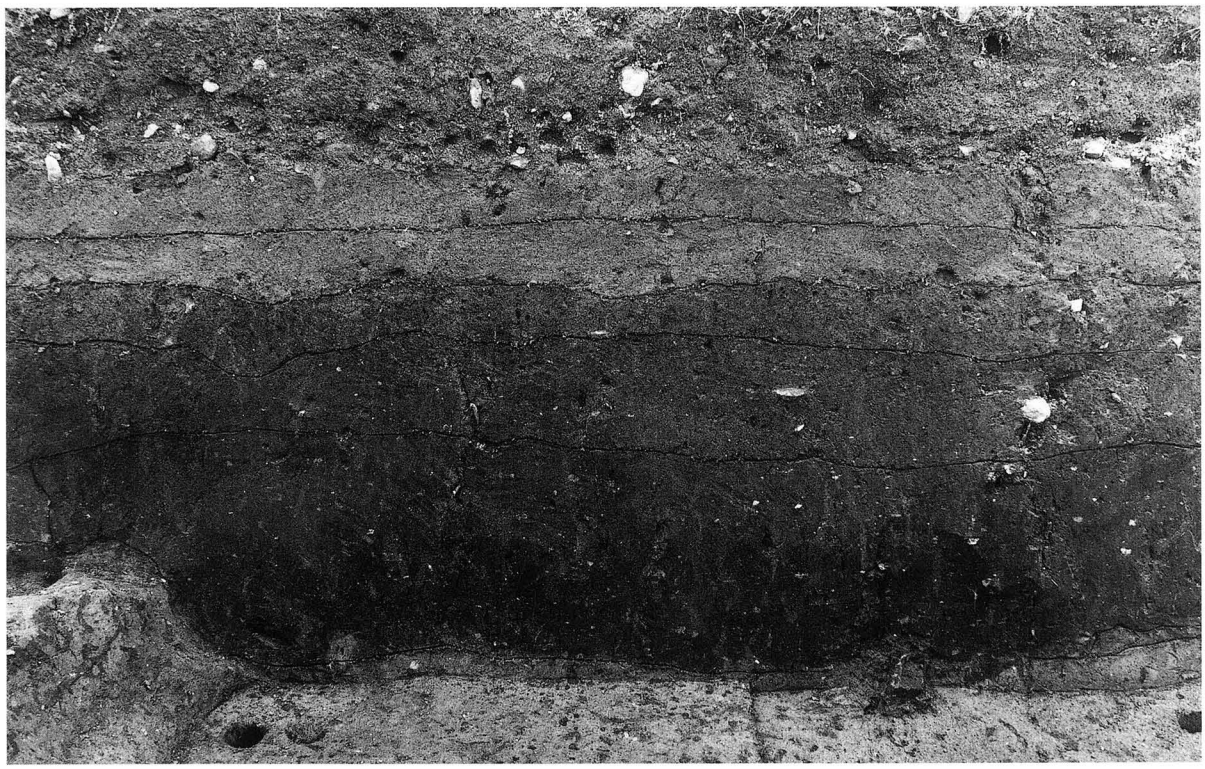
用紙　マットコート

製本　アジロ綴じ

【参考】『埋文写真研究』vol.1～19　『報告書制作ガイド』

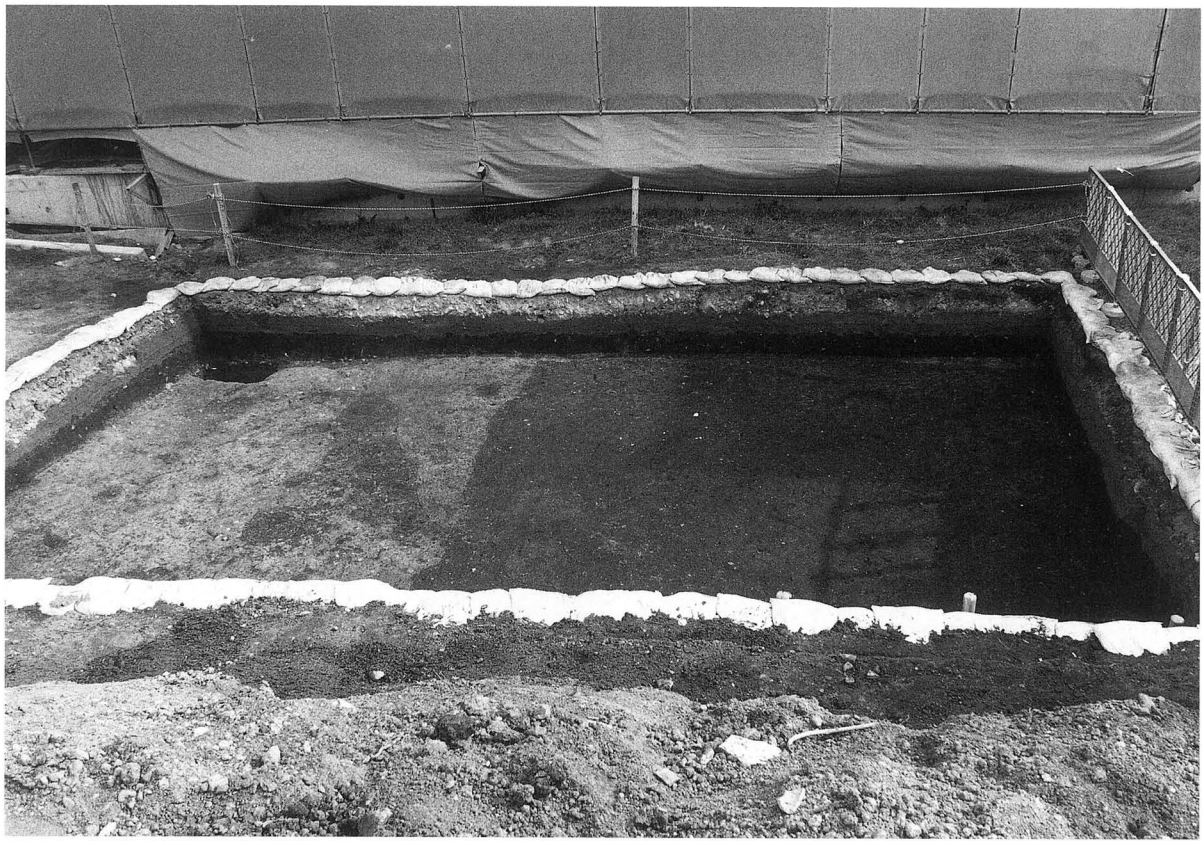
［大西朋子］

1．調査地全景（南西より）



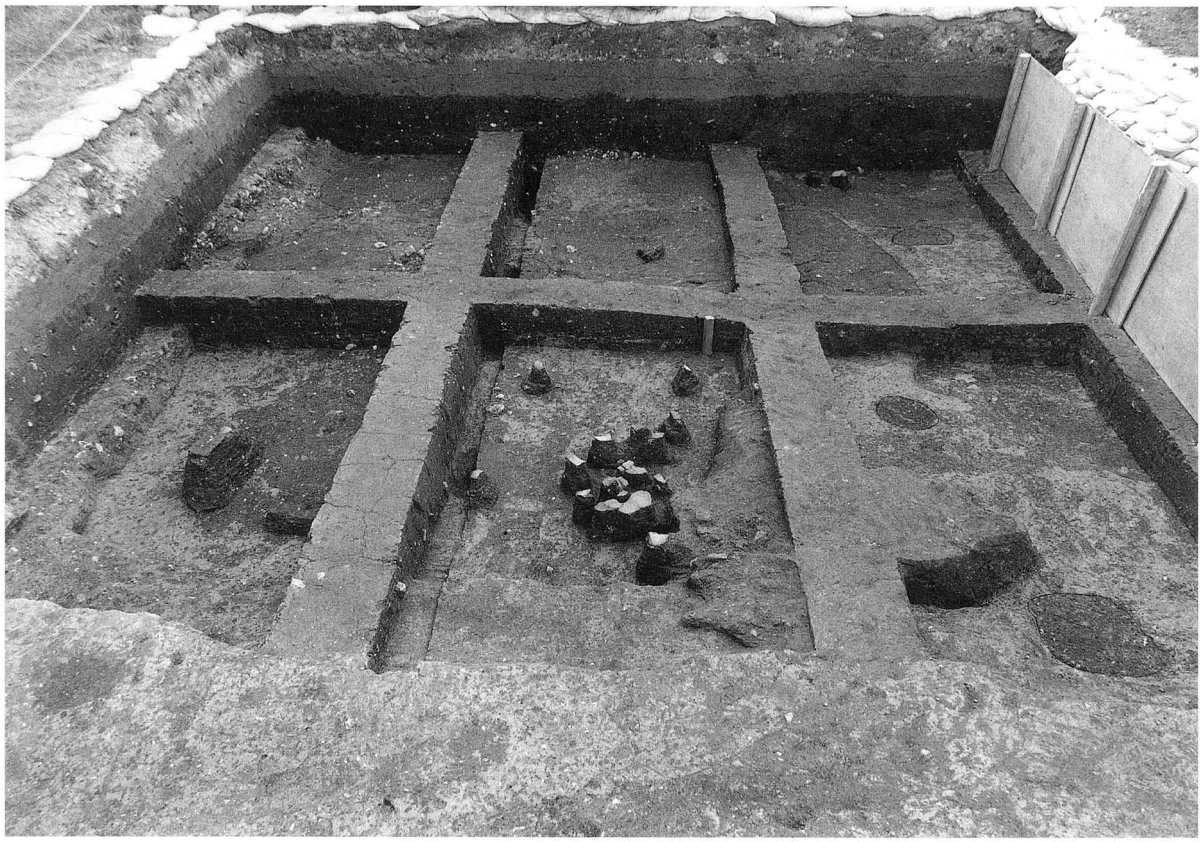
2．南壁土層（北より）

図版 2

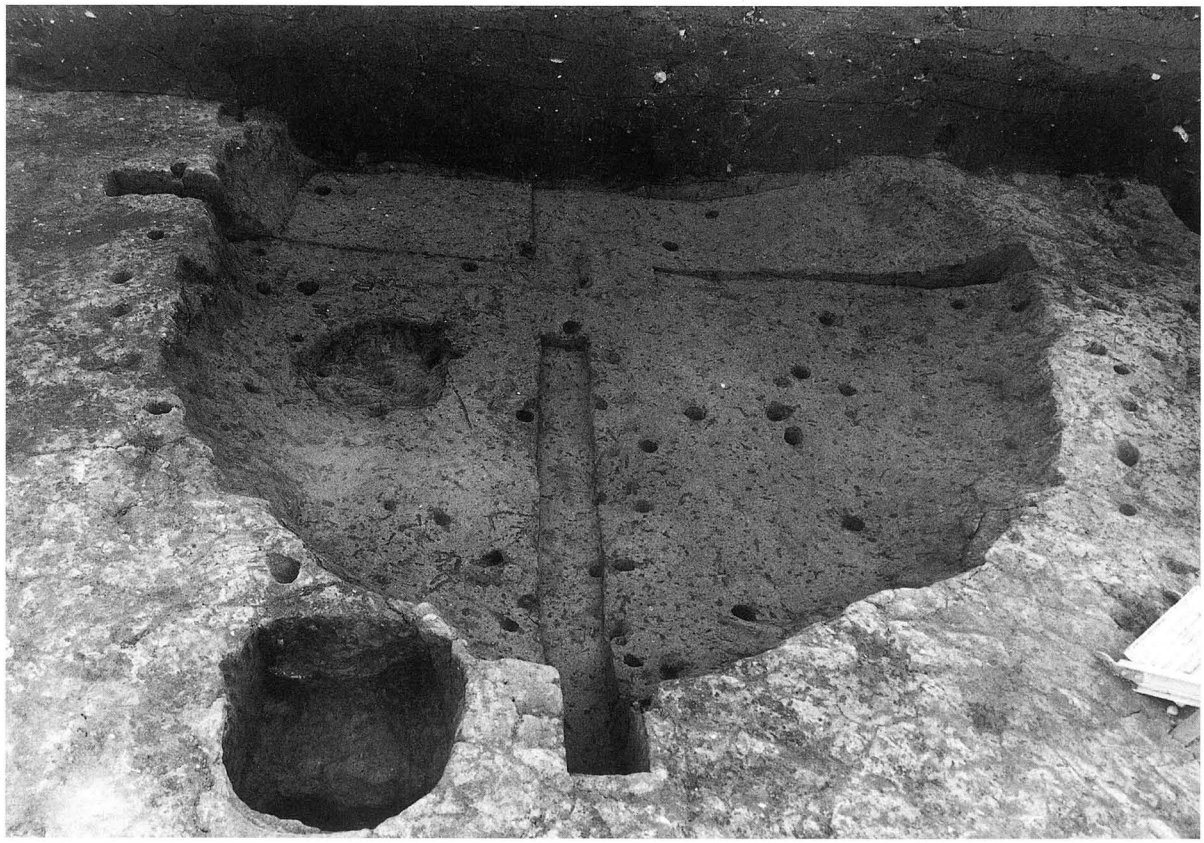


1．東半部検出状況（西より）

2．西半部検出状況（東より）



1．ＳＢ１検出状況（北より）



2．ＳＫ１完掘状況（北より）

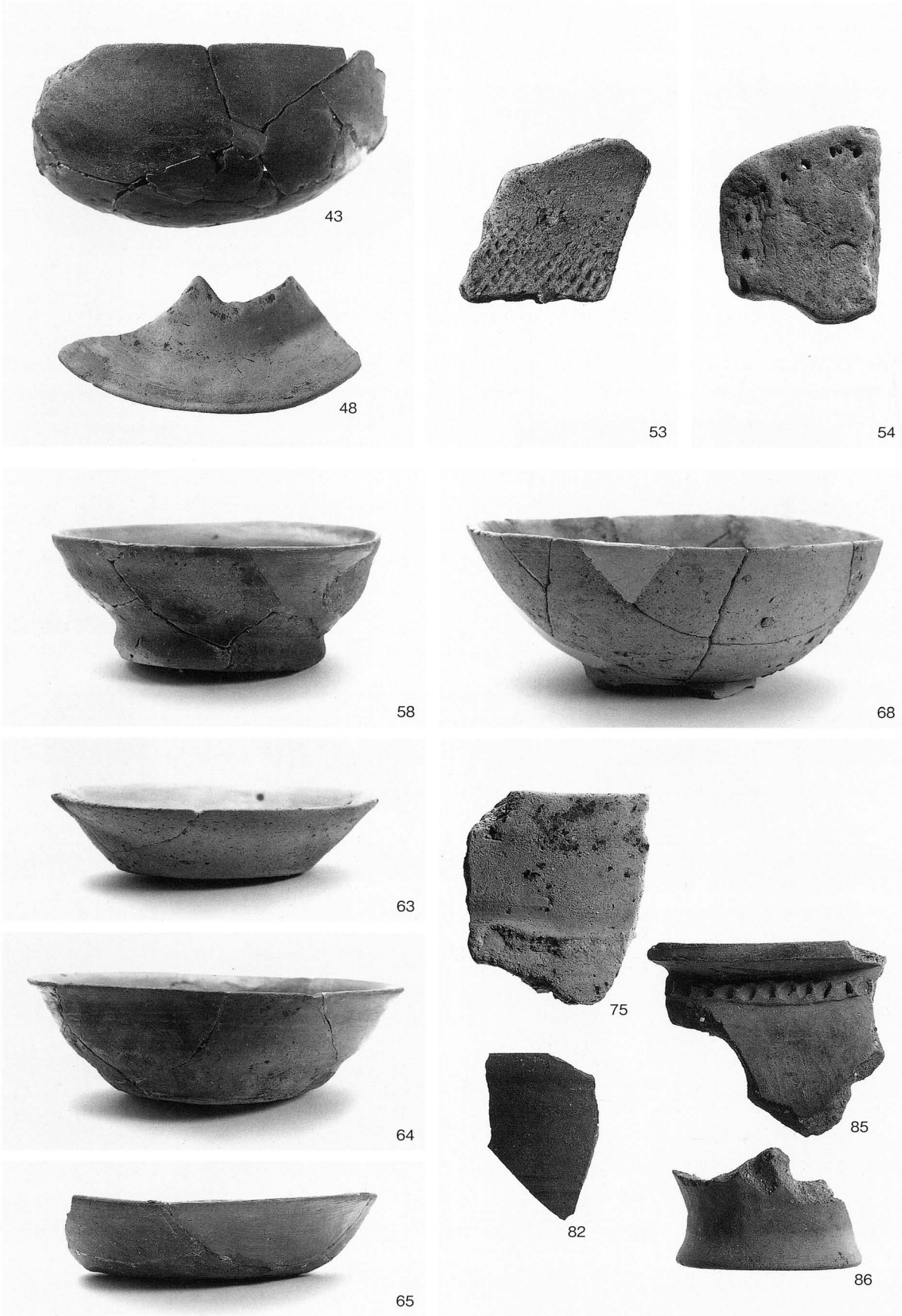
図版 4

1．掘立１完掘状況（東より）

2．作業風景（北西より）

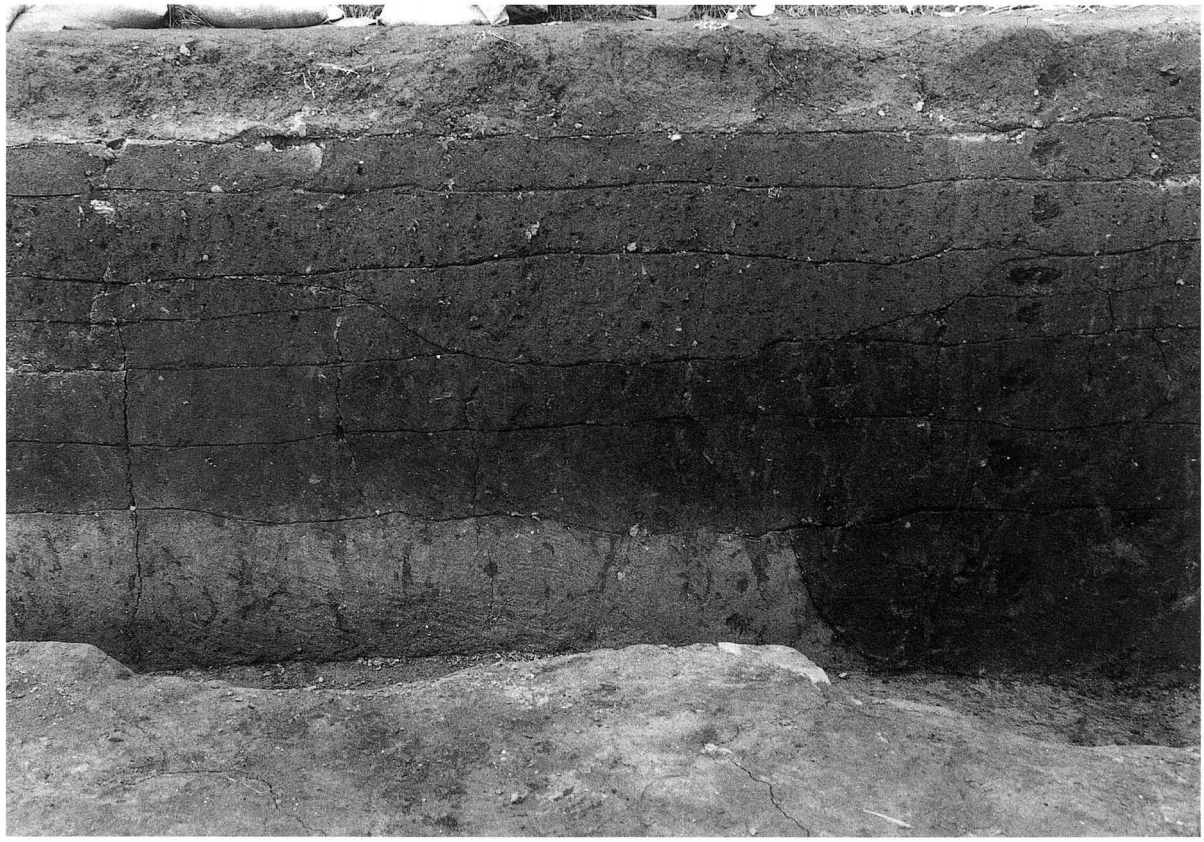
1．ＳＢ１出土遺物

図版 6



1．出土遺物（ＳＫ１：43・48・53・54、包含層：58・63～65・68・75・82・85・86）

1．調査地全景（北西より）



2．西壁土層（東より）

図版 8

1．北半部遺構検出状況（北より）

2．南半部遺構検出状況（北より）

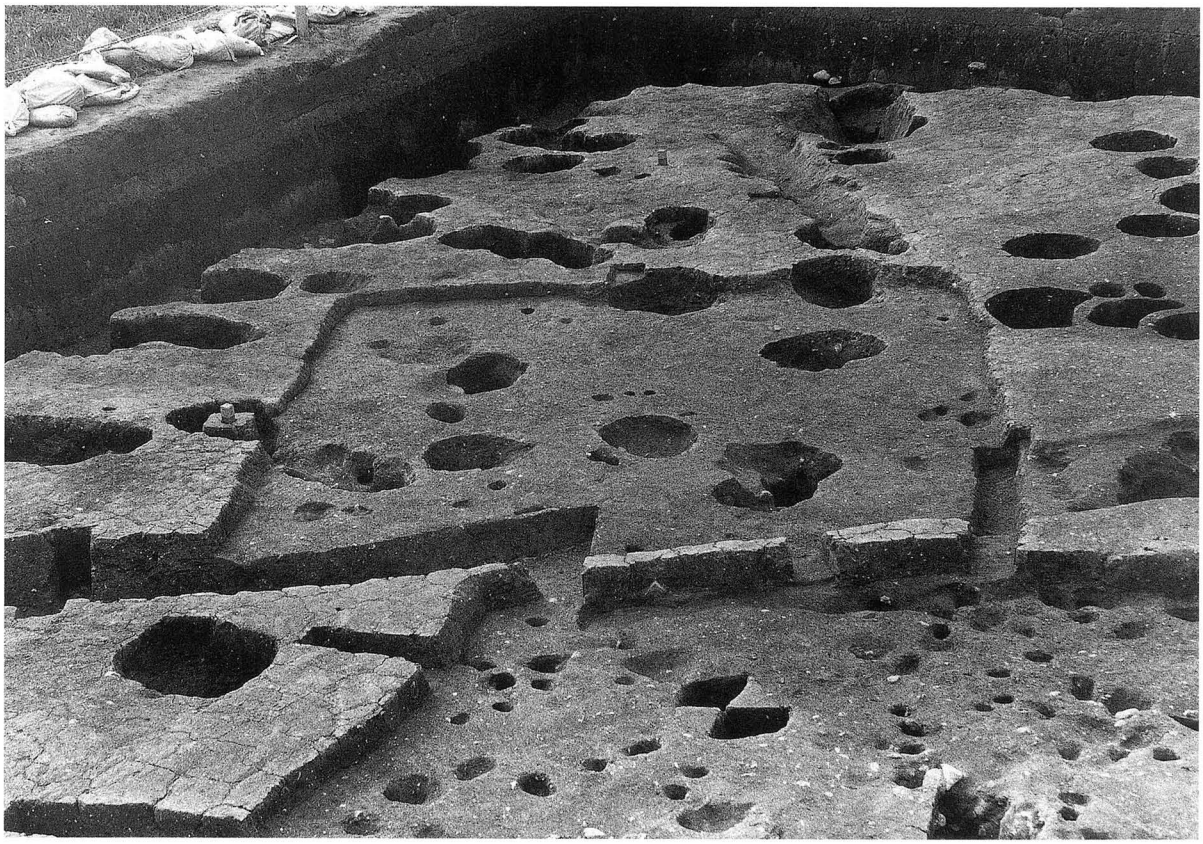
1．遺構完掘状況（北より）

図版10

1．ＳＢ２・10完掘状況（北東より）

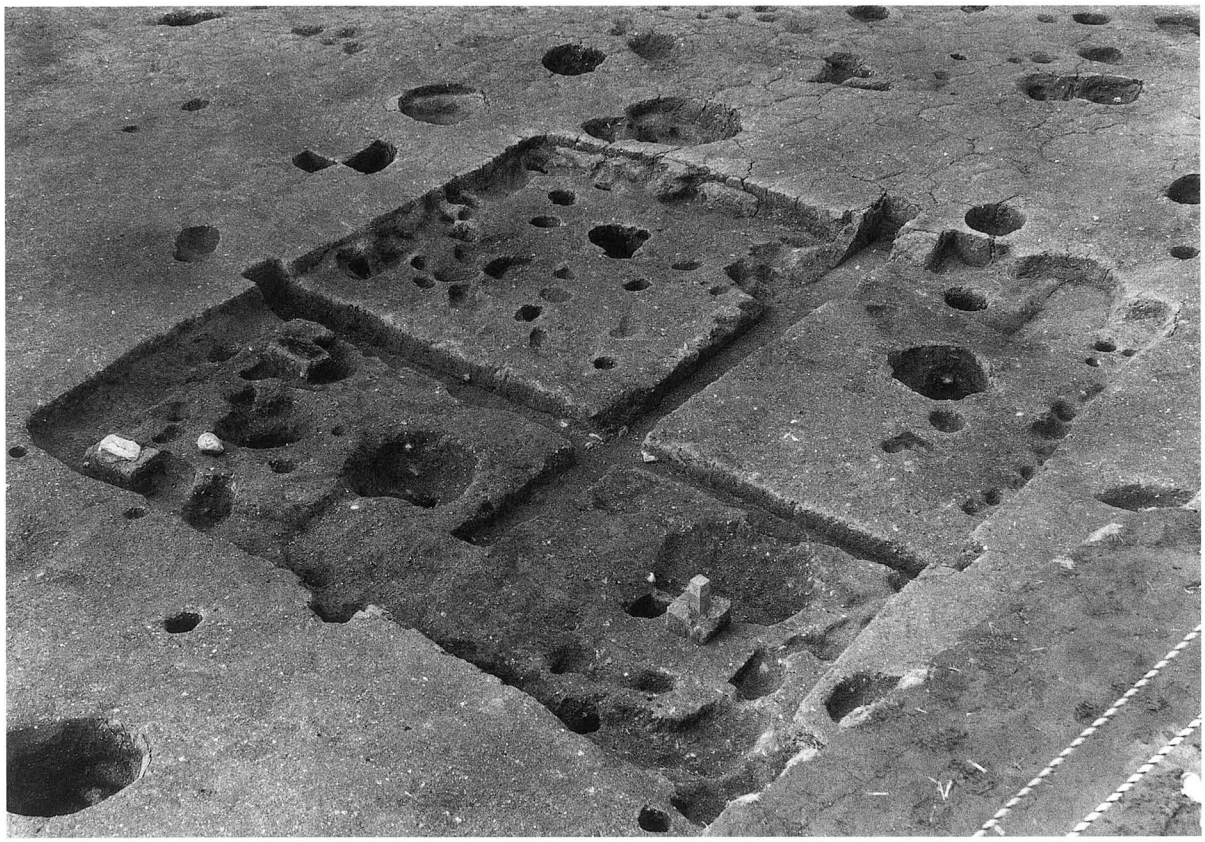
2．ＳＢ４完掘状況（北西より）

1．ＳＢ１完掘状況（北東より）



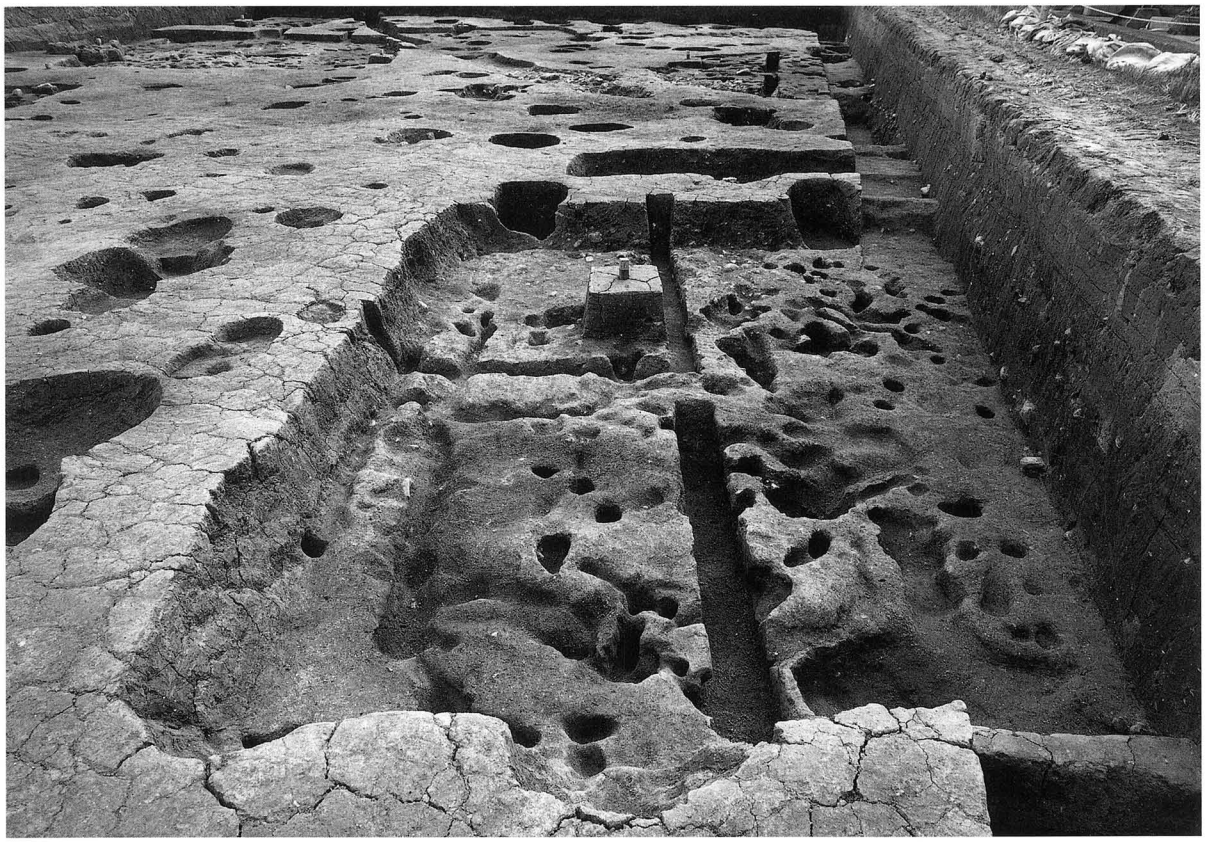
2．ＳＢ３完掘状況（北東より）

図版 12

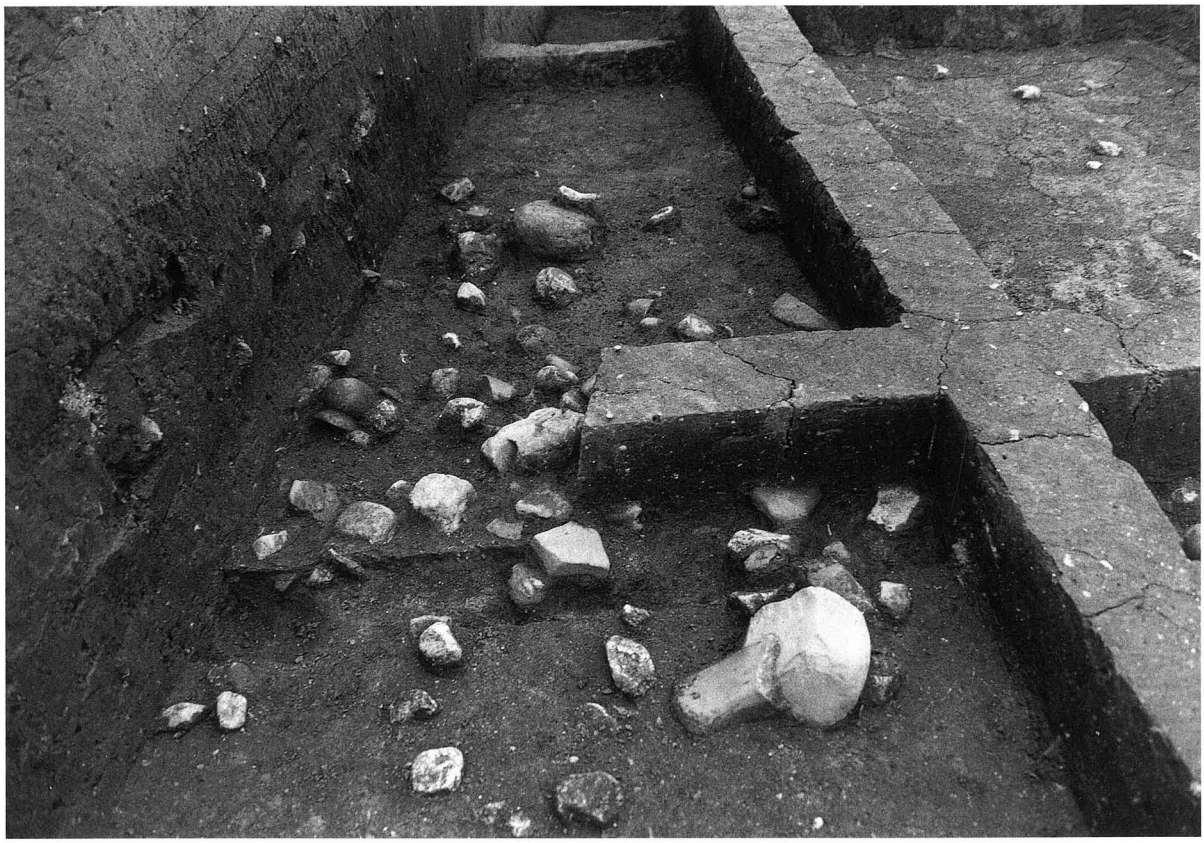


1．ＳＢ５完掘状況（南東より）

2．ＳＢ８検出状況（東より）

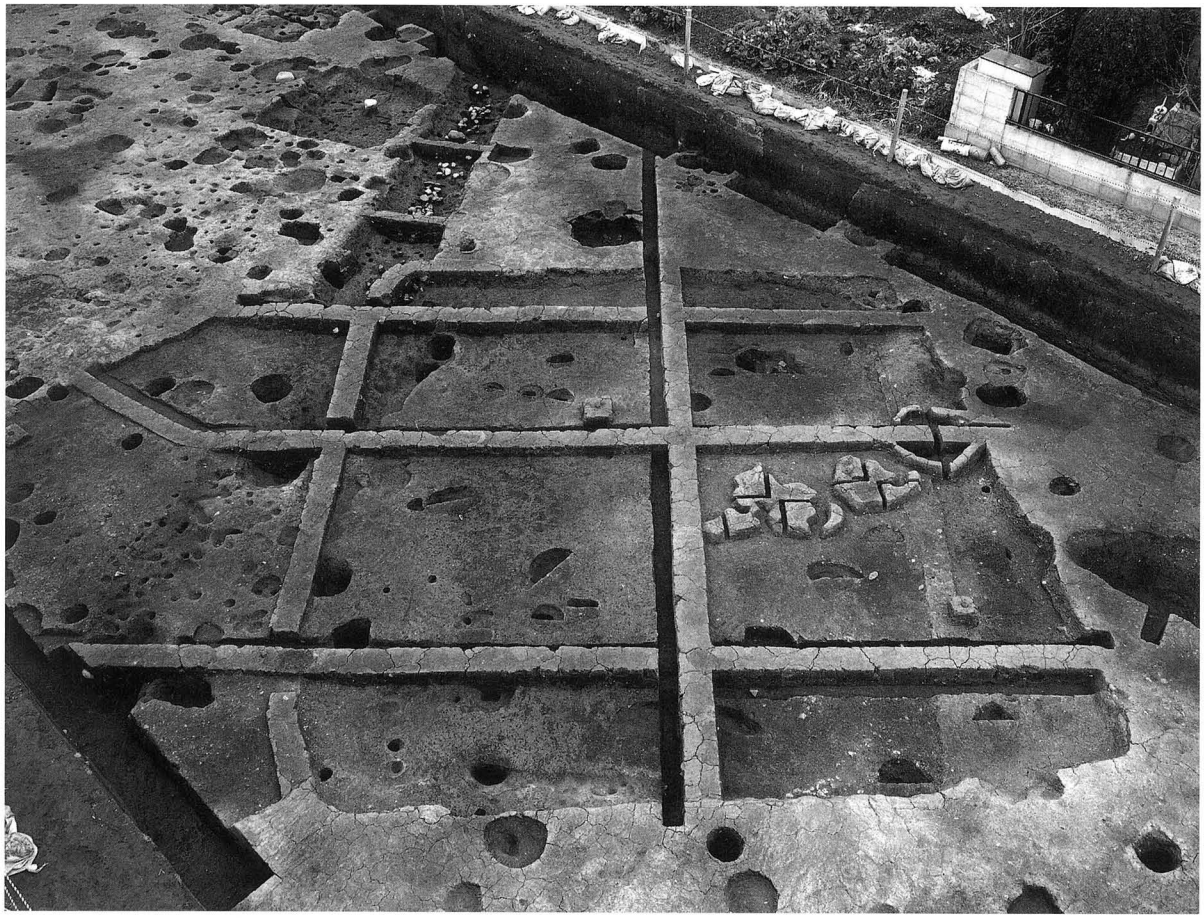


1．ＳＢ６完掘状況（北より）



2．ＳＢ６遺物出土状況（南より）

図版 14



1．ＳＢ９・11検出状況（北東より）

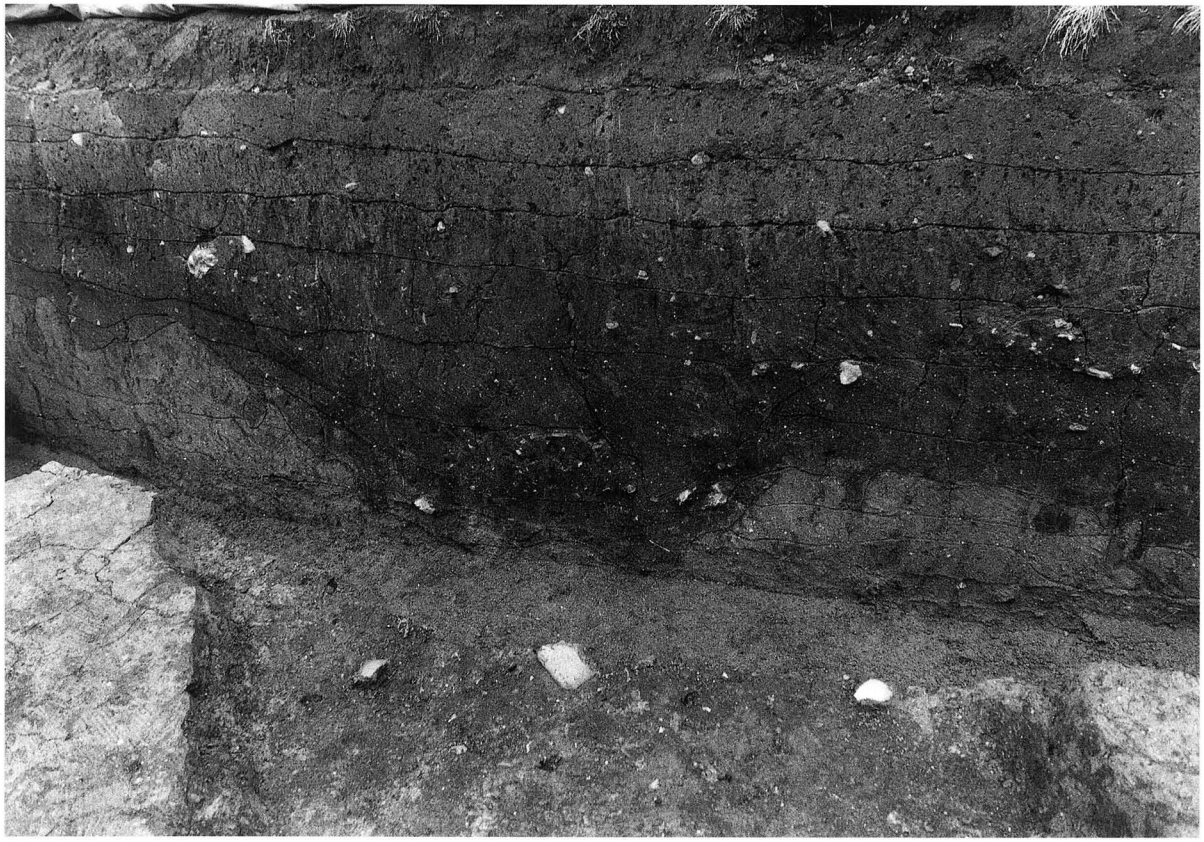
2．ＳＢ９遺物出土状況（南東より）

1．３号大型建物検出状況（北東より）

2．３号大型建物検出状況（東より）

図版16

1．３号大型建物柱穴（ＳＰ㉟）完掘状況（東より）

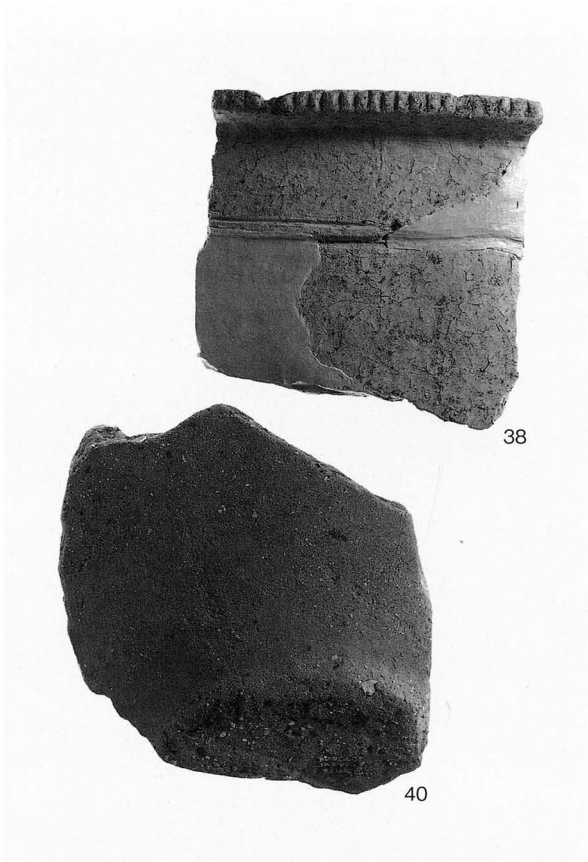


2．ＳＤ２断面（東より）

1．ＳＤ２上層遺物出土状況（南東より）

2．ＳＤ２下層遺物出土状況（北東より）

図版18



1．出土遺物（ＳＢ２：1・4・5・12・19、ＳＤ４：28・29、ＳＫ１：38・40）

50

51

53

54

60

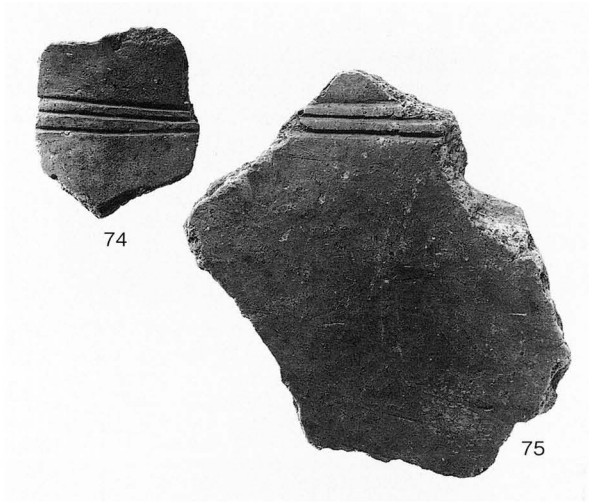
64
66

55

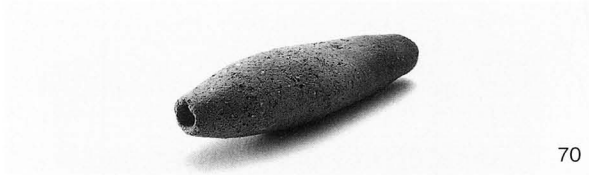
1．ＳＢ10出土遺物

図版 20

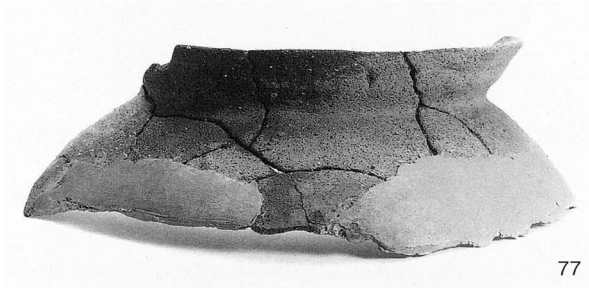
67


74
75

71


70

76

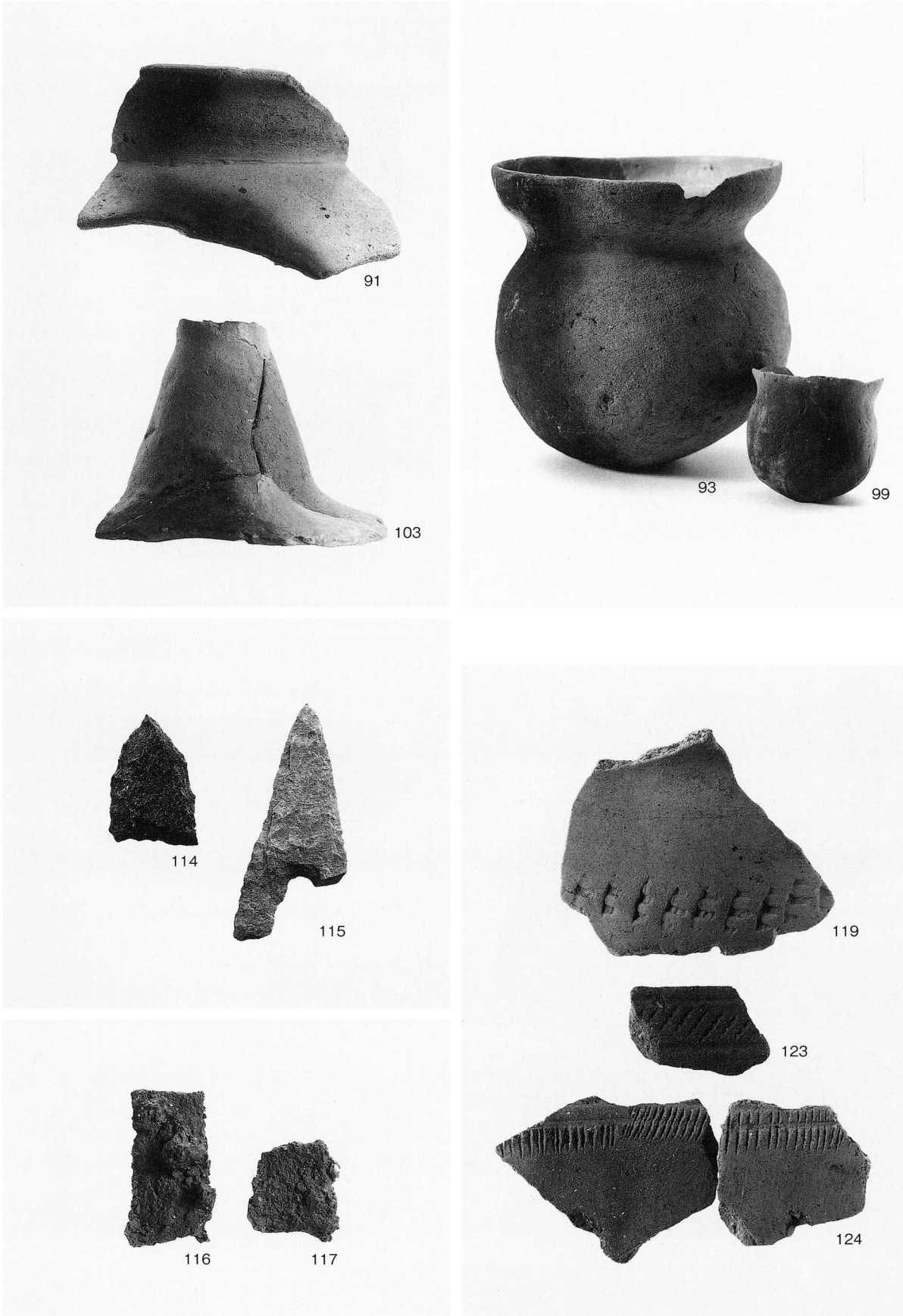

77

82

81

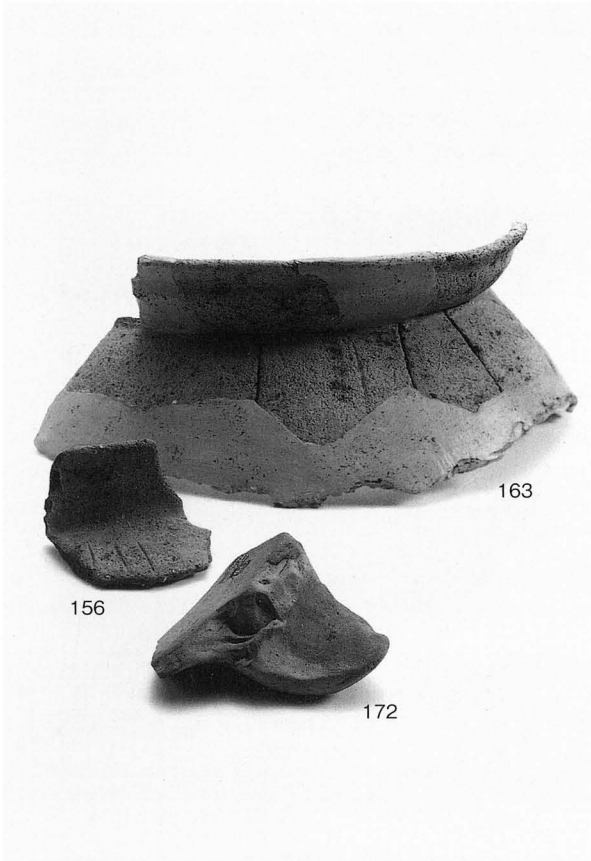
84

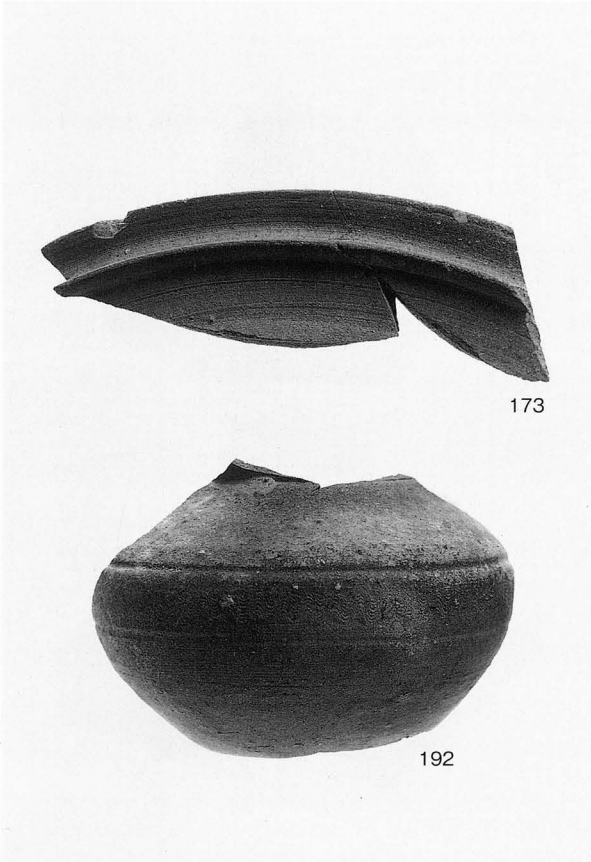
1．出土遺物（ＳＢ１：67・70・71・74・75、ＳＢ３：76・77・81・82・84）



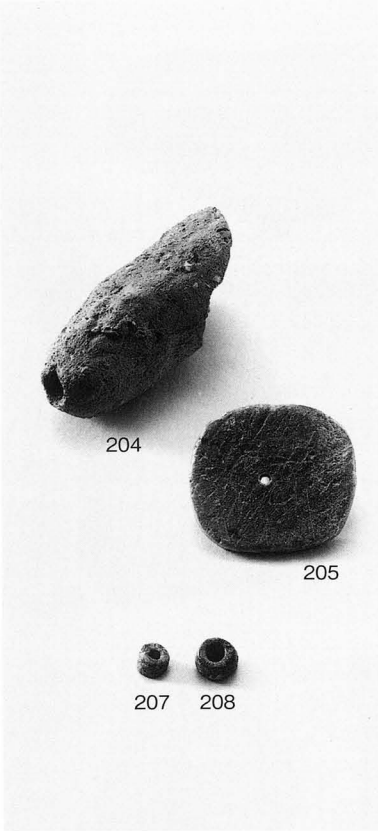
1．出土遺物（ＳＢ６：91・93・99・103・114～117、ＳＢ８：119・123・124）

図版 22

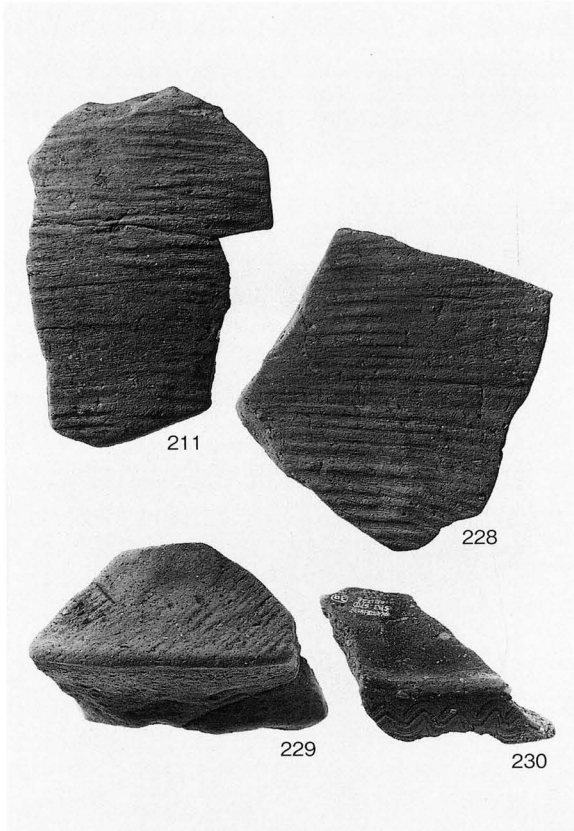




1．ＳＢ９出土遺物(1)



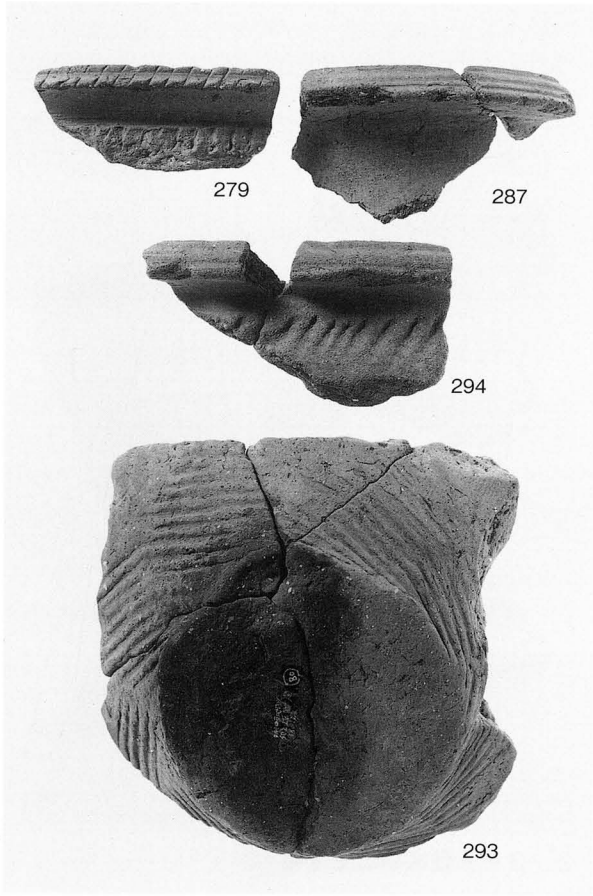
1．ＳＢ９出土遺物(2)

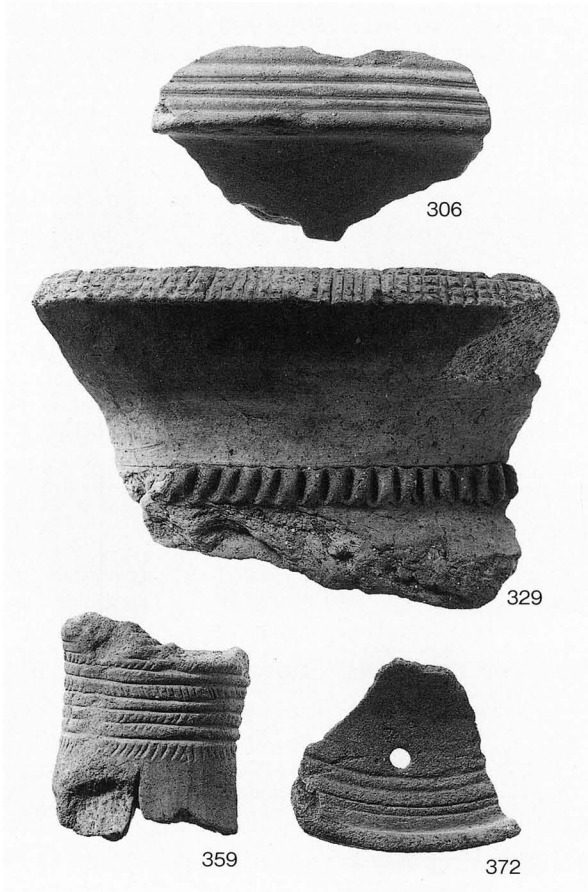


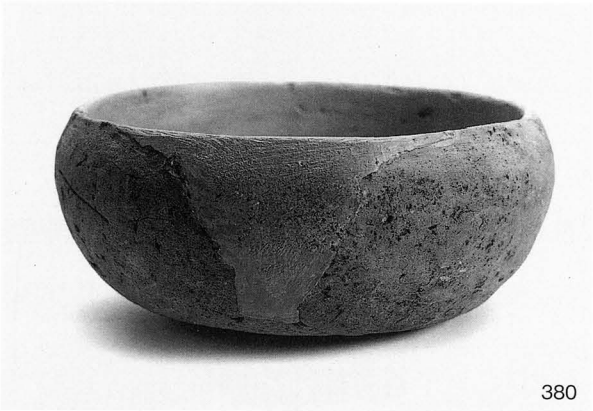
2．３号大型建物出土遺物

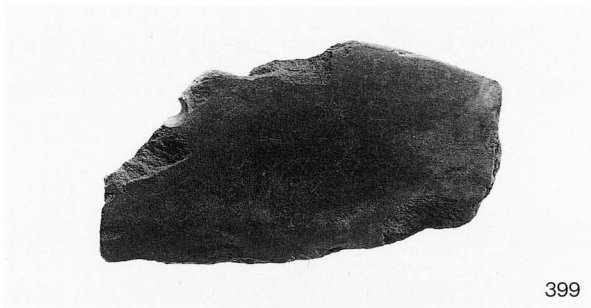
3．ＳＤ２出土遺物(1)

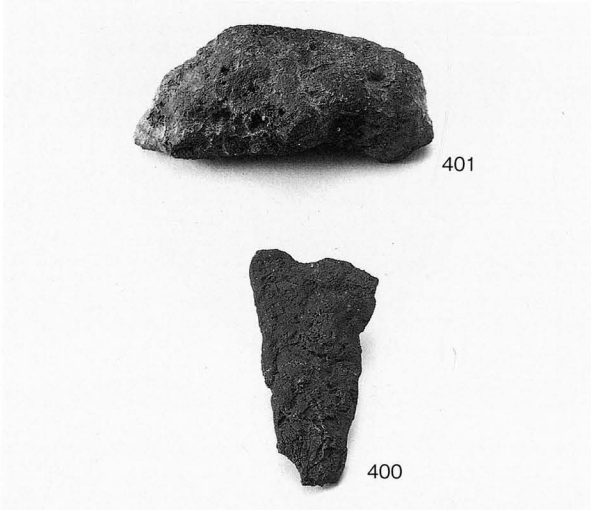
図版24



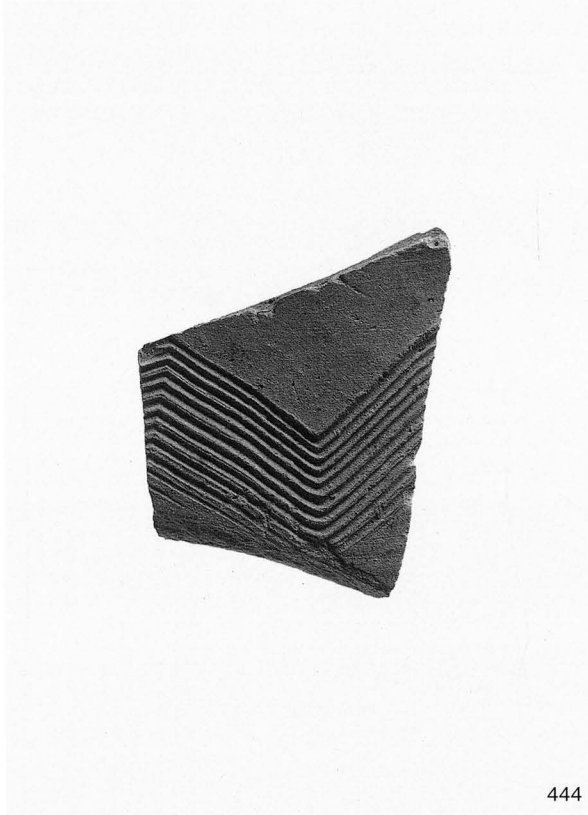


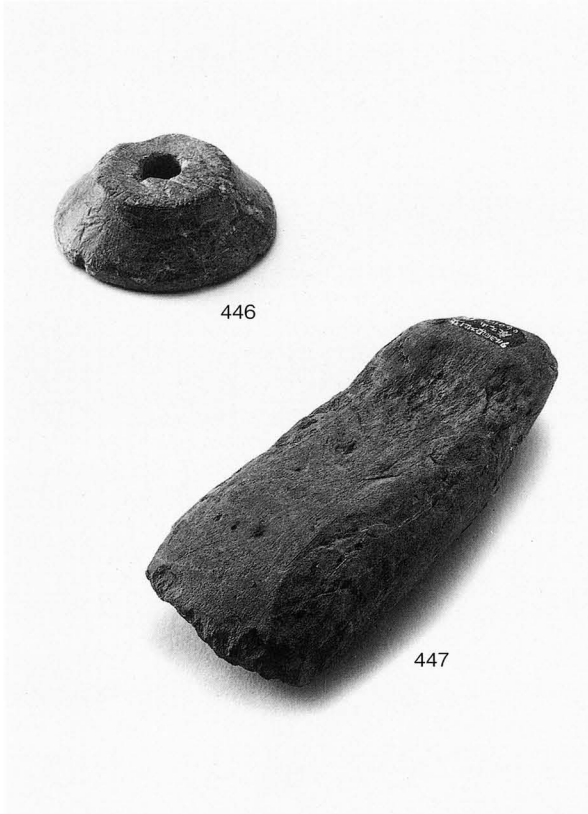


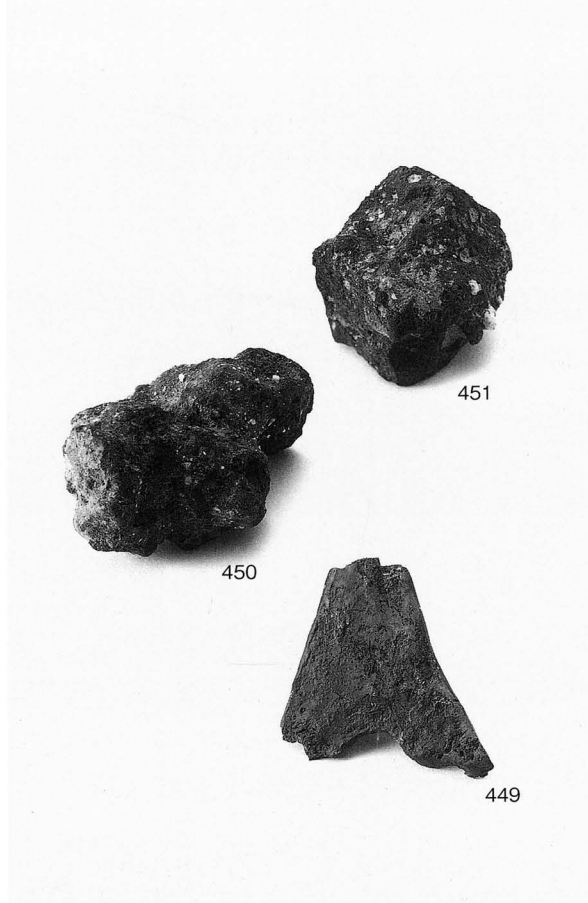




1．出土遺物（ＳＤ２(2)：279・287・293・294・306・329・359・372、柱穴：379・380・399～401）







1．出土遺物（包含層：407・410、地点不明：444・446・447・449～451）

報告書抄録

ふりがな	たるみしたんじいせき
書名	樽味四反地遺跡　－12次・13次調査－
副書名	平成17年度国庫補助市内遺跡発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	松山市文化財調査報告書
シリーズ番号	第130集
編著者名	相原秀仁・宮内慎一・大西朋子
編集機関	松山市教育委員会、財団法人松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター
所在地	市教委：〒790-0003　松山市三番町六丁目６番地１　TEL(089)948-6605 市埋文：〒791-8032　松山市南斎院町乙67番地６　TEL(089)923-6363
発行年月日	西暦2009年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
たるみしたんじ 樽味四反地12次	たるみ 樽味４丁目228番地３	38201		33° 50′ 4″	132° 47′ 27″	20051017～ 20051226	201	重要遺跡確認調査
たるみしたんじ 樽味四反地13次	たるみ 樽味４丁目231番地１	38201		33° 50′ 6″	132° 50′ 26″	20051101～ 20060330	820	重要遺跡確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
樽味四反地12次	集落	古墳時代 古墳時代 後期以降	竪穴住居・土坑 掘立柱建物	弥生土器･土師器・須恵器・石器・鉄器・臼玉・分銅形土製品 弥生土器・土師器・須恵器	第Ⅳ層中から平安時代後期の土師器が出土
樽味四反地13次	集落	弥生時代～古墳時代 古墳時代	竪穴住居・土坑 掘立柱建物・溝	弥生土器・土師器・須恵器・石器・臼玉 弥生土器・土師器・須恵器	３号大型建物の検出

要約	樽味四反地遺跡12次調査では、古墳時代の竪穴住居や土坑などを検出したことから、樽味地区の南方に古墳時代集落が展開することがわかった。 樽味四反地遺跡13次調査では、樽味地区で３棟目となる大型建物を検出したことが最大の成果である。首長層の建物様相がわかる貴重な資料を得ることができた。

松山市文化財調査報告書　第130集

樽味四反地遺跡

－12次・13次調査－

平成17年度国庫補助市内遺跡発掘調査報告書

平成21年３月31日　発行

編集・発行　松山市教育委員会
〒790-0003　松山市三番町六丁目6番地1
ＴＥＬ（089）948-6605

財団法人松山市生涯学習振興財団
埋蔵文化財センター
〒791-8032　松山市南斎院町乙67番地6
ＴＥＬ（089）923-6363

印刷　セキ株式会社
〒790-8686　松山市湊町七丁目7番地1
ＴＥＬ（089）945-0111